林刀

第四十期

刀林

大陸特輯號

第十四號

滿支旅行より御歸りの茂木先生

各票記載事項に間違のないことをお確め下さい

局番號印

拂込料金加入者負担

拂込票

口座番號 ※ 東京二九二七五番

加入者氏名 ※ 四谷區西信濃町慶應病院内 慶應義塾 大學醫學部 外科學教室 同窓會

※一金

拂込人住所氏名 ※

受付局日附印

口座所管庁日附印

逓信省

金額を訂正したものは受付を致しません

一年保存

拂込料金加入者負担

拂込通知票

口座番號 ※ 東京二九二七五番

加入者氏名 ※ 四谷區西信濃町慶應病院内 慶應義塾 大學醫學部 外科學教室 同窓會

※一金

拂込人住所氏名 ※

受付局日附印

口座所管庁日附印

逓信省

金額以外の記載事項を訂正した場合は相當證印して下さい

文字は正確明瞭に一、二、三、十の數字は壹、貳、參、拾とお書き下さい

振第九號乙

※印の欄は拂込人に於て記載して下さい

通信欄

この欄は加入者宛の通信に御使用下さい

御注意

一、振替貯金の拂込をなさるときは表面※印の欄に夫々記入し之に現金（又は郵便爲替證書、振替貯金拂出證書、小切手）を添へて郵便局（小切手による拂込の場合は特に指定した郵便局）へお出し下さい

二、この用紙を御使用の場合は拂込料金は加入者の負擔となりますから料金を要しません

同窓會費

昭和13・14年度分、金6圓也

右振替又は御便宜の方法にて
御納入相成度願上候
（尚會費は昭和七年度以降は年、
金参圓也と相成居候）

昭和十四年十二月

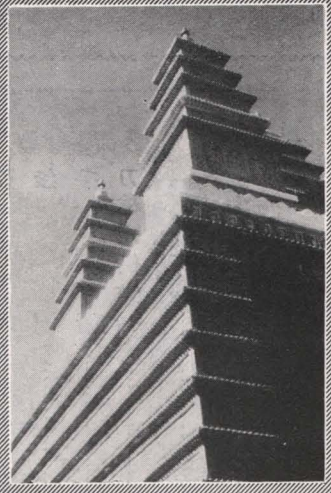
同窓會會計係

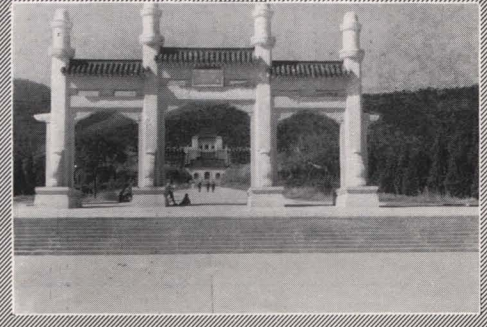
澁井君

[illegible]

[illegible]

[illegible]





通信欄 ……一〇八

ハガキ通信 ……一一八

同窓會記事 ……一三七

役員名簿 ……一三七

御禮 ……一三八

告 ……一三九

同窓會總會 ……一三九

茂木先生謝恩觀劇會 ……一四〇

御禮の辭 ……一四〇

昭和十四年度同窓會會計報告 ……一四一

學術欄 ……一四三

第四十回日本外科學會總會 ……一四三

第十四回日本整形外科學會總會 ……一四三

第十六回日本醫科機械學會總會 ……一四三

宿題擔當を祝す ……一四三

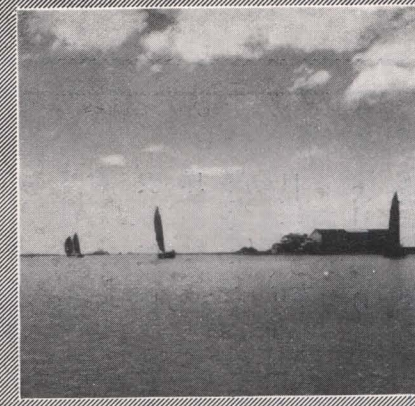
抄讀會 ……一四五

外科集談會 ……一四六

整形外科集談會 ……一四六

外科教室より出たる文献 ……一四六

整形外科教室より出たる文献 ……一四八



刀林　第十四號　目次

表紙題字　木村先生　御慶事　出征
扉　賀正　入營
茂木先生（小平畫）　論文通過　凱旋
目次寫眞（右…海南島より　左…北・中支より）　昇格　新入局
結婚　赴任

戰地よりの便り……一
大陸特輯……三八
滿支ところ〴〵の概感……茂木藏之助…三八
中支偶感抄……瀨尾宿三…四四
大陸に旅して……齋藤脩二…五二
大別山中の水……四條龍作…五九
新鄕より……森山成一…六二
瓊崖行記……植草實…六四
滿洲散見……楠田敏也…七三
鐵驪雜記……松浦元…七九
同窓會……八一
札幌より……柳壯一…八二
石卷便り……上石英造…八三
同仁會より歸りて……瀨尾宿三…八六
工場醫漫言……吉岡勝衞…八九
今年の收穫から……龍野一雄…九二
市立大久保病院へ赴任して……野崎寛三…九五
旨い物の話……渡隼…九八
雜感……久崎章…一〇〇
親しき友……田邊重信…一〇三
牡丹江……工藤達之…一〇六
通信欄……一〇八
ハガキ通信……一一八
同窓會記事……一三七
役員名簿……一三七
御禮……一三八
告……一三九
同窓會總會……一三九
茂木先生謝恩觀劇會……一四〇
御禮の辭……一四〇
昭和十四年度同窓會會計報告……一四一
學術欄……一四三
第四十回日本外科學會總會……一四三
第十四回日本整形外科學會總會……一四三
第十六回日本醫科機械學會總會……一四三
宿題擔當を祝す……一四三
抄讀會……一四五
外科集談會……一四六
整形外科集談會……一四六
外科教室より出たる文獻……一四六
整形外科教室より出たる文獻……一四八
醫局近況……一四九
醫局擴張記……一四九
醫局だより……一五四
記名帳……一六五
新人紹介……一六八
修善寺歡迎旅行記……H K 生…一七二
當直日誌より……一七四
綴方教室……岡品男…一八二
運動救護……一八五
富士救護だより……一八五
醫局庭球リーグ戰記……一九四
强剛を斥けて醫局對抗リレーに優勝……一九〇
外科山岳部誌……石川七郎…一九五
醫局對抗野球奮戰記……一九二
藏王スキー合宿の記……雪女郎…二〇三
文苑……二一一
梅……治生…二一一
出征の友を送る……治生…二一二
節衣の書から……夏積生…二一三
高原の便り……伊藤國男…二一六
清水のキス釣り……多霧沈介…二二五
病床に林克己君を訪ふ……石川七郎…二二八
林檎の皮……STUV生…二三一
伊豆の一日……相見三郎…二三九
酒の歌……久米仙…二四二
春の雪……治生…二四四
鷄頭……治生…二四五
無題……小平正…二四六
手術……岡品男…二四八
刀林嘘倶樂部……眞赤會同人…二五〇
川柳漫畫……スケッチブックから……
會員名簿……二五五

扉
茂木先生（小平畫）
目次寫眞（右…海南島より　左…北・中支より）

祝賀
論文通過
昇格
結婚

入營
凱旋
新入局
赴任

戰地よりの便り……一
大陸特輯……三八
滿支ところ〴〵の概感……茂木藏之助…三八
中支偶感抄……瀨尾宥三…四四
大陸に旅して……齋藤脩二…五一
大別山中の水……四條龍作…五九
新鄕より……森山成一…六二
瓊崖行記……植草實…六四
滿洲散見……楠田敏也…七三
鐵驪雜記……松浦元…七九
同窓會……八一
札幌より……柳壯一…八一
石卷便り……上石英造…八三
同仁會より歸りて……瀨尾宥三…八六
工場醫漫言……吉岡勝衛…八九
今年の收穫から……龍野一雄…九二
市立大久保病院へ赴任して……野崎寛三…九五
旨い物の話……渡集…九八
雜感……久崎章…一〇〇
親しき友……田邊重信…一〇三
牡丹江……工藤達之…一〇六
通信欄……一〇八
ハガキ通信……一一八
同窓會記事……一三七
役員名簿……一三七
御禮……一三八
告……一三九
同窓會總會……一三九
茂木先生謝恩觀劇會……一四〇
御禮の辭……一四〇
昭和十四年度同窓會會計報告……一四一
學術欄……一四三
第四十回日本外科學會總會……一四三
第十四回日本整形外科學會總會……一四三
第十六回日本醫科機械學會總會……一四三
宿題擔當を祝す……一四三
抄讀會……一四五
外科集談會……一四六
整形外科集談會……一四六
外科教室より出たる文獻……一四六
整形外科教室より出たる文獻……一四八
醫局近況……一四九
醫局擴張記……一四九
醫局だより……一五四
記名帳……一六五
新人紹介……一六八
修善寺歡迎旅行記……H K 生…一七二
當直日誌より……一七四
綴方教室……岡品男…一八二
運動救護……一八五
富士救護だより……一八五
醫局庭球リーグ戰記……一九四
强剛を斥けて醫局對抗リレーに優勝……一九〇
外科山岳部誌……石川七郎…一九五
醫局對抗野球奮戰記……一九二
藏王スキー合宿の記……雪女郎…二〇三
文苑……二一一
梅……治生…二一一
出征の友を送る……治生…二一二
節衣の書から……夏積生…二一三
高原の便り……伊藤國男…二一六
清水のキス釣り……多霧沈介…二二五
病床に林克己君を訪ふ……石川七郎…二二八
林檎の皮……STUV生…二三一
伊豆の一日……相見三郎…二三九
酒の歌……久米仙…二四一
春の雪……治生…二四四
鷄頭……治生…二四五
無題……小平正…二四六
手術……岡品男…二四八
刀林嘘倶樂部……眞赤會同人…二五〇
川柳漫畫……スケッチブックから……
會員名簿……二五五
編輯後記……二六三

御慶事

昭和十四年十一月九日
茂木先生御次女慶子孃には若尾家へ
御芽出度く御入嫁遊ばされました
同窓會員一同衷心より御壽ぎ申し上
げ先生御一家の御繁榮を御祈り申し
上げます

賀正

時局に鑑み同窓會々員交互の年始御挨拶は乍略儀小誌上を藉り申述べ併せて應召會員諸兄の武運長久を祈上候

昭和十五年元旦

外科
整形外科

同窓會

祝賀

論文通過

森文雄君	昭和十三年十二月
大岡保司君	同
堀田善二郎君	同
大塚廣君	同
井手行乎君	同
橋本文吾君	昭和十四年二月
八木勝郎君	同
野崎寛三君	三月
河内野弘德君	六月
富田勝郎君	同
山口恒造君	九月
今井秀雄君	十月
小泉次郎君	十一月

祝賀

昇格

整形外科講師　小泉次郎君　昭和十四年三月

結婚

許添旺君　昭和十四年一月

高和壽次君　同　三月

津留慶之君　同　五月

井手行乎君　同　八月

祝賀

出征

權守英夫君　昭和十四年四月
川上弘君　同
遠山一郎君　同
西新助君　同
山口恒造君　同
傳田俊男君　同
田邊重信君　同
森山成一君　同　六月
武藤敏文君　同　七月
若林研爾君　同　八月
瀧本昇君　同　十一月

入營

石田堅一君　昭和十四年四月
大久保崎夫君　同
高田孝君　同
相馬順三君　同
武藤敏文君　同
內藤敏德君　同
瀧本昇君　同　六月

凱旋

尾村偉久君
木村守江君
佐藤壽郎君
照井侃君
四條龍作君
渡邊重雄君

歡迎

新入局

石田堅一君	昭和十四年四月
大久保崎夫君	同
花岡正人君	同
横畠德雄君	同
高田孝君	同
瀧本昇君	同
林（竹内）勝君	同
相馬順三君	同
內藤敏德君	同
武藤敏文君	同
權守赳夫君	同
淺賀武夫君	同
佐藤武君	昭和十四年十月

送別

赴任

野崎寛三君	昭和十四年二月	大久保病院
橋本文吾君	同 三月	自宅開業
根本一郎君	同 八月	神戸市濟生會兵庫縣病院
八木勝郎君	同 十月	ブラジル サンパウロ市
中村廣人君	同 十一月	日本無線附屬病院

戰地よりの便り

小林忠君

僕も出征して早五ヶ月今は兵隊になり切つてゐます兵站病院勤務にもすつかり慣れ切りました。兵站病院勤務と致しましても內地の病院と變つた處も少なく唯凡てが軍隊式なだけです。

僕も太原に參りまして三ヶ月、少しは太原に於いて存在を認められて來ました。太原には塾出身者が十名ばかり居りまして會合する事がちよい〳〵あります。もうずつと前ですが、太原に日華會館と云ひまして立派な料理屋（將校用）があり、そこで太原三田會を開催致しまして實に盛會でした。あの時は出征以來初めて三味の音を聞きました。又先日は外科醫局の、中野宗夫氏、赤倉一郎氏に

も會ひ、日華會館で愉快に飲みました。其の他塾出身の人と時々會ひます。ほんとうに嬉しいものです。

太原は立派な城壁に圍まれた大きな都會です。支那人も大部我々に慣れて來ました。先日支那人小學生が愛國行進曲なんか歌つて居りました。ほんとうに嬉しいものです。

松浦勇四郎君

當地もます〳〵寒く、零下五十度近くも下り、二重窓の外はガチ〳〵に凍り、我々の大切な食料も全く石コロの如きものです、まあ〳〵風邪もひかず、適當に酒を呑んでゐるので、案外頑丈なものです。當地なぞはあまり正月らしくありません。當院も新任軍醫が二名來たので私も稍々樂になりました。戰局はいつ果てるやら、又いつ平和の日がくるか、見當も付かず、第一線と銃後の皆々樣とを問はず、今年も大いに氣を新たにして滅私奉公盡忠報國の誠を致しませう。(一月八日)

松丸忍君

夢の如く過ぎた此の半ヶ年も〇〇での物資缺乏、炎熱燃ゆるが如き中での生活であり、敵前四十米突小銃彈はもとより機關銃、手榴彈を浴び、時には銃彈の音を聞きながら手術をしたこともあります。

然し今は平穩無事なる徐州に、いとも暢氣に暮して居ります。

當地には飲食店、雜貨店、煙草屋は勿論の事、日本ビー、朝鮮ビー、支那ビーと數百人も居ります、支那人は以前の半分位歸り街は非常に賑かになつて居ります、時偶比較的綺麗な姑娘を見る事も出來る樣になりました。その上新年を迎へて爆竹の音も朗らかに和かな平和に滿ちた情景を釀して居ります。初めは內地歸還の心で矢も楯も堪らなかつた連中がもう少し支那に居てもいゝなと云ふ樣な狀態です。兎に角復興の意氣物凄い物です。

然し明け暮れ憶ひ出すのは內地の事です。最近の情報に依ると內地歸還は今のところ駄目らしいので從つて慢々的に暮して行く覺悟で居ります。吾々の間の生活も時と共に段々皆と融合して旨く行つて居ります。

稻葉玉六君(第一信)

去る十一月轉勤以來楊子江泥水上の生活にも漸く慣れて參りました、相變らず元氣です。

先日は漢口で小野田大尉と會つて刀林を前にして醫局の話に花が咲きました。

尙近くに佐藤壽郎、竹內實兩先輩の居られる事を知り會ひたいと思ひました。

二十三日には十四回生五人居る事がわかりましてクラス會を開きました。

殘念ながら一人は病氣缺席しましたが皆元氣です、遠く離れて同窓の人と共に語り共に飲む、これに過ぐる嬉しさはありません。

まして戰地に於ては思ひも及ばない事です。小生は近く〇〇方面に行く事になつてゐます。

同仁會派遣の瀨尾先生一行に會へる事を樂しみにしてゐる次第です。

小生も出征以來、南支北支中支と隨分方々へ參りました。

中支は最前線の洞庭湖畔有名な岳陽樓にも昇りました。

今は丁度減水期の爲め有名な岳陽樓の記に在る風景はありませんが立派なものです。

銃後の皆樣の御厚情を感謝すると同時に愈々自重、東洋平和確立の一礎石とならん覺悟を以て努めてゐます。（一月二十六日）

同　（第二信）

中支方面も愈々本格的の暑さとなつて來ました、傳染病の絶え間なき地方に於てその流行期を控え又マラリヤの流行に對して防疫に大童の狀態です。

〇〇難民中にはコレラ多發して之が一大强敵となりました。

一艦の乘員の健康を預る小生の任務も愈々重きを加へて參ります。

幸に暑さにも負けず益々元氣です。
長江の水も日毎に増水して濁流渦を卷いて物凄いばかりです。
今まで坐洲せし機雷も流されて時々つかまへては爆破して魚を採つてゐます。
氣味の惡い程大きな魚で一寸食思動きません。（七月十日）

同　（第三信）

再度の出征以來一年八ヶ月、北支から中支揚子江方面に轉戰して、益々元氣です。
揚子江の一年沿岸警備の傍ら宣撫施療をやつて流行病風土病等に就き種々なる經驗を積みました。
マラリヤは極めて多く、一寸想像もつかない脾腫には隨分御目にかゝりました。
支那人の通性として皮膚を見せることをひどく嫌ひ、殊に女性に著しく、內科的疾患は仲々受診して來ず濕疹とか白癬とか露出皮膚面の疾患が大部分です。
九月には○○作戰に陸軍と協力○○湖上を馳驅して武裝ジャンクを捕へ又は砲擊し○○航路に敵の敷設せる無數の機雷堰を啓開して進擊し敵彈の下をくゞり敵前上陸を敢行して戰果を收めました。
敵前掃海の困難は全く想像外です。
誤つて觸雷すれば艇もろとも木葉微塵と化する決死的作業に軍艦旗の下欣然として母艦を離れる兵

の眉字に漲る緊張は今尚眼前に髣髴としてゐます。

作戰も一段落、今〇〇警備中です。（十月一日）

赤倉一郎君

幸ひ益々元氣潑溂と軍務に出精して居ります。

出征以來早くも一年四ヶ月を經ましたので其の間色々な經驗を得又思はぬ處で思ひ掛けぬ人に遇つて喜び合つたりしました。

十一月上旬に部隊長に隨行して北京まで飛んだ歸りに太原で小林忠さんに會つた時は醫局全體に會つた樣な氣持でした。

兵站病院となると內地の病院生活と殆んど變りませんから忠さん相變らず朗らかで大いに喜んで居ました。

十二回生の秦さんが同病院の內科主任で居たのにも會ひ一夕太原に於ける三田會を開き大いにメートルを上げました。

太原の軍管理工場の主任及び副主任も塾出身者で一堂に會し大いに愉快な一夕を過しました。

戰爭と酒は戰爭と鐵砲彈みたいな關係にあると見えて出征以來酒を呑まぬ日は飯も碌に食へない樣

な狀況の時か移動中位のもので、毎日の樣に酒浸りで吾ながら呆れて居ます。恒さんが出征しなかつた事は實に好機を逸したものです。

當隊が臨份に來てから早いものであと二ヶ月で滿一年になります、從つて臨份を基點にして同蒲線上を南進北行して居ますが、初めの頃は隨分駄々つ廣いと思つた北支も慣れて見れば左程でもなくなり、山西省は我が家の庭の如く、太原より風渡までの同蒲線は自分の繩張りの樣な氣がして至極呑氣に歩き廻つて居ります。時々擊たれますが、僕の實彈射擊みたいなもので中々當らないものです、僕等の隊に居る濱田軍曹が上田廣と云ふペンネームで改造や中央公論誌上に當方面の實狀を基として小說を書いて居ますが、山西南部に居る中野、井上、小林、赤倉等の便り代りにお閑な折にお讀み下さい。(一月八日)

小林不二夫君

小生御蔭樣にて上陸以來微傷だも負はず、病魔にも犯されず極めて元氣です、時には敵機の爆彈に吹き飛ばされさうになつたり或ひは迫擊砲彈と心中し損ひ、又敵の重圍に陷つて死を決したりして昇天しかゝつた事は再三ならずでしたが、幸ひにも今尙及ばず乍らも大に頑張つて居ります。

本職の方では、メスを持つ事など殆どなく、過去一ヶ年中にバナリチウムでナーゲルのエックスス

テイルバチオン一名、股腺炎の切開一名と云ふ始末です、尤も戰傷者は可なりあります。

漢口攻略戰の酣なる頃吾々は北方から有名な大別越えを敢行して居ましたがあの時の苦勞や危險も喉元過ぐれば熱さも忘れてしまつて、今では、武漢平原の○○にて大平樂な日を送つて居ます。

吾が新村部隊の高級醫官山田友五郎中尉は大學時代は、前田先生と同級であつた由で會へば時折先生の話が出ます。

皇軍占領のあとは、直ちに着々と宣撫工作が進められて居りますが、吾々醫學者の任務は寧ろ今後に殘された醫學に依る宣撫工作にあるのではないかと思はれます。（一月十七日）

小野田肇君

當地も師走の候に叛かず、降雪等あり寒氣も日益に激しく相成候も燃料等なきも眞の第一戰の事燃ゆる氣力のみにて充分に御座候。

お正月も迫り候間せめてはお正月らしく門松も飾り度く存じ候、之が探索には最も苦慮を要する所に候○○山脈近く迄少くとも○里近く行けばあるとの話、心細き次第なるも、殘敵掃蕩の如き氣構へにて討伐に出掛け、無理をし苦勞をしてお正月を味ふ氣持は亦一入格別のものに有之候、臼はなし杵はなし、このなしなしの裡に何とかお雜煮も、からみ餅にしなければ食べられず、兵隊といふものは

格別の技倆にて何とか間に合はせ、不自由中にも喜びを見出し居候。

城　俊　輔　君（第一信）

漢口陥落以來私等の部隊は尙討伐を繰返して居りましたが、昨年の暮より長江沿岸の某都會地區の警備にあたり比較的平穩に暮して居ります、自分の大隊では衞生部員の損害多く、軍醫二名は戰傷し、衞生下士官戰死、衞生兵一名戰死、二名戰傷といふ狀態です。

幸、自分は負傷せずに頑張つて居りますがマラリアで一時は弱りました、冬になつても盛にマラリアは再發して居ります、戰爭に參加して、平病患者が如何に多いかを知りました。

中島三次君は自分と同じ清水部隊ですが未だに會ふ機會がありません、その中會へると思ひますが元氣でやつて居るらしいです。

第一線で働いて居るとそれ程でもありませんが警備になつて落着きますといつも醫局生活を思ひ出して居ます、今年も長江の濁流を眺めて暮します。（一月二十三日）

同　（第二信）

北支の秋は既に酣になつて來ました。諸先生益々御壯健にて御勤務のことと存じます。小生も相變

らず達者で軍務に精出して居ます。

當地に參りまして早や半歲漸く不良の水質にも慣れて來ました、治安狀態も當部隊が參りましてから一段と進んで、警備地區城內には小學校で大いに日本語教育をやつて居り、小生の室に遊びに來る子供も可愛いゝ日本語を話します、日本の歌はとても上手です、日本人は大分在住して居りカフエー等も散在して居ります。

夏は赤痢等の腸疾患が相當出ましたが目下はすつかりなくなり腸チフスが時々散發する外「コレラ」も出ません。

水の惡いことは想像以上で毎日「硫マ」を飲んで居る樣なもので、朝の味噌汁は苦く風呂は石鹼が泡を出さず、「コーヒー」を作つても香が出ません。

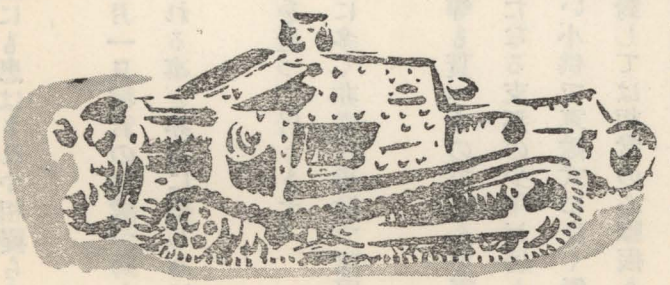
昨年の今頃中支で死線を越えたことを思ひ出して感慨無量です、中支では同師團で中島三次君が居り、一日某地で劇的會見をやりました。

當地では慶大醫學部出身は靑柳大尉（十三回生）、藤田少尉（十一回生）、靑野見習士官（十三回生）が居られます、赤倉先生が近くの部隊に居られることを聞きつゝ未だお會ひする機會を得ません。慶應出身の諸兄に會ふのが何より懷かしく賴もしく思ひます。（十月十七日）

中島三次君

渡支以來全く四谷の様子に接する機會もなく色々と變つたニュースも出來た事でしよう。

〇〇〇歩兵隊附として六月勇躍上海に上陸して杭州附近から湖州長興一帶の掃蕩警備の後、八月末南京に至り偶然大谷(小兒)、網藏(生)、林(外)の三先輩に出會ひ四人でスキヤキパーテーに愉快な一夕を過し級友堀内君にも會ひましたが共にのんびりする暇もなく、乘船して途中敵砲彈に見舞はれながら遡江、鄱陽湖入口の廬山々麓に上陸して九江に出で水雷艇に便乘して更に遡江して長江北岸に渡り、遡江部隊として武漢攻略の第一線に參加し、向後頑敵を攻撃、追撃して十月二十六日待望の漢口の一角に入り更に追撃隊として漢口、漢陽間の漢水を遡江する事約四十哩にして漢口繁榮の根源をなす漢水流域の主要都市漢川を占領し、警備、宣撫に服する事二十日足らずで漢陽に下つて乘船し江南の某地に上陸、直に大討伐に服する事一ヶ月の後、山の中の寒村部落に腰を据へて正月を迎へ、一月中旬同じ様な山の中の部落に落ち付き、警備旁々宣撫に就いて居ります。



かくして幾多砲煙彈雨の中を驅け廻りながらも幸ひ微傷だに受けず、病魔にも患はされず相變らず元氣で働いて居ります。

城君も同じ師團に居りますが未だ面接の機會に惠まれません、然し去る二月一日城君の部隊が隣りに來ましたので電話で話した處、相變らず大元氣で居り近日會ふ機會に惠まれる事と非常に樂しみにして居ります。

中支はどんな田舍でも抗日と防空の跡著しく、又吃驚りする程到る所陣地を造つて居ります。

敵は各國製の彈藥を豊富に持つて居り、兵隊には十七、八歳の少年も非常に多く非常に勇敢で確固たる信念を持つた奴も居ります。

部隊に捕虜を澤山使つて居りますが安心して飯は食へるし、煙草、加給品等も貰へるので喜んで軍隊式に點呼もやり良く働いて居るのも面白い光景です、私達の部隊に十四歳たなる支那の少年が居りますが私達の部隊を慕つて八月からずつと一緒に付いて來て居ります、可愛い小供で軍隊式に良く働き今は日本語も相當覺え、通釋代りにもなります、日本人氣取りで支那人に對しては相當の心臓振りを發揮して居るのも面白く、どうしても日本に行くと頑張つて居ります、皆に可愛がられて本人も幸福でせう。

到る所食に飢え、寒さに惱み、病に苦しむ避難民が澤山居り氣の毒なものです、然し今は皇軍の居

る所、其庇護の下に續々歸來し安心して働いて居ります。

當地も今は敵も遠くからポン／＼やる位ですし、雪や霜は降りますが風がないので暖く非常に凌ぎ良い事とて渡支以來久し振りに皆のんびり過して居ります。

今は部隊の大部惱まされたマラリアもなくなり、赤痢、コレラも跡を絶ち、戰死傷者も出ないので私達も久し振りに呑氣になりました。

丸五ヶ月間夜の明りも蠟燭や燈芯、金も價値ない原始的生活を續けました、損も得も色氣も艶もない生活です、女の顔でも死にかゝつた汚い土民の婆さん以外に見た事もありませんハヽヽ……然し…もうどんなどん底生活にも馴れて別に不自由等と云ふ氣持も起りません、病氣にならぬのが不思議なだけです。

銃後の內地生活も色々うるさくなつた樣子ですね。當地も豚、雞、家鴨等は食ひ盡して今は朝も菜ッ葉、晝も菜ッ葉、夜も菜ッ葉、と菜ッ葉ばかりを食つて居ります。

× × × ×

長期建設！皇軍の目的の前途益々多難の折柄私達も愈々元氣で其目的に邁進致します。

嚴寒の折柄醫局御一同樣も愈々御自重御自愛の上銃後の護りに御苦勞の程御祈り申し上げます。（二月四日）

蓮江信行君

春尚ほ淺く寒さ未だ去りやらずと雖も內地は既に梅の便りも聞かれる頃かと存じます。一昨年の初秋出征以來既に一年半の戰線生活も幸ひ無事に過去となり現在は支那農民の廢屋に在つて長期聖戰を體驗致して居ります。銃砲聲が時たま天地の靜寂を破る位なもので頗る平穩な駐軍の毎日を送つて居ります。後方遙か彼方の雲間には盧山連峰が去年の秋の追憶も尙ほ新たなる中に聳え、前方近く望む敵陣の山々に希望の春近きを感じます。懷鄕的感傷の中にも愈々士氣旺盛にして次期作戰に待機中です。（二月十三日）

合原義泰君

小生只今南支第一の要都○○に於て軍務に從事致して居ります、當地には醫局の小島先輩も居り、毎日の樣に會つて居ります、小島君は自動車隊附故、自家用を一臺持つて居り御蔭で小生まで中山大學、孫文記念塔或は廣東料理を食ひに行く時等大いに利用して居ります、大分當地も復興致して居りますが、歸つたのは多く貧民階級で大きな家、商店等は未だ開かれず晝間でも未だ物騷な所が多々有り晝間散步する時でも、慰安所へひやかしに行く時でもピストルをぶち込む奴等ありあまり油斷出來

ません、仕事の方は目下なか〳〵多忙です、之から又雨期にでも入つたり夏にでもなつたりしたら益々忙しくなる事と覺悟して居ります。

小生昨年末一度南支より中支派遣軍にまはされ上海に五十日程居り照井先生を初め同仁會の瀨尾、小平兩先輩にも御目にかゝり、本年二月新作戰と共に再び當地へ參りました、上海出發の時は新作戰による新方面かと、すつかり覺悟をさめた所、再びもとの古巢でした。當地には慶應卒業生の會もあり毎月一回開催致し先月第二回目の時は醫科方面では山本大先輩、大谷周一先輩、小島君、十四回の戸刈君、十六回の島津、鈴木君等總計二十名近く集まりました。

先日內地の新聞を見たら○○にも日本料理が出來、壽司もさしみも澤山ありと書いて有りましたが此の日本料理たるや實に高價な代物で三四人で行つて少し飲み食ひしたら百圓以上とか、目下の小生等は前も通れません、支那料理はなか〳〵安いです、姑娘も大分歸つて來ました、二十錢O、K、つて所も有るそうですが詳細はいづれ實驗の上報告致します。(三月十九日)

左奈田幸夫君(第一信)

至極頑健にて目下南昌南方三〇粁の地點にて討伐中です、氷修より南昌に向ふ追擊戰は實に壯快言語に絕し敵に立直る暇を與へず約一週間の追擊に睡眠をとつたのは只一日といふ猛烈さでした、敵は

砲を棄て軍馬を棄て南昌對岸に到着して見ると負傷者を擔架に收容した儘、敵衛生部が退却したゝめ皆友軍の砲彈、機銃彈に殲滅されました。

南昌は流石江西省の首府で堂々たる縣城ですが、到る處防空壕があり如何に空爆に怖れを抱いてゐたかゝ分ります。南昌城内掃蕩後二日休養の後現在地に追出、目下附近討伐中ですが土民が多く便衣隊との區別が判然とせず、友軍警備狀態をスパイするので油斷は出來ません。

一方今迄追擊中、支那米と粉醬油で大分閉口致しましたが此の附近には豚、鷄、野菜類豊富にて、脚氣、戰爭浮腫等の營養失調性の疾病は今の所ありません、只マラリア傳染病の警戒嚴重に致して居ります。

蓮江君と内科の岩松君とは永修出發以來現在迄行動を共に致して居ります。（四月廿四日）

同　（第二信）

小生は只今南昌南方三〇餘粁の地點にて殘敵討伐中ではありますが、便衣隊の活動は相當なものであります。暫時にして敵の蠢動も止めば、そろ〳〵殘務整理後皆樣と樂しく語る日も遠きことはないと存じます。

當地は最早眞夏の氣候にて、炎天百餘度の行軍には相當閉口ですが將兵一同志氣旺盛です。蓮江君

も相變らず元氣で張切つて私の部隊の後方に衞生隊を開設して居ります。衞生狀態も只今の所大過なく防疫に大童ですが、蚊、蠅は支那の名物？とでも言ひますか、支那兵の如く跡を絶ちません。（五月六日）

小島　茂君

小生〇〇に於て健在軍醫務にたづさはり、醫者離れのしたる者と存じ居候、醫局の合原君は同じ河南（廣東珠江南を河南と稱す）の野戰病院に勤務何かと好都合に御座候、此頃は所謂雨期にてうつとうしく今日にて丁度一ヶ年に相成り申候、思へば永くもあり短くもあり今直ぐ醫局の光景を頭に浮べんと努力しても一寸判然せず心細き事とは相成申候、新入局員にて野球のうまい人は入局致候や否や御暇の折御一報御願申上候、六大學リーグ戰も目下酣のことゝ存候、〇〇にも映畫館開館致し目下「女醫絹代先生」を映し居り候、モンバリと號する大カフエーも有之金さへあればビールでもウキスキーでも酒でもサイダーでも支那酒でも飲むを得候、又日本人經營の飲食店デパート等もあり、バス（乘合自動車）もあり豊橋等よりは遙かに大都會に御座候。

門橋　勇君

一昨年七月皆様の歡呼の聲に送られまして應召以來內地勤務の爲め髀肉の歎に暮れてゐましたが丁度昨年の本月本日命を受けまして勇躍征途に就き其の後徐州の追擊戰以來中支北支に作戰し更に昨年十月よりは波濤萬里を越えて南支廣東に正義の劍を振ひ年末には再び北支に轉進暫く人的戰力を養ひ霜解けと同時に蘇北作戰に參加目下江蘇省の東北方の地に於て御奉公しております。

其の間皆々様の熱盛なる御後援に依りまして益々元氣にて長期抗戰への覺悟を以て東亞永遠の平和の爲め微力を盡しております。

私は目下本隊と別れ療養所長として不便の地で勤務しておりますが當地は衞生狀態非常に惡く飲料水もオタマジャクシの棲むクリークの水を飲んでゐます大變濁っており又辛いです最近は大分慣れましたが內地では一寸御想像がつかないかと存じます。

當地に參りまして既に三ヶ月餘になりますが未だに每夜々々銃聲を聽きます。

戰鬪部隊は每日の樣に討伐に出掛けますが、殘敵は蠅の如きものにて追へば逃げ、ほつておけば寄つて來全く始末におへない者です。

從つて戰傷患者もボツ〳〵と出來吾々も既に〇〇名收容しました。

宣撫工作の爲めに支那良民の施療もやつておりますが之は大變繁昌し、良民が大變なついて來ました。時々鷄をくれたり卵をくれたりします。これで美味しい野戰料理を作つて喰べてゐます。

先日師團長閣下の巡視がありまして當療養所はお褒めの言葉を戴き面目を施しました。

これから段々暑くなるにつれてコレラ、赤痢等の惡疫が流行することゝ思ひますが百萬の敵も恐れない勇士もこれら傳染病には辟易しております、吾々活人報國者はこれ等傳染病に對しては一層の勇氣を以て臨まなければならないと覺悟し既にこれが豫防に萬全を期しております。（五月六日）

鐵道隊附の大內君の勇姿

皆さん御氣嫌如何？いくさも暇になつてシカンしてるです。これはレールです。持つて見ると案外シジョーに輕いです。

田邊重信君

去る五月廿四日公主嶺へ着きましたが、何と同じ部隊に權守君が居るではありませんか、氣强い事此の上無く毎日醫務室の一角に寢そべつて、病院の別館當直室を思ひ出しては駄べつて居ります。仕事らしい仕事は何一つするではなく、之でプレ氏が衛生兵氏と代つて居るなら病院に居た當時と少しも變らぬ狀態です。今の氣候は日中暑い位で、夜中は涼しくて良いですが、十一月頃から零下二十度、窓に五寸も氷が張ると言ふので今から氣になります。權守氏と一緒に居る事約二週間で自分は此處へ參りました。隊のすぐ前にある哈爾賓陸軍病院には內

科に道源大尉、外科に松井中佐の二先輩が居られました、只今の官舍は實際の面積五疊の所へ二人で住んで居ると言ふ慘ぢめさです。が、夜九時半頃迄明るいので市街散歩には惠まれて居ります。殊に松花江岸の散歩には内地には一寸ない味が有まります。

次に「トロイカ」と言ふ處を御存知でせうか？哈爾賓名物の一つだそうです。昨夕行つて觀ましたがその内容は○○○○○。

今の處仕事も無いので、早目に退勤しては寫眞を撮りに行つて居ります。内二葉、哈爾賓ホテルの寫眞展に入選して大いに氣を良く致しました。（六月三十日）

傳、田　俊　男　君（第一信）

今が暑さの眞最中です、匪賊討伐も樂ではありません、この暑さで一日に十里も毎日毎日敵を追つて進軍です。

第一線の救護もなか〳〵思つた樣に行きません、理窟は知つて居ても又話には聞いてゐても實際にぶつかると材料の不足、時間不足その他で思ひ通りにはなりません、上肢骨の粉折の時梯狀副木があつても第一線では水平外轉位副木も出來ず、腹部貫通銃創でもどうにもなりません。おまけに山の中故後送機關全くなく出來た傷者は自隊である期間治療をつゞけるのですから、相當の知識と手腕を必

要とします。

もう少し自分も勉強して居たらよかつたと思ふ時もあります。

時々支那人の施療もやつてゐますが大分わからない病氣があります。ミルツツモールが五、六歳の小兒に大分あります。トラホームの多いのは想像以上です。その他結核なんか猛烈にひどいのがあります。

こちらは施療中でも支那語がよくわからないので、あまりうるさくなると健胃錠か何か飲ませていゝ加減に歸してしまひます。

內地から持つて行つた學問の本なんか見たくても見る暇もなし見る氣も起りません、これぢや全く低下する一方です。

しかし聽診器を出して見せりや支那人は唯々驚いて、大人大人とばかりに伏します。

いつか隊でアッペが出たらオペラチオンをしてやらうとは思つてゐるんですが、どういふ加減か病院のない所ではアッペも出ません。（六月二十七日）

同　（第二信）

益々元氣にやつてゐますから御安心下さい。

何しろ暑いんで閉口です、彈丸の中に居ても彈丸が少し少くなると暑い〳〵です。山の中や、高粱畑の中で戰ひをやるんですから敵はなか〳〵見えないし苦勞します、內地を出る時はそう戰ひはしないと思つたら大間違ひで相當激戰が展開されます、我が隊でも既に相當の犧牲者を出して居ます。何しろ我が○○部隊の軍醫中尉が戰死した樣な狀況ですから。

けれど戰ひ終へて後の休養の樂しさは何とも言へません。そんな時に軍醫殿腹が痛いのですとか、軍醫殿腰が痛いのですか何とか下らぬことを云つて來るとがつかりしますが、これが軍醫の職責故仕方がありませんが、病院の宿直で起されるより堪りません。

奥山俊夫君（第一信）

渡滿以來早や七ヶ月、未だ何の變化もなく日々を無事に過して居ります。無事と申しましても安逸にではありません、軍の作戰に應ずる如く日夜の訓練は到底內地の比ではないかと存じます。特に私共のやうに特異な部隊は最も迅速に行動しなければなりませんので、全員の意氣も亦格別であります。最近兎角國境は刺戟的になつて來ました。○○砲は空をい仰で常に待機して居ります。軍の意圖たる「犯さず、犯されず」の鐵則を守つて、犯さるれば斷乎敵地に侵入しても此れを排擊する方針でやつて居ります。最近支那方面も漸く落付きを見せて參つたやうですが、ソ聯としては此の時機の我が行動

を非常に恐れて居るのではないかと思はれます。滿ソ國境線を死守する兵の勞苦は並大底ではないやうです。

私共が參りましてから、部隊から流腦の患者を一名出しました。此の近所には天然痘の發生（滿人）もあつたやうです。鼻疽（馬）は非常に流行して居りまして、〇〇部隊でも隨分かゝりました。

同　（第二信）

私も無事異鄕の地に新しき年を迎へ、一段と緊張を加へて無事重責を果し度いものと覺悟致して居ります。

當地におきまして何よりの苦痛と致します零下三七・八度の酷寒も最近は大分慣れまして何の苦勞も感じなくなりました。冬期作戰の爲の演習も來る〇日から大々的に開始されんとして目下盛んに訓練中であります。平時に於きましての衛生隊は何の任務もありません。唯兵の敎育訓練のみに重點を置いてゐる次第です。邊境に守備致して居ります我々兵隊共は時に嬉しい便りやらユーモラスな雜誌やらを手にしました時恰も子供が菓子を載いた時の樣な嬉しさを覺えます。當地にも先輩の方が二名來て居られます。第一回生櫻井中尉、第七回生中澤大尉で、色々お世話になつて居ります。

西　新　助　君

目下中支〇〇〇にて元氣に勤務して居ります。

當地は有名な「雀落し」の猛暑で、日中は百三十度にも昇り、日光に照らされた石や鐵類には手も觸れない程です。何處に居りましても殆んど同じ様な暑さに圍まれて三十分仕事をしては三十分休むと云ふ有様です。殊に吾々の居ります所は相當に高い山に取り圍まれた窪地の爲、殆んど無風狀態が續き、夜も夜半の二時頃になりませんと寢に就き兼ねます。その爲睡眠が充分に取れませんので一同弱つて居ります。

患者は大部分傳染病で、中にも「マラリア」が猛烈に多く次から次と續出します。「チフス」は殊に惡性です。それに「コレラ」、赤痢と現在病室は超滿員を極めて居ります。外科患者は大きな戰鬪が近くありません爲め割合少いですが、その代り「アッペ」その他の平時疾患が比較的多く參ります。部隊が目下續々と移動して居りますのでそのうちにずつと多忙になる事と存じます。

私達の周圍の山中には敵の大部隊が集結して居りまして時折出沒しましては鐵道破壞や電話線切斷等をやります。一昨日も夜明け方歩哨線迄近づき、襲擊の隊形をとりました所を逸早く氣付きまして當方に犧牲者を出さずに十數名を捕縛致しました、と云ふ樣な狀態で常に警戒を緩める譯には行きません。同窓の方も近くに居られるのではないかと思はれますが、連絡のとれない山の中に籠つて居りますので、ちつともその機會に惠まれません。（七月十四日）

川上　弘君（第一信）

先日討伐に行つて參りましたが、その前日まで約八〇〇集結してゐたと言ふ敵も我々が行動を起して山又山の險路をぐん〳〵進軍して行つた若き偉力におそれをなしてか、一人の敵すら既になく空しく歸つて來ましたが、約五日間に歩いた部落は大抵日本軍を初めて見たといふ部落ばかり、敵が最も有力な主力をおいてゐた筈の〇〇村に我々が姿をあらはした時は、良民達まで我先にと山の稜線を逃げてゆきました。その無人の部落に宿營準備をしてゐる時、畑で働いてゐて皆の逃げたのを知らぬ農民がひとりふたりきよとんとして立上る元氣もなく坐り込んでしまつた姿には笑はされましたが、それらの良民をいたわつてやる我が軍の樣子を聞き傳へてか、夕刻そろ〳〵と部落民が歸つて來ました。鷄をしめたので金をやるといつても不要〳〵と叫んで受取らぬのも道理、そんな山奥では金錢の使ひ

途が全然なかつたのです。代りに與へた罐詰を彼等はとても喜んでゐました。

討伐間歩いた處は殆ど何處でも路の兩側のきりたつた山の斷面に石炭のしかもすばらしくいゝ石炭の層がのぞいてゐました。さすがに寶庫といはれるだけの意味をはつきり知りました。附近の部落民が路ばたに露出してゐる石炭を少しづゝ堀つて來ては、かまどの下にくべてゐるだけで、まだ手をつけぬ實に〳〵不思議な程の石炭の山ばかりでした。

討伐を了へてすぐ○○にある野戰病院に出張した處、そこの外科治療主任としてがんばつてゐた見習士官は整形にゐた遠山一郎君でした。我部隊のおくる患者はその病院に行くことになつてゐるのです。二人で全く偶然の喜びを分ちあひ色々醫局の話に花を咲かせました。

私が此處に歸つてからは又平和な毎日がつゞいて居ります。新聞によるとどうやら傳田君のいつてゐる部隊はさかんに戰鬪をやつてゐるらしく、また彈丸の音をきかぬ自分を顧みて羨しくてなりません。

今日傳田君にも便りをかきました。東と西とに分れてはゐても同じく彼も北支の野に興亞の劍とメスをにぎつてゐるのかと思ふと懷しさで一ぱいです。（七月六日）

同　（第二信）

東京のあのアスファルトもとける様な暑さを今この涼しい山西の山の中で思ひ出してゐます。もう此處には秋が訪れました。七月中降りつゞいた雨も八月に入ると同時に忘れた様に、快晴の日が續きあくまで澄んだ青空に名殘の夏雲の白さが目を射す様に美しく浮び出てゐます。強烈な日射しの下に吹く風は全く秋を想はせる冷たさです。七月中腹具合を惡くし、柄にもない變な熱を出してみたり、軍醫らしくもなくすつかり部隊長はじめ皆に心配をかけましたが幸に一日も診斷を休むこともなく腸チフス流行地のはさみうちに會ひ乍ら此處ではまた傳染病患者を出さず今尙懸命に防疫につとめてゐます。聲をからして衞生講話をやつたり、無智な土民を集めて傳染病の智識を吹き込んだり、不運にして敵彈をくゞる機會を未だもち得ぬとは言ひ乍ら見えざる强敵に對し全く孤軍奮鬪です。

八月に入つて雨があがると共に又元の元氣さを取戻しましたから御安心下さい。七月中旬より昨今まで雨のため交通は途絶され、內地の音信はもとより新聞さえ讀めませんでしたがやつと最近少しづゝ音信も來る様になりました。○○野戰病院にゐる遠山一郎君も至極元氣で、さすがに暑い○○で澤山の外科患者を一人で引受けて大活躍をされてゐます。

敵からすかり敬遠されて討伐についてゆくと敵は逃げ、ついてゆかぬと敵と交戰したりして、よく〳〵敵の驚異の的となつてゐるらしい小生に反し、遠山君のゐる○○は先日勇敢なる敵軍から砲擊を受け同君もやつと第一線に來てゐることをはつきり感じたと言つて來ました。

敵をみずに殘念に思つてゐた僕にも最近いよ〳〵相手にとつて不足のない敗殘兵ならぬ優秀なる敵との初陣の日が來る筈です。かつて六月中旬紙上をにぎあはしてゐた〇〇〇方面に再び侵入の敵に今度こそ我々が一撃を喰はせることになりました。

すつかり張切つて醫极をひつくり返したり擔架を組立てゝみたりして初陣の第一線救護に腕前の程を見せ様としてゐます。

かつて熱河の戰ひに鬼中隊長とうたはれ金鵄を胸間に輝かせてゐる〇〇部隊長以下すべて張切つて「明朗山西建設に禍する奴は一兵も殘さずたゝき斬る」と鬪志滿々です。

素晴しいニュースをお待ち下さい。暑苦しい病院の空氣を吹き飛す様な快ニュースを送る積りです。（八月十四日）

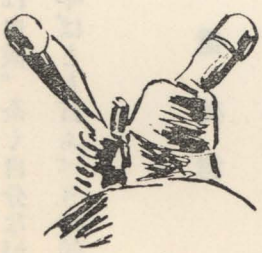
同　（第三信）

秋深き此頃醫局の諸先生や同窓會の諸先輩皆御元氣と御奮鬪の事と思ひます。大陸に轉戰すること六ヶ月。黄塵に眼を赤くしたり、洞窟の生活を送つたり、突如黄河河畔〇〇を占領して陝西省の敵の度膽を拔いたりしてゐる間に、遽しく月日が過ぎました。今居る處は山西省有數の都會、酒と麗しき姑娘の名産地。ところがそれ等を狙ふ爲かどうか時々ふら〳〵と敵が近寄りますので、此の所討伐に次

ぐ討伐で、一寸一杯と言ふ時間もない有様です。つい先日も三日がゝり不眠不休で敵を蹴散らしましたが、あれ程バラ〳〵撃たれたのは初めてです。尊き○○名の戰死傷者も一度に出ました。又明拂曉を期して一寸出かけます。大抵征く處は近郊の別莊地帶で、支那に珍らしい清流が、紅葉した林の間を縫つて流れてゐようと言ふ全く素晴しい景色の溪谷です。敵をさん〳〵やつつけた歸りに、落葉を浴び乍ら流れのほとりに憩ふ一ときの快さ。上高地をぐつと縮少した樣な眺めに想ひは遙かなる祖國に走ります。我が部隊の一分屯隊のゐる峠では夜はもう零下十五六度にも下るとのこと。此處に冬の訪れを見るのも間もないことでせう。初の大陸の嚴冬を過すのは果して何處になるのでせう。何はともあれ、常にはち切れん許りの元氣さで頑張つてゐますから皆樣御安心下さい。（十月十八日）

內藤敏德君

小生滿洲國牡丹江省東寧、東寧○○陸軍病院に無事着任仕り候。尙小生、當初は佳木斯陸軍病院附仰被附られしが、急に東寧に變更と相成申候。着任後小生の驚きましたるは、いきなり庶務主任並に教育主任及各科診療主任を命ぜられたる事にて、小生眼を白黑させ申候。其上早速昨日より牡丹江の多田部隊本隊に庶務主任及副官會議に出席致し數多の佐官連の間に挾まりて、



様子さつぱり判らず甚だ困り申候。從つて極度に心藏を强くする必要にせまられ申候。全く自分ながら、あきれる位に御座候、滿洲も昨今は朝夕はかなり氣溫低く、現在既に秋も半ばとも言ふべき時候に御座候。（八月十九日）

長屋信美君

○○より離るゝ事數十里の小都邑なれど治安確立され落付いた支那部落ですが、六十年來の豪雨にて周圍は一面一大湖沼と化し、畠も高粱も土民の土壁家も皆湖底に沈む如き狀態です。小生の官舍も三疊の疊附きに電氣はあれど電流は不足にてランプを點じて、原始的生活をいとも明朗にやつて居ります。當地の地方病は殆んどありません。依然マラリヤ、脚氣、戰爭浮腫、慢性大腸炎等であります。ヘルメット帽を被つて、赤土にてデッチ上げた支那家屋の中を巡視して歩く姿は丁度外國映畫に出て來る外人部隊そつくりですよ。

武藤敏文君

無事三十日夜、日英會談問題の國際都市に到着、三十一日以來元氣に軍務に從事して居りますから御安心下さい。尙小生は當分の間當地に居る事と思はれます。當地は連日、日中氣溫百度を突破、夜

に入るも蒸し暑く、就眠困難の事も屢々であります。今後は事變當初より今日迄活躍せられた人々に代り、大いにその職責を責したいと存じます。

遠山一郎君

小生益々元氣です。當地も本年は例年にない雨期（梅雨）が長引きましてやつと昨今あたりから天候も回復しました。朝晩の涼しさは早くも秋を思はせます。支那人にとつては雨は一番の禁物でせう。あの輕裝であの靴（鞋）では全く外出は出來ませんが、もうすつかり回復したので城内も賑つてゐます。姑娘の姿も亦格別です。支那の家屋の中に柘榴がこんもりと繁り、中に紅い花を咲かせてゐる樣は丁度繪を見てゐるとしか思はれません。小孩（シアオハイ）達の日本語熱も大したものです。復興への努力は實に目覺しきものがあります。

皆樣の御自愛の程を祈り上ます。（八月一日）

石田堅一君（第一信）

着任以來未だ數ヶ月、ソロ〳〵隊勤務なるものもなれました。此の間一ヶ月許りノモンハン事變に出動、孫吳を留守に致しましたが、現在亦孫吳に歸つて居ります。

當地にはもう何回も雪が降りました。全くの粉雪で目に見えぬ程のこまかいのが、風と共に地に舞ひ降りて積ります。朝の出勤時雪の草原の中を通る時は、馬の足の下で雪がキュッ〳〵と鳴るのが亦内地のスキー行が思ひ出され樂しくなります。

然し積雪は少ないので上越あたりの樣なわけには行かぬさうです。スケートの方は到る所天然のスケート場で水でも撒いてをけば二、三十分で芝浦山王そこのけの豪華版が出來る由、等良い事ばかりはなく氷點下四十度もあらうと言ふ曠野での演習等聞いたゞけで寒氣がする事でせう。自分の方が匪賊と思はれさうな恰好で居てもまだ〳〵寒いと言ふのですから所謂處置なしです。

其の代り夏は天然の避暑地です。湯あがりの浴衣等と意氣がつた事を言つてゐると風邪を引く怖れが多分にあります、日中でも太陽にあたれば、夏は夏だけに汗も出ますが、木蔭にでも入れば凉しすぎる位であります。

孫吳の街は部隊より一里半ばかりはなれてあり、いとも貧弱な日本人の家と滿人の家があります。カフェー等もあつていとも賴りないネオンが半分壞れて光つてゐると言ふ有樣で、中を泳いでゐる女給孃なるものが、九州は天草あたりの產が多く、中性みたいな女性が居ます。げに「ダス、メッチエン」であるかな!!

それでも漠々たるホロンバイルの草原よりみれば孫吳は大都會ですよ。(十月)

同　（第二信）

小生八月下旬下命ありて、ノモンハンに出動いたし唯今亦孫吳に歸るを得て、隊勤務に服してをります。

孫吳は最早冬で雪も三回も降りました、粉雪のパリ〳〵で大部ひがまれる方もあるでせうが殘念ながら少しか降りません。

朝も氷點下一〇度とか八度とかになる事があります。しかし東京に居る時程寒さを感じないのはいかなる關係でありませうか。

之の季節になると、食物をあさりに、匪賊がチラホラ出る樣ですが、昔程の事はなく、滿洲と言ふと匪賊を思ひ出すのは遠い話となるのも近い中の事でせう。

夜になるとアチラの草原コチラの山の嶺に草を燒く火が美しく見られます、野火と稱して今頃の年中行事の樣であります。

內地は今頃は良い氣候と思ひます、時に銀座の灯が見たくなる事もありますが、又孫吳にも仲々捨てがたい趣もあります。

折あつた時には孫吳にもお出下さい、內地で喰へぬ御馳走を奢りますよ。（十一月）

小口宇一君

出征以來二年有餘お蔭樣で全く健康に惠まれて居ます。「チャンコロ」の彈丸は向ふの方でよけて通つて呉れますし、「マラリア」も「コレラ」も赤痢や「チフス」も嫌つて寄りつきません、部隊内の將校で病院のお世話にならないのは自分の他一名です。

北支に一年、中支に一年、今度は南支かと思つらまた北支へ「ゴースタン」しました。山西省の山の中で鳥の聲を聞き乍ら松茸や栗を思ひ出し、なつかしがつて居ります。

北支中支と歩き乍らなつかしい「慶應マン」に遭つたのは數名に過ぎません、南昌一番乘りの川上部隊の直ぐあとから入城して見ると〇〇隊〇隊長の辻岡君にめぐり會ひました。自分達と違ひ隊長さんの指揮も採れば、又手が足りなければ得意の「メス」も採ると云ふ働き振りでした。漢口では小野田君が待つて居て呉れました。鴨鍋を突つつき乍ら得難い話を聞いたのは嬉しかつたが、自分の都合で「キネマ」に案内して貰へなかつたのは殘念でした。

支那語はなか〳〵進歩しません。夫れだのに何時の間にか朝鮮の歌を覺えて了つたです。「ヨボ」進出の目覺しさよ、支那娘子軍の活躍の話は聞えて居たが運惡く出會はなかつた處、八月の大討伐の時三人生取つたのです、そして寫眞を撮りました。撮る時係の下士官から觸らないで下さいと叱られま

した。貴重品並の取扱です。

取りとめないことを書きました、諸先生の御健在を祈ります。（十月廿二日）

大久保嵜夫君

去る八月以降平壤聯隊にて勤務中の所この度愈々部隊と共に現地に參りました。以來大元氣にて隊務にたづさわつて居ります、現地と申しましても當地は治安も相當行き屆いてゐますから今の所何も戰地に來てゐる樣な氣が致しません、此處でも今年の始め頃は相當に激戰が繰返へされたと云はれます、着いたばかりでまだ何もわかりませんが、唯水は北支でも有數な美しい水です、何時迄か判りませんがまあ當分の間ここら近所をうろ〳〵する事と思ひます、今後共色々と御高導の程御願ひ致します。（十一月十日）

依田亘正君

御蔭をもちまして小生も目下無事勤務に精勵致して居ります、當地は已に眞冬と變りありません。毎日零度以下であります、併し氣溫から云へば內地より多少低い程度ですが、風が烈しく殊に三寒の時は文字通り膚を刺すと云つた狀態です、なんでも「旅順の風」と云つて有名なんだそうです。これから十二月の上旬にかけて野營演習がありますが、全く思ひやられます。

只今は隊は演習の爲十數名しか殘つて居りません、小生も隊内に腸チフス發生した爲に殘留となりましたが、今年は石炭統制から十六日迄は火を焚けず毎日震へてゐる有樣です。

實は今月の初めに腸チフス患者四名、赤痢患者一名發生し已に二名の死亡者を出した爲に大騷ぎをやりました、尙續發の徵ある爲に頭痛に惱んでゐる仕末です。

何分今年は大連に多數患者が出ましたので隊内に入らねば良いがと思つて居りましたが、先々月の中旬に演習地で洪水に會ひ、濁水に胸まで浸つて仕舞ひました。

多分之が原因だらうと思ひます、其後、衞生調査にでかけましたがチフスらしき患者で死亡したのがありました。

何分滿人は病氣になつても醫者には診せず、死んだら勝手に病名をつけて派出所にもつて行けば檢死も何もなく簡單な埋葬許可證を呉れるので病名は全く良い加減です、二十一歳で卒中と云ふ死亡名がついてゐる有樣ですから仲々調べるのにも面倒でした。

川上君からは度々便りがあります、彼も元氣ださうです。（十一月廿日）

林　克　己　君（第一信）

自分も出征以來元氣にて彈の音を殆ど聞かずに蘇州、南京、九江、漢口と前進致し、病院勤務に服

して居ましたが、殘念乍ら八月初旬病に犯され入院加療せるも經過思はしくなく、九月二十九日漢口發、十月一日南京着、南京に十月二十一日迄滯在致し、十月二十五日無事廣島着、廣島陸軍病院に收容せられました。而し擔送でなく獨歩ですから他事乍ら御安心下さい。

中支も、いやな九江より七月下旬漢口に前進致し、暑さも過ぎ今が一番凌ぎ良い時です。

漢口には小野田さんが海軍病院に居るとの事でしたがお會ひする機會がありませんでした。

近い中に宇都宮陸軍病院に轉送になる事と思ひます。（十一月二日）

同　（第二信）

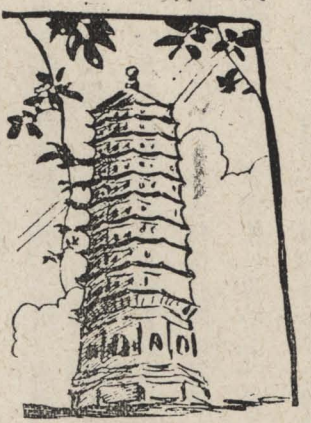
小生出征中は一方ならぬ御後援を賜はり御厚志の程厚く御禮申上げます、尙軍務多忙とは云へ御無音に打過ぎ申譯御座いません。

自分出征以來滿二年、上海、蘇州、南京、九江、漢口と前進致し病院勤務に服し居たるも不幸八月初旬病に犯され入院、現地にて原隊復歸を願ひ居たるも幸に內地還送を命ぜられ途中南京、廣島を經由十一月九日無事宇都宮陸軍病院に收容せられましたから他事乍ら御安心下さい。

聖戰半にして病に犯され內地還送となりました事は殘念至極です。

歸還の上は一意養生に專心し一日も早く全快の上再び第一線に赴く覺悟です。

末筆乍ら皆樣の御健康をお祈り申上げます。（十一月十一日）



大陸特輯

滿支ところ〴〵の概感

茂木藏之助

私はハルピンに於ける滿洲醫學會及び北京に於ける中華民國醫學會に出席のため、次女慶子を同伴して、八月二十三日に醫局諸君等の御見送りを受けて出發したのでありますが、下關より釜山に渡り本學出身者で横濱の濟生會や我が整形外科に居つた郭君の出迎へをうけ、直ちに自動車で釜山の近くの海雲臺溫泉といふ所に案内されました。釜山の近くには昔から東萊溫泉といふのがあつて、有名なさうですが前田教授や島田君の推奬を受けて玆に來たのでした。海雲臺溫泉といふのが近來拓けたのでありますが、海岸の直ぐ側で、近くに山があり、一寸内地にもない樣な溫泉でありました。朝鮮に行かれる時諸君は是非一泊して旅の疲れを洗ふがよろしいと思ひました。尙この直ぐ前では目下赤鯛が澤山釣れるさうで、郭君の伯父さんが釣狂に近いので、是非案内したいとの事でしたが、娘同伴のため遺憾ながら思ひ止まりました。此の晩は郭君の奥さん（日本女子醫專卒業）なども見え、いろ〴〵の話を伺ひました。郭君は開業後一年内外であるのに、アツペの大家として名をなして居るそうで、大陸に上陸早々氣をよくしました。

昨日朝釜山を出發し京城に到着しました。京城も昔に比べてなか〳〵よくなりました。京城ではもと我が整形外科

講師たりし中村教授にいろ〳〵御世話になり、其の晩は慶應に關係ある教授諸君や、同窓の出身者諸君に日本料理の御馳走になり歡待されました。

翌日京城を出發し、平壤に立寄り、大連に向つたのでありますが、朝鮮は十五六年前に二度も廻つた事がありましたが、其の當時と現今とは非常の相違であります。之れに就いては三四會雜誌に記載してあるので、重複して述べる事を省略して頂きますが、此頃の朝鮮の發展は目覺しきもので、且つ大に內地化して居る事が非常に心强かつたのであります。なほ朝鮮には方々に金山があるので金山熱も高く、ある醫者は偶然にもよい金山を發見して、一躍成金となつた人もあるそうです。どうです諸君の內には朝鮮や滿支の僻地に行つて開業しながら金山でも探し出しては…

旅行中先づ朝鮮で第一番目に困つた事は、朝鮮と滿洲の境界になつて居る鴨綠江の兩側に新義州と安東があるのですが、新義州に行く少し前に大藏省の官吏か、稅務署の官吏か獄卒みたいな爺が來て、金をいくら持つて居るかと云ふから、金の事は山海關ではやかましいと云ふ事を聞いて居たが、安東ではやかましくないと思ひ、子供と一緒であつたから一人五百圓の規定だから、合計千圓許り持つて居ますと云ふたら、一家族は一單位と認めると云ふのです。又他に名古屋の人で店員を一名同伴した人もあつたが、之れも一單位と認めるので五百圓以上は持つて行けぬから新義州で下車をして餘分の金を日本內地に返還しろと云ふのです。滿洲の鐵道列車の內には方々に右の旨注意書があるから、誰れにも解るのだが、朝鮮鐵道には何處にもそんな事が書いてない。併し規則は知ると知らざるとを問はず之れに從はなければならんとむづかしく云ふので、實に不愉快な印象を受けたのであります。併しそんな場合にもいろ〳〵便法があつて幸に事なきを得たのであります。なほ此の金の關係は滿洲と北支の境の山海關・滿洲と蒙疆政府の境の南口でも交替しなければならんのであるが、新義州程喧ましくはなかつたのであります。又滿洲や北京の旅館等では日本貨幣が役に立つて居るのであります。兎に角旅行中小役人の威張るのは不愉快の事であります。又た多くの

人等が云ふ通り朝鮮鐵道の車掌もボーイも至つて不親切で、安東で滿鐵の從業員と交代しますが非常な相違でありました。併し此んなごた〳〵や不愉快の爲めに汽車中はあまり退屈もせんで、滿洲の野の旅を續けました。滿州の土地は誰れでもが言つて居る通り誠に渺茫限りないもので、一—二時間の間は山も家も見えぬ所があります。汽車の後方を見れば何處までも何處までもレールが一直線になつて居る所が多く、空と陸が地平線で一緒になつて居ります。

奉天に到着する少し前の驛に神山君と宮尾君が昔と變らぬ元氣な顏をして出迎えに來られました。奉天に到着したら千種課長、寺田教授はじめ多數の方々が出迎えに見へられました。其の晩は粹山と言ふ小生曾遊の料理屋に遠近から集まつた三四會員（遠いと言ふても日本の遠いのとは單位が違ひます）が三十餘名集まり、一同單衣物に着換えて心置きない歡迎會が催うされました。集まつた連中は一同元氣で、私も大にうれしく感じました。

只旅順の畠中君が病氣（肋膜炎とか）で出て來られないのが少々淋しかつた。實は旅順見物旁々畠中君を御見舞に行くつもりであつたが、時日がなかつたので、傳言を賴んだゞけでした。

翌二十八日には滿鐵の戸田君に案内せられ、神山君などゝ一緒に奉天の名所を案内されました。私共が曾つて第二奉直戰の當時張作霖軍の戰傷者を治療した、東北大學は、今度も病院となつて傷病兵を收容して居ましたが、時々戰傷者を見舞に行つた北大衞は滿洲事變の戰災により殆んど跡方もなく廢墟と化し、殘つて居る建物には多數の彈丸の跡がありました。折りしも初秋の候なので所々に野花が咲いており、蟲の音も聞え、何んとなく、センチメンタルにもなつたのであります。なほ案内役だつた戸田君は何とか言ふ可なり遠いところにペストが發生したそうで、翌日早速防疫のため出發されました。なほ奉天等に關する事は三四會雜誌にも一寸記載しましたから、玆には省略します。

二十九日の午後奉天を出發して夕刻新京に到着しました。此の汽車は亞細亞號と云ふて滿洲で自慢の汽車なそうで、全車冷房裝置になつて、速力もなか〳〵早いのです。始めの内は涼しいので氣持がよかつたが、冷房が効きすぎ

て居る爲めに、後には少々寒くなつたのですが、着物は一纏めにして外に積んであるので、衣服を出すのも面倒臭かつたので、其の儘新京まで過しましたが、此の間に風邪をひいて仕舞いました。兎角滿洲や北支の旅行は旅行距離が長いので、暑ついと思ふと、すぐ寒くなつたりするので、よく風邪を引く人があります。又水が變つたり、御馳走が多過ぎたりするので、よく胃腸を害する人が多いのであります。依つて今後彼地に旅行せらるゝ諸君は此の點によく注意すべきであると痛感しました。

新京に到着した時は滿鐵の川上課長其他數氏及び愚弟夫妻及親戚のものが出迎へに來られました。新京に着いた晩には何とか言ふクラブへ諸君に招待されて、御馳走になつて大に愉快でしたが、丁度防空演習？で、飛行機が高く飛んで居る所をサーチライトで挿み其の行動を妨げる現狀を見ました。コンナ事は曾つて、巴里に獨軍の飛行機が飛んで來た時にも行つて居ましたが、それよりも遙かに効果的のやうに見られました。新京に着いた時は、少々風邪氣味なので、市街をあまり見物しませんでしたが、電線も電話も地下線となつて、道路が非常に整然として廣い事を感じましたが、人家はまだ〳〵まばらで、新開地と言ふ感が深かつたやうです。又弟夫婦に聞くところによれば物價がなか〳〵高いそうです。

哈爾賓の學會は八月二日、三日とあつたのですが、新京で風邪の爲め二日の晝頃到着いたしました。哈爾賓では堀課長はじめ諸君の出迎を受けましたが、其處に哈爾賓方面に出張した醫療奉仕團の、醫局の櫛田君及び學生二三名が見えて居りましたが、塵や垢にまみれた團服を着て垢だらけになつて居るのを見て、諸君の苦心の程を知つたのですが、後から聞くと哈爾賓より二三里も離れて居る所から歩いて、わざ〳〵出迎えに來られたのだそうです。なほ學生の奉仕團の事は三四會の雜誌に記載いたします。

哈爾賓の學會は仲々盛大なるもので、內地の各大學より三四十名程も來賓があり、想像以上に盛會でありました。

哈爾賓の街は稗田君等に案内されて見物いたしましたが、樹木が非常に多く――尤も冬になれば皆葉が落ちて仕舞ふそうでありますが――内地人、滿人ばかりでなく白系露人がなか〳〵多く、異國情緒ゆたかなものがありました。併し白系露人と申しましても、赤系のものも相當雜つて居り、スパイが非常に盛んで、日本の内情が、響の應ずるが如く直ぐ筒抜けになるそうで、いろ〳〵な場所にスパイを注意すべしと書いてありました。白系露人と言ふても、赤系露人と言ふても、前者は色が白く、後者が色が赤いと言ふわけではないので、區別が少しも附かんので、取締の方法は全くないとの事であります。又た白系露人は一同不遇の境遇にあるので、御互に助け合つて居るのかと思ふたら白系露人達は至つて仲の惡いものが多く、相反目して居るものも多いとの事で、今は自動車の運轉手等をして喰つて行けるものも多いが、仲には生活に困まつて自然、スパイをやつて喰つて行くものもあるそうであります。併し國家を失つた國民は實に慘めなものであると言ふ事をつく〴〵と感じたのであります。

ハルピンではうつかりして、汽車の急行券を買ひ損くねて、出發を一日延期するの止むなきに到りました。併しその御蔭で、森下君夫妻、稗田君、弟夫妻、私達親娘で有名な松花江の對岸でピクニックを兼ねた釣をしました。其處には露人も滿人も釣をして居ましたが、釣は矢張り内地人が上手なやうです。但しハルピンのステーションを出發する時にノモンハン方面に行く軍人が武裝もの〳〵しくして同車しましたが、それに私共が釣遊びに行く事は誠に面恥かしかつたのですが、今更ら引き返へすわけにも行かんので、遂に出かけましたが、釣つて居る間も軍人が澤山汽車で通るのを見ました。私共は心から手を振りながら、軍人諸君の健全を祈りました。なほノモンハン事件にはいろ〳〵話もありますが、軍の秘密に關するから省略します。

ハルピンの學會が濟んで、北京の學會に出席する事になりましたが、なか〳〵旅程が長いので、奉天に一泊、神山君を同伴し、山海關の稅關を通り、天津の大洪水を見ながら（天津の洪水に就ては三四會雜誌に記載しました）漸く

北京に到着し、村瀬課長君はじめ多數の出迎へを受けました。北京の學會では門、前には支那の兵隊が劍附き鐵砲で護衞して居るばかりでなく、會場内も同樣に護衞して居るので、所謂戰時學會の氣分が濃厚でありました。北京では李市長、湯文部大臣、候會長等に立派な北京料理を御馳走になりましたが、村瀬課長と一緒に仕事をして居る張君の御宅での支那料理は最もおいしく感じました。張君の家は北京での門閥家なそうで、よい料理人を雇つて居つて、張君の父君もなか〳〵の支那料理通で、張君の令夫人は自分で料理の材料を買ひに出かけらるゝそうであります。其後何とか飯店と言ふ有名な料理屋で三四會の連中十名ばかり集まつて御馳走になりましたが、張君の料理を頂戴した後には、失禮ながら何處の料理も左程ではありませんでした。なほ村瀬君には、舊城内、公園、萬壽山等を案内して頂き、珍らしき御馳走も頂戴しました。なほ、北京郊外の某大學の跡にある實に廣大なる病院で醫局出身の林軍醫少佐にも面會いたしました。なほ北京の事は三四會雜誌にも書きましたから省略します。又た北京に行く途中に天津の廣大無邊の大洪水を見ましたが、其の大略も三四會雜誌に記載したから省略します。

次に滿洲に於ける三四會員の活躍、特に金井蒙疆最高顧問のきび〳〵した活躍等も三四會雜誌に記載してあるので茲には省略します。

要するに結論として、大學卒業後、其科によつては、異るが一—三年間はみつしり專門の方を勉强し、滿洲か支那方面に行つて活躍し、且つ世間學と共に實地醫學を充分に學んで、子供が中學か女學校に行くやうになつたら（其の間に贅澤しなければ、相當の資力を蓄へられる）內地に歸つてのんびりと醫學に從事した方が良からうと思ふ。

併し又獻身的に日本の爲めに終生努力することも男子としての快事とも思ふ。

（病中床上の執筆にて簡略亂雜の段御免を乞ふ）

中支偶感抄

瀬尾省三

上海入港

對岸の見えぬ黄色い流れの楊子江を溯ると、やがて山のない平らな岸が見えてくる。これは崇明島といつて楊子江の中央にある島。ついで船は左に折れて黄浦口を上る。呉淞の戰跡がすぐ目の前に現れ、軍行路の並木が見えて來るうちに遠く市政府の屋根が見える。凡そ内地とはスケールの異つた眺である。往來する船はすべて日章旗の御用船か艦艇。なんとなく戰の香がするなかに、第三國の國旗を揚げていろ〳〵な物資を乘せ、乘組員は殆ど支那人のくせに外國船の如き顔してこそ〳〵と來る船もある。やがてニュースでお馴染の旗艦出雲が現れてくる。よくもこんな狹い江の中に錨泊して居て彈があたらなかつたものだと不思議に思はれる位だ。上陸すると、すぐの往來からもう廢墟の街である。大震災の跡を思へば間違ひのない通りを自動車で虹口即ち日本人町へ行く。こゝは殆ど壞れて居ないので安心した。

上海の戰跡

ニュースで見なれた閘北の鐵路工局、北站を見、又四行倉庫を見るにつけ、其の彈痕の生々しさ、よくぞ吾等が勇

士等の祖國の爲に戰ひたると頭の下る思ひがする。そして僅か四、五間位の幅の道を距てゝ租界あり、其の租界に一發の彈も入れず閘北ボケット地帶を完膚なき迄にやつゝけた戰の苦心、現地に立つてしみじみと初めて知ることが出來た。

上海租界バンド

有名なブロードウエーマンションホテルの下、ガーデンブリッヂを越すと、もう戰爭は何處でやつて居るのかと思ふやうな氣がする。各國の旗を屋上にたてたビル街。第三國旗のもとに物資の陸上げに忙しい船着場。支那ではなくて外國の街である。黃浦口の中流にずらりと白色に伊達者を氣取つて英米佛の軍艦は彼等が租界の守りとして並んでは居るが、すべてオモチヤ然たる感じは免れないと共に、租界の要所々々辻々に立つ各國兵士も其の感じがし、國際制服展覽會のやうな氣がする。こゝで見る日章旗と吾等海軍將士の姿は一層に賴母しい限りである。

上海ジエスフイルド公園

秋晴れの或る日曜日、上海の共同租界、工部局の經營するジエスフイルド公園に初めて行つて見た。一寸神宮外苑と云つた感じの芝生の多い公園であるが、はるかに狹い。入場料を取つて入れる、もとは東洋人と犬入る可からずと云つた公園との由。

日曜日のこととて各國人の散步と又戰も知らぬ氣に漫步する支那インテリ級が多い。突然ゴウ〳〵たる爆音と共にすんだ青空を銀翼に日の丸も美しく戰鬪機二つを從へて悠々飛び行く吾が海の重爆一機。何處を攻むるか北より南に公園の空を過ぎて行く。仰ぎ送る眼頭に秋の日がしみて仕方がなかつた。

敵襲の夜

十月十日、支那では双十節と云ふ記念日である、記念日には必ず何か抗日デモをやる。十月十日朝まだき午前一時、

突然浦東に起る砲銃聲。こいつは敵の先手を打つて皇軍の浦東討匪行だと思つて起きて見る。サイレンが鳴る。これは少々變だなと見れば、舊八月十七日夜の月皎々と冴えた浦東に火の手が上る。いよ〳〵激戰をやつて居ると思ふ突端にヒューンと彈の音、カチンと建物にあたる。此れは正に敵襲である。兵站部に電話連絡する、幸に電話は通じる、心强し。銃聲はげし、敵は對岸の倉庫に陣して南市に向つて發砲す。事いよ〳〵急なりと全員正服着用燈火を消した院内に非常配置につく。わけても看護婦連の僅か五分で身躾をすませ中央に集結せるは中々上出來なり。敵は皇軍の黄浦江渡河を妨げる集中射擊、渡船場が本病院のすぐそばときては正に流彈の集中射擊は免がれぬ。南市警備隊の連絡兵は增兵のため自動車の應援を求めて來る。直ちに本院のトラック出動、銃火を潜ぐつての活躍が始まつた。浦東に面した看護婦連中の部屋の窓はすでに疊を上げ、バリケードを作る。敵は對岸なるも此處南市は今尙抗日分子の蠢動あるところ、先日も警備兵が手榴彈を投げられた。隣れるは援蔣の本家佛租界、英租界、これで南市に敗殘兵の蜂起と考へれば自づと或る種の覺悟が出來る。先づ重要書類を取り纒め借物の拳銃に彈を込める。入院中の支那人はおど〳〵する、これを小平君は鎭めて歩く。

約二時間の激しい銃火は次第に遠のいてきた。友軍の渡河に成功したのであつたらうか。屋上に昇つて見ると男班員連皆な壁の陰にしがみついて恐いもの見たさも手傳つて流彈の音のスリルを滿喫して居る。一寸聲を出すと對岸の倉庫から銃火がパツパツと光つてヒューン〳〵と彈がくる。この廣い江を距てゝも深夜はこつちの物音が聞へるらしい。銃聲のとぎれには河の中の航路標識のブイの鐶の音がカラン〳〵と無氣味になり、黄浦江の流れの音も聞へる樣な靜寂さだ。もう曉の三時だ。銃聲もとぎれて遠うのいて來た。看護婦連中には其のまゝ中央の大部屋に假寢させ、皆で部隊輸送に出かけて行つた茂木運轉手の歸へりを待つ間が、とても長い。負傷でもせぬかと心配だ。五時東の空の薄明るくなつた頃遠くから聞き慣れたエンヂンの音がしてトラックの凱旋である。常の如く朗らかに茂木君ハンド

ルを操りながら歸へつて來た。そして手柄話に不安の一夜が無事に明けて行く。

上海—東京空の初旅

十月中旬本部から各班長に、事務打合せ兼中間報告會をやるから上京せよとの命令がきた。待つて居ましたと許りに仕度をして、全班員諸君の種々な手紙や言傳も携へて、今日から定期航空路になつたばかりの、十月十八日秋晴の朝七時半、南市の病院から中村君達に送られて共に〇〇の飛行場に向つた。午前九時五〇分ダグラスD2はブルン〳〵と爆音高く〇〇を離陸する。空から手を振りながら見ると中村君達は忽ちに小さくなつてもう見えない。足下は既に揚子江だ。高度約二千米と九州辯のエヤーガールが云ふ。間もなく黄い海、下に小さく白い尾を僅かに引く汽船がチラ〳〵と見へて居る。中々海の色は青くならない。やがて青い海になつたなと思ふころ左下に島が見へてきた。これ濟州島である。高度三千米だが少しも寒くない。上天氣の大空の中でエヤーガールがサンドウイッチと紅茶をサービスする。仲々美味い。やがて五島列島の眞上にかゝる。よく耕された畑や山が見へる。九州の空には一帶に入道雲が立ち込めてゐるが、其の上は飽くまでも美しい青空だ。飛んで行く下には、綿をちぎつたやうな雲が去來する。唐津の上を通つて午後一時十分博多灣に入つて來た。千本松原など實に美しい。大きく回つて雁の巣飛行場に降りて行くが、あんな狹い所に何うして降るかと思つて居ると、下の格納庫の屋根が見る〳〵大きくなつてくる。尾翼を屋根にすれすれに引つかゝるかと思ふ位にして、サツト着陸する。ドスンと輕くきてそのまゝ發着所の前まで地上滑走して行く。發着所で檢疫及び稅關の檢査を型の如く濟ませて、次に今日から就航したばかりのダグラスDC3に乘換へる。雁の巣とよく言つた、北京から青島から、朝鮮から臺灣から、次々に雁の如く、ダグラス、ロッキード、フォッカーといろ〳〵な旅客機が鵬翼を連らねて舞下りてくる。それらを待ち合せて、午後二時再び機乘する。先のDC2は十四人乘り。今度の東京行きDC3は二十一人乘り。再び飛行場の隅から滑走したと思ふと前の山にぶつか

る位にどん〳〵高度を上げて行く。三千米に上つた頃は既に瀬戸内海で、天氣はやはり良い。右に四國、左に山陽を見て瀬戸内海の眞上を飛ぶ。内海は全く箱庭を見る如く四國の向ふに太平洋が見へる。四國は狹いなと思つた。約一時間半で淡路島上空に出る。もう直きに神戸だ。が、そろ〳〵怠屈して、あくびが出るのはおかしな話だ。行手の空は暗く曇つてゐる。東京辯のエヤーガールは今朝は東京は時雨だつたと云ふ。薄く曇つた空の下に神戸が見えてきたと思ふと、ダグラスは霧の中に突入した、突端に上下に大きく搖れだした。航空路の難所鈴ヶ峠の上に居るらしい。暗い雲の下に鐵道線路が隱見する、又雲に入る。窓の外に霧が走る。雲の切れ目の向ふに一寸光つた湖のやうなものが見えてくる。あれは琵琶湖かと聞けば伊勢灣と敎へて呉れる。間もなく其の上に出て再び一寸晴間を靜かな飛行を續けて行く。行く手の雲の上に富士の白雪が見えてくる、同じ高さに嶺を感ずる。そろ〳〵箱根だなと思ふ。又ゆれてくる。直ぐに相模灣の上に出た。江の島らしきものを下に眺めて上陸。もう五時をすぎてゐる。曇つた空は黃昏れて下の景色もはつきりしない。と、眞下にピカ〳〵と連續して電車のスパークが見える。それを辿ると鐵道線路がはつきり認められ青赤のシグナルまで認められる。これでは中々空襲下燈火管制は困難なことだなとしみじみ思つて居る内に横濱の街、ネオンは美しく街燈は點線をなし整然と輝く港の上に出て海から羽田空港に入つて行く。チカリ〳〵と照空燈のキラメク飛行場に大きく旋回して、スロツトルもゆるやかに着陸したのが午後五時半、小雨がしと〳〵と降つて冷え〳〵とした氣持。日航ステーションでサービスガールの紅茶に暖まつて自動車で東京に入る。考へて見ると今朝の九時半に上海を出て、もう東京着とは正に飛脚と言ふわけだのに、瀬戸内海上で怠屈したなんて言ふことも一寸變つた感じがする。

秋の杭州

所用を帶びて十一月杭州へ行つた。上海から約五時間。家の壁と云ふ壁は暗色に塗りつぶされ、又西湖の岸に大防

空壕を作るなど仲々空襲にはよく備へたものだ。

有名な西湖。靜かな湖である。丘のやうな周圍の山は紅葉で美しい。湖畔の宿、古ぼけた洋式のホテルであるが、夜など實に靜かである。あわたゞしい上海に比べると誠に靜かな休養地だ。もう日本ツウリスト・ビューローの出張所があるなど仲々手廻しがよすぎる。

鎭江の甘露寺

南京の手前、鎭江の甘露寺を見る。悠久なる揚子江の流れにそゝり立つ崖の上に古城の如く甘露寺がある。この丘に立ちて昔阿部仲麿は「天の原ふりさけ見れば」云々と旅愁の念を走せたる處と聞く。對岸はるかに揚子江は此の邊でも尙濁つた海の如き觀を呈す。向ふ岸には支那隨一の美人楊貴妃誕生の地楊州がある。甘露寺は要務の傍ら見物に來る日本人も多いと見えて附近の村童は早くも片言ながら阿部の仲麿「天の原ふりさけ見れば」と說明しながら手を引き腰を押して丘の上の寺まで人を持ち上げて突端に「先生（シーサン）、銅幣（ドンペー）進上（シンジョー）」と手を出すところ全く子供ながら商賣氣旺盛なること驚く可きだ。

空からの南京行

午後三時上海〇〇飛行場に福岡からのダグラスが着く。人と荷をおろすと再び南京に飛んで行く。爆音高くふはりと浮んだと思ふと、遠く上海のビル街が刻々足の下になつて行く感じは、ケーブルカーの早いやつと思へばよい。

中支那の一角を空から見ても、實に廣いなと思はれる。右に揚子江、左に太湖を見ながら南京へ南京へと飛んで行く。山と名のつくのは丘陵だけである。約五十分で有名な紫金山が右眼下に見えてくると、ダグラスは大きく旋回する。南京の城壁が見える。建物が見える。一昨年の夏、例の渡洋爆擊行の勇士等はこの景をどんな氣持で眺めたか、今や此等勇士に穴だらけにされた城內飛行場に東京—南京定期航空路の終點が出來たなど一寸感無量のものだ。

南京明孝陵

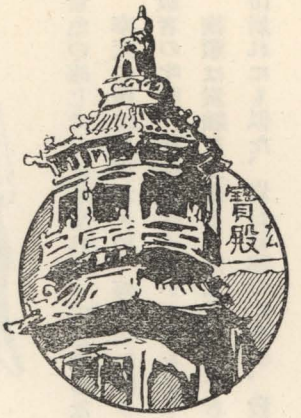
南京をとりまく大きな城壁を出て、城外中山陵を見る。相當な規模を持つた大きな山陵、蔣介石が支那革命の父孫中山先生の遺德を慕つて作つた墓である。其の近くに所謂明孝陵がある。深々と樹木の中に、相當に破れ果てた古陵ながら、何んとなく大明の時代を思はせるものがある。國破れて山河在りと言つた名句は矢張りこんなところの感じから來たものか。

事、いさゝか、私事に亘つて恐縮なれども、今から約三十年前の明孝陵の寫眞が我が家にある、即ち明治三十九年小生の亡父が、昨年他界せられし入澤先生の御供で南京に視察に行つた寫眞である。當時の明孝陵と、今とは建物其他に殆ど變りはないが、周圍の樹木の鬱蒼たる工合は三十三年前の原野の中に見る陵の寫眞と全く異つてゐる。聞けばこれは後年一部植林によりたるものと言ふ。成程生物は育つ、日露の役濟みし、明治三十九年、父が南京に行き、今、事變によるとは言ひながら、其の子が又南京を視る、一寸不思議な事である。

南京秦滙河畔

南京の秦滙江畔は東京で言へば柳橋とでも言ふところ、所謂秦滙河と言ふ帶のやうに狹まい（實際日本內地の小さな河位）川岸にたつてる花柳界である。從つて此處では大小の宴會が常に行れて居る。そして夏は河畔のテラスに食卓を圍み、又この狹い川に畫舫と言ふ船を浮かべて船遊びをやり、胡弓に合せて藝者の歌を聞く處、全く日本の御遊びも元は支那の風俗から來たこと疑ひなし。此處で維新政府要人の一人たる陳郡氏に同仁會關係者が招かれて行つたが、支那料理の食卓を圍み老酒の杯を上げ譯のわからぬ歌を、痛高聲で聞かされたが、だん〳〵に其の零圍氣は矢張り日本の藝者の歌や踊を見ながら飲む宴會の氣分と一脈の情緒的一致はあるものかなと、つまらぬことを感心した。

—（終）—



大陸に旅して

齋藤脩二

私は此の夏、加藤教授のお供で滿蒙支の旅行をする機會を得た。加藤教授、この度の旅行の目的は、第一が同窓諸氏の慰問、第二が同窓諸氏の動靜を目のあたり見ること、第三が大陸發展に關して、我々の出來る範圍に於いての具體案を得るといふのである。加藤教授が昨年來、本學内に於いて、大陸方面の就職掛りを引き受けられ、既に六十名の醫員を滿蒙支に送られたことは衆知の事實であらう。そして此の新しい仕事の必要上、今回の旅行となつた譯である。不肖私が、其のお供の任に當つた事は、私にとつて種々の意味で嬉しい事共であつた。

前置きを斯く述べて、行程一萬粁、四十日に亘る旅行の見聞記、隨想といつた樣なものを書き綴る。

私にとつては海外へ出るのは初めての經驗である。八月十一日から十四日迄の神戸大連間の汽船の旅は、今から大陸へ行くのだ、といふ幾分の心配にも似た、張り切つた氣分さへなかつたら、どんなにか、のんびりとしたものだつたらう。事實、歸りの上海神戸間の船旅は誠に休養其の者であつて、加藤教授の「歸りは樂なもんだよ」とのお話の通りであつた。兎も角、船は樂なものである。

大陸への第一歩は、大連に印せられる。此所の港外で稅關、檢疫其の他のお役人達の乘つた船がやつて來る。中に

物々しいのが憲兵である。内地とも違つたな、と思はせられた第一である。然し乍ら、此の一種の恐怖に似た緊張感は、上陸後、直ちに薄らいでしまつた。既に第一日、此の大連といふ所は、何と靜かなんだらう、町の中で內地の戰時氣分の十分の一でも嗅ぎ出すことが出來ないぢやないか、之は安心した、といふ氣持、つまり安全感を感ぜざるを得なかつた。落ち着いた同窓生の人々の顏、宿の設備、市中の廣告等、何にしても平靜である。まして夜の宴會等、盛なものであつた。其の後の旅行中でも、隨分物々しい風景を見聞きしたものであつたが、事實はさう大して慌てるなと言ひ聞かされて居るやうな氣がした。

大連から特急「あじあ」で奉天に行く。此の列車には冷房裝置があり、防音設備がある。だから外界とは隔絕されたことになる。驛での見送りの人の聲が聞へない。口が動いて居るなと思つて居る中に動き出すが、之が滑るが如くといふ按配で、氣が附かない。スピードが速いので一年間も雨が降らないといふ大連を出て、一時間も走らないのに大水が出て居る所に來る。雨が降つて居るし、涼しいなあと思つて居ると、之が間違ひで、停車驛で外に出て見たら、何と其の暑いこと、雨の降つて居るのは事實だが、外は決して涼しくはなかつた。今迄車窓から見て來た景色の感じは、改められなくてはならない。

奉天の街は馬車が多い。停車場に降りて馬の臭ひを感じた。夜、ホテルの四階迄戛々の響きが傳はつて來る。滿人馭者の叱聲、旅情を唆るといふ語を使つて見たい所であつた。

撫順は炭鑛を土臺とした工業の街である。有名な露天掘りの他に、驚くものは工場、發電所等である。製油工場の山崩れにも似た、岩石破碎の作業場、發電所の冷却塔等大したものである。一方、住宅街は工業地帶を見晴した、之

は又、樹の多い、小起伏の續いた、靜かな所である。

新京は、大きくて、新しくて、奇麗で、そして未完成である。將來は世界一になるかも知れない。日比谷の交叉點、新宿からのバスが來て停る所に立つて見ると、新京の雛形みたいである。樹があつて、大きな建物があつて、そして空地がある。だが日比谷より新京の方が大きい。

哈爾賓では、露西亞風が目立つ。建物に露西亞の寺院が多い。料理も露西亞、人亦露西亞人が澤山居る。此所では松花江の夕陽が印象深い。正に赤い夕陽であつて、而も地平線に隱れる頃、平たくなつてしまう。楕圓形の朱盆といはねばなるまい。日が暮れると有名な夜の街である。人類の繁殖に必要な或る楷程を展觀する所があるが、此所では然し、詳しくは述べない。露西亞人の樂人達の中には實に上手なのが居る。日本人達の求めに應じて、種々の曲目をやる。音樂的に言へば、彼等から見て無智かも知れない異國人に、諾々と從つて居る彼等樂人達を見た時、私が泌々と感じたのは、戰は勝たざる可からずといふ事であつた。

哈爾賓附近の車窓からの景色は、又南滿と異つて本當に廣い原つぱが多い。然し本當に平で、廣いといふのは齊哈爾方面へ行く沿線とのこと。

哈爾賓から奉天へ戻つて、今度は支那へ入る。山海關で所持の金を聯銀券にする。列車ボーイがやつて呉れた。此の列車は天津の大水の中を通つて北京に着いたが、之を最後として不通となつてしまつた。運の好い事であつた。

北京は古都である。立派な宮殿、美味い喰物、それから歩いて居る人間、何れもが落ち着いて居て文化的である。私が此の度の旅行で最も印象に殘つたものの一つは此所の持つ深みであつた。だから此所の印象記をでも書けば、本當に限りがなから

う。北京での種々の見聞は此所に書き切れもしないし、又書かないで置いた事、其の事が北京の感じを出しはしまいかとさへ思はれる。まあ古都といふ二字だけを書いて置く。

まだ〳〵暑い北京の午後、京包線の列車に乘る。これから目指す蒙疆は涼しさを通り越して居るとの事。毛布を持參する。居庸關で長城線を通過する。寫眞でよく見る蜿蜒たる連りは見えないが、大きな煉瓦をきつちり積み上げた城壁が、切り立つた崖を這ひ上つて居る。其の峻しさ、よくぞ斯んな所に斯んな物を造つたことゝ、支那の昔を想ふと同時に、よくぞ此の天嶮を破つたものと、皇軍の强さに畏敬の念を禁じ得なかつた。

張家口を夜中に通過、夜明けと共に大同に降り立つ。頰をかすめる風が、いやに冷い。手も冷い。大同で有名なのは、石佛、炭鑛に美人である。前二者は、よく拜見したが、美人探險の機會はなかつた。纏足の婆さんがひどく多い。大同郊外の石佛寺への途中、漢人の墓がある。北京郊外でも、或は何所にでもあるのではあるが、此所で見た其れは、言ひ樣の無い淋しさを覺えさせるものがあつた。邊りの風景が荒寥として居るせいでもあつたらう。

京包線を更に、厚和まで辿る。大同でもさうであつたが、雲一つない蒼空を初めて見た。日本では、いくら晴れて居ても何所かに雲の千切れ位飛んで居やう。所が此所では眼の及ぶ限りの地平線の彼方、數十里も先も見へやうといふ廣さなのに雲が無い。太陽は朝出たら夕方入る迄、翳るといふ事を知らない。正に青天白日である。此の太陽の下、坦々たる大平野を眺めると、實に土でも平になる時には平らになつてしまうんだなあと感心してしまつた。厚和は、其の樣な廣い平野の一部に、樹を澤山持つた都として異色がある、厚和豪特（ホホコト）といふ舊名は、青い都といふ意味であるといふ。

張家口へは九月一日に着いた。此の日、恰も新政權樹立の日、新興の都の氣分横溢して新四色七條旗の氾濫であつた。新國旗は、赤の日本を中央に、回教の白、蒙古の青、漢民族の黄と、順次に横に並んで居る。張家口では、市中の見物は大してしなかつたが、郊外は大分遠く迄行き、我が皇軍奮戰の地、外長城線を訪れた。秋草の咲き亂れた小山、且つては敵のトーチカ、今は我手に納められた其のトーチカの側、淋しく眠る數名の勇士の墓標を仰いだ時肌寒き迄の嚴肅さを覺えたのは、私ばかりではなかつたらう。

北京へ戻つて、次いで天津に向ふ。天津に行くには、當時大水害であつたので特別の旅行許可が必要であつた。幸ひに此の許可も下りて旅行を續ける。北京郊外の畠には立派な野菜が出來て居る。他の土地の様な、だゞつ廣さがなく、和やかな田園風景であつた。天津に近附くに從つて滿々たる水を見る。水平線の彼方は雲である。所々に樹の頭等が見えるのを見れば、深さは大したことではあるまいが、其の廣大なことは、海邊で見る海よりも尚々大きく廣く感ぜられた。川上も川下も區別等あるものではない。之では放つて置いて何年も退かないといふのも無理からぬことである。

さて天津の街であるが、今迄の各都市と異つて居るのは、外國の兵隊が目につく事である。租界といふ言葉が實感を伴つて來る。各國の氣風といふか、やり方が目で見て判る。一例を擧げれば、舊の露西亞租界が、支那の行政下に入つたら、著しく汚れて來たといふ様な事である。此處では軍隊が防水作業を一生懸命やつて居る。其の力强さ、頼母しさは實に大變なものであつた。

濟南に行くのに津浦線を南下する。途中、又々支那の大水の大さを見る。船車連絡の所がある。此所では少しづゝの減水で段々と船運が惡くなり、運河でも掘らうといふ、大水の水が減つて交通の不便を來す等といふ、凡そ妙な現象を現はして居る。

濟南に着いて珍らしいのは山と水とであつた。今迄は樹の生へた山を、此處で見る程近くで見た所はなかつた。といつて內地の山とは段が違ふが、兎も角久し振りに山に接し、而も之を煙雨の中、駕籠に乘つて登つたのである。黃河のほとり、ぽこつと出來た小山は一寸神戸の摩耶山を思ひ出さした。支那一般は、水が水らしくないのであるが、此所のは、內地での泉、噴井戸の觀念が當て嵌つてお釣が來る位。豊富な水量を利用した臺所を持つ料亭で支那風の鯉の洗身を食べた。

津浦線を更に南下して南京に向ふ。徐州邊りでの朝日は本當に嬉しかつた。といふのは此の夜行列車も一〇〇パーセント安全といふのではなく、戰時狀態にある地區を走つて居るからである。午後蚌埠に着く前、約四十分又々大海原の眞只中を走る。海の中に堤を慥へて汽車を通した樣なもので、此の海は黃河である。蔣介石の作戰で生じた新黃河は、濟南邊りへ流れるべき水を此所へ持つて來たのである。廣軌鐵道で四十分走ると、やつと此の河が渡れるとは先づ〳〵大變なことである。

南京は路幅が廣く、建物も立派なものがあり、記念塔、博物館、競技場等、近代都市としての資格を備へやうと努力して來た所である。だが未だ整然といふ言葉には、緣遠いのではなからうか。箱の中に入れたものが、ゆすぶられて底にきつちり落ち着かうといふ、其の道程の途上にある樣に見えた。紫金山麓、中山陵あたり良い公園になりさうである。

南京下關驛から汽車に乘る。此の客車は日本でお馴染のもの、一等車だけは新しく現地で造られてある。此の一等車のサービスガール二名、色の淺黑い仲々きび〳〵した姑娘であるが、其の話す日本語は誰が敎へたか、ひどくぞんざいであつて聊か打ち壞しであつた。

上海に就いては魔都とか、塵芥箱とか言はれて居る。此所は今迄書いて來た各都市の樣に數行の文章に纏めやうと

しても仲々うまく行かない。つまりは種々雜多なものが入り混り、何でも彼でもあるといふ具合で、各國の特徴が取り入れられて居るのであらう。個々の問題として越界路の勢力爭ひ、ステツキガール、百貨店、玩具みたいな外國兵等々、種々と面白いものがある。兎も角、何でも彼でもあるのが上海であるといふ位にして置かうか。

訪問した有名な町は之で濟んだ。最後に南通のお話を書く。之は今迄餘り知られて居なかつた所だが、今、慶應病院の中で此の土地の名を知らないものは居なくなつた。それは此所の病院が全部慶應だからである。二回生の清水忠夫さんを院長に醫員看護婦、凡て慶應である。揚子江の江口。北岸に位する此所の風物は長閑である。太い柳と、クリークと、それに溫順な町の人と、等。此所で我々は浴衣がけ、下駄穿きで支那芝居を見に行ける。何の危險もない。此所の事に關しては、もつと〳〵色々書く事が多いが、別の機會に讓る。

さて旅行も終りに近附いた。南通から再び上海へ向ふ。途中の揚子江は最後に又支那の大きさを見せて吳れる。眞黃色な泥水がざわ〳〵流れて居る。河も油を流した樣にどろつとは流れて居なかつた。廣さから言へば、水天一髮の彼方迄見通せるのだから、海といへばいへないこともないが、海とも一寸違つた感じである。中に之でも水路があつて、何所でも同じ向きに水が流れて居るのではないさうで、其の廣い中の、うまい流れに乘つて船を進めるのださうである。

黃浦江を遡つて上海に歸り、次いで神戸向けの鎌倉丸に乘る。豪華な食事を滿喫しつゝ歸國といふ段取り。忙しかつた旅行であつたが、見聞を廣めたこと丈で、本當に嬉しかつた。九月十九日東京へ歸着する。

之で見聞記を終る譯であるが、此の度の大陸旅行で、泌々味つた言葉は、百聞一見に如かずといふ言葉であつた。私は、之迄隨分滿蒙支に關して他人から敎はつて來た。話に聞き、本で讀み、寫眞で見た。そして、あゝもあらう、かうもあらうと想像してゐたが、一度大陸の土を蹈んで見ると、其の印象は全く新しく、異るものであり、どんなに

頭の中で考へて見ても、今迄の經驗からだけでは、創り出せるものではないことを知つた。とはいふものゝ決して話が、人が、畫が嘘を吐いた譯ではないのである。嘘を吐かれた等とは少しも思へぬし、確かに其の通りでしかないのであるが、さて自分が實地に行つて見ると、少しく譯がちがつて居たのであつた。之は自分の考へ方が悪いのであつて、活動寫眞迄を見て居ても仲々本當の事が判らなかつたのである。同時に眞實の姿を他人に傳へ樣とすることは、如何程難いかといふ事も判るのであつた。だから私の此の見聞記だつて、決して嘘僞りはないし、誰でも現地に行かれるならば、成程さうかいと思ひ當る事はあつても、決してあれで考へてゐた通りだつたよ、とは言へなからうと思ふ。百聞といふのを他人から間接に見聞きした事、一見といふのを親しく自ら經驗した事とするならば、前掲の格言は、私の此の度の旅行で得た感懷の大部分を占めるものであつた。

最後に、此の度の旅行中、各地で示された同窓の方々の御好意に就いて一言すれば、其れがどれ程有難かつたか、之即、百聞一見に如かずで、自ら覺えたものでなければ理解し難いものである。本當に、本當に各地の皆樣の御厚遇には、何ともお禮の申し樣のない所である。懷しさ、賴母しさ、有難さ、種々な所謂萬感交々至つてといふ有樣で、お目にかゝつた方々に此の誌上で改めて感謝の微意を表すことを許して頂きたい。大阪の中地さん、門司での吉野さん、大連の牛久さん、奉天では、神山さん、宮尾、木村、辻岡君、撫順の畠中、新京で松浦君、哈爾賓で松井さん、天津の佐藤君、北京で林さん、南京の西平君、南通の栗本さん、其の外、種々の都合でお目にかゝれなかつた、右の他外科同窓會の皆樣の御健闘を祈りつゝ筆を擱く。

大別山中の水

四條生

出征二年間殆ど間斷なく中支の諸戰闘に參加し、幾多の艱苦缺之を味はつた中で痛感したものゝ一つは中支に於る水である。

上海方面では到る處の「クリーク」の水に戰闘行動を阻害された事は一般によく知られて居るが、衞生的見地から見て良質の飲料水は皆無と言ふべく、揚子江の水は勿論「クリーク」の水も大半は濁り水で到底其の儘では飲料となし難い。濾水器で濾過して漸く飲料に供する事が出來るが、之れとても鹽分が多く且つ泥臭く内地の水とは到底比較にならぬ。從つて御茶等を入れてもその風味は全く味はれない。上海の水道水も之れと大同小異である。

市井或は村落の井水の如きも百に一つ良質のものがあつても鹽分は相當に多く、而もコレラ、赤痢、チフス菌等が多く散在して居たので、殆ど生水を口にする事は出來なかつた。たゞ石井式濾水器で濾過した水は生の儘飲んでも病原菌は居ない事になつては居たが、其の水源たる池又は「クリーク」に死骸等が浮いて居るのだから始めの中は飲む氣にもなれなかつた。

南京に到る途中、湯水鎭には珍らしく溫泉があつて、此のお湯だけは無害と云ふ事で大喜びで飲んだり入つたりした。

徐州會戰の始めに我々が集結した蚌阜の西方二里半、懐遠の南方淮河右岸に聳える石山の麓に二三滴づゝ滴り落ちる岩清水を見付けて、ワザ〳〵兵隊を汲みにやつた事すらある。懐遠から蒙城百善徐州に進軍中は南船北馬の移り變る地帶とて次第に水が少なくなり、殊に徐州西南方附近に於ては、宿營後の炊餐用水及び馬の飲料水を見付けるのに苦勞した事もある。此の地方の池水或は井水は上海、南京のそれと比べると濁り方は少ないが、やはり鹽分が多く、或は泥臭くもあつたが、次第に慣れて來て左程にも感じなくなつた。

壽縣で例の黄河決潰の爲め大洪水に襲はれ辛じて瀘州まで逃避した慘狀は玆に省略する。武漢を攻略するに際して吾々は大別山北側地を進軍中先づ六安に於て淠河の流を見、其の清玲に一驚したが、之を味はふ暇なく軍橋を渡つて進軍した。葉家集に於て待機中央河の流は全く內地の河川を思はせる清流で、玆では思ふ存分飲み且つ水浴した。

いよ〳〵大別山炭礦の直前、商城南方四里、新店北方の某地曲河の畔に駐軍した際は、時恰も晩秋にして全山紅葉におほはれ戰鬪下に詩越を味はひ乍ら滿腹する迄此の清玲な水を飲んだ。其の甘かつた事は實に何とも云へない。大別山を越えて漢口に到り、更に西北方二百餘里安陵及び襄東地區迄進軍した時も山中に清い水は折々見たが、大別山のそれとは到底比較にならなかつた。

要するに中支に於ては有り餘る水に惱まされ乍ら、而も飲料水には非常に不自由をした譯で、何と云ふ皮肉であらう。常に水を粗末に扱つた我々は今度こそ始めて水の有難味を知つた。出征二年間中、一番甘かつたものは大別山中の水であつたと云ふ事は將兵一同の語り草であつた。

新郷より

森山成一

私達の御用船〇〇丸が、汚い泥土家屋の並立した白河を遡航して塘沽についたのは、七月十一日午後三時頃であつた。丁度五日前の今頃、船の上甲板に立つて、遠く消えて行く九州の山々を眺めながら、兵隊の合唱する「勝つて來るぞ」を聞いてゐると、何かしら目頭のほてつてくるのを感じた私であつたが、大陸に第一歩を踏み出した瞬間不思議にも、一切の感傷的な氣持ちが消えて、日本軍人としての誇と自覺とをひし〳〵と身に感じた。

上陸して見ると困つた事には水害の爲鐵道幹線の到る所が不通である。而し兎に角、其の日に天津に到着した。天津で更に被害の甚大である事、今も尙敵襲の頻々として行はれてゐる事などをきかされた時には、餘りいゝ氣持ちはしなかつた。而し天津驛構内の兵站酒保で飲んだ一本のビール、一週間ぶりで祖國の垢を流した白河莊の入湯、夜の曙街の思ひ出は、今尙忘れる事が出來ない。翌日天津を出發して北京に向つた。北京への曠漠千里、單調ではあるが涯の無い大平原を車窓から眺めた時支那は廣いなあと、つく〴〵感じた。北京に二週間滯在した。萬壽山の雲境に遊んで五彩の殿堂美に讃嘆し、紫禁城の威觀に中國の盛代を偲ぶ事が出來たのも水害のお蔭であつた。本年に亘る五朝の首都として輝しい歴史を誇る古都北京は、忘れる事の出來ない數々の美しい印象を與へてくれたのであるが、七月の北京は實に暑かつた。私は生れて始めてお湯の中で汗をかいた。支那料理の好きな私は方々を食べ廻つたが、一番

うまかつたのは豊澤園の料理と、全聚德の烤鴨子であつた。今も時々其の味を思ひ出してゐる。氾濫する洋車が餘り氣にかゝらなく成つた頃には私も相當支那ずれがして來た。いつ京漢線が復舊するかわからないと知つた時、いつまでも北京に滯在してゐるのが惜しい氣がした。そこで大同、太原を迂回する事に決心した。七月廿四日いよ〳〵前門驛を出發した。城門を出た汽車は例の如く坦々たる平野を走るであらうと豫想した私を裏切つて、いつまでも〳〵城壁に沿つて走つてゐる。私は始めて北京城の雄大さに驚いた。この京包線は支那人の手で始めて敷設されたもので、大北京城を中外に披露する爲めに城をほゞ半周するが如く特に設計されたものであると、同車した京大建築教室の某教授から説明をきいた。夕刻八達嶺の懸崖に皇軍の勞苦を偲びながら、萬里の長城を仰ぎ見た時には廻つて得をしたなと思つた。

翌朝大豪雨の最中に大同に到着した。こゝで亦約十日間滯在した。警備兵づきの「ボロバス」で有名な石佛を見物する事が出來たのも亦雨のお蔭であつた。一夜或る「カフエー」で氣持ちよく酒を飲んでゐると、突然「コラア曹長」と私のテーブルにどなり込んで來た一將校があつた。大分醉つてゐるらしい。「キサマはどこの部隊か」と仲々凄い元氣である。過日東京を出發して赴任の途中にある見習士官であると私は名乘つた。素性を知つた彼は一杯やらうと言ひながらテーブルに割り込んで來た。いろ〳〵ときかれるまゝに最近の内地話をしてゐる内に突然○○し始めた。私はびつくりして、どうしたかと尋ねると「急に妻子の事を思ひ出した」と言ひながら涙をぬぐつて再び飲み出した。殆んど復舊しかけた太原間が雨の爲め亦不通となつた。東京を出發して以來約一ケ月を經過するのに、未だ行程の四分の一も來てゐない、私はそろ〳〵部隊の事が氣にかゝつて來た。軍醫部に交渉して飛行機をお願ひした所が簡單に引き受けてくれた。墜落の話などをきいてゐる内に急に不安に襲れて來たが、今更引込みがつかない。久しぶりに晴れ上つた八月三日、故國の事など思ひ浮べながら私は大同飛行場を立つた。いつ離陸したかわからない、ふと氣

付つくと可成高く上つてゐた。單調な北支の大平原も機上から見ると亦格別の景觀であつた。遠く箱庭の樣な山西の山々を眺めてゐると、つひねむく成る程氣持ちよい旅であつた。四百粁を一時間半で太原に到着した。さすがにほつとした。太原は堂々たる山西の主都である。大厦高樓の櫛比するあたり正に北京の前門街を彷彿せしめる。いよ〳〵これから田舍落ちをするのだと思ふと少々さむしい氣持ちに成つた。私は再び訪れる機會もないであらう此の都で腹一杯山西料理を食べて酒を飲んだ。太原を立つてガタ〳〵汽車で石家莊に向ふ途中、私は高野上等兵と道連れに成つた。高野君は轉戰二年、京漢線を南下して、徐州會戰に參加、隴海線の遮斷に續いて漢口攻略に武勳を立てた勇士であるが、不幸マラリアに罹患して、太原陸軍病院に收容され、疾癒えて再び今次の潞安作戰に參加すべく某地に集結の中隊を追求の途中であつた。いつもニコ〳〵しながら朴訥ではあるが愼しみ深く談る彼の言葉の中に、私はなみ〳〵ならぬ兵隊の苦勞を新しく認識した。「軍醫殿、これも皆故鄕があるからであります」と言つた言葉を私は今でも忘れない。石家莊で一泊した時には私の汗くさいシャツを洗つてくれた。彰德までの二ヶ所の長い徒步連絡では、いくら拒絕しても、私の重い背囊と行李を汗を流しながら、かついでくれた。私は實に有難いと思つた。某地で高野君と別れたが、程無く目的地に到着する私は自分の持藥の全部を與へて、何くれとなく注意を與へた。「軍醫殿これから山の中に入れば米の飯は當分食へません」と彼は笑つてゐた。

東京出發以來四十日、漸く私は新鄕に到着した。第一線〇〇病院である私の部隊には連日潞安作戰の戰傷病者が後送されて來た。隊長以下一兵に至るまで私達は文字通り寢食を忘れて働いた。私は新患者の收容される度に高野君を思ひ出してはひやりとしたが、幸ひにも杞憂に終つた。

新鄕は實に汚い片田舍である、而し住めば都、私は至極元氣で御奉公してゐる。（昭和十四年十月十八日）

瓊崖行記

植草實

瓊崖（ケイ）とは海南島の別名である。北の瓊山と南の崖縣の二州を縮めて古くはそう呼んだのであるが、此の南溟の孤島海南島の名も今春縣軍長驅して新に作戰地域に入り漸く世人の眼を惹くに至つたに過ぎない。或は亭々たる椰子林の中に百花撩亂たる常夏の寶島の如くに傳へられ、或は害蟲毒蛇の横行跋扈する蠻煙瘴霧の邊土とも聞かされ、――事實は其の何れでもなかつたのであるが――正確なる知識を得るに術なく好奇的興味と共に多少の冒險的危惧をも抱いたのであるが、事を企て案を練つた學生諸君の壯心に動かされて同行凡そ二個月半に及んだ。

歸來僅かに二個月餘であるが、往事は忽ちに漠として仕舞つて遠い以前の事の樣に思はれる。

× × × ×

六月二十八日。昨日佐世保を出港してより船は一路東支那海を横切つて大陸に近付きつゝある。空は相變らず五月雨雲低く水平線は茫漠として雲とも山とも思はれる。

七月一日。早朝福州に入る。此處でも細雨の中を海軍旗を飜がへして掃海艇が縱横に活躍してゐる。午後出港。次第に雲が切れて來るに從つて空の碧さを映して海の蒼さを增し其の深さを思はせる。船は夕燒雲を衝いて平穩な航海を續ける。夕陽が渺々たる大洋の眞只中に沈むと共に十五夜の月がぽつかり海上に浮んでゐる。月光は波に碎けて眞

白く果しなく廣い海を眞二つに區切る。軈て亞熱帶圈に入る。海はもう南支那海である。

七月三日。海は飽くまで蒼く且つ深い。右舷には相變らず島が多く見える。何れもごつ〳〵した岩山から成つてゐる。海岸は多く斷崖となつて海に盡きてゐる。人煙も耕地も眺められない。

七月四日。朝、船室の窓から首を出して見ると低い平らな埋立地の樣な綠の草原が目の前にある。澎湖島である。太陽は赫々として朝から嚴しい。鷄の聲が吹き飛ばされて欠伸してゐる樣だと云はれる風の强い澎湖島の海も六、七、八月の間は至つて穩かである。馬公街見學。狹い埃つぽい街。道端の榕樹の枝から垂れ下つた枝根がうつとうしく一層暑苦しく感じさせる。男は出稼ぎに出てゐる故か女の多い。皆本島人である。

七月六日。高雄入港。高雄神社の境內から町を俯瞰すれば、此の常夏の町は强烈な夏の陽を浴びて總ての色彩が鮮かである。綺麗に區劃されて樹の多いのが目立つ。海を渡つて來る風が涼しい。南方發展の根據地として將又工業都市として、殊に皇軍の南支作戰以來町の景氣は素晴しいものがあると聞く。今町は縱橫に膨脹しつゝある。

七月七日。事變二週年の日に當る。船の碇泊中を利用して臺南に赴く。臺南は古い街であつて、此處では高雄では全く見られなかつた赤煉瓦の支那風の建築が多い。三田會の好意によつて市の內外を案內して戴く。

七月九日。朝から水平線上遠く入道雲がもく〳〵として晝の暑さを豫約して居る。海の色が線を劃して全く違つて來た。群青と云ふか藍を溶かした樣な靑さである。そして一層深く且つ透明である。午後再び右舷に大陸が見え始める。夕陽の將に沒し去らんとする頃紅々と燒けた大陸の山々はバイアス灣を圍むそれと聞く。客秋此の灣內奧深く敵前上陸を敢行してより早や十箇月を閱する。今は唯波靜かに一隻の戎克も見られぬ平和な姿である。

七月十日。〇〇群島沖に碇泊。船が停ると暑さは又格別である。皮膚の觸れる處忽ちに玉の汗となつて流れる。海面を撫でて來る僅かの微風も朝から蒸暑く、海水の溫度は朝六時旣に卅二度であつたと云ふ。荷役作業の間南支那海

に端艇を浮べて終日糸を垂れる。悠々たる雲の影が一つ又一つと岩山の島を掠めて行く。島に鳴く鳥の聲が意外にはつきり聞える。

日の暮れるのが遲い。午後九時頃であらう。遠く葡領澳門(マカオ)と英領香港の灯を背後に船は更に南下する。黑く高い檣が闇の中に大きく搖れる。船足が輕くなつた樣だ。明日中には海南海峽に入る筈。

七月十三日。昨夜晩く左舷に見えた燈火は海口の街の灯と聞いたが、今朝は風の爲め船の向が變つて遠く右舷船首に寄つて見える。

愈々海南島上陸。佐世保を發つて十七日目に當る。遠く海から眺めた海南島は唯低く廣く平らな横長い島である。そして海は廣く、空は高い。海岸の土の色が赤い。朱の赤さである。期待して居た椰樹は此の邊では數へる程しか望見出來ない。本船を離れて小蒸氣船で凡そ五十分、漸く〇〇棧橋に着く。海口は貿易港と云つても名のみであつて何等港灣の形を具備して居るものではない。海は南渡江の土砂を堆積して遠淺なのである。

海口は海南島第一の都會であり唯一の貿易港である。人口三、四萬とも五、六萬とも云はれ、濃厚な色彩、所謂支那式に彩られた白堊の壁、赤い屋根瓦、綠の欄干、黃色い文字等、暖色に豊かな二階の張り出た建物とコンクリートに鋪裝された道路とが我々の豫想から意外の念を呼起す。酒場料理店、床屋、靴屋等が多い。又道の兩側には賭博街連なり、四、五歲の小兒と中年の男とが眞劍になつて刳拔いた椰子の實の中に賽を轉がして銅幣(ドンヤイ)を爭つて居る有樣は頗る奇異なものである。一歩裏露路に入れば甚だ不潔で汚い。女が多く且つよく働らいて居るのが目に着く。しかし何れも一樣に痩せて黑い。男は所謂華僑となつて出稼ぎしてゐるのである。

毎日雲が多い、そして日に一度はスコールが襲つて來て雨の後は寒い位である。海南島の眞夏は五月、六月であつたと云ふが今は朝夕は凉しい位である。しかし氣溫は決して低くはない。

七月二十二日。午後から陸軍部隊の第一線見學に出掛ける。赤土道を警戒兵と同乘トラックを飛ばす。瓊山迄の道の兩側は見渡す限り土饅頭の墓の波である。幾萬とあることであらう。高さ三四尺から一間に及ぶ土を盛つた墓の前には一片の石碑が立てられ姓名を刻み付けてある。土葬であつて棺は木であるが、熱帶產の木質は堅緻で數十年も腐ることがないと云ふ。此の土饅頭が波の樣に無數に起伏してゐるのである。

瓊山の街に入る少しく手前、崩れ落ちて名のみの城壁に近く平蕪の綠濃き中に東坡居士蘇軾の祠がある。瓊山は曾て蘇東坡の流謫の地であつた。二層樓の支那風の木造建築物が僅かに其の名殘を止めてゐるのみ。樓門に海南第一樓とある。

瓊山を過ぎてから道の凹凸はげしく身體は頻繁に宙に浮いて思はず車體にしがみ付く。仙人掌、椰子樹が多い。陽の光は强く烈しくて目が傷む。露出した首筋、前膊、膝頭は忽ちに赤く燒けてひり〳〵する。凡そ一時間半にして潭口へ着く。戸數十二、三軒の小さな部落である。南渡江の渡河點を扼して少數の陸軍部隊が警備に當つてゐる。土民の自衞の爲め建てられた望樓の白壁は無數の彈痕に刻ぐれて黑くコンクリートを露はしてゐる。海南島にも未だ〳〵敵兵が居るのである。望樓の中は三階になつて警備兵の宿舍となつてゐるが、明と云ふのは僅かに銃眼を通して入つて來る光丈であつて薄暗い。樓上に登れば南渡江の悠々たる流が眼下に濃綠のジヤングルの中を屈曲しつゝ白く光つて居る。

七月二十七日。再び〇〇棧橋より乘船三亞に向ふ。高い波が船首にかぶつて船は相當搖れる。夕刻瀅州島に着く。晴れた日には此處から對岸の北海が見えると云ふが相憎く曇である。

七月二十八日。午後左舷に幽かに灰色の山が見える。船はもう海南島の南に廻つたらしい。夜更けて島影は雲間を洩れる弦月に次第にはつきりと目の前に現はれて來た。波は何時の間にか全く治まつてゐる。三亞灣内に入つたのであらう。船足がぐつと落ちる。夜光蟲が舷側に碎ける白波に幻しく光る。しかし船内は依然として暑苦しい。眠られぬ儘に船尾の甲板に凉を求めて手摺に倚つて考へるともなしに考へる。北海岸の唯廣く低く殺風景なるに比べて黝い山又丘の緩かな起伏を眺めては内地に歸つたかの感を抱かせる。しかし又來る處まで來たものだの感至つて夜の更けるのを忘れる。

七月三十日。昨日起重機によつて下された海も今日は靜かだ。海岸の砂が白く細かい。眼に泌みる樣な青々とした椰子の葉を搖すぶつて渡つて來る爽かな暖風と渚を打つ濤の音とが甚だ快適である。陽の影が足下にある。黃道が丁度海南島の上を通るのである。

八月一日。班を分つて三亞を出發、西方崖縣に向ふ。土民の逃げ去つて仕舞つた水田は水涸れて一面の草原と化して居る。豪雨の中をトラックに搖られ搖られて約二時間半崖縣〇〇部隊本部に着く。

崖縣は南部第一の街であつて、此の邊、海南島の本來の土人とも云ふべき黎(れい)族が多い。和冦の血が流れてゐるとも云はれる。彼等の顏、表情には我々日本人に近いものがある。殊に小兒に於てそうである。海南島住民は元來罪囚、流民等の子孫であり、これが次第に先住民である黎族を山間に壓迫しつゝ今日に及んでゐるのであつて、互ひに好感を持つて居ない樣である。

八月三日。更に前線へ。占領後一月餘りの九所、黄流へと向ふ。よく開墾された田畠が多い。二回目の稻がもう伸び切つてゐる。しかし穗が少く草の樣である。何等肥料を與へる事なく手入れもせぬ爲めに三毛作も我が一回の收穫に遠く及ばない。

今日はマラリヤ豫防の爲めの鹽基の〇・八瓦を一度に飲んで仕舞つた故か關節に力なく腰が拔けた樣である。

午後から部落外の小學校で早速宣撫治療を始める。小學校と云つても漸く三、四十人を容れるに足るかと思はれる土間の教室が二つと、一つの禮堂とがあるのみである。豫め佈告を發してあつたので仲々の盛況である。遠くから輿に重病人を乘せて運んで來る。紙片に適確な短い文章を並べて病狀を訴へて來る。通譯が居ないので一切筆談であるが、老人と女は全くの無學である。身振で納得させるより方法がない。汚なく又臭いのは云ふ迄もない。

今度の宿舍は商店街と云つても道の兩側に一列に並んで二、三十軒程しかないが其の一つである。何れの家の軒下にも富容常臨とか、五福滿家と書いた赤い紙片が貼り付けてある。家は煉瓦を二重に積み重ねて造り上げたもので幾何の家財道具があつたかは分らぬが、煉瓦はむき出し土間であつて、何の裝飾もなく物置の樣な建物である。間口の一、二間なるに比して奥行が非常に長い。二、三十間にも及ぶ。部屋と部屋との區切りは木材を使用してあるが堅くて火を付けても燻ぶる丈である。窓が此の廣い家の前後と天井とに三、四あるのみで甚だ暗い。通風も從つて惡いので今は兩側の家は潰して壁を打拔いて窓を作つてある。

夜は屋上にビール箱を積み重ね板を張つて卓子とし、さゝやかな月見の宴を張る。蟲の音がすだき、大きな螢が飛ぶ。仰げは爛旰として星輝き、南支那の空は高く青く澄み切つて秋夜の如くである。夜更けて月が昇る。皎々として破れた支那家屋を照す所轉た落莫たるものがある。銃聲が聞える。

七月十五日。感恩攻略戰に戰死せる英靈の告別式に許されて參列する。

八月十七日。昨日再び三亞に戻り、今日は三時間半の凹凸道を東方陵水へ向ふ。トラックも乘り慣れると案外樂である。楡林迄の道は遠く綠濃い山脈が重疊として高原を行く樣である。低い灌木類其の間に椰子樹、檳榔樹の林がある。山鳩、雉子等羽毛の綺麗な鳥が多い。藤橋を過ぎてからは廣漠たる平原である。其の果には海が筋の樣に光つてゐる。牛、水牛の群が遠く近く我々を見送る。大氣は全く乾燥してゐる。トラックの鐵板は燒けて手が觸れられぬ。

陵水に近く草原の中に一基の墓標が立てられて名もない草花が供へられてゐる。武田朝日新聞記者戰死の地である。此邊〇〇部隊奮戰の跡である。海南島上陸に當つて上陸地點に敵兵を見なかつた處から、誤り傳へられて海南島には敵兵が居ないと一般には考へられてゐる樣であるが、事實は仲々然うでない。幾重もの陣地を構築して其の抵抗は相當頑强であつたそうである。陵水は城壁に取り圍まれた稍々大きな町である。此處には小學校、師範學校、圖書館、公園、監獄等がある。孫文の像と「革命未成功、同志須努力」の句は何處に行つても見られる。そして又抗日宣傳教育の徹底してゐることは殘された文書、ビラ、教科書、更に兒童の綴つた作文を讀んでも容易に判るのであるが、思はず慄然たらざるを得ない。早速診療を始める。

八月二十日。萬寧行。占領後命名された赤坂峠、千早峠の頂から眺めれば開墾された萬寧、陵水の平野の景觀と山嶺に去來する雲の姿、豪快な山容の雄大さとは素晴しい。瘴癘の地とは考へられない。

萬寧は占領後間もないので我が爆擊の跡も未だ生々しい。蚊が多い。日が暮れると手掴みに二、三十匹は捕れると云ふ。無論彼のアノフェレスである。

八月二十三日。三亞に歸來。夕刻俄かに乘船せよとの命令あり。司令官始め多數の人々がわざ〳〵棧橋の端まで見送つて下さる。

甲板の手摺に倚つて波靜かな日暮れゆく三亞の海と、背後の山脈の起伏とは見慣れてみれば心懷しいものがある。

僅か一ヶ月半ではあつたが、唯炎熱下何の考へる事なく無爲に過して來た樣に思はれる海南島を離れて明日は內地に向け歸らんとする時、遙けくも來つるもの哉の感再び深い。

八月二十五日。船首に當つて虎門砲臺を望む。船は珠江を深く溯つて來たのである。

八月二十六日。廣東の土を踏む。小島先輩、合原君の元氣な顏を見ることを得て甚だ愉快であつた。僅か十分足らずの面會ではあつたが。

八月二十八日。漸く日本のラヂオがキヤツチ出來る樣になつた。歐洲の情勢は一瞬にして再轉、更に三轉、風雲急なるものがあると聞く。

八月二十九日。馬公。今宵は滿月だが澎湖島は月の名所である。終夜の荷役で船はすつかり汚れた。一同の顏には漸く多少の疲勞の色がある。

八月三十日。明皎々たる十六夜月夜臺灣海峽を橫切つて再び厦門に入る。

九月二日。二百十日。白い波が立つ。朝來夏の入道雲は全く見えず澄み渡つた空には一抹の秋思を見逃せない。舷側にしぶきを上げる波が船尾に近くまで泡立つて消えない。船は逆風ながら潮流に乘つて十六浬も出して居ると云ふ。

明日の朝は佐世保に着く。

滿洲散見

櫛田敏也

七月一日、內科教室板倉君及び學生六名と共に內原訓練所に赴き、此處で興亞青年勤勞報國隊別働隊に參加し、三ヶ月の間滿洲の野に行動を共にすることになつた。

七月七日、大陸の關門大連に上陸し官民多數の出迎を受け、炎天下リュックを背負つて市內行進一時間餘、漸く大連の兵舍に着いたが皆元氣旺盛、午後は忠靈塔、大連神社に參拜し、十九時特別列車で新京に向つた。

大連。馬車を除けば何等內地と變らない。唯水饑饉の爲鹽辛いお茶を飲ませられたのには閉口した。お蔭で車中猛烈な下痢を起し樂しかるべき大陸の初旅も毛布にくるまつて過す始末であつた。

新京着八日朝であつた。下痢が續いて下車出來ず、折角の首都も車窓より眺めるのみであつた。隊員はこゝで再び市內行進をやつた。

目的地安達着七月九日、降雨の爲道路甚だ惡し。宿舍は安達街の町はづれにある油房（大豆油を製造する工場）の倉庫で六月以來降り續く雨の爲壁はすつかり濕つて黴が生え、土間は矢張りじめ〳〵して不愉快な且非衞生的なこと甚しい。然し翌日から晴天となり、除草、道路工事其他の作業に從事したが、四、五日すると猛烈な下痢、嘔吐、高熱の患者續出し、中には痙攣を起す樣なもの迄出て來たので、檢便を嚴にし、血便の者は外に隔離し、重症者は滿鐵

醫院にお願ひした。何分一度に十數名も出たので閉口したが、板倉君及學生の應援によりどうにか處置した。

雨が上つて蠅が非常に多くなり飯の上が眞黑になつて、いくら追つても追ひきれるものではない。之が赤痢患者發生に重大な役割を演じたものと思ふ。

滿洲の蠅は有名だが住民は一向平氣で、蠅の甞めるぐらひは一向平氣だ。蠅の集らない樣なものに旨いものはないと云つて居る。

患者の食事は甚だ心細く粥に梅干といふ狀態で、次第に榮養狀態が惡くなるので、多大の努力を拂つて入手した葡萄糖液注射を行ふことにしたが、之も限りあることで充分に行へず、その內にハイラルに行くことになつたもので、之等の患者及び恢復充分ならざる者をハルピンに還送し、七月二十五日安達を去つた。

安達といふ所は大豆、豚の名產地であると聞いたが、成程街中でも到る所豚が橫行闊步し、可成惡臭が鼻をつく。裸の子供が溝の中で豚と戲むれてゐるのもしば〳〵見かけた。田舍町ではあるが、それだけ滿洲の味のする所で、しばしば興味を覺えて街を見學した。商店は殆んど日本製品を陳列して居り、この點餘り珍らしくもないが、大道の外科醫？（そこまめを丹念に削り取る商賣）や、時計屋の齒醫者兼業など初めての我々には珍らしいものであつた。

ハイラル着七月二十六日朝。ノモンハン事件の眞最中で吾々も大いに緊張し隊員も張り切つて居つた。軍、領事館、省公署等を訪問し大いに激勵され、宿舍に着いたのは午後であつた。宿舍はバラック建の物置で、約八十名の收容數に、しかも米、味噌、農具等と雜居してゐる始末で、自然一部のものは天幕生活をすること〻なり、ハイラルを離れ

て雨の中を夕暮のホロンバイル草原に勇んで行つた。

當地で一ケ月飛行機や戰車の爆音をきゝながら有意義な作業に從事した。ハイラルは水質の惡い所と聞いて居つたが清澄な水が充分にあり、此處で初めて一ケ月振りで入浴も出來た。町は餘り綺麗でなく、馬糞の街と言つても過言でない、甚しい所は歩くと彈力を感ずる。之が一旦烈風に吹かれると全く目を開けることが出來ない。黄塵といふ形容はあたらない、兎に角、馬糞くさく閉口する、又雨が少し降れば泥沼だ。街中では滿、蒙、露の人達がせはしげに行き交ふのを見る。公園には之等人種の子供達が無邪氣に遊び、日本人の子供は胸に日の丸のマークをつけてゐる。婦人連の散歩も見える。之等は殆んどロシア人だ。日本の婦人は他にいそがしい而も尊い仕事があるのだ。公園の風景は一見平凡のものだ。作業の合間には有益な講演及見學を行つた。

ハイラルより約二里の所にある南屯といふ蒙古人部落を見學した。當地の小學校で晝食の際、接待に出て來た少女を見てびつくりした。よくも日本人の少女がこんな所にまで澤山居るものだと思つた。所が之は蒙古人の小學生であることを案内人にきゝ二度びつくりしてしまつた。しつかりした日本語を話し、セーラー服に短靴といふ至つて身なりもきちんとしてゐる。暑い中をやつて來たので、お茶が大變旨かつた。こゝで義經がヂンギスカンだといふ傳說が眞實のものではないかと考へ、なんとなく蒙古の人達には好感以上の親しみがした。ラマ廟もみたが色々の木像が總て腰に布を卷きつけてゐるのには一行のものゝ好奇心をそゝつたが、誰も之に手をつけるものはなかつた。蒙古人の宗教に對する概念は吾々の想像以上に大きなもので、この部落に來る途中オボ（之はどろ柳を切つて之を四角の棚の中に入れ、その木の先に色とり〴〵の布をぶら下げてあり、之を神聖視してゐる、或は石を積んだオボもある）があつたが、此の布が珍らしいので失敬しやうとした所、案内役の人からとんでもない後の祟が恐ろしいから止めなさいと云はれた。蒙古人の住家である包を訪ねた。丁度食事時で牛糞の乾燥したのを燃して、メリケン粉(?)を油でいた

めて居つたが、聞くと肉、蒙古茶及この油揚が今日の御馳走だといふ。この乾燥した牛糞は樹木のないこの地方の唯一の燃料で、草原の眞中に山の如く積んであるのを方々で見かけた。ホロンバイル草原には蒙古櫻が滿開であつた。之を摘んで來た隊員もある。白い小さな花で、丁度造花の樣な乾燥した感じのする花で、若木の中に摘むと一年位散らないといふ。日本に輸出されて貝殼細工の飾になるといふ。

天幕生活は交代で行つた。八月中旬を過ぎると朝夕は凉し過ぎてヂヤケツを着る樣になり、もう秋が來たのかと思つたが、日中はまだ〳〵暑く裸で作業する程だ。淋しいことは秋の蟲の音のきけない事だ。この草原の夜は實に靜かだ。物音一つしない、時に野犬の遠吠が聞えるのみだ。

眞紅の太陽を草原の一角に迎へ送り全く世の中と隔絶して生活をした。新聞もなく本は廣告まで見盡した。時々來る手紙はお互に見せ合つた。隊員とは一番親しんで暮した。

八月十五日、十六日は第二次ノモンハン事件戰利品展覽會がハイラル公園で催され、日、滿、蒙、露の見物人で雜踏した。ハイラルの想出は多いが色々の理由で今は書けない。目についたのは馬、羊の多い事だ。

八月二十七日、戰場では大激戰のあつた日とか後で聞いたが、この日吾々は住み馴れた天幕をたゝみ感慨深いハイラルに別れを告げハルビンに向つて出發した。

興安嶺も夜中に越え、夜が明け初めた頃は再び大曠野の眞只中を驀進して居つた。ハイラルに向ふ時は沿線の草原には桔梗、女郎花等、赤、黃、紫の草花が視野一面に咲亂れ實に見事であつた。今は花も疎となり、當時未だ小さかつた高粱が延び切つて實の秋と變つてゐる。

北滿のパリと云はれるハルビン。吾々は大いに期待して居つたが、驛を出るなり大型バスで草深い所にもつて行かれた。而も毎日不出來の御飯をたべさせられて閉口した。だがいくら腹が減つて居つても半煮の米は喉を通らぬこと

を經驗した。當地で福島中隊の醫療班長の板倉君が召集令狀を受けた。この草深い中のこと故隨分心配した。夕暗の迫る頃板倉君を送つてハルビン驛に行く。大草原の果まで響けと唱和する隊員の彌榮の聲に送られ凹凸の道をトラックに搖られて行く。物凄いスピードだ。

先輩にも知らせたので、棚田先輩、靑柳兄が夜十一時といふにも拘はらず見送りに來てくれた。ハルビン驛頭を壓する彌榮の聲、出征を祝して三唱した。テールランプは次第に暗の中に消えて行く、目頭が暑くなり獨りでに涙が出た。翌日ニューハルビンに茂木先生をお訪ねした。かねて先生が來哈することを聞き、我々八名は非常によろこびお待ちして居つたのである。

先生の御元氣なお姿に接した時は云ふに云はれぬなつかしさで胸が一杯になり、大聲で先生と呼ばずには居られぬ興奮を感じた。先生はまだお食事前で僕達にも是非食べよとおつしやるので、もう食事は濟んだからと申上げながらも結局御馳走になつて了つた。いやそれどころかお櫃のお代りまでやつて先生の御令孃に御厄介をかけて了つた。ハルビンに來て初めて半煮ならざるおいしい御飯を食べることが出來た。卵にも二ケ月振でお目にかゝつたといふわけ。その上色々と御配慮に預り、この御好意には一同感激した。ハルビンの作業が豫定よりも長くなり、九月十日夜こゝを出發することになつた。この日は時間があつたので市内見學をした。當地の代表的な街であるキタイスカヤもまだ人通が少なく、スンガリーは增水して濁流を見るのみで、太陽島も僅かに頭だけ出してゐるといふ樣な有樣で何等印象に殘る樣なものもなかつたが、尖塔聳え立つ中央寺院前で淸楚な感じのするロシア娘が胸に十字を切る姿は吾々の心を强く打つた。

ソ滿國境で戰死した最初の白系露靑年の告別式が當寺院で行はれたが、寺院内の數多い花輪は人目を引いた。

ハルビン名物の十錢タクシーもその運轉士が殆んど露人であるのと、車體の古ぼけたのとが注目される。

再び車中の人となる。驛毎にのんびりした、からん〳〵の鐘の音を響かせながら、車窓の眺めも草原から白樺の林へ、溪谷から黄色の波の水田へと移り變つて、目的地黑臺に着いたのは十二日夕刻であつた。こゝで隊員は黑臺開拓團員の個人住宅に分宿することになり、開拓團の生活を身を以て經驗することになつた。こゝの開拓團は第五次のもので、昭和九年入植したのであるが、以前は滿、鮮人が耕作して居つた土地で、現在では煉瓦造りの住宅、堂々たる小學校及病院等設備も可成整つてゐる。しかし十日間の生活その內面をほゞ知り得て、開拓團といふのがこれでよいのかと淋しくなつた。開拓團と名のつく限り、土に親しみをもつて渡滿し、この大地を掘返し掘返し、吾等民族の根をはびこらせなければならぬといふ位信念を持つてゐる筈だ、と思つて居つたが、彼等からさうした態度を見出すことは甚だ困難だと思つた。眼先の利害にとらはれ、そして勞少なくして利多くを望むといふ甚だ堅實味の乏しい態度をみせつけられた。この樣なことが自分の誤まれる觀察であつてくれゝばと念じて居るものゝ、少なくともさうした感を抱かせる態度は寒心にたへないものと思ふ。

吾々醫療班員四名　中隊長は開拓團訓練所に同宿した。團員家族の往診など賴まれ、或時は肛圍炎の患者を麻醉無しに切開して歸途感謝狀をもらつたり、滿人の西瓜畑に聽診器とグレラン持參で、謝々と云はれながらリユツク一杯西瓜をもらつて來たり、少しも無聊を感じなかつた。但し西瓜を餘りたべ過ぎて翌朝から血便が出て隨分心配した。

九月二十二日奉仕隊の使命を果し歸國の途に着く。

のんびりした汽車は一時間半も延着して午後十一時黑臺に別れを告げた。送る者送られる者お互に健康を祈り合つて。牡丹江に朝着く豫定の所、晝近くになつて了つたので朝食晝食を此處で濟まし、約五百名の奉仕隊員がこゝで一緒になつた。町を見物する時間の餘裕もなかつたが、驛前通りから受ける感じはまだ生々しい新興都市といふことだ。牡丹江はこれからだ。

こゝから羅津迄の旅は實に樂しかつた。歸國といふうれしいことの爲に列車内は喧騒な程お國自慢の歌の合唱だ。その上特別列車の爲各驛に停つたり停まらなかつたり、或時は四十分、一時間と停車して居る。その爲隊員は皆列車から降りて花を摘むもの、草原にねころぶもの、驛前の民家を覗くもの樣々だ。東支鐵道の頃ロシア人が汽車を途中で停めて草原に花を摘んだといふ話を聞いたことがあるが、實に樂しいものだつたらう。

羅津三泊、いよ／＼ハルピン丸に乘船し、當地の小學生の海行かばの歌に送られて大陸に別れた。

更に淸津に假泊し、それから一路内地に向つた。

日本海上で軍人さんの奥さんが男子を安産したが、學生と二人で産婆役をやり、その日は赤飯で船中喜びを分つた。船中塾出身の方が二人居り色々と世話になり、樂しい船旅であつた。

三ヶ月の滿洲の生活を考へると、よくも元氣で唯一人の落伍者もなく歸つたものだとつく／＼思つた。

安達、ハイラル、ハルビン、黑臺と滿洲を見て來たものゝ、さて滿洲の感想はと云はれても到底自分には云ふことが出來ない。これまで歩いて來たもの土地々々のことを一部書いたまでの事。

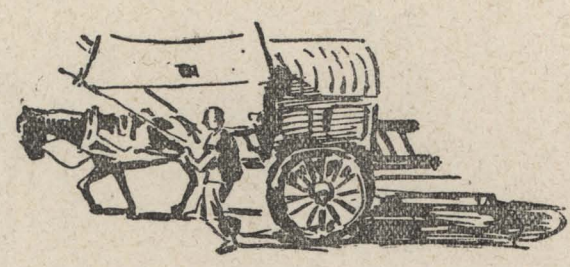
★

★

★

鐵驪雜記

松浦元



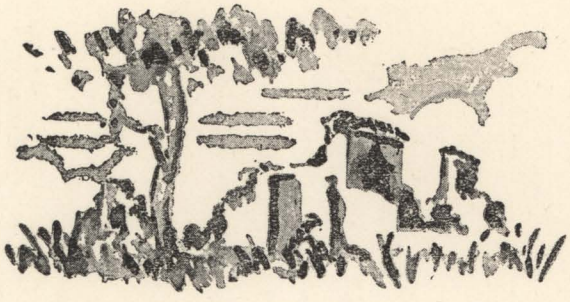
鐵驪と申しましても御存知の方は一人もありますまい。先づ場所から説明致すこととしませう。皆様御存知のハルピンより黑河に向いて約三時間、綏化の驛に到着、之より神樹行列車に乘換へ約五時間東に走ると其處に鐵山包と云う驛がある。之より約四粁に鐵驪の町、その奥に訓練所がある。行く事になつたのは約五ヶ月前五月の始めだつた。驛に到着して一人廣い曠野のバラック建の驛頭に立つたのは忘れもしない五月十九日午後十二時、此の時位私の頭が變になつた時はない。とにかく見ず知らずの人に迎へられ、單身滿人の人混の中に入る位いやなものは無かつた。最初の印象は實に良くなかつた。然し段々と此の氣持は改められて來た。到着翌日より病院の外科開設を始めた。昨年來倉庫にあつた器械類の取出しにかかつた。器械數は大體在る樣だつた、然し破損の物も相等にあつた。早速三日目より治療を開始した。來るは來るは外科ばかりではない、眼科、耳鼻科等は外科をしのぐ有樣、一人女醫で外科の方が居られたので手分けして仕事を始めた。手術をする用意も出來た、到着より十五日目位に蟲突炎を最初にヘルニヤ、痔核等をやつた。手術場は四疊半位で私の如き者には動けぬ位の廣さだ。器械、消毒等に至つては全く御話にならない。でもヘルニヤは一例も化膿せぬのは天の助か。外科の事などこの位にして、さて當地の一端を紹介しませう。

五月には一面に青い草がのびて來て居る。此れを毎日の食事に用ふる。之は野菜の缺乏を補なふに充分、冬を越して全く野菜は喰べつくして居るからだ。

五月は未だ寒い。六月に入ると一面に高山植物の樣な花が野原一面に咲き初めた。天然色の活動でもと思ひ出す位で毎日訓練生は押花を作つて內地に送つて居る。

六月になると段々に夏の樣子になつて來る、上衣の必要も無い位になる。七月、八月の始めとは可成の暑さになるが、之とても私輩の如き肥つた者も汗を流さずに歩ける。九月に入ると全く凉しさを通り過ぎ寒くなる位だ。

食事は心配する事はない、ただ心掛一つだ、然し患者食としては淋しい限りだ。訓練生は實に張切つて居る。將來の事を大いに考へてやらねば心配すべき狀況になるかも知れぬ。可哀想の一語につきる。滿洲國の將來は未だクウエスチョン・マークだ。之も考へねばならぬ事だらう。人生若い內に滿洲を見るも一つの行方かも知れぬ。未だ私には何が何だか解らず夢中で生徒と共に暮して行つて居る。外科醫としての仕事よりは一人の指導者としての立場からだ。面白い人生である、まあ此の位で止めよう。來年歸つて又考方はどうなるかは來年のおたのしみにしておく。



同窓會

札幌より

柳　壯一

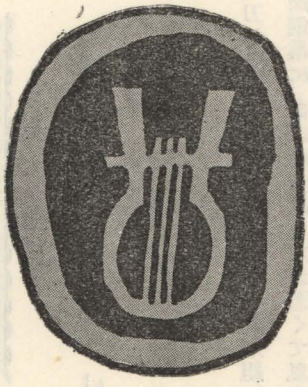
「刀林」が發行せられるから「元老組」として何か書けとの御注文ですが、醫局の建國創業に、あの時分はまだお若くて私など足もとにも寄れぬほど御元氣であつた——本當に大した元氣でした——茂木教授とたつた二人で、今の外來がまだ完成しない病院の一隅や近藤外科の醫局などで、醫局の机の寸法なども決めて居た時分からは、もう二十年近くの時が經ち、茂木先生の頭は白くなり、私の頭は禿げ上つてしまつたのですから、今更昔話をした所で諸君には何等の感興も湧きますまい。

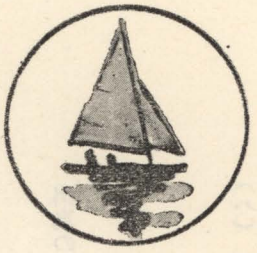
只私は慶應に深い緣故があり、小學校は幼稚舍の卒業ですし、只今も塾員として札幌三田會の會員であつて、私の頭からは慶應と云ふ事は一生離れません、今でも其頃の事を獨りで思ひ出してはなつかしんで居ります。

札幌へ來て早くも十五年たつて、その時分小學校へ通つて居られた人々が醫學士になる世の中ですが、こちらは大して變りもせず、この土地で働くやうに神樣から命ぜられて、只一途に學生の指導と、ボツ〳〵勉强をして居ります。

只今は「低溫に關する研究」と、「創傷治療に關する研究」をやつて居りますが、いつ迄續くことやら。

東京で育つた身にはいつも東京がなつかしく、どうにかして東京で働きたいと思つた事もありますが、これも運命でせう。しかし幸に醫局も繁盛、土地の人々には少しは信用もせられ、樂しく、冬も、夏も、東京になど、とてもないやうな雰圍氣の中でなごやかな生活をして居ります。





石卷便り

上石英造

私が當地に開業してから十五年、陳腐ながらも「歳月流るるが如し」である。はや當地開業醫師連の中老組に編入されてゐるので當石卷市の粹境の一端を述べて名勝金華山を參詣なさる會員の御參考に供したいと思ふ。

「三十五反の帆を卷き上げて、行くよ仙臺、石の卷」と、古くから唄で知られてゐる石卷である。岩手宮城二縣に亘つて迂々蜿蜒し、日本有數の長河として聞える北上川の渺茫太平洋に注ぐその河口を持つ石卷は往時鐵道の便なく、運輸機關の未だ不便なりし時代には「水の鐵路」として此の川に據るの外なく、南部、伊達兩藩米の輸送船その他の船舟は實に頻繁を極め、水上織るが如き盛況を示したものであると云ふ。集貨所としての石卷は當然商取引上の根據地で、隨つて之等商人の社交機關たる花柳界の發展振りは想像に難くないのである。今にしても花街の業者は夫々繁榮振りを見せてゐる。殊に最近當市の近郊に東北振興會社經營に依る「パルプ」會社設立建築最中なので、從業員の素晴らしい好景氣のため花街は殷盛を極めてゐる。聖戰下內外多事多難の折柄自肅自戒を要すべき秋、かゝる現象を呈してゐるのも軍事景氣の一端と見るべきか？　吾々有識の士一同密かに憂へてゐる次第である。しかし時勢の一時的現象と諦めて、更に主題の內容を述べれば南地、新地等の一廓には軒を並べて甲乙丙種の料理店がその數六十を數へ待合は五軒、置屋は九軒、藝妓數は大小合して六十人を擁してゐる。藝妓は元來地元つ子が多かつたが、近時「漁港石

卷」の名と共に、水都觀光石卷の名も高められ、全國より集まる遊覽客の激增に伴ひ、業者は目覺めて藝妓の向上に努め、昨今では一流都市のそれと優劣を覺えしめぬまでに精進を續けてゐる。一方「ネオン街」でも近來女給の素質向上に努め、向上會なるものを組織して、演藝部一行三十餘名からなる豪華版を以て陸軍病院（當地の日赤病院）へ傷病兵の慰問に出掛け、大向ふの大喝采裡に妙演技を振ふ等、各方面より非常な好評を博してゐる。

次に鄉土の風習と情緒を盛つた俚謠二三を紹介する。

（イ）さんさしぐれ（祝宴の初めに必ず歌ふ）

さんさ時雨か、かやのゝ雨か
　　音もせで來てぬれかゝる　ションガイナ
酒のさかなにかずの子よかろ
　　親は、にしんで子はあまた　ションガイナ

（ロ）三　拍　子（此の歌は鰹船の大漁して乘込む時歌ふ。）

舟玉とりもの　とらせて喜ばせ
　　お祝させてよろこばせ
出島の下り松何欲しくて手を出した
　　何かに欲しくもないが正德松
　　欲しさに手を出した芽出たいや
　　三芽出たいが重なり

（八）石卷小唄

目出度うれしや思ふこと叶ふた　　末は鶴龜ヤサ五葉の松

えかさん、たこさん　なまこさん

あとから　ほやさん　ほうい〳〵　　トコヤツサイ〳〵

尾浦御殿でつき鐘つけば

伊達の染川ヤサおもひ出す

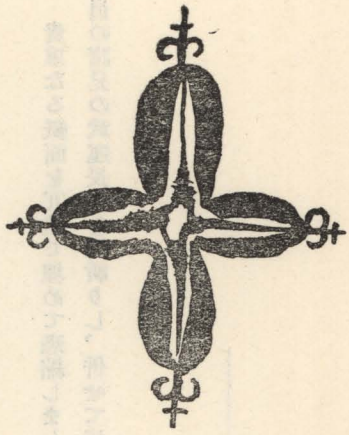
二貫と三貫五貫の手

なまかべぬるのは左官の手

口から手を出すあんこの手

トコヤツサイ〳〵

貴重なる紙面を冗述で埋めて恐縮しました。遙か戰地に於て東亞新秩序建設のため日夜奮闘されてゐる應召同窓會員の諸兄の武運長久を御祈りし、併せて恩師茂木先生始め醫局各先生方の御健康を祝して筆を擱きます。



同仁會より歸りて

瀬尾宥三

昨年中支上海に同仁會診療班として出張の話を何か書くやうにとの編輯係の御依頼でありましたが、もう歸へつて一年近くもなりました。變轉極みなき又複雜怪奇なる現今に於て昨年の吾々の話などは大きく云つたところで興亞大業史の一頁否其の一行いや其の一字位なものと思つて居りますが而し現地に於て微力ながらも御奉公出來たと云ふ感激は今尙深いものであります。

吾々のやつて來た仕事の大要はすでに三四會誌とか同仁醫學雜誌に述べましたので、刀林には中支偶感と、歸へつてからの甚だ抽象的な感想とを此處に述べさせていたゞきます。

即ち「戰爭は勝つ可し」と云ふ感を深く思ふと共に又隣同志が何故にこんなにまで闘かはねばならなかつたかと云ふことを考へさせられるのであります。民族の爭闘、人間の感情しかもこれが宿命的になつてしまつたもつれはやはり此處まで來なくてはならないのか、もつと事前になんとかならなかつたかと思ふのであります。そして今後の始末の實際容易ならざるものを痛感するわけであります。

日本は強い又其の精神力は一種の傳統的美點でありますと共に一方大いに威張る、特に日清戰爭以後のチャン〳〵坊頭氣分が相當に影響して居ること、そしてやはり吾々も歐米依存の形であつたことは今更ながら一寸恥かしい氣持がするし、又其れを支那人も突こんでくるのであります、又支那人は實に禮儀を重ずる（難民はともかく）し仲々社交的である事確ですが、ともすると日本人は威張る手前この支那人の禮儀と社交を、づるいそして又一つの御世辭と考へたがる點が又一つ彼等を見くびつて行くことに相當するのではないかと思はれる、從つて、てんから馬鹿にし切つてかゝると逆に小股すくひをやられる事がある、勿論彼等の社交と儀禮は世代的進歩であつて決して油斷できぬものでありますが、然し毛唐の方が全く支那人以上にずるい奴であります。

「話せば解る」と云ふ言葉がありますが全く其の通り、しかし其の話の中に誠意なき話は百萬言用ひても決して解らない。ましていろ〳〵なあの手この手を使つては一層不可解となるわけ、今や新政權の樹立せんとする時其の速やかなる成立と圓滿なる提携を望んでやまぬものであります。

次に一寸變つた感じですが、現在の狀態を昭和維新と申すならば、所謂明治維新のあの頃に塾祖福澤先生の着流し姿で堂々とやつて行かれた獨立自尊の意氣は實にすばらしきものであると思ひました、所謂實學の何んたるかが解つたやうな氣もします。そして自分のあらゆる甚しい不勉强を今更ながらつくづく恥かしく思つて居ります。

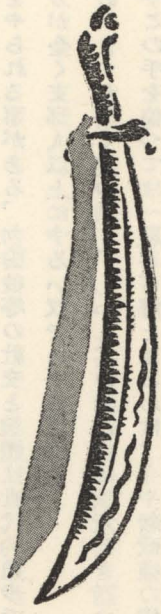
兎に角一度外に出て見ると種々の苦勞はありますが、其れと共に又よき教育を受けるものであると信じました。

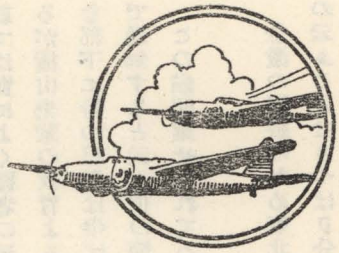
此の點今回の出張に私如き者を御推選下さつた茂木、西野兩教授に感謝いたすと共に故中村君始め班員各位の絶大なる協力と御苦勞を深謝するものであり、事は決して一人の力でなるものに非ずといふ事がよ一層く解りました。又吾々出動各地の三四會、三田會の御配慮や御援助と云ふものは實に有難いものであると思ひました。

昔から「運は天に在り」と云ふ言葉があり、又自から運を開くと云ふ努力の言もありますが、斯の如き時世又は戰

爭にはこの運と云ふ奴は實に不思議な位働くと思ひます、怖ろしい位に考へて居ます。昨年十二月末歸還して自分でさへもよく生きて歸へれたものかなと小平君とも話し會ひました、恐らく今聖戰に活躍せらる諸君はそんなにまで感じて居られぬかも知れませんが、しかし又それを考へて居ては仕事は出來ぬと思ひます。內地に歸還された方々は恐らく同感と思ひます。

此點一層應召勤務中の同窓會員諸兄の武運長久を祈つて止まぬものです。





工場醫漫言

吉岡勝衛

醫局を出て工場醫に鞍更えしてからもう二ケ年近くになるので近頃は漸く仕事の方も板について來て、横山先輩を頭に總勢九名張り切つて仕事をしてゐる。のんびりした醫局生活とは一寸趣が變つた生活で、初めは大分不平も出たが結局工場醫なるが故と諦めて働いてゐる。工場醫なるが故に世間一般のお醫者様と異つてゐると思はれることを二三記して見ようと思ふ。

「流行る醫者は飯時に滿足に飯も喰へぬ」と云ふことを聞いてゐるが自分達は別の意味でこれと同じ悲哀がある。何故かと云ふと能率本位の生産工場として從業員は就業時間中には絶對にその職場を離れることが出來ぬ、從つて我々のところへ診療を受けにくる時間と云へば彼等の晝食時及び夕食時である。それ故必然的に一般診療時間は晝間は十一時半—一時、夕方は五時半—七時と云ふことになる。從つて我々醫者は結局人様が飯を喰べる時に一番忙しくて飯など喰べてゐられぬと云ふわけになるのである。

世間樣と同じ樣に我々の仲間にも宿直醫と云ふものが順番でまわつてくる。この宿直が一寸只の宿直と趣が異ふ。目下當工場は晝夜二交制で深夜業を行つてゐる。そのために世の中一般の人の休息の夜は夜勤者にとつては活動時間に當る。從つてこちらは「ベット」へもぐりこんで寢ようと思つても、先樣は遠慮なしに外傷など持ちこんで來る。働いてゐれば負傷するのも無理はないが、それが各科全般とくると大當りの時は殆んど寢る暇のないなどと悲鳴を上げることも珍しくはない。醫者は不死身とでも思つてゐるらしい。結局身體が丈夫でないと勤まらないと云ふことになる。

時間的に餘裕のない代りに、診療に頭をつかふ必要のないことが、工場醫の唯一の有難い點かと思ふ。工場醫には「ムンテラ」がいらない。從業員は全部健康保險組合に入つてゐる故、直接何等自分達の懐が痛まない。それ故治療に就ては實によく醫者の云ふことを聞く。その一例をあげると自分達の方でも一番手術の多いのは「アッペ」患者であるが横山先輩の教育よろしきを得て、「アッペ」即手術と云ふ考へを皆が持つてゐて「アッペ」と診斷すればその患者を部下に持つ組長は半ば命令的に入院させて、自身保證人になつてすぐ手術をさせてしまひ、その兩親へは事後承諾で通知すると云ふ位の簡單さである。その外のことも殆んどこれと同一である。

この點開業せられてゐる方々に比して甚だ樂だらうと思ふ。

急激の膨脹のため東北、信越方面から數千の見習工を一時にとつた。そのため彼等の言葉たるや千差萬別で、先方の云ふことはさつぱり分からず、又こちらの云ふことは一寸も通じない。そこに起つてくる色々の珍談が續出してく

る。これも一つの工場醫局風景と思ふ。その一つ二つを拾つて見ると……。

一、「先生足が『コワイ』んですが見て下さい」とくる、さあーこちらは判らない、よく問ひたゞして見ると痛いことらしい、しかし赤くも腫れてもゐない。そこで何時から痛いかと問ふと「一年位前からで」と答へる。これでは一寸拍子抜がする。

二、風邪で咽喉を痛めた患者、その次の日に來て、此度は腹が下ると云ふ。よく聞いて見ると前日貰つた鹽剝の含嗽藥六百瓦を一日で飲んでしまつたと云ふ。これではお腹をこわすのも當り前でせう。

三、前日に足の汗疱で紫外線をかけた男が看護婦の多忙のためか、うつかり禿頭と間違へて頭に光線をかけたところ、その男凉しい顏をしてすましてゐた。足の水虫が頭へ光線かけて癒ると思つてゐるのかどうか。

くだらぬことを長たらしく書いたが、これは現在の自分達の生活の一部分であつて、決して工場醫一般のものではないことを特に附記してをく。

今年の收穫から

龍野一雄

第九回の日本醫學會總會で富士川先生は「醫術の史的考察」なる講演をされたが、その中で醫學に直接關係するものとして擧げられてゐる諸科學の研究の外に猶心理學・法學・社會學・經濟學・哲學及び倫理學の知識も亦醫術の實施に大なる關係を有することが認められねばならぬとの意味を强調された。この言葉は現在の私にとつては二重の意味でのしかゝつて來てゐる事柄なのである。その一つは醫史學の基礎として切實にその必要を感じてゐるからである。過去に於ける日本の醫學は云ふまでもなく所謂漢方であつて、私は現在それを歴史的に考究する一方臨牀的に實踐してゐる—と云つても歴史の齒車を逆廻轉させ昔に復歸するのではなくて新しい日本醫學への一分子として意義付ける爲めに努力してゐるのである。その漢方の源泉は無論支那に在るが、現在の支那の醫學は漢時代のそれとも、江戸時代の日本に於ける漢方とも可成り趣を異にしたものであることは特に指摘して置きたい。支那思想の展開の仕方はどの時代に於ても必ず古典に則るといふ傾向を持つてゐるから、支那の文化や思想や學術を研究しようとする者は先づ古典に盛上げられた思想の特長、即ち支那人はどんな思索の仕方をするか、代表的な思想は何か、それを生み出した社會組織はどうかなどと究明してかゝらねばならぬ。代表的な思想としては儒・佛・道の三教が普通擧げられるが、

醫學の研究には儒教道教及び道家の思想が重要で、易と陰陽五行說と共に支那醫學を規定する基礎構想としてしつかり把握されねばならぬ。思辨的迷信的色彩の强い如上の思想から純粹なものを抽出することは隨分困難を伴ふけれども、現在の我國は支那の思想や社會の解析を要求してゐるので、自分の仕事も現代の文化科學の一端を分擔するものと思へば頗る愉快である。以上の目的の爲めに支那哲學史や文化史を涉讀してゐるが、苟くも哲學と云ふ以上は現代の哲學概論も一わたりは心得て置かねばならず此春から哲學・科學・思想方面の概論や史論を貪るやうに讀み漁つてゐる。

思想は思想だけとして單獨に發展して行くものではなくて、社會經濟組織が必ずその基底を成すか、少くとも思想と相俟つて展開されて行くことは必ずしも唯物史觀によるまでもなく明らかな事である。

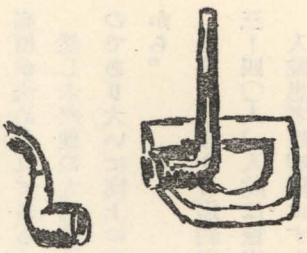
例へば明治時代に何故漢方が徹底的に滅亡したか、現代に於て開業醫制度が何故崩壞しつゝあるか等の問題を解くためには、單に時代の流れに押し流されるといふが如き抽象的な說明では滿足し得ぬものがある。漢方の地盤だつた封建時代から明治以後の資本主義への轉換と資本主義の特質及びその Allg. Krise を摑まなければ完き理解は不可能である。漢方を學ぶ者が資本論を讀まねばならぬとはお釋迦樣でも御氣付きならぬ事であらう。

哲學や經濟の知識は私のやうに醫史學に興味を持つ者許りに要求される事ではない。富士川先生のお言葉の重要さは一個の醫者としても切實に感ぜずには居られない所である。それは單に科學者としての思索の方向と方法を把握する許りでなく、例へば醫師法の改正といふ樣な問題に對しても、斯かる知識の根底無くして單に技術上の是非だけでは到底冷靜にして正鵠を得た批判は成立し難いのである。

從來の醫學教育では單に醫學なり醫術なりの方面だけを取扱ふのみで、思索の仕方とか社會の構成（從つて醫者の社會に於ける位置）とかは全然眼を閉ざされた儘であつた。顧れば舊幕時代に於ける漢方醫者が儒學を修め宇宙觀と

か天下國家に對する經倫思想に培はれて居たればこそ、その中から優秀な國士を出し、或ひは思想的方面に於ても先覺者の名を擅にして醫家が時代の先端を歩み文化の指導者となり得たではないか。醫者が單なる技術者に墨されんとする傾向は決して故無き事では無い。思想の貧困と云ふ事が盛に言はれるが、醫家に於ても亦その故に醫家の社會的發展に自身で制動器をかけてゐるのではないか。

思索の方面に新しい境地を見出した今年の收穫を來年は新しい基地の上に種蒔きたいと思つてゐる。



市立大久保病院へ赴任して

野崎寛三

永年の醫局生活を去つて慶應としては珍しくも市立一般病院醫長として赴任すると內定したのは去年の暮の事、腕試しの機會が愈々來たと思へば殊勝な氣持にもなるのであつたが、扨自分の番になると別離の悲とでも謂はうか一種の感慨にふけらずには居られなかつた、夫は（少し氣障な譬ではあるが）嫁入前の娘の氣持とでも謂はうか。大久保病院は幸にも母校の近くであり、新設の整形外科專門「クリニツク」であるからやり甲斐もある、醫局多忙の折柄多少のお手傳も出來るのは何よりであると考へた。二月下旬慶應を辭し東京市の辭令を貰ひ愈々準備に取かかつた、新設なるため概略一萬圓の豫算ではあるが一品一具に至る迄入札購入の煩雜さには閉口した、今更日常の手術器具、材料品名並に種類等に對する不注意さを悔ひたが追付かぬ、然し大體不足のない手術器具其他を購入し得たのは幸であつた。診療開始したのは物資不足の折から手間取れて四月になつた、醫局員は目下各方面手不足の折柄困却したがやつと島田學兄の御好意で芝濟生會から二人廻して頂いたのは何より好都合であつた。

市立傳染病院は慶應內科出の方が多數なるに比し一般病院の方は醫長は多く東大出の方である、院長は茂木先生より數級下の近藤外科出の內田英博士、副院長は慶應內科出の川島(彌)博士、泌尿器科は元京城醫大教授廣田博士、外科

醫長は青山外科の元醫局長で長野日赤より轉任された小島博士、我醫局の小島茂君の長兄に當られるのは奇緣、眼科は金澤醫大元助教授小口博士、婦人科は東大に古く居られた近藤博士、耳鼻科は同愛から來られた小野博士、小兒科は東北帝大元講師千葉博士、齒科は東京齒科の教授中井博士で各科共お歷々揃、私も緊褌一番せずには居られない。夫につけても私は今度赴任してつく〴〵有難く感じた事は私が茂木教授の下に慶應外科整形外科醫局に居たことであり、恩師前田教授の下に專門科目を納めたと云ふ事である、以上の履歷は何者に代へ難い私の誇であると共に今度程「親の光、七光」なる句を眞味に感じた事はない、諸先生の御指導の御恩に報ゆるためにも又慶應の名譽にかけても勉勵せずばなるまい。

市立病院の樣な所で整形外科はどの位患者があるものだらうか、新設なだけに心配したが杞憂に過ぎない事となつて嬉しくもあり、一面整形外科的患者は中產以下の階級に案外多いと云ふ事を感ぜしめられた。

市立病院は東京在住の中產階級以下の人々のための施設であるから料金は驚く程安い、外來診察料無料、最高處置料十圓、入院料は最高二圓五十錢以下收入に應し夫々四級に分けられ、手術料も最高三十圓以下入院料に應じ夫々最高價が決められてある。勿論無料も多い、會計上の心配が少く、一般に診療が氣樂にやれるのは何よりよい點である。

然し未だ他の大病院に比べ設備萬端不充分で外國殊に獨逸の Städten-krankenhaus から比ぶれば遙に程度の低いものであり大いに向上の餘地があるが、東京市としては困難な事であるらしい、やつと整形外科が併設された位であるから。

診療開始後今日迄約六ケ月間の外來新患者六一〇人、入院患者一〇三名で此數ケ月來患者數も安定し外來一日延數三—四〇人、入院は豫定數滿員で二〇名前後である。

入院患者疾病別にすると次の樣になる。

先天性畸形――二九名（内先天股脱二二名、其他兎唇口蓋披裂、内翻足等）
後天性變形――六　名（小兒麻痺後、瘢痕、關節攣縮等）
脊椎疾患――一三名（大部分結核性）
關節疾患――二二名（淋疾性一二名、其他結核五名等）
骨　疾　患――七　名（結核、骨髓炎、肉腫等）
軟部疾患――七　名（腸腰筋炎四名等）
神經系統――三　名（腦、脊髓、末梢神經各一名）
外　　傷――一六名（四肢骨折九名、脊椎骨折四名等）

以上の様な次第で今後共同窓會諸先輩の御指導、御後援をお願ひしまして慶應醫學のため盡したいと思ひます。輕費或無料患者の必要がありましたら御利用願度う存じます。終りに茂木先生、木村、前田兩先生を始め諸先生の御健勝を御祈り申上げます。

旨い物の話

渡　隼

海鼠腸の話

此の怪物様の品名は海鼠(ナマコ)の腸で製した鹽辛の一種である。即ちコノワタである。舌の上の軟い滑かな觸覺と舌の深部にヂツクリと浸み込んで行く滋味其の上を潤す清酒の香氣等の三味一體の印象が想ひ出されるゴクリと喉を鳴らされる方が多いと思ふ。

此の海鼠腸の名産地は伊勢、志摩、三河、能登であるが僕のお郷は伊勢、志摩の對岸の三河である。

海鼠腸を造るには脱腸器と稱する物で生きたまゝの海鼠の腸を拔き出し、其の一端から水を注いで指頭でこくか、又は針で割き丁寧に腸中の泥砂を取除き良品の鹽で鹽辛にするのであるが色々家傳の秘法があるらしい。其の手間のかゝる事は大變なもので、例へば此の原料の一升を得るのには約百貫の海鼠を要し更に之れを製品とすれば僅かに七合になると云つた工合である。而も製造期は寒中を好適とするので赤紫に腫れた凍えた手で村の娘達が夜更に働いて

居る様を見ると高價な事が首肯ける。

淺利の話

鄉里の海岸の内灣に姫島と云ふ愛す可き小島があるが、其處で採れる淺蜊は特別豊饒な肉を持ち甚だ美味である。週間朝日であつたか某食通が此の姫島淺蜊を三洲味噌で味噌汁にした物は日本一と推奬して居た。我々には日常の食品となつて居るが矢張り地方へ出て僕もこんな旨い味噌汁を御馳走になつた事が無い。

旨い物の話。これは洵に精神的慰安であり聞いた丈でも消化器に好影響を與へる様に感ずるが、併し聞かされて唾液の分泌のみいたづらに亢進させて居るのも辛い。聞かせた人には其の試食の機會を醫局で實現させる丈の責任がありさうだ。

★

★

★

★

雜感

久崎章

"Out of sight, out of mind" 自分の事にかまけして醫局の皆さんに大變御無沙汰をして居りますが平身御詫申上げます。

聖戰下第三年の刀林編輯の御通知に接し拙筆乍ら一應其の責を塞ぎ度いと思ひます。

思出多き醫局を船出してより早くも一星霜が流れ様としてゐます。醫局で錬へられた小生は御蔭で斯んな見知らぬ所へ來ましても萎まないだけの度胸は持合せてゐますが、益々深刻化する人的並物的資源の缺乏だけはどうしようもありません。實は目下は其の危期にさへ直面して居ります。爲に先刻も大變無理な御願ひを茂木先生に申上げ又醫局の方にも御煩はし致して申譯け御座居ません。

○

扨て次に當市の事に就て簡單に抽寫して見ませう。此處は毛織王國とも云はれ有名な織物產地でありまして、纖維工場の非常に多い處です。慶應出身の會社員も仲々多い様に見受けられます。爲に健康保險の患者が大多數を占める事になります。前々より注意されて居た事なので特に健保の患者を大切に取扱ひました關係か、私の處に於ける健保の取扱ひ數は市內の病院中で最多數を占むる處となりました。こんな事は自慢話にもなりませんが必要な事だと痛感

して居ります。

元々平和産業の土地柄であり、それが事變の影響と電力節約令の爲とで街の殷賑さは二、三年程前に比べて稍々下火との事ですが、産業勞働衞生、環境衞生方面の研究と云ふ事も一應考へて見度い土地であります。

一般市民の知識的レベルは中京の近くであり乍ら低い樣に見受けられます。特に我々の方面に在つては、昔から非醫者特に鍼灸醫の跋扈が盛んだつた相で近代醫學の何たるかを解さない一寸風變りな土地柄で殊に手術と云ふ事に對して强いフォービーがある樣に思はれます。此點關東の田舍町の比ではありません。街がそんな風な爲に當市では性病と結核とが何と云つても第一位で之は全國的に見ても其の數量に於て多いと云はれてゐます。小生の二女も當地に來て胸をやられ、つひ最近慶應小兒科の方で御厄介になつて居りますが、兎に角呼吸器の病は相當深刻な物があります。

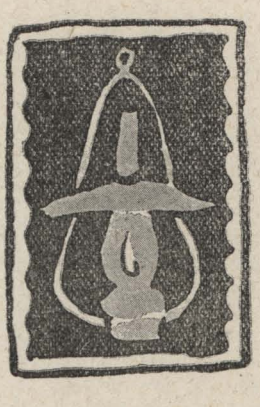
亦大阪との取引きの盛んな爲だ相ですが人情の惡い處でもあります。此處では蟲突炎の患者なんか最初から醫師の診斷を求めて來る者は先づ無いと云つても過言でありません。どうするかと云ひますと先づ鍼灸醫にかゝりそこで針を打つて貰つて局所はよく溫めて貰つて、鳥の黑燒にした物を呑まされると云ふ療法から始まります。それで治る場合もある相です。癒らない時に初めて醫師が呼ばれる位のもので、從つて開業盛んならん事を欲するならば此の鍼灸醫との連絡を取る事に心を向けねばならぬと云ふ珍現象が起るわけです。之が爲に針でつつかれて穿孔されたものに相當出合ひます。一例報告の價値ある例は澤山あります。特に今でも忘れられないのは、七歲の女兒で小兒科で腸重疊症の診斷を受けて愈々手術となり、開腹して見て重疊所が「ネツツ」の爲であつて、結局良く聞いて見ると、御鄭寧に横行結腸に五本も針を刺したとの事で、横行結腸が二ケ所に於て穿孔し壞疽狀態になつて了つて手遲れになつた事もありました。先年茂木先生の御報告の中に東京に在つてしかも「ろ號」入院患者で針醫にかゝつて死亡した例を知つて居りましたが今更思ひ半に過ぎるものがあります。

最近日本醫事新報誌上に於て茂木先生、木村先生の素描を拜讀しまして大變懐しく思ひました。剰へ御老體が今日尙嬰鑠として遠く滿洲北支の地に其の足跡を印せられ貴重な御研究に御講演に御活動の由誌上を通じて拜讀致し感激致しましたと同時に非常な刺戟と感銘とを受けました。斯うして中央を離れては醫局の發展を見聞するだに誇りと喜悅とを感ずる事眞に切實であります。又最近「診斷と治療」社より茂木、木村、前田諸先生の御執筆あるやに承り居りますが待望切なる物があります。

擱筆に當り御發展を心から祈り、遠く戰地に活躍されつゝある同窓諸兄の御健康を祝します。

一九三九年十月十日

一宮市厚生病院にて



親しき友

田邊重信

醫務室は直ぐ解つた。中央に繩暖簾を吊した入口があり、靴底消毒の準備があつた。繩暖簾を跳ね除けて中に入つた。プーンと例の消毒藥の匂ひがした。久し振りに嗅ぐ懷しい匂ひだつた。廊下は馬鹿に暗かつた。採光の惡い建物だなと思ひながら左へ折れたら出會ひ頭に懷しい顏にブツツかつた。權守中尉だつた。「ヤお前か」、「ウン俺だよ」、是で久闊の挨拶は濟んだ。短い簡單な內に無限の餘韻を含んだ良い言葉だ。

それにしても僕は何と言ふ幸運な男だらう。誰一人知る者もなく異鄕に放り出されたのだが、もう大丈夫だ。そう思つたら急に疲れが出て來たが、實は此處の部隊には腸チフスが蔓延してゐて、今日も之から防疫會報があるんで行く處だつたんだ。一緒に行かうよ。と誘はれたのでお伴をする事にした。防疫會報は醫務室と併行して居る建物の中で行はれた。此處で駐屯地の最高軍醫官太田中佐や、安岡部隊の室田中尉等に紹介された。此の建物が將校集會所である事も聞いた。防疫會報の終つたのは彼是れ四時近かつた。

晩飯に權守中尉から街で本場の支那料理と言ふものを初めて御馳走になつた。矢つ張り海月（クラゲ）や海鼠（ナマコ）の樣なものは不味（マズ）かつた。鰕（エビ）の揚げた樣なものが口に合つたのは內地の支那料理と同じだつた。

翌二十五日は新京へ出張したから、權守中尉と大きな白い雲がボカリ〳〵浮いて居る靑空を見ながら芝生に寢轉んで居たのは二十三日だつた。權守中尉は頻りに、最近手に入れたと言ふ「スーパーシツクス」の性能を讃えて滿洲に

は内地と異り雄大な畫材が幾らでもあると話し掛けて居る樣だつたが、僕は悠々と移動して居る白雲を追ひ乍ら、全然別な思ひ出を樂しんで居た。

權守中尉、昔の權チャンは、熊本醫大出だつたが、緣あつて僕等の教室へやつて來たのは一昨年の四月だつた。丈高からず、髯飽迄濃く、そして謙讓な態度は、皆んなから直ぐに好ましく思はれたらしく、權チャン〳〵で大もてだつた。その內に權チャンは、病院の廊下を決して獨りで歩く事がなくなつてしまつた。廻診の時、食事の時、それから野球場、映畫館と病院の內だけとは限らなかつた。

看護婦達から、田邊先生と權守先生とはまるで鴛鴦（オシドリ）の樣ですねと言ふ譯で、間もなく二人は鴛鴦（オシドリ）先生と言ふ、ニックネームが奉呈されたのは此の頃だつた。

此の權チャンと僕が時を同じうして軍務に服する事となつた。權チャンは廣島陸軍病院へ行く事となり、僕は東京第一陸軍病院附、何うする事も出來ない力が鴛鴦（エンオウ）の契りも淺さからぬ此の二人の仲を割（サ）いてしまつたのだ。

憶へば銀座の紫烟莊で、別れるのは殘念だが軍人となつた以上は、何處に離れて居ても、お互に一死報恩の意氣でやらうと手を握り合つたのだつた。それから三ケ月後に又權チャンと同じ紫烟莊で會ふ事が出來た。

權チャンは患者護送で廣島から遙々上京したのだつた。それ以來文通も杜絕えて今日に至つたのであるが、思へばよくも此んな異鄕の地で又會へたものだ。盡きせぬ緣（エニシ）と言ふ他はなからう。

今、傍に仰向いて居るのはヒョットすると權チャンじやあないかもしれんぞ、フトそんな風に思へて、左手でソッと軍服にさわつてみた。「うん」と權チャンの聲がした。僕は「鴛鴦の事さ」と意味のない事を言つた。

「九に絞つて、百分の一で好いだらう、」と亦言つた。權チャンはまだ寫眞の話をして居るのだつた。

それから六月十日に何時亦會へるかしれぬ別れを惜んで僕等が哈爾賓へ發つ迄の二週間は懷しい病院時代の鴛鴦生

活の再現だつた。

權チヤンの官舍は公主嶺驛と山岡部隊との中間で、公主嶺陸軍病院の直ぐ前にあつた。毎日權チヤンの官舍で風呂に入り、無駄口を叩いてから馬車(マーチヨ)で宿舍へ歸り、夕飯を食べてから、此度は宿の浴衣に寫眞機と言ふ出立ちでやつて來て、二人で九時頃迄パチ〳〵やり乍ら散歩するのが僕等の大體の日課になつて居た。內地ではいくら夏でも九時頃迄明るい事はないが此處では九時半頃迄明るいのには驚いた。

病院の裏手は一望のもと綠一色の平地で、遙か彼方に小高い丘が、それから先きの見通しを遮つて居る丈けだつた。此の平地の、あちらにもこちらにも百頭近い羊の群が綠の若草を美味そうに喰ひ乍ら漫歩して居た。僕は內地ではこんな悠々たる風物に接した事がなかつた。

雨の日などは撮影行を止めにして、良く街の映畫館へ出掛けたものだつた。公主嶺の映畫館と言ふのは內地の田舍によくある「寄席」の樣な造りで、階上もあるにはあるが、祿に掃除もしないらしく、歩くとザラ〳〵する樣な床に粗末な腰掛がホンの五人分位しか置いてなく、階下は薄緣敷きで、ドツカと胡坐をかいて觀賞すると言ふ式の古めかしいものだつた。上映する映畫はみんな日本物で觀る者も日本人、殊に軍人が大部分の樣だつた。

權チヤンとの鴛鴦生活も長くは續かなかつた。それは六月十日、愈々我が尾之上部隊が、山岡部隊に訣別して哈爾賓へ向ふ事になつたからだつた。それは僕が五月二十四日に此處へ着いてから丁度十八日目だつた。でも此の短い公主嶺での毎日が何んなに樂しかつた事か。僕は權チヤンを此の地に移し、僕を此處へ連れて來た結びの神に心から感謝したのだつた。

それから僕はハイラルに行き所謂ノモンハン事件に參加した。此の時も權守君は例の將軍廟(チヤンデーンビヨウ)で大活躍をして居た。そして停戰後再び哈爾賓へ戻つて來て穢い官舍のペーチカの傍で此の筆を執つたわけである。(十月十日記)

牡丹江

工藤達之

牡丹江は馬車とトラックとそして坂のいつぱいな町といつたらよいでせう。朝は深い朝霧が、夕方は濃い夕靄が半町先も見通せぬほどとつぷりと、町中をつゝんでしまひます。もうやがて嚴冬期が來るといふのに、數萬の苦力が石を運んだり煉瓦をつんだり道を掘りかへしたりしてゐて町中どこを歩いて見ても完成したところといふのは一所もありません。悉く今建設の途上にあるといつてよいでせう。ポツンと一軒枯野の中にお粗末な家が出來る、そして一週間もするともう數軒の立派な集落になつて、そこに住んでゐる人が見られるといつた有樣で、三、四年前迄は滿人の住む一寒村だつた牡丹江がもうこの谷間の平野を埋めつくして四方の山の裾にと這ひ上つて行つてゐます。現在の人口は增す一方で市の當局者にも明瞭には分らぬさうで廿萬位だらうといふ話です。

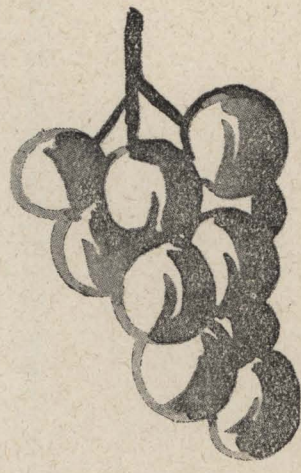
朝など官舍街と市の中心を結ぶ道路はさながら丸の內と同じ樣な混雜が見られます。町は新市街、舊市街に分れてゐて、廣さは京都の三分の一位もありませうか、新市街は主に日本人商店街と官舍街で、デパートと稱するもの三四

軒、その他お定まりのカフエー、おでん屋、小料理屋、さては料理店營業といふ看板は出してゐても一向料理など喰べさせさうもない家、建築事務所などの氾濫です。舊市街は滿人街で何でもあります。相當な商店が軒を並べてゐますが、面白いのは露店です、蚤の市式に何でもないものなしで、古靴、古釘、空瓶、かけ茶椀から德利、ありし日の實體の到底捕捉出來ぬ樣なものが並んでゐます。立喰式の料理を喰はせてゐるかと思ふと、古着のせり賣、南京豆屋カンザシ賣り、早撮り寫眞と一寸新宿あたりの露店でもかなはないバライエテイがあります。この間を交錯する樣々な叫聲や蓄音器の騷音で一種不可思議な世界を作り出してゐます。舊い他の支那町に比べて街幅が非常に廣いことが目につきますが、その半分位は塵芥の堆積場で、馬が繫がれ空馬車が置かれて家鴨が散歩をしてゐます。

今年は寒氣の來るのが遲いさうですが、間もなく淸流牡丹江（多摩川位の大きさで水は丸子附近よりも餘程きれいです）も牡丹江公園の池も、凍つてよいスケート場になるでせう。

さうなるとこちらもいよ〳〵冬籠りです。

內地も銃後々々と何かと御不便も多い事でせう、寒さに向へば又御仕事も增しますし御多忙の事と存じます。遙かに三先生始め醫局の皆樣の御活躍を御祈りいたします。



通信欄

中村復一郎君

拜啓　茂木先生初め皆々様には相不變御元氣の由で大變喜ばしく存じます。私が本年九月より十月に亘り外傷の爲め就業不能となつたとき、又々醫局よりの御應援を頂き厚く御禮申上ます。私が茂木先生の御世話になつてから已に約二十年になり、獨立して業務についてから十ケ年になりました。この間に社會の事情も變動があり、醫師として將來に處するにも、今迄の如き單なる考への みでは、どうもむづかしくなつて行く樣に思はれます。況んや近時政府一部の案として社會に知られてゐるものに、學校卒業後の一ケ年の修業期間と、二ケ年の徵用問題、醫業公營、處方箋强制發行、廣告制限、醫療內容監督、醫療報酬限定等の問題が起り、これが國法として確定したならば、醫師の生活や國民の保健問題に、どの樣な變化が來るか豫測し得ないことが出來るであらうと、心配してをります。この時こそ我々が醫局を中心とし、一團となつて、お互の爲めに努力して行くべき時期であり其の具體的方法を定め、醫局關係者の發展向上に全力を盡すべき時期であると確信してゐます。我々も出來る丈

け醫局の協力者となり、應援者となる一方、醫局から應援をして頂いて、我が大醫局の發展があらゆる方面に向つて進む事を願ふ次第であります。

阿部貞治君

思ふ丈けで、今の處道樂も趣味もやれさうもありません。啄木の歌でこんなのが記憶にあります「この次の休日に一日寢てみむと思ひすごしぬ三年このかた」開業醫の生活など、まづこんなものでせうか？　平素の御無沙汰をお詫申上げ、各位の御健康を祈ります。

神山敏雄君

醫局へは御無沙汰勝ちで申譯ないと思つてゐます。晩秋の候益々御健勝のよし御慶び申します。小生もおかげび相變らず暢氣に暮してゐます。事變この方もう二年四ケ月になりますが軍からおひまが出ません。滿鐵に復歸したら早速久し振りで一人上京、醫局を御伺ひし度いものと思つてゐます。刀林には何も書く樣な事も御座いません。病院の狀況は申上げられません。この田舍に三年三月も暮してゐるので、世の中と沒交渉で御知らせするものもありません。兎に角興城在住日本人の最古參になりました。着任當時はまだ匪賊の心配も多分にありましたが、今では王道樂土になりきりました。夜など戸締する事は一年中一度もない有樣です。變つた事は治安の確立位なものでせう。刀林に餘白が御座いましたら、先生が長い滿洲、北支の御旅行の御歸途、態々御立寄り被下た事を深く感謝してゐると御書添へ願ひます。今年は久方ぶりに先生に御目にかゝるし、齋藤君、門橋君にも逢へ近々は古山君が來るとか云つて來ました。多幸な年でした。刀林編輯で大變でせう。何卒御自愛を御祈りいたします。

後藤昇君

謹んで應召會員諸兄の武運長久を祈ります。外科醫局員の多數應召でさぞかし御多忙の事と存じます。茂木先生初め皆樣の御健康を祈ります。當山形地方は非常な豊

作で農家がほく〳〵らしい。どこの溫泉場も超滿員で、第一次歐洲大戰以來の混雜方だそうです。十月は農繁期で一般の開業醫は一年中最も暇な時です。新庄町に分院開設以來滿二ヶ年を經過しました。「アッペ」だけ九十三人開腹しましたが、どれもこれも化膿し、早期にやつたのは一つもありません。（內死亡四人）、新庄町を中心にした最上郡では「アッペ」になれば、氷袋で冷すことゝきめ込んで居ります。こゝの醫者も冷せば治まると敎へこんで居るために、初めから仲々手術などやりません。山形市や仙臺に出る時には、もう駄目な時が多いのです。

新庄町を中心にした最上郡の人口十一萬の處に、大穴があるんだから痛快です。新庄町の開業醫十四、五人、內學校出三人位、女醫さんが一番はやるんだから面白い處です。馬券にばかり大穴があるわけではないらしい。自由に活動の出來る幸福な人は、都會にばかり執着しないで立派な腕で大陸なり、田舍なりで大穴を當てるんですね。終りに刀林の御發展を祈ります。

君塚　正君

いつも御無沙汰致して居りまして、何とも申譯ありません。茂木先生初め皆々樣には益々御壯健御精勵の事と推察致して居ります。聖戰の爲め戰地に御活躍の皆樣には、其の御奮鬪苦鬪をお察し致し遙に感謝致して居ると共に、益々御健鬪を祈り上げます。

小生も此地に來て三年一ヶ月經ちました。三年の年月も經つて見れば全く夢の樣です。北國の片田舍の小さな町とは云ふものゝ住めば都で、今では知人も出來、其の風俗、人情（質朴で愛情細やかと感ぜられます）に自然と同化されて、たまにお江戸などに出て行くと、自分ながら田舍者になつた樣な氣がして、引け目を感ずる事が時々あります。

外科は小生一人ですが、手術の時は婦人科の矢田部君に手傳つて貰つて居りますが、病氣の時が一番困ります。幸ひ醫局に御願ひして御忙しい中を、遠くまで度々御配慮に預つて居りますが、此の春にも藤原學兄の應援

を得たのでしたが、此の様な教室を持つ我々は又と他にないと、どんなに有難いか又力強いか、深く〳〵感謝致して居ります。

田舍には仲々の珍患者が出て來ます。篏頓「ヘルニア」の爲めに陰囊破裂し、小腸の殆ど全部露出したるを檢診しました。陰囊の耐壓力と云ひますか、抵抗力と云ひますか、如何程なるや何人も測りたるを聞かざる今日、又「男の七不思議」と歌はれて居る陰囊も、ほころびる事あるかと御參考までにして、東北地方御來遊の醫局諸兄の御立寄りを願つて居ります。

茂木先生始め諸先生並びに戰地の皆様の御健康御活躍を祈つてやみません。

寺田泰三君

刀林と聞けば、必ず何か躍り上る元氣を感じて來る。「オール」外科ではないが、神戸の「オール」四谷「ブロック」、遙か東方より次郎さんの贈入りで、三方濟生會院長を始め、村江則忠君（婦人科）その他名前を列擧したら皆思ひ出せると思はれる元氣者許り。大いに張切つて居る。

處が小生こゝ一ケ月許りは悄氣たり、周章てたり、驚いたり、喜んだり、すつかり笑ひ者となる。

「フラウ」が突然急性「アッペ」にて濟生會に入院やら手術やら（執刀者根本君）「タンポン」やら（穿孔はなかつたが）膿やら、「ウンデ」やら、一方當方之れ又徒手空闘にて苦勞の種。

併し現在は「ボールザルベ」程度となり、少々の無理も聞屆けられ先づ安心。

富田勝郎君

何か期日迄に禿筆と思つてゐましたが、雜用多く遂に日限が切れて仕舞ひました。せめて一筆認めて平素の疎遠を御詫致し、遙か恩師始め國家の爲に御奮闘の諸兄、又在室三人前の御多忙を頑張られる諸兄の御健康を祈り上げます。降つて小生相變らずにて、無爲の光陰の早きをかこつて居ります。

板橋　剛君

同窓會諸兄の御苦勞を心から感謝し、武運長久を祈つて居ります。多數の應召にて醫局も手不足の由、益々お忙しき事と存じます。茂木、木村、前田教授始め諸兄の御健康を祈る次第です。小生濱松に參り一年半、お蔭で元氣です。東京より益々遠ざかり御無沙汰勝ちをお詫びします。當地は御承知の通り機業地にて名所、名物も餘りありませんが、濱名湖は釣りも出來、館山寺あり、一泊清遊には好適でせう。御通過の折にお寄り願ひます。

重盛福七郎君

茂木先生始め教室御一同様益々御健勝にて、御精勵の趣き何よりと御慶び申述候

陳者小生儀爾來一向に御無音仕り、怠慢の段恐縮千萬に存居候、御蔭を以て至極元氣に起居罷在り候へば乍些事御放慮賜り度く願上候、尚去る七月岡山醫大病理學教室を辭し、當玉造船所に新設せられたる衞生科の業務を担擔仕り居り候、從來馴染み申し候臨牀醫學の領域を去り、新なる決意と希望とを以て、豫防醫學の事に立向ひ申し居り候、寔に淺學菲才克く夫の任に堪ふるやも苦慮致し候が、幸ひ斯る產業醫學方面に於て大いに活躍しつゝある多數の本學先輩を峙み、誠心業務に努力仕り居り候、向後共宜敷御鞭韃御指導爲し被下度願上候。

當玉造船所は始め三井物產株式會社造船部として設立せられ、客年其の規模の增大と共に獨立せるものに有之候、從つて本造船所は創立後尚比較的日淺く、且つ貨物船製作を主體と致し居り候へば、巷間には無名に候も、現在多數の所員を擁し、世界第六位の造船能力を有し居り候、尚近來國運の進展に伴ひ、邦家重工業方面は名實共に飛躍的發展進歩を觀つゝある由に候も、當所に於ては造船工業は勿論、其の他重要機械の製作等に擧げて懸命の努力を盡し居る現況の趣きに候。

深く時局下產業衞生の重要性に鑑み微力を盡し、玉造船所の社業を通じて、皇國躍進の秋に協力致し度くと念願仕り居り候。

乍末文茲に同窓生諸先生の武運長久と、教室諸先生の御健康を祈念仕り候　不盡

木村知孝君

四月十三日、東京を出發しまして、十五日夜下關につき十七日朝奉天に到着致しました。二十日に身體檢査をすまし、廿一日入社式があつて、二十二日に錦州に赴任致しました。

錦州では保險課に畑先輩（十回生）、醫院に大島兄（十一回生眼科）、辻岡君（十四回生外科）が居られ、知らぬ土地とは云へ、とても心強く感じました。たゞ午後になると風が吹いて、ほこりがたつので、室内でもとてもきたなくなります。

殆ど雨がふらず、朝夕は大變氣持ちのよい天氣です。

醫院へは二十二日に參りました「アルツト」は内科二人、小兒科二人、外科五人、耳科一人、皮膚科一人、齒科四人です。外科は新患再來合せて五十人位ですから五人は不要と思はれます。五人の内三人は今度赴任したのです。

勤務は朝八時から午後四時迄ですが、日本時間にすれば七時から三時迄ですから、午後は大抵野球をやつて居ります。日の暮るのは八時半頃ですから相當時間があります。

では又御便り致します。本日は之にて失禮します。

長坂謙二君

常臥の床より四年間、明けても暮れても同じ松を見てゐると、常々綠で變らないと思つてゐた松にも、やはり春夏秋冬があつて愉しくなりました。秋の松は春のじみな華かさに比べて、何となく淋しさうです。殊に秋雨にうたれて、病葉がすうーと流れ落ちる樣には一抹の哀れを感じます。拙吟一句、

松にふる秋雨わびし手紙かく

渡邊　敬君

九月二日、千葉に來て同月五日より法醫學教室の一員として働いてゐます。家庭は妻、男二人、女一人。

同窓の出征勇士の御辛苦に心から感謝し御禮を申し上げますと共に、茂木、木村、前田各先生を始め、會員諸兄の御健康を祈ります。

今井秀雄君

小生一月二十日付けにて軍醫少尉に任ぜられ、仙臺陸軍病院附に補せられました。偏へに諸先生方御後援の賜と厚く御禮申上げます。目下當仙臺市に下宿住居をして居ります。病院は何日になつたら患者が減ることやら目下超滿員にて、縣下の日赤病院を借りて收容して居る始末です。內地患者も相當ありまして、蟲突、「ヘルニア」骨折等每日の樣に入院します。御蔭樣で每日少しづゝは勉强出來ますのは幸ひと思ひます。

寒さは却々激しいので、當地にては「スケート」が盛んです。昨年暮より雨は降ることがなく、何時でも雪ばかりです。でも北國の樣に積る程降りませんので道路は乾いて居ります。

小田　滿君

茂木先生始め皆樣愈々御健勝の由承り慶賀候。

醫局員先輩諸兄多數應召され、各位各方面に御奮鬪の事これ亦誠に邦家の爲御目出度き事と存じ居り候、小生お蔭を以て以來頑健打倒英國の聖戰に參加致し、父弟と共に一家男子を擧げ、御奉公申上ぐる事の出來る光榮に感激致し居る次第に候へば御放念被下度候。

當豫備士官學校は、將來豫備役將校たる甲種幹部候補生を教育致す機關に候へば、軍紀嚴正にして、演習等も實戰以上の猛烈を極め、從つて小生健康は益々上乘頑丈と相成り萬事御奉公第一と念じ勤務致し居候。

現在勉强等は出來ず、否やらず、歸局叶ひし折は一年生より再度出發し、皆樣の御指導御引廻しを願はねば相成らず、今より宜敷しく御願ひ申上ぐる次第に御座候。

慶早野球戰も優勝し、今秋の覇者となりし事誠に目出度く、所詮學生「スポーツ」は勝つ事のみが目的と存じそれが爲の意氣であり熱であると愚考されますが故に、十月二十一日は小生昔の感激を偲び祝杯を擧げ、忘れかけて居た塾應援歌及「丘の上」高らかに歌ひしも、一入懷しき事に存じ候。

小生既に二人の親と相成り、些か焦慮の感無きにしもあらざるも、總ては時であり、幾分なりとも將來に期する處あり、結局銅は銅なりとも努力する覺悟御推察被下度、今後共從前同樣御交情の程偏に御願ひ申上ぐる次第に御座候。

最後に茂木、木村、前田三教授殿及外科醫局先輩諸兄の益々御勇健にて御活躍の程遙かに御祈り申上候。

慶應醫學
慶應外科　萬歲

尾村偉久君

醫局皆々樣益々精勵御發展のおもむき拜聞致し、蔭乍ら忻喜致して居ります。教室とは緣の遠き役所務めの事とて書く程の經驗もなく、無爲に打過ぎて居ります。

同僚木本君が別の方向に變られたので、寂しくなりました。小生昨年短期間の出征より歸還後は、運動不足の爲か肥滿し出して、在局當時より三貫目以上も殖えました。

醫局皆樣の御健康を祈ります。

木本多喜雄君

去る八月兵庫縣日本鑛業旭日鑛山醫局へ赴任致しまして御無沙汰致しておりますが、元氣でやつて居ります。

郭在禧君

小生開業以來極めて順調です。今春は前田先生、夏は茂木先生が釜山を御通過なされました。半島關門に開業した幸福さを獨り味つて居ります。歸鮮して最も殘念な事は「マテリアル」は多いのに自分の智識の貧弱さと、藏書の少さです。勿論食事もゆつくり攝れない位時間的餘裕がありませんが、睡眠時間を半減せば、每日四時間

は無我の境に入れる筈です。小生は例の通り夢の多い男子、又夢ある故樂しく生きられる男子、開業一年半に於て既に數個の夢は「テスト」に於て完敗しましたが、新生する夢の方が多いから樂しいです。終りに出征して居られる會員諸兄の武運長久を祈り、醫局の皆様の御健康をお祈り致します。

許　添　旺　君

當地へ赴任して早や一年近くなりますが、永らく御無沙汰のみ致して申譯ありません。

茂木、木村、前田諸先生始め、醫局の皆々様には御變りなく、御元氣に診療に精進致して居られる事と拜察申上げます。僕も御蔭様で元氣一杯頑張つて居ります。此處へ參つた當初は淋しい感じも致しましたが、住めば都とか、段々に馴つ子になり、近頃はむしろ忙しい思ひばかりさせられます。最近では當院の諸先輩の努力が報ひられ、僕なんかその御蔭で日増し患者もふへて來て、張合のある診療が出來る様になりました。次に當院及當地方を御紹介申上げて、御序の時でも御立寄りを御願ひ致します。

當縣でも岩手三四會が出來まして、昨年藥物の阿部教授を迎へて、第一回岩手三四會を催しました。

盛岡に　三回生福井(内)、十二回生菅千里（外）兩先輩、十六回生荻村君(外)、

横田に十五回生莊司君（外）、十五回遠山君の留守居。

花卷に　七回生樋口先輩（婦）、十五回大熊君（婦）の外黑澤尻病院で院長十回生鈴木重一(内)、十一回生勝田泰一(耳)、十二回生尾島信夫（婦）先輩等僕を合せて十名居ります。慶應から誰かが來られると皆して集つて、歡迎會を催すなど盛なものです。最近では我が醫局から伊藤原先輩が來られ、皆愉快に一晩閑談致しました。町としては割に交通も便利な處で、周りには礦山地帶を控へ、北上川の畔に位して、近くに景勝の地、展賞地あり、春には半里近くも續く櫻並木の滿開時など見物です。秋には山へ「キノコ」狩りに、冬は冬

で方々に良い「スロープ」があるので「スキー」が樂しまれます。殊に近くに國產輕銀及び東北振興の二大社會(資本金三千萬圓)を「バック」に持つてゐるので、將來大いに發展性のある町として漸次改新されつゝあります。

諸先生始め皆樣に、どうぞ御序での時でも結構ですから、一度御來遊の榮を賜はらん事を願ひつゝ筆を擱きます。

終りに臨み先生始め皆樣の御健康を御祈り致します。

松浦　元君

只今は學生衞生隊の人々多數を迎へ、私達の仕事は大變樂をして居ります。學生達も皆元氣で、此の不自由な土地で大いに働いて呉れて居ります。醫局の諸兄も數多各地に出張なされ、さぞかしおいそがしい事と察し居ります。

當地も患者多數發生し、一寸此の所目の廻る樣です。下痢患者、蟲樣突起炎等が最も多數を占めて居る樣子です。土地は此の二、三日全く秋の中頃の氣候の樣で、全く浴衣一枚では、私如き肥つた者にも寒さがひし〳〵身にしむ程です。

雨期に入つたものと見え毎日雨空で、必ず雨に見舞はれ、道は全く膝までぬかる樣子です。

先日まで衞生の湯淺講師が見えて居られ、久しぶり慶應の事を聞き、一日樂しく暮しました。只今は傳研の小島博士が見えて下痢便の檢査をなさつて居られます。

生活は相變らずで毎日粗食です。でも一向にやせない所を見ると、之でも結構なのかと思つて居ります。新設の病院は材料不足の理由で全く行悩みの樣子です。今年中の完成は全くおぼつかない程です。亦此の土作りの家の內で、一年を送るかと思ふと、一寸心配な氣がします。之も「メーフアーズ」

先日來「シンメル・ブッシュ」破壞のため手術不能になり、新京に新品を求めに出張し、一個買求め歸りました。久しぶり都に出で、思ふ存分命の洗濯をして參りました。

（順着到）

〔問〕
一、最近何か道樂をお始めになりましたか
一、何か旨いもの、話（お郷自慢でも）をして下さい
一、御家庭の繁榮振りを御知らせ下さい

◇前田和三郎教授

一、久しく中絶して居つた圍碁の趣味が、最近再燃して來たので、徒然の折には碁を圍むことを樂しみにしてゐる。

二、郷里大阪から今でも昆布と「かまぼこ」を時々とりよせて家族一同で賞味して居る。

三、本年七十六歳になる母は家族中でも一番元氣です。小生及愚妻は先づ〳〵無事に消光して居る。長男は慶大醫學部豫科に進み、次男は先年死亡、三男は慶應普通部在學、四男はやつと三歳、家族中で一番人氣物です。

◇中村復一郎君

一、何も道樂をしません。

二、旨いものがあると云ふ話を聞き込むと、都合をして出掛けて見ますが、特にこれを云ふものにあたりません。然し醫局に居た時（大正十年春）茂木先生につれられて「うなぎ」を食ひに行つた浦和の大多窪へは、家族連れで時々行きます。藁屋根丈けは其當時の樣子が殘つてゐます。

三、家族は四人、そろ〳〵娘を嫁に出す頃となりました。

◇久崎章君

一、いつ暇になるやら、いつ忙しくなるやら分らない。云ひ換へれば、自分の時間といふ物を持たぬ人間には文學的な趣味が良い樣な感じがして、絶えて久しく手にしなかつた小說を讀み始めた。余り暇があり過ぎる

時等つい書いて見度くなる衝動を覺える。新刊書「土の聖者二宮尊德」は佐藤太平博士の著で、一度拜見し度いと思つてゐる。

二、旨いものと云へば、何といつても東京に限る。但し當地にあつては鮎である。それに夏の夜、長良川に舟を浮べての鮎が良い。

三、診療此處に一年未だ見るべき物なし。

◇關　市　衞　君

一、道樂は日本畫と釣位のものですけれど、暇がなくて何も出來ません。病室を持つ個人開業醫の悲哀を泌々感じました。

二、お鄕自慢の旨いものは山芋と栗と菊の花です。菊の花は觀る許りでなく食用のものもあり、其風味は格別で、最近少し許り送つて貰ひ、三盃酢のお浸しとして舌鼓を鳴らしました。

三、家庭は別に繁榮しませんが、老生と婆さん（愚妻のこと）三男一女皆壯健に暮して居ります。老生も肺炎後病弱感が未だ殘つて居りますが、努めて無理を避けて居りますので、大した事もありません。併し此冬の燃料統制が心配ですけれど、出征將兵の事を思へば何でもありません。長男は九州の三井鑛山の方へ勤める事になりました。今度新設された石炭液化部の仕事をやるそうで、若い者相當の理想を持つて居る樣です。

◇吉　野　史　朗　君

一、道樂と名の附く樣な道樂はありませんが、時々釣に出掛けます。

二、當地の名產は「うに」です。

三、女兒二人、男子ナシです。

◇柳　壯　一　君

一、まだ道樂を始めるヒマもカネもありません。每日朝から晩まで働いて居ります。

二、北海道にはうまいものが澤山ありますが、その土地で食べないと味は出ません。兎に角北海道まで御出でになれば御紹介はいくらでもします。

三、家庭はちつとも繁盛しません。

◇梅　村　六　郎　君

一、道樂と名のつく程のことでもないが、一昨年から年末より三月の末迄で、休日毎に赤倉に日光に等「スキー」に出掛ける。それこそ所謂老人の冷水だと家内中に笑はれるけれど、一面銀世界の中に汗を流し乍ら、七轉八起して味はれる無我の境地が、忘れられぬので樂んでゐる。

二、田舍地方には旨いものは無い。それでも「日向の南海」で捕れた鯢(ニベ)の子は旨い。恐らく黑潮流れる海水の關係ではあるまいか。遠方だから各位に御馳走することの出來ぬのは殘念だ。

三、年頃の娘を一人持つてゐる丈けで、老人は國策にも沿ひ得ぬ次第だから、せめてこの子が男子であつたら第一線に奉公させるのにと殘念に思つてゐます。

◇大曾根幾次郎　君

一、小生の趣味は余りにも廣汎に亘り、自然淺薄の嫌ひがある樣です。最近は間々鰡、石持釣りに熱中して居ます。

二、鰻、鮭等々、那珂川の鰻は清浦奎吾子が深く愛好され、鰻香の號を由來したとありますが、眞疑の程は不明です。

三、太郎、ペル子二名(?)居ります。但しシェーパードの子供、小生は無產階級に屬します。

◇大　槻　正　路　君

一、昨年秋から池上本門寺近くの檜林を開墾して、百姓の眞似を始む。收穫は漸く瘠大根、蕪、蟲喰ひ菜葉等。

二、當地羽田の海で此頃釣れる「ハゼ」の天婦羅、美味此の上なし。

三、事變で急に增加した工場の健保患者で、門前賑かなり「吾が日の本に(健保ちゆうもの)無きもがな」の感切なり。

◇犬　養　六　郎　君

一、道樂は何も始めません。却つて酒を止めて了ひまし

た。大ザル碁は從來の通りですが、近頃それが面白くなりました。

二、特に旨いと思ふものはありません。幼い頃旨かつたと思つたものも、近頃久し振りに喰べて見ても別に旨いと思はれなくなりました。お國自慢なら一つあります。それは岡山の水蜜桃です。それも東京へ送つて來たものは駄目です。木で充分熟したものを取つて其場で喰べる時の味!! 此れは確かに旨いものです。

三、家族は夫婦に一男一女です。私が本春「チフス」に罹りましたが、幸に全快して今では頑健です。家族も皆丈夫です。長男は本年四月慶應普通部一年に入學しました。長女は東洋英和の小學部三年生です。

◇四　條　龍　作君

一、元來無趣味で何等申上げる道樂はありませんが、依然圍碁は好きです。折々石を握りますが、余り上達は致しません。依然として「ザル」です。尙數年來高血壓の爲禁酒して居ります。

二、取り立てゝ申す事もありません。大別山の水程おいしいものを近年飲んだ事がありません。

三、十余年來變化は御座ゐません。現在は大學生一、娘一、中學生一人の至極少人數で御座ゐます。

◇伊　藤　國　男君

一、道樂といふ程のこともなく、休の日には杖を手に野山を歩き廻るのを樂しみにしてゐます。

二、御承知の如き山の中、旨いものと言つても春の「わらび」に、秋の「しめじ」位のものです。

三、弟一人と妹三人、東京と富士見に別れての共和政治は獨身大統領の私も、仲々苦勞の種があります。

◇大　塚　廣君

一、田舍で魚鳥を相手の靜養中です。

二、……

三、家族は四歳及二歳の男兒あり。至極平和です。

◇柴　沼　薫君

一、玆數年來「釣」をやつて居ります。相手は黑鯛、鱸沙魚、鮒、鮎、やまべ、ボラ、まるた、いしもち、かれい、わかさぎ等々仲々豐富です。御同好の士は土曜から日曜へかけて御出下さらば二、三人なら宿位します。

二、那珂川の鰻、久慈の鮎、涸沼のはぜ、公魚等何と言つても季節々々の新鮮な川魚料理が自慢です。酒は地酒でも、石岡產のものは相當「コク」があつて關東一と自負して居ます。「カメラ・ハイク」や釣をして四時頃きり上げ、パイ一やつて歸りは夜汽車でうと〳〵し乍ら丁度い〻時刻に東京へ歸れます。

三、第二世はまだ尋常五年、次女が女學校二年、長女は九段上の家政專門の三年生、目下貰ひ手を物色中。

◇木　本　多　喜　雄　君

一、最近「カメラ」を始めました。田舍の退屈なのには持つて來いです。序に「レコード」の先生で謠等。

二、田舍で旨いものはありませんが、茸の中で「クロホー」と稱するのは、や〻ほろ苦くて旨いものである事を知りました。之は仲々この邊に澤山あります。

三、未だ獨りでおりますが、近く親しい人生道伴もありさうです。

◇根　本　一　郎　君

一、住居を海岸に定め、釣を始め申し候、但し日光浴と稱し居り候間左樣心得置下され度候。

二、何んでも食ひ何でも旨い。ならば澤山ある方がよいです。

三、家庭は相變らずに候。

◇澤　浦　正　三　郎　君

一、今日（十一月十四日）は吹雪です。「スキー」が出來る樣になりさうです。一年中で「スキー」が一番樂しみです。醫局の皆樣も冬休みに是非お遊びに來て下さい。こちらの雪は素敵ですよ。

今年の正月から謠曲（觀世）を習つてゐます。
二、旨いもの凡そなし。
三、國策に副ひ度いと思つてゐますが、未だに赤ん坊出來ません。

◇森　文雄君

一、好きな運動をやる機會が全く無くなつたので、せめて日曜祭日丈けでもと思つて「ハイキング」を兼ねて今年から鐵砲を始めました。處が意地の悪いもので、明日出掛けようと、樂しみにしてゐると「オペラチオン」を頼まれて、未だ二度出掛けた丈けです。十月十五日の初獵には、小田急沿線で小魚をたつた一羽擊ちました。醫局へ山鳥か鴨でも御屆け出來る樣になり度いと思つてゐます。何卒御指導をお願ひ致します。
二、甘黨の私には御話する樣なものがありません。
三、「產めよ殖やせよ」の國策に副ふ事が出來ず、御恥かしい次第ですが、子供は相變らず長女一人丈けで、目下東洋英和女學校の小學科六年生です。

◇赤松常信君

一、年取つて道樂は危いといふから未だ始めない。飲みに行つてももてない事夥しい。若い者の比に非ず。之は痛感する。中老のひがみ。
二、旨いものと云つても田舍にはそうざらにない。何れ味ふもので、發表するより取つて置くから諸先生に御出掛けを願ひます。
三、子供は長男七歳、長女五人、腹中六ヶ月、男女不明の二人と少々です。

◇横山虎雄君

一、道樂と云ふ程のものでもないが、今夏看護婦達の保健の爲に病院裏に「テニスコート」と弓場とを作りましたので、門前の小僧でボツ〳〵引いて見たら、案外面白相なので、毎日やつてゐます。經を讀む迄には途遠しですが、相手がなくとも出來るので、都合が好いです。
二、御質問の主旨に合ふか如何かわかりませんが、近頃

荻窪驛の程近くに普茶料理「桃山」と云ふのが出來ました。之は黄檗宗の僧侶が始めたものらしく、精進料理です。梅干の天ブラ、そーめんの精進揚げ等々變つたものがあります。食通たらんとする方は一度は試食さる可きですよ。

三、家族は一男三女、一ストライク、三ボールといふ所です。一ストライク、二ボールの後、愼重考慮する事五年、何とか二ストライクに仕様と懸命の投球をしたのが矢張りボールでした。然し幸ひ一同健康に過して居ります。

◇篠原靜夫君

一、道樂は何もありません。強いて云へば、家を建てる事が好きですが、今年は家の修繕で殆んど一年過して了ひました。年内には出來上る豫定です。

二、胃潰瘍の疑あり。それに私は生來味覺はゼロです。

三、繁榮だかどうだか分りませんが、病院に三十人、家族十五人、家畜（馬、犬、猫）六頭、物價トーキがこたへますよ。

◇重盛福七郎君

一、所内（玉造船所）に豊富な施設がありますので、ぼつ〳〵テニス、ゴルフ釣等の練習を始めました。どうもものになりさうなのはありませんが、御蔭で十錢の辨當が二人前喰えます。

二、信州育ちの山猿には、魚の旨いのが何よりです。お通りがかりの節は御立寄りを願ひます。

三、こればかりはどうも相濟まない次第ですが、まだ下宿生活を致して居ります。似合ひのがありましたら御盡力を願ひます。

◇上石英造君

一、最近乘馬を盛んにやつて居ります。自慢ではないが當石卷市愛馬會の創立者の一人です。我が石卷愛馬會は、中央の騎道會と連絡をとり、色々と國策に順應した催しをして居ります。確か慶應醫科乘馬會も盛大に

やつて居る事と思ひます。此の醫科の乘馬會も創立したのは私と滿洲醫大の寺田君と二人でした。憶へば遠い昔の事となつて了ひました。

二、當市の御自慢の旨いものとてありませんが、左手黨には「いかさし」、健啖家には「釜めし」が御座ゐます。とても旨いものです。

三、家庭内は平々凡々、子實はなし未だに書生氣分が抜けません。子供のないのは目下重大時局の折、興亞建設の爲國家に申譯ありませんから、精々製造能力を遲蒔きながら發揮しませう。

◇中村次郎君

一、鯛釣り。子供は親の眞似をしたがるものなり。

二、酒丈けは安心して飲める。吝な繩暖簾を潜つても結構旨く戴ける。東京の樣に店を吟味せずとも、アタビンに來ないのを見ると贅六と輕蔑するが、酒道德はこちらが高い。灘辰馬の主人から親しく聞いたのたが、東京に送る酒は飽く迄生一本だと。水を割つたり混ぜたりする奴の罪を叱咤した。

瀬戸内海の魚の味も推奬したい。

三、家内と女兒二人、皆健在、醫局で髑髏をまいてゐた當時と變りなし。貧乏人の子澤山のイロハ骨牌の文句は完全にノックアウトすべきだ。

◇鍋島勉君

一、相變らず犬（日本犬二匹）を飼つて居ります。太田の醫局では將棋が目下旺んです。

二、近來旨いものを口にしません。

三、家族に增減なく、夫婦、長男、長女です。長女は小學二年、長男は五歲です。時々病氣をするので弱ります。

◇富田勝郎君

一、昔からのヘボ碁に、昨冬から「スキー」に入門しました。年をとつてからは、仲々うまくならぬそうですが、小生は例外の由。呵々。

二、當地では別に話になる樣な旨いものもありません。
まあ黑ダイヤの產だけは有數のものだと云ふ事です。
三、未だ二世の顏を見ず、至つて靜かなものです。

◇中　村　武　重　君

一、食ひ道樂も富士見の山では不自由で、まゝなりません。謠、俳句の熱さもさめたか近頃は何か、こうさしせまつた氣持で居ります。
二、春のたらの芽、初夏の蕨、秋の茸、恐らく信州獨特の風味を持つてゐると思ひます。
三、長女十二歲を頭に、男の子四人と來ては障子も唐紙もあつたものではなく、まるで匪賊に暴れられてゐる樣な有樣です。

◇山　本　順　君

一、以前から道樂が多く、從つて最早新しく始める道樂も無之。
二、當地で旨いものはサツポロ生ビール。
三、妻は一人、子供は五人、二男三女の大家族にて、毎日賑やかな事です。

◇相　見　三　郎　君

一、俳句、油畫、エトセトラ、皆ものにならず。
二、土肥枇杷は枇杷山でもいで食べなければ、本當の味はわかりません。百聞は一味に如かず。
三、山の神に陸軍二人、五つと二つ。

◇井　上　太　郎　君

一、公休に高崎を離れて日光浴位のものに有之候。
二、高崎は交通の要衝といふ以外何も旨いもの無之閉口仕候。
三、一姫二太郎五つに三つ、腕白盛りに候。

◇渡　邊　敬　君

一、最近寫眞を始めました。目下上達の域に達しつゝあります。
二、別にありません。
三、家庭は長男六歲、翌年から入學です。長女四歲、次

男三歳の三人の子供に夫婦、皆至極元氣です。

◇橋　本　文　吾　君

一、最近息切れがするので、斷然禁酒して早や二ケ月、その代り洋樂レコードを少し許り集めて樂しんで居ます。

二、兩國橋の柳橋側に「猩々」といふ酒場があります。此處のお酒は東京中でも稀に見る上等です。時々市川から出掛けて來て樂しんでゐます。同じく近所に「あひ鴨」の「バタ燒」のとても旨い店があります。一度御案内致し度いと存じます。皆さんお揃ひで御出下さい。店の名は確か「鳥安」だつたと思ひます。市川の川魚料理も一寸良いそうですが、大した事はないでせう。

三、家庭は何時も乍ら圓滿で、皆さんにお見せし度い位です。

◇今　井　秀　雄　君

一、暑中稽古、寒稽古と盛んに劍道をやらされ、生れて初めて竹刀を持つて六日目の納會に三人を拔き、俄然自信を付けましたが、其後更に上達せず。又患者と一緒に謠曲を習つて居りますが、未だ道樂の域には遠いです。

二、仙臺には旨いものがありません。毎月興亞奉公日を薩摩芋で過す時は格別不味とは思ひませんが、咽頭を通りません。(戰地の方々の前では申し上げられないこと)

三、應召前の置土産に男兒二人を儲け、共に健康で下は第一回誕生を迎へました。但し現在は下宿の二階にて獨身生活を營み、國策に副へないのをかこつて居ります。

◇板　橋　剛　君

一、寫眞を始めて居ります。良き「ライター」が欲しいものです。

二、濱松は凡そ旨いものはないといひ度いが、唯一つ鳥(實に軟かい)の味噌鍋は自慢出來ませう。來濱の方には必ず御馳走する事にして居ります。

三、男女兒各一名です。

◇加藤銀治郎君

一、特に始めた道樂はありません。

二、別にありませんね。

三、男子（四歳）一人丈けです。

◇今井金治君

一、專ら寫眞に精進して居ります。時局柄皇軍慰問には最適かと思ひます。

二、最近旨かつたものは、赤城山で喰べた「日の丸辨當」味覺をそゝるものは利根の鮎、佐渡の西瓜に、宮鄕の富有柿、暖かい味噌付け饅頭。

三、家庭には老人はなく、皆若い元氣者許り。妻に子供が三人、看護婦、女中合せて八人。犬が一匹、馬も飼はず、猫もねず。

家業は御蔭でどうやらやつてゐます。

◇中村廣人君

一、三年前から熱帶魚を飼つて居ます。御承知の樣に熱帶魚には卵生と胎生と居まして、共に繁殖力が强いものです。而し卵生は素人には仲々增殖させる事が六つかしいが、胎生魚は簡單に自然に增殖して行きます。小生は六種類飼つて居ますが、その動作運動に興味を覺え、今後も種類の變つたものを集めたいと思ひますが、冬の暖房が現下電力統制に會ひ、どうしようかと困惑して居ます。御同好の方がありましたら御歡談し度いものです。

三、長男七歳で來年から學校です。長女三歳、次男は今年五月生れました。

◇君塚正君

一、これと云ふ新道樂も出來ません。皆醫局時代の道樂の延長です。

二、松茸は關西、信州許りと思つてゐたので、山形に來て松茸の取れるには驚きました。松茸山で自分で取

つて燒いて食ふのが何より旨いと思ひます。來年の時節には御送りしたいと思つてゐます。

三、家内は男兒二人の四人暮し、長男は一年生、次男は五つ、皆健在ですが、女の子供のないのがうらめしい丈けです。

◇山　田　迪君

一、釣を始めました。東海道辨天島、海もきれい、景色も佳し。日曜午後半日の清遊に好適です。先日四百匁の「まだか」(鱸)をあげました。

二、當地には特筆する樣なものも無い樣です。

三、子供が四人(男一、女三)になりました。五人目もどうやら確實の樣です。此の調子だと十人以上のレコードが出そうです。

◇高　橋　哲　二君

一、目下研究中です。何れ定めたいと思ひます。極く最近は名倉厚君の御指導で碁を始めて三日目です。

二、東京ですから、何んでも食ひたいと思ふものはありますが、人によつて違ふことでせうから、何んとも申せません。

三、目下尙脛嚙り中です。

◇今　井　光君

一、網打ち、魚釣も好きですが、のんびりやつても居れず、一投數十匹? を捕へる網打ちに轉向、それから道樂よりも趣味の部かも知れませんが「茶」と「花」、ヘイお前がかつて? ハイ時節柄お酒はやめませう。

二、名物にうまいものはないと云ふけれど、「梨」があります。何時迄經つても甘くて保存がきくのは、僕に似てゐます。それから小生作る處の「エビのツクダニ」裏の池で大量捕つては作ります。酒の肴に乙ですよ。そういふ物があつたら送れつて刀林子の網にかゝりそうですね。

三、兩親が生きてゐて「メシ」が食べられゝば、之に越した繁榮はありませんね。時局柄「生めよ」「殖せよ」

つて、小生も近い中に國策に副つて、そのもとを作る事になるかも知れません。そうすれば一層萬歳です。

◇大庭國紀君

一、別に道樂も始めません。むしろこの三、四年前から中止の狀態。たゞ保健の爲に、時と場所、晴雨に關せず出來又天然の風景を聯想する事の出來る、盆栽をやつてゐます。保健の爲と申しても、まあ足止策、一方第二生活の資本とも申されますが。

三、御かげで無事、長男の入營、孫男子二名。

◇久保秀夫君

一、けんだま。

二、淺草公園ひようたん池畔、たこ味噌煮三串　十錢
　　同　上　　レモン水　一杯　二錢

三、一人でハンエイ致して居ります。

◇濱野碩太郎君

一、ありません。

二、北陸の隅に位して居りますので、名物なし。いさゝか知られてゐるのは若狹塗でせうか、天下に知られてゐるものは、梅田雲濱先生と、佐久間大尉の兩先輩です。

三、增加もせず、減じもせずです。

◇櫛田敏也君

一、これから何か始め樣と思ひます。

二、最近醫局で兎料理を始めたから、どうぞ御試食下さい。うまいといふ評判ですから。

三、一家無事。

◇菊池龍介君

一、以前から集めてゐる鄕土玩具が、この頃年に一つ二つ殖へる外に、新しき道樂とてありません。

二、樂滿（麻布六本木）いはゆる料理屋の料理を食べ倦きたものに異なつた味を知らせて呉れる。平凡な鰺とか、鰈などを實に旨く食べさせる。但し此の家の親爺

は變り者で、たとへ老夫婦でも、アベックはお斷りとか。
三、異狀なし。

名倉　厚君

一、最近圍碁に興味を持ちました。
二、先日角力の部屋で手製の河豚料理を食べましたが、仲々美味でした。一寸ピリツと來る所がいゝさうです。
三、家族は三人。

◇尾村偉久君

一、依然として無趣味のまゝに過し居り候。
二、大阪の事とて、味覺には比較的惠まれて居ります。醫局の皆樣の方が詳しきことと拜察します。
三、未だ資格無し。

◇笹島彦次郎君

一、何も道樂らしいもののないのが、小生の昔からの道樂でして……。
二、書き上げたら、それを御馳走して下さるでせうか。
三、男兒二名、勿論長男と次男です。

◇高和壽次君

一、道樂は主として「スポーツ」方面だつたが、醫局生活をしてゐては充分出來ないので、今では僅かに圍碁のみが樂しみです。だが段々釣魚等も始めたいものと考へてゐます。
二、東京へ來て旨いと思つたものは、唯僅かに壽司の立喰ひ位のもので、高級なる食品が田舍者の口に適しないのかも知れません。やはり故鄕の物は旨いと思ふ。殊に「このわた」を澤山暖い飯で食べる等忘れられない魅力です。
三、別に變つたこともありません。

◇渡邊重男君

一、支那から歸つたばかりで、道樂は出征前の道樂を續

行してゐます。新しい道樂を開拓しやうと思ひ、目下計畫中です。

二、何か旨いものと云ふ注文ですが、目下何をたべてもうまいです。何かまずいものをさがしてゐる位です。上京第一歩三階の「サンドウイッチ」の味は忘れられません。お蔭で同行者にあきれられました。

三、目下花嫁物色中にて、當分の間現狀維持の狀態です。下宿先に花嫁御入來で、小生おいたてをくいつつあります。誰か花嫁と下宿を世話してくれる人はありませんか。

◇佐藤　武君

一、小生日本醫大卒業後今迄引續き軍籍に在りし者、色々と新しく敎へて戴かねばなりませんが、此の方面に於ても一つ宜敷く御願ひ致します。

二、永らく中支方面に居り、內地を歩き廻るのは極最近の事故、未だ何でも旨く、區別がつきません。支那で忘れられないものは楊子江の蟹と、それから河魚の鹽辛です。但し鹽辛の方は鱗や眼玉迄混つて居るので、些か氣持が悪いです。

三、五尺六寸、十八貫身體はすく〳〵と伸びましたが、一人者で繁榮の仕樣がありません。

◇瀨尾　宥三君

一、模型汽車を走らせたり、作つたりする道樂を覺えました。仲々面白いです。息子の玩具を親爺が取り上げた樣なものです。

二、前戰に働く人の事を考へると贅澤は云へぬが、取りたての魚のチリ鍋を、腹一杯食つて見たいです。上海から歸つて以來、之が一番旨いと思つてゐます。

三、母と妻と悴一人です。別に繁榮ばへもしませんが、弟妹が夫々片附きましたので、兄貴として安心したわけです。

◇千倉　義雄君

一、靜岡に出張中論を少し始めましたが、醫局に歸つて

からは却々續ける譯に行きませんので止めました。目下これといふ道樂もありません。

二、私の田舍で鯛が釣れます。岡釣では當歳から二―三歳までの黑鯛が釣れ、船で沖に出れば眞鯛や黑鯛の、でかい奴が釣れます。暇と金があれば時々行くのも惡くはないと思ひます。

三、まだ一人者ですから氣樂にやつてゐます。二人になりたくもあり、なりたくもない樣な氣持です。

◇近藤宗彥君

一、ホヤ〳〵の道樂は有りませんが、十數年前からの撮影病から發した「山の寫眞を集めたい」と言ふ症狀が熾んになりました。職掌柄時局柄旅行が思ふ存分出來ませんから、埋め合せに寫眞又はその原版の交換或は貸借を皆樣に御願します。

二、東京に永く住むと、名物や御鄕自慢が目立たず、五里霧中……免疫？

三、平凡に搗いたり出したり、女兒二人を育てつゝ。後は目下考慮中。

◇渡邊治生君

一、將棋を始めました。太田の病院には好敵手が多く賑かです。

二、初秋の頃、梁で捕れる鮎の味は推賞に値します。近來さゝやかな晩酌を樂しむ樣になりました。旨いものと思ひます。

三、申す程の事はありません。此頃太田へ越しました。ハイキングを兼て御來遊をお待ちします。將棋のお對手でも致しませう。

◇島田信勝君

一、魚釣りを盛んに致してます。下手の横好きの方ですが、魚釣りを透しての人生觀は又格別のものです。

二、何等取立てゝ自慢をする程の事もありません。然し大過なく過して居ります。

三、特別繁榮もありません。

◇齋藤脩二君

一、事變下心の餘裕を持たうと努力して居りますが、仲々道樂といふ程に發展の餘技がありません。

二、今の時候、湯豆腐での一杯が一番旨い樣です。

三、未だ繁榮の道具だてに缺けて居ります。

◇中井愼一君

一、特に御知らせするものもない。

二、特に披露するものゝ持合せはないが、近く七分搗を食することを余儀なくされる樣になるとすれば、恐らく白米が一番此の世の中で旨いと言ふことは、萬人の僞らざる叫びとなるだらう。

三、折角「家族繁榮」の御問合に對しても「寡族反榮」と引下らねばならぬ。

◇安齋直君

一、川釣。釣場まで二、三十分で行けますので、日曜日毎に樂んでゐます。季節により釣り方を變へて釣るのは面白いものです。

二、釣りたての鮎は美味しいです。その香は何とも云へません。左利きの人なら一〇〇%にこの味を味へるでせう。

三、兩親、女房、息子一人の五人暮しです。息子は去る九月で滿一歳になりましたが、發育良好で、この時は既に歩行が出來ましたので一升餅を荷はせてやりました。

石川七郎君

一、昔乍らに小さい山や丘を歩くのに、興味を持つてゐます。此等の山や丘に雪が積ると、その上をスキーで滑ります。一年中忙しい位です。

二、山やスキーに行つて食べる土地の產物が、又なく美味しく感ぜられます。山形縣のお酒も五臟六腑に浸み渡りました。

三、坊やが一人、明けて三つになります。好んで肝油を食べるので困つてゐます。

◇小泉次郎君

一、最近始めたものはありません。舊態依然油繪が飯よりも好きですが、現在一寸手が出せないので、殘念です。其他寫眞を時々撮つて喜んで居る位のものです。尙何處かへ旅行でもした樣な場合は、梟か木兎の鄕土情緒豊かな玩具を探す事に興味を持つて居ります。

二、江戸で生れて上州で育つたからでもありませんが、東京の壽司と利根川の鮎が世界で最も旨いものと信じてゐます。

三、佐喜子と云ふ四歳の女の子供が一人、元氣過ぎて困る位です。

◇神山敏雄君

一、西瓜作り、大和錦を此夏二〇〇位、旨い事内地の比ではありません。來夏御來滿下さい。御馳走します。先生にも一つ試食して頂きました。

二、興城の支那料理、柳城飯店といふの一軒きり。一卓四圓位です。これも一つ御馳走し度いものです。

三、別居生活では仕方ありません。滿洲子は出來ません。

◇松井八郎君

一、寫眞器を持ち廻つて、あちこち「レンズ」を向けてゐます。松花江の流氷、哈爾賓の雪景など題目が多々あります。

三、子供は三人、もう出來ないらしい。二人よつて後繼ぎが三人だ。約五割の增加です。

◇野崎寛三君

一、別に何も始めて居りません。

二、新宿二幸横食道樂横丁に「そばとろ」と云ふのがあります。要するに「そば」に「とろ」をかけたものです。

三、長男三歳、次男一歳。

◇栗本勝之進君

一、長江北岸の南通に參りまして約一ケ年になります。目下は建設の途上で何にも申上げる事もありません。

唯先生方初め醫局の皆樣の御後援をバックとして力强く我張つて居ります。まだこれぞと發表し得る道樂はありませんが、興に乘じて老酒に徹夜する位です、

二、支那料理と云つても田舍料理、それに毎日食はされては全くやれ切れません。集まれば東京の食べ物「今頃はサンマだ」等となげいて居る次第です。

三、女房をもらつて足かけ六年、現在長女(五歳)、長男(三歳)と責任額は果しましたが、單身こちらに來たので、當分生產報國は中止のやむなき次第です。

◇植　草　實君

一、二、特別にありません。

三、婆さんと二人り切りです。

◇古　山　實君

一、無シ。

二、北京の支那料理は實に旨い。

三、男子二歳。

同窓會報告

本年度同窓會役員

會長　茂木藏之助先生
副會長　木村博先生
同　前田和三郎先生

評議員（イロハ順）

犬養六郎君　岩原寅猪君　畠中卓助君
大庭國紀君　大曾根幾次郎君　鎌田竹次郎君
上石英造君　神山敏雄君　横山虎雄君
竹下貫一君　梅村六郎君　柳壯一君
山本順君　町田謙二君　藤原道純君
佐藤太平君　篠原靜夫君　土方久顯君
百溪定七郎君

以上十九名

御　禮

過般次女慶子結婚につき、醫局並に出身者各位より多大の御祝品を頂戴した事は感謝に堪えぬ。玆に謹みて御禮を申上げます。

又右披露に際しては、各位を御招待申上ぐべき筈ですが、時節柄出來る丈け簡略にしたので、御招ぎを遠慮した方も澤山あつたのですが、惡しからず御了承を願上ます。

茂木藏之助

告

今回茂木先生御次女慶子孃には十一月吉日をトし、若尾家へ御目出度御入嫁遊ばされました。同窓會員一同先生御一家の益々御繁榮遊ばさるゝ事を祈る次第であります。猶評議員會の依頼により同窓會と致しましては頸飾一連御祝品として差上げる事と致し目出度御納め願ひました事を茲に御報せ申します。

外科整形外科同窓會本年度總會

編輯員

本年度總會は四月三日赤坂幸樂に午後五時より開催。茂木會長始め、木村、前田副會長以下六十二名出席。寫眞撮影、余興萬歳があつて愈々宴會に入りました。

會長の御挨拶後、各卓子より一名宛代表の挨拶あり、新入局員は各々、自己紹介を命ぜられ、眞面目なる、奇拔なる、皆其の言葉に樣子に特長を發揮して會長始め一同大喜び。宴酣となる頃、三田倶樂部優勝カップを携へて上野、土井君等が會長に挨拶に來る。會長起ち上るや、カップに滿たされたビールを一氣に呑み干される。一同其の御元氣に暫し呆然。我に還るや拍手、拍手鳴り止まず。

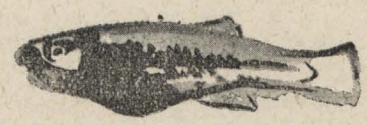
慶應外科整形外科同窓會萬々歳を三唱、出征同窓會員の健康、武運長久を祈つて散會す。

茂木先生謝恩觀劇會

編輯員

恒例茂木先生謝恩觀劇會は昭和十四年一月十四日歌舞伎座に於て催された。

茂木先生御夫妻、御令孃を主賓として午後四時頃には同窓會員及會員家族百名近く參集。序幕、歌右衞門、吉右衞門の「地震加藤」。大成駒、橘屋の「桐一葉」。菊五郎、吉右衞門の「寺子屋」。此の幕間に四階食堂にて一同會食して、茂木先生の御健康を祝しました。次に音羽屋絶品の「道成寺」、羽左衞門の「十六夜清心」等々大歌舞伎、日本傳統の藝術に醉ひ愉快な一夕を過しました。當夜は茂木先生にも御機嫌良く其の御元氣な御樣子に會員一同喜びつゝ、同窓會の益々隆盛發展を祈つて散會しました。



御禮の辭

編輯員

四季折々會員諸先輩より御贈與下さる各地の名物、銘酒、又御上京醫局御訪問の節頂く酒肴の數々は何日も、會員舊知の者は懷しい思出と美味芳香を滿喫し、新人未知の者迄も何となく嬉しい先輩の厚意を味つて居ります。

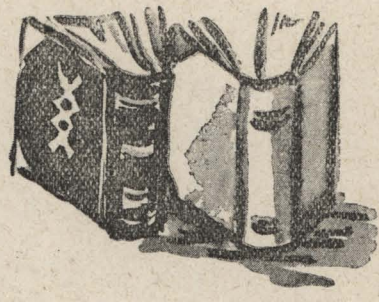
是も茂木先生御德の顯はれとして、醫局員は常に深く深く會員の御厚情に感謝しつゝ、スポーツの後又冬の夜ストーブを圍んで、下戸も上戸も御馳走になつて居ります。誌上略儀ながら厚く御禮申上げます。

昭和十四年度同窓會會計報告

昭和十三年度繰越金	二一九一円三四
同窓會費	三〇、〇〇〇
寄附	九〇、六七
雜收入	一五、九五
收入合計	**二三二七、九六**

刀林費用（十三號）	五六三円一五
餞別	二四〇、〇〇〇
見舞	五、一〇
香奠	一〇、〇〇〇
通信費、雜費	四七、九四
支出合計	**八六六、一九**
昭和十四年度繰越金	一四六一、七五

（笹島）



學術欄

第四十回日本外科學會總會

蟲樣突起摘出に於ける皮膚切開線の積極的短縮に就て　木村博教授

蟲樣突起炎と「アレルギー」　渡邊治生君

追加「ガラス」製排膿管の應用　他七君

追加　頸椎頸髓損傷に於ける椎間板損傷の意義　笹島彦次郎君　西新助君

第十四回日本整形外科學會總會

大腿骨幹部骨折處置として、の半屈曲位ギプス固定法に就て　前田和三郎教授

鈍力による上膊神經叢麻痺の一基因としての頸髓神經根離脱例と其の診斷法　森田正朗君

第十六回日本醫科器械學會總會

蟲樣突起切除に用ふる二三の新器械に就て　百溪定七郎君

☆

宿題擔當を祝す

第十五回整形外科學會總會宿題擔當者として、我が同窓會員である島田、小泉兩君が推薦せられ決定しました。是は兩君のみならず我が同窓會としての名譽でありまして、兩君の御努力を祈り、併せて此の快報を會員諸賢に御傳へ申上げます。

宿題　淋疾性關節炎　擔當者　濟生會芝病院醫長　島田信勝君
慶大講師　小泉次郎君

スケツチ・ブツクより

抄讀會

第百三十回（昭和十三年十二月六日）

一、骨及び關節結核と肺結核に就て　植草　實君
二、(A)腸間膜淋巴腺炎　安齋　直君
　(B)蟲樣突起炎と廻盲部淋巴腺炎
三、(A)低血塩症に就て　山口　恒造君
　(B)術後に於ける葡萄糖注射の可否

第百三十一回（昭和十四年一月三十一日）

一、肩胛關節の病理　高橋　哲二君
二、假性蟲樣突起炎特にグリツペ性蟲樣突起炎　木村　將義君
三、異物蟲樣突起炎に關して　名倉　厚君
四、腹壁縫合法　笹島　彦次郎君

第百三十二回（五月三十日）

一、股關節成形術の一新法　森田　正朗君
二、原因不明の「ミエログラム」の停止に就て　中井　愼一君
三、膵臓囊腫内臓吻合術及び其持續効果に就て　若林　研爾君

第百三十三回（六月二十七日）

一、假關節樣の二重關節を形成せる場合筋力の共同作用例として前膊假關節に就て淺賀　武夫君
二、纖維性骨炎の際に於ける外傷及び腫瘍發生の關係に就いて　堀越　恒君
三、穿孔性胃及び十二指腸潰瘍　久保　秀夫君
四、肝油の血液凝固時間に對する影響に就て　渡邊　仁七郎君

第百三十四回（十月十三日）

一、頭蓋底骨折の場合の手術適應に就て　權守　赳夫君
二、先天性股關節脱臼の遺傳生物學的研究　茂木　英一君
三、瓦斯壞疽治療の問題　佐藤　壽郎君

第百三十五回（十一月十六日）

一、術後の腸管運動障碍　櫛田　敏也君
二、硬膜外麻醉法　石川　七郎君
三、葡萄狀球菌抗溶血素反應の術式と其の臨牀的例用價値に關する新發見　小平　正君

外科集談會

第三七五回

假關節肋骨鞘狀移殖療法　百溪定七郎君
膽汁瘻手術治驗二例　木村博教授
顏面脾脫疽（標本供覽）　安齋直君
臀部瘢痕の整形手術　木村博教授

第三八一回

胃捻轉症　名倉厚君

第三八三回

「ナット」嵌入による右示指外傷　百溪定七郎君

整形外科集談會

第百二回（昭和十四年三月二十一日）

脊髓壓迫症狀を呈せる頸椎骨骨腫一例及び其の類似例に就て　星野正雄君
脊髓神經根切斷術より見たる主なる脊髓反射中樞の高位に就て　森田正朗君
脛骨骨頭剔出後內軸法骨移植後の經過　高橋哲二君

第百三回（六月十九日）

主として脊椎骨に多發性に轉移せる癌腫の興味ある一症例に就て　堀越恒君

第百四回（九月十八日）

脊髓靜脈瘤の一例　中井愼一、根本一郎君
淋疾性關節炎の病型分類　島田信勝、小泉次郎君

外科教室より出たる文獻

（主として教室寄贈集による）

蟲樣突起摘出に於ける皮膚切開線の積極的短縮に就て（外科、第三卷第七號）　木村博教授
凍傷の豫後（日本醫事新報、八五八號）　町田謙二

顏面腫瘍の診斷
（醫學輯覽、臨時號）　町田謙二
關節痛
（診療と實際、臨時增刊「救急療法」號）町田謙二
腹痛と外科
（皮膚と泌尿、二月號）　町田謙二
蟲樣突起切除術に用ふる二三の新器械に就て
（醫科器械學雜誌、第十六卷第十二號）百溪定七郎
腸管閉鎖症に用ふる新套管針に就て
（醫科器械學雜誌、第十六卷第十二號）百溪定七郎
疲勞及び饑餓が細菌感染に對する動物の免疫性に及ぼす影響
（日本外科學會雜誌、第四十回第六號）渡邊治生
肉芽創療法管見
（外科、第三卷第六號）　渡邊治生
上海南市に於ける八ヶ月間の診療總括
（同仁會醫學雜誌、第十三卷第六號）瀨尾宿三
上海に於ける醫事衛生施設並にコレラ、赤痢の二三事項に就て（同仁、第十三卷第二號）　瀨尾宿三
蟲樣突起摘出後一次的縫合に於ける縫合絲膿瘍の統計的觀察並に其の細菌學的研究
（日本外科學會雜誌、第三十九回第九號）　橋本文吾
淋巴肉腫症
（日本外科學會雜誌第三十九回第十二號）　橋本文吾　大塚廣
上海南市の外科診療報告
（同仁會醫學雜誌、第十三卷第九號）小平正
高位小腸瘻患者に依りて觀たる消化及び消化酵素就中醱酵素に就て
（日本外科學會雜誌、第四十回第二號）若林研爾
實驗的腸管過敏症の研究
（日本外科學會雜誌、第四十四回第三號）　山口恒造
麻疹に合併せる急性蟲樣突起炎の二例並に其の巨態細胞出現に就て（日本外科學會雜誌、第三十九回第十二號）　山口恒造
炎症性蟲樣突起內容の水素「イオン」濃度に就て
（日本外科學會雜誌、第三十九回第十二號）　今井秀雄

顏面脾脱疽の一例
（外科、第三卷第六號）　安齋直

「ゴム」輪絞扼に依る陰莖壞疽の一例
（「臨牀の皮膚泌尿と其境域」第四卷第五號第三十二冊）　櫛田敏也

所謂原發性急性腹膜炎の五例に就て
（グレンツゲビート、第十三年第十號）　植草實

整形外科學教室より出たる文獻

外科學、脊髓・脊椎・交感神經
（日本醫事年鑑、昭和十三年度）　前田和三郎教授

支那事變と整形外科
（日新治療、第二百五十二號）　前田和三郎教授

骨結核（カリエス）
（結核の臨牀、第二卷第一號）　前田和三郎教授

椎弓截除後に於ける脊椎の形態竝に機能に關する臨牀的研究（日本整形外科學會雜誌、第十四卷第四號）　伊藤原

限局性脊髓膜炎の「ミエログラム」に就て
（日本整形外科學會雜誌、第十四卷第三號）　小泉次郎

脊髓神經根切斷術より見たる主なる人體脊髓反射中樞の高位に就て
（日本整形外科學會雜誌、第十三卷第九號）　森田正朗

脊髓壓迫症狀を惹起せる頸椎骨腫及び其類似例に就て
（日本整形外科學會雜誌、第十四卷第二號）　星野正雄

主として脊椎骨に多發性に轉移せる癌腫の興味ある一症例に就て
（日本整形外科學會雜誌、第十四卷第四號）　堀越恒

醫局近況

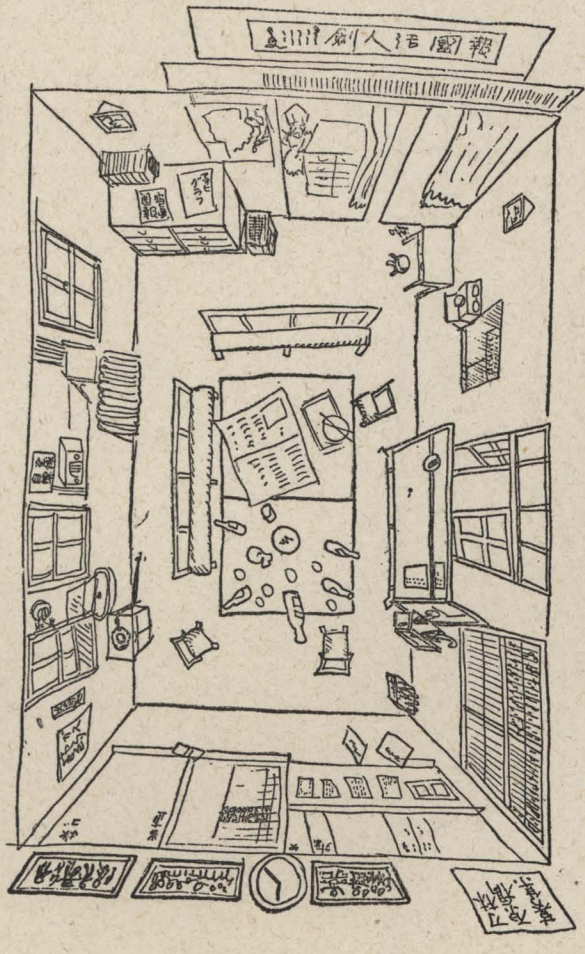
醫局擴張記

我々の醫局が大變廣くなつた。

去る四月一―三日の學會の間に急改造に取りかゝつて、廿七日にはもうすつかり面目を一新した新醫局で、茂木、木村兩先生御寄贈の引越し蕎麥を祝つた。六月七日の開局第十九週年記念日には、改築落成披露も兼ねて、同窓會員諸氏を招待して、新醫局で盛大な祝賀會が開かれた。抄讀會も此處で出來る樣になつたし、すつかりゆとりが出來て今迄の樣に椅子に突き當つたり、藥罐をひつかけて水をこぼす樣な心配がなくなつた事は最も愉快な事である。

抑々新醫局改築の經緯を少し述べると、それは北里圖書館が落成して、病院の東南の一角にあつた中央圖書が移動し、狹い病院にも多少のゆとりが出來た事に始まる。勿論舊中央圖書跡は、各科の垂涎の場所であり早速各科の猛烈な移動或は擴張工事が此處に始められたのであるが、外科は地域の關係で、そういふペリフェリに出店を出すわけにもゆかないので、この恩典には全く與らなかつたのである。

一日茂木先生は、擴張した内科醫局を見て來られて、今更の様に我々の醫局の手狹な事を痛感された。兎も角御存知の様に、當時の醫局では、着物は着換へる、抽斗しはある、野球の道具はある、酒樽はある、人の應接もする、婦長の事務はとる、將棋はさす、といふわけで如何に狹い所が一〇〇%有効に使はれてゐたかがわかる。所で、一方奇妙な事には、あれ程多かつた肛門患者が近年段々減少し廣大な坐浴室の利用價値が大いに減じた。そこで三月の末此處を取壞して醫局を擴張する様に茂木先生の命があつた。當局は其頃病院改造といふ事に對して餘り積極的意見を持つてゐなかつたが先生が强硬に主張せられた結果遂に實現の運びとなつたのである。



さて、遠く野戰に御活躍の諸君の爲、又は嘗つて此處で大いに飲み大いに談じ合つた古い諸君のために今醫局の眞中に立つて新醫局風景を御紹介することも無駄ではなからう。

大體略圖でおわかりの事と思ふが、今迄坐浴室と相接してゐた壁は一本の柱を殘して內側三分の二がぶち拔かれ、此處に醫局次室が出來た。次室は主に更衣室に當てられ、中央には抽斗しをかためて置き之がそのまゝテーブル代用ともなつてゐる。窓際にはもう一つ小型の机があつて此處で婦長が事務をとつてゐる。此の部屋の周圍にはボックスがある。現在の樣に無人の醫局ではボックスも今では多過ぎる位だが、今に大勢凱旋殺到してもビクともしさうもないから心强い。今迄新聞や食器を入れた箪笥は、次室の上に戶棚を造つて上げて了つた。

明き樽や明罎の類（時には中味のあるのも）をしまつて置いた所謂婦長室は、次室の奧に硝子の障壁を殘した儘昔の通りにあり、今でも此處でミシンが動いてゐる。此處へ出入した廊下からのドアーは、ふだんは閉めきつてあるが醫局で會のある時には此處も開放する樣になつた。

醫局の出入口は今迄通りであるが、突きあたつて左に入つたのを右へ入る樣にし、電話をそこに取りつけて、給仕を坐らせてある。永年醫局にあつて、煙草の火を消したり、酒をこぼしたり又庖丁できざんだりしたお馴染みの机は一つは新品と取換へ、一つは上を張り換へて中央に安置してある。窓側ストーブの上には、茂木先生の「至誠自尊」の額とラヂオがあり、圖書室側が床の間になつて手術告知板や黑板、その上に時計がある。時計の兩側には今迄明るい繪がなかつたが、今では茂木先生がフランスから持つて歸られた、ドアイヤン夫人畫かしめた所の、フランス名醫連の漫畫三幅がかけられて、醫局に一種のなごやかさを與へてゐる。

之に相對する、次室との中隔の欄間には、之も茂木先生御直筆の「報國活人劍」の額を揭げ、その下には、武運長久を祈つて、出征同窓會員六十二人の芳名が出征順に連記してある。何かの御參考にもなるであらうから、（少し大變だが）皆寫してみるならば、次の通りである。（敬稱略）

昭和十二年、中野、門橋、大木、小口、渡邊昇、岩原、照井、辻岡、小野田、松浦勇、佐藤壽、志田、小澤、稻葉、

田中周、蓮江、竹内實、小林不、工藤、木村守、四條、富田、竹下、赤倉、渡邊重、林克、名和、尾村。

昭和十三年　左奈田、古川、西平、小柴、伊藤原、今井秀、大内、大沼、小島、大岡、明樂、弓削、中島三、城、松丸、小林忠、小田、中村寛、合原、橋本、奥山、山田二。

昭和十四年　權守英、川上、遠山、西、山口恒、傳田、田邊、森山、若林、堀田、瀧本。

その中、「除隊」と朱書してあるのが、照井、佐藤壽、木村守、四條、渡邊重、尾村の六君丈けで、堀田君の上には「即日歸鄕」と書かれてある。

一方入口の左側にある入院患者札の上には、醫局員の札があるが、之は又一異觀で眞中のしきりより右の現醫局員の名札は寥々としてゐるに反し、左の休職或は出征（日の丸貼布）者の名札は正に溢れる許りである。

名簿と重複するけれども、試みに此の寥々たる現醫局員の名札を讀んでみるならば、

茂木、木村、前田三教授、町田助教授以下

講師　藤原、百溪、土方、渡邊治、瀨尾、武藤嘉、小泉。

助手　笹島、小平、鵜澤、佐藤壽、渡邊仁、名倉、安齋、石川、森田、植草、久保、櫛田、高和、木村將、渡邊重、千倉、茂木、高橋哲、中井、横畠、淺賀、佐藤武君の

三十三名、又出張中として下欄に

井手、河田、津留、日下部、松浦元、堀越、花岡、林勝、權守赳君の九名が掲げてある。

即ち新人も入局早々にして一躍三段目か幕下になつて了ふのであるから往年醫局華かなりし頃とは雲泥の差で、此處にも超非常時の動きがあり〳〵と見屆けられる。

さて此の他其處此處の壁に二三の酒落れた風景油繪があるが、之は（一寸大きな聲ではいへないが）或失業畫家救

濟に買取つたものである。とは思へない程小じんまりしたものである。

最後に此新醫局の天井には二つの最新流行型の大シャンデリヤがある。之は森文電燈病院長の寄贈になるもので、實際夜ともなれば、一寸昔の俤を思出さうとしても、容易に出て來ない位に、見違へた壯觀を呈する。

どうか諸君、一日も早く御凱旋、或は御來訪の上此新醫局で悠々と一杯やつて載きたいものである。

醫局長交替

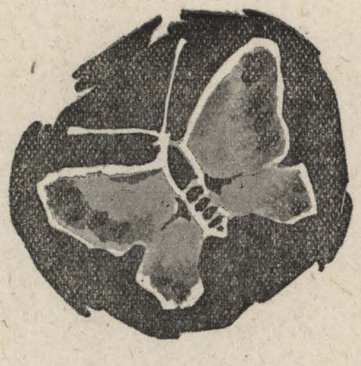
舊醫局長　百溪定七郎君

新醫局長　笹島彦次郎君

昭和十四年十二月五日　醫局長交替が發表されました。

百溪君には約五年間醫局及び同窓會の爲めに、御多忙の身を種々御盡力になられ醫局内外の發展に多大の成績を納められたることは醫局員一同感謝に堪へません。

銃後益々多端なる今日、新醫局長笹島君を得て醫局員一同は一致協力我が教室及同窓會の發展向上に邁進することを誓ひ合つて居ります。同窓會員諸兄に於かれましても今後御援助下さいますやう、誌上を以て御願ひ申上げます。



醫局だより

茂木先生

先生はお元氣で、講義、外來、廻診、手術と其御忙しさの上に、芝濟生會にも週一回御廻診に行かれ、又醫局員の御指導等、壯者を凌ぐ御活動です。それでも時折は御閑を見られて、釣に、野球見物に御出掛けになる樣です。

本年先生には御令孃御同伴八月廿三日東京發にて滿支大陸の御旅行をなされ、九月廿日無事御歸京になられました。其の間、滿洲醫學會(ハルピン)、中華民國醫學會(北京)に御出席になり、又滿鮮北支に在る慶應出身者殊に我が同窓會員諸氏を御訪問になり、その活躍振りを御視察になられました。

木村先生

先生には本年外科學會總會に、所謂先生獨特の「蟲樣突起摘出術のクライン・シュニット」に關する御發表あり、大なる興味を聽者に抱かされました。先生にも、手術に、外來に、講義に、廻診に、醫局員の指導に當られ、殊に手術

に於ては茂木先生に代られて、大いに御活躍です。

又横濱の警友病院にも週三回御出掛けになられ、非常に御多忙なるに拘らず、益々御健康であられることは一同喜びに堪えない次第です。

前田先生

先生は、相變らず醫局員の誰れよりも早く御出勤になり、外來、廻診、講義、手術と殊の外御多忙な中にも、常に溫顏に微笑をたゝえられ乍ら御奮闘を續けられて居られます。又岩原助教授を始め多數應召の爲に益々御寸暇無き有樣であるのに、來年度宿題擔當の濟生會島田、教室小泉兩君の御鞭韃、御統卒にも當つて居られます。

其の間先生には別掲の如き幾多の業績を御發表になり、又最近は、諸種の集談會講演會にも御出講の上斯學の智識向上に努力して居られます。

尙時々村松松嵐莊へ御出張の上、「トラコ・プラステイク」其他に靈腕を揮はれ、又醫局員堀越君出張中の鹽原傷兵保護院にも御出張の上、種々御指導に當られて居られます。

防空演習の夜北島醫學部長がヒョッコリ醫局に入つて來られ、居合はせた高和君と圍碁を始められました、「そんなに堅くならんで、うち給え、君」

醫　局

醫局の模様は醫局擴張記に詳しくありますので、此處では省略致します。

今年は醫局員も大いに大陸、南洋方面に活躍しました。部長先生の滿支御旅行を始めとして、上海同仁會から瀨尾、小平兩君が有終の美を收めて歸還の後、六月から松浦元君が滿洲國鐵鑛へ、植草君が海南島へ、又七月から櫛田君がハイラル方面へ夫々出張視察診療に當り、大いに慶應醫學の眞髓を發揮して來ました。尙松浦君一人は、先日一寸休暇を得て歸京しましたが、恰も大陸の地を戀ふるが如く再び渡滿目下尙奮鬪を續けてゐます。

鈇後の醫局は勿論寂寥の感蔽ふべくもありませんが、一同益々元氣に、二三人分の働きをして立派に留守を守つて居ますから御安心下さい。

次に本年度のクランケの數其他に就いていへば、今年十一月末日迄數字に現はれた所を見ても、我が醫局の益々繁榮なるを雄辯に物語つて居ます。

入院患者數(外科)　一六七三　(昨年度は十二月末迄で一六四九)

中　アツペ　七〇三　(昨年中六〇八)

外來患者數　四六五八　中　フライ　四一九

手術患者數　一四〇四

醫局では目下碁將棋熱擡頭し、非常時局に相應しく、火の出る樣な「名人戰」が展開されてゐます。相當觀戰子にもウルサイ豪の者も居りますから其の御積りで、同好の士は御來局の折、是非一局を試みられんことを望みます。

外科第一診察室

花瓶には毎朝美しい花が挿してあります。
月金は部長先生、火木は木村先生、水土は町田先生
外科のサロンは何時も明るい光に充ちてゐます
毎日二十人から三十人も新患が來ます
電氣時計の樣に狂ひがありません
豫診の濟んだカルテを默つて出せば
獨逸語のわかる菊本はちやんとロカールの判を押します
肥つて朗かな增田が患者を通します
ブンクチオン・採血・ザウググロツケ
紫色の「入院規則書」がクランケに渡されます
菊本が婦長のもとへ走ります
午後直ぐ手術ださうです
輸送車を持つて迎ひに來て下さい

豫診室

第一と第二の間に挾まつて陰になつた
小さな豫診室
凡ゆるクラツセの人で一杯です
何氣なく豫診が取れゝば助手も一人前でせう
羞んで何も言つて吳れない制服の處女
之は又病院を廻り廻つたクレブスの男
我が子を抱えてオロ〳〵する若い母親
工場を休んで來た健保の青年等々
インキ壺はもう空になつて了ひます
午後は若い看護婦生徒が
綺麗に並んで繃帶材料を作ります
樂しさうな一とき
朗かな笑ひや小聲の歌が漏れて來ます

第二診察室

武藤先生の大きな聲が響き渡り
戰場の樣な朝の二時間
クランケ・クランケ・そしてクランケ
碇子(イカリコ)が鮮かにさばいて行きます

看護婦達のチームワークも滿點です
パナリチウムの爪取り
フルンケルのカルボール洗滌
スポガンのナトチト注射
バルサム・リヴアノールガーゼ・ボールザルベ……
忙しかつた半日もすんで
碇子は書類の整理をしてゐます
仲良しだつた石合はどうしてゐるかしら
新入局のアルツトが面白くて堪らない第二

第三ポリクリ處置室

三年と四年の學生がしきりに何かやつてゐます
月火水は瀬尾、渡邊治、笹島先生
木金土は町田、百溪、土方先生
「何故」「何故」を解いてやる諸先生の苦心
默々とフライ患者の面倒を見る山中
午後は櫛田君が手を洗つて
大いに腕を揮はれます

夜の特診、外傷!!
蒼白い當直のプレの顏と
制服巡査、運轉手等物々しく手洗ひの鏡に映つて
緊張した手にマーキユロだ、受針器だ
明ければ齒刷子をくわえた當直の先生が「お早よう」
昨夜の事はもう忘れてゐる樣です

檢　査　室

默つて幾日も檢便してゐる人がゐます
顯微鏡を覗く時きつと口笛を吹く人がゐます
ピペツトを洗ふアルコールやエーテルは
みんな流れて行つて了ふんだな——
口惜しさうに誰かゞ言ひました
暇になつた給仕の松崎が
面白さうに遠心器を廻して呉れます
あと百回だ、もう五十回だ
ニーランデルが眞黑に出て
古顏のアルツトは叫ぶ

「ちえッ又定量か、くさつたな」
煤けて來た諸檢査一覽表も懷かしく
夜はオーフェンの青い灯が明滅して物悲しい

手術場

昔から居た石合、有明が居なくなつて
「ほ」號から來た伊藤が頑張つてゐます
菊本や山中や村田や增田も手を洗つて呉れます
ヒルルーグの戰場　ブルートを見る喜び
年々鰻上りの手術患者數
防空演習でもこの廣い手術場で
ゆつくり手術が出來ます
婦長が出て來て二言三言いへば
あんなに泣いた坊やも泣きやみます
御褒美は何でせう、キャラメル？　チョコレート？
木村先生のアッペはガーゼ一枚しか要りません
誰かゞしんみり言ひました
僕の汗かきは親ゆづりだよ

整形第一診察室

學生が盛んにアナムネーゼを取つてゐます
今日は試驗らしいです
廊下には患者が溢れてゐます
前田先生の溫容に接した丈けで
屈つた脊骨も伸びるといひます
「信愛」の二字が壁にかゝつて
ベシュライバーのペンは走る　走る
廻つて來たレントゲンのフイルムを　手際よく
西郡がカルテに挾んで行きます
あんなにつながつてゐたカルテの列も
正午一分も違はずに無くなつて了ひます
月水金は部長先生
火木は小泉先生　土は森田先生

整形第二と手術室

硝子窓では仕切られた綺麗な石疊も

股脱やギブスベットで直ぐ眞白になります
此處は整形外科の再來患者が殺到する所
高橋君が元氣に働いてゐます
日光浴を濟ましてクランケが入つて來ました
呪はれたテーベーのフィステルを
早く治してやる方法はないでせうか
ドアを開けばオペラチオンスザール
灰色に塗られた壁、こぢんまりと纏つた手術場
鈴木がかけ持ちで明朗な活躍振りです
斜頸の手術が一しきり濟んで
兎唇の赤ん坊が運ばれて來ました
馬毛も大事な務めを果してゐます

マツサージ室と器械室

晴れた日も雨の日も
まるで小兒科の樣な賑やかさです
岡村の退いたあとには林原が坐つて
中山さん以下五人の先生が心を碎くマツサージ
一年がゝりでせつせと通つて來る
只一筋の母性愛には頭が下るばかりです
工場の樣に並ぶ澤山の器械
お姉さんが膝關節を盛んに動かしてゐます
保育園の香田先生が彈くピアノに合はせて
もみぢの樣なおてゝをうつて「兵隊ちやんの歌」
それから面白いお話、折紙細工
さあ早くマツサージをすませて
向ふで皆んな仲良く遊びませう

圖書室

醫局に居た誰もが持つ思ひ出
讀書に、ノートに、一寸の相談に
あんな便利だつた所はない
手術からお歸りの先生が
きつとタイプライターをお敲きになる
茂木先生の肖像　アツペ宿題記念の置時計
相變らずギツシリ詰つてゐる書棚

梯子一つあれば
自分で文献をあされる手輕るさ
抄讀會も程近くなつて
外國雜誌を讀み耽る者　書き取る者
いくら見てゐても倦きない
ビーアブラウン・キルシュナーの挿圖の美しさ

當直室・食堂

つわもの共の夢の跡!!
寢臺も段々圓くへこんで
大變寢にくゝなりました
昔乍らに「外科整形接骨科」と書いてある當直室
戰地に行つた人達の
寢卷が二年も三年も淋しく主を待つてゐます
突當りにサンプルの出てゐる食堂
いつも四品宛並んでゐます
たまには大きなカツレツもつきます
ライスカレーは別館と味くらべです
お櫃の飯をよそひ乍ら
他の科の人達とも
氣易い交歡が行はれてゐます

い號病棟

「子供の國」の彫刻も
三階に行く階段もある　い號の下
主任の富田がやめてから
に號から來た佐々木も去り
今は松崎が主任　渡邊が之を助けて忙しい
小兒科內科神經科理學科等々々
それに特等室迄抱えこんで
まるで國際都市の樣な色彩
クラスの者ともよく顏を合はせ
「どうだ　忙しいか」とやられます
月金の二度だが總廻診の朝
い號の始めに患者を持つと
眞先きに飛んで行かねばならぬ其のつらさ

ろ號病棟

外科と婦人科　いつも滿員です
うちの若樣が御入院ですが
何時頃病室があくかと電話が來ます
新人が先づアルツトは難かしいと直感する所
病室から溢れ出てゐる
カーネーション　白百合　小菊
朝な夕なふくよかな香の漂つてゐる
廊下を歩む女性の姿も美しい
看護婦室にある魚も熱帶魚
特大の佛蘭西人形　志賀直哉の小說
上品な言葉も遣ひ慣れてゐる日川
詩やレヴューの好きな平城
どの病室もみんな日向をむいてゐます

に號病棟

外科と整形の獨占です
白いカルテと水色のカルテ
四階の喫茶で誰かゞ言ひました
「に號は良いよ　丁度俺達の階級だ」
壁には詩もあり漫畫もあります
附添ひがビフテキを燒いてゐます
「おい、お手軟かに賴むぞ」と
醫局のアツペも時々こゝに入ります
藤野は相變らずオツトリしてゐます
新井も穩かだが少し甘つたるいといはれます
身近かな親しさ!!
當直の翌朝廻診に起して貰ふのも
に號に賴んで置けば安心です

ほ號病棟

忙しい!!それに大變な人だ……
喧騷を極める總廻診

別室には常に重症が呻吟してゐます
サンマの煙で一杯だと思ふと
患者が食膳を運んで行きます
今しも外傷の小兒がステリました
貧しい父親が髭だらけの頰を
子供の顏に押しつけて號泣してゐます
見榮も外聞もなく……
健氣な窪田も目頭をうるませてゐます
山崎が何も言はず蒲團を取りかへます
直ぐ次の腹膜炎が入つて來るのです
兎に角忙しい!!ほ號の下

ほ號の上・ち號の上

いくら端(ハシ)だからといつて
夕廻診を忘れたりしてはいけません
ほ號の上はずつと向ふに
島流しの樣なたつた一つの外科病室
金澤が一人で健闘です
たまには重いアツペも入ります
親子二代で入院したクランケだつてあります
ち號の上も內科の先に二つある整形の大部屋です
寺田や小林が愛想よく迎へて呉れます
永いギブスペットや牽引臺
クランケはみんな仲良しです
隔日の總廻診　先生のやさしい御言葉に
患者もホロリとしてゐます

別館病棟

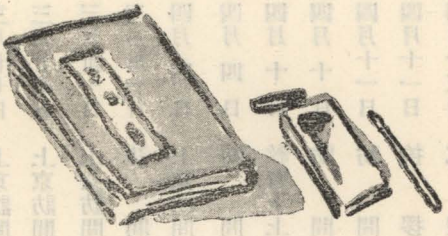
大變急な地下道です
女手の輸送車が喘いでゐます
廊下に出ると志田が見てゐて
カルテはちやんと机の上に出てゐます
別館の建物に相應しいキチンとした病棟
クランケも上品でインテリ

志田達筆の名札が並ぶカーテン附きの大部屋には
男丈けしか入れません
泰西名畫のかゝつてゐる廊下
「インコ」の籠があつて
よく接吻したりしてゐます
抽斗しに渡邊の讀むジイドの紀行文等があります
「ワーワーツ」とリーグ戰の喚聲も聞えて來ます

別館醫局・四階

此處は外科新人群のオアシス
ラケツトもグローヴもミツトも
山と積まれてあります
ソファーに寢轉んでラヂオも聽けます
三つの寢臺によく合ふ電氣時計
一人寢の當直でもNBです
エレベーターで四階に行けば
溫かい紅茶と美しい少女が待つてゐます
氣のきいたランチも出來ます

食後の樂しい雜談がつゞきます
繪畫館のドームの彼方に
美しい富士の姿も見られます
退院間際の患者がよく寫眞を撮つてゐます



記名帳

昭和十四年の始めから、醫局に大變立派な「記名帳」が出來、久濶懐しの醫局を來訪せられたる同窓會員諸君を始め賓客各位に一人殘らず署名して戴く事になりました。

記名帳の卷頭には、茂木先生の「千客萬來乞貴名」の雄渾にして慈愛に充ちた御筆蹟あり、次いで木村先生の「山海之珍味集於一堂」、前田先生の「有朋自遠方來不亦樂乎」てふ墨痕鮮かな二つの題字が遠來の訪客を待ちあぐんでゐる樣です。

試みに繙いて見ると、たとへ一行の署名の裡にも無限の親しみと懐しさが感ぜられ、同時に會員往來の生きた記錄帳ともなるので此處に書き取つて御傳へする事にします。

○

二月二十日	公用出張	陸軍軍醫中尉	松浦勇四郎	三月十五日 上 京	清水田村信介
二月廿三日	桐生醫師會長手術の爲上京	赤松常信		三月十七日 上 京	市川大岡保司
三月三日	上 京	鍋島勉		三月廿一日 上 京	豊橋小田滿
三月六日	軍醫學校復歸	大木猪四郎		三月廿一日 上 京	小樽山本順
三月十四日	手術見學	病理 曾爾睦利		三月廿五日 乞 暇	內科 青木孝之
三月十四日	上 京	大阪 尾村偉久		三月廿五日 上 京	小千谷小方則太郎

三月廿五日　訪　問　　森　文雄
三月廿七日　訪　問　　高橋　眞雄
三月廿七日　御氣嫌伺ヒ　歩三留守隊　　工藤　達之
三月廿七日　歸　還　軍醫少尉　　佐藤　壽郎
三月廿七日　訪問　近騎、軍醫中尉　　道躰　祐二郎
三月廿七日　訪　問　　菊池　龍介
三月廿七日　訪　問　軍醫中尉　　傳田　俊男
三月廿七日　上京訪問　　中山　一郎
三月廿八日　上京訪問　　林　利治
三月卅一日　上京訪問　　柳　壯一
三月卅一日　訪　問　　成松　清敏
四月四日　上京訪問　　佐藤　太平
四月四日　訪　問　　相見　三郎
四月十日　教育上上京　　城　俊輔
四月十日　訪　問　　犬養　六郎
四月十一日　訪　問　　橋本　文吾
四月十一日　挨　拶　　中澤　恒三良
四月十三日　乞　暇　　木村　知孝

四月十五日　拜　訪　　望月　宗吉
四月廿八日　應召乞暇　理學科　野口　好之
四月廿八日　應召乞暇　　西　新助
四月廿八日　應召乞暇　　山口　恒造
四月廿八日　際入營乞御暇　大久保崎夫、石田堅一、高田孝
五月一日　手術見學　　山田　銀男
五月二日　際出征乞御暇　　傳田　俊男
五月三日　際入營乞御暇　　內藤　敏德
五月五日　際入營乞御暇　　武藤　敏文
五月五日　滿鐵入社御暇乞　　玉村　英昭
五月九日　滿拓鐵驛訓練所出張乞暇　　松浦　元
五月十八日　渡滿乞御暇　　田邊　重信
五月十八日　御挨拶　　桑野鐵四郎
五月廿四日　訪　問　　木本　多喜雄
六月一日　京都府立醫大外科　　河村　謙二
六月三日　訪問　ハルビン石井部隊　　小林　榮三
六月七日　祝開局記念日
大庭國紀、篠原靜夫、中村廣人、野崎寛三、森文雄

犬養六郎、大槻正路、齋藤脩二、林利治

六月十三日　內地歸還　照井侃

六月十五日　慈惠病理　手嶋金次郎

六月廿八日　訪問　重盛福七郎

六月三十日　出征　森山成一

七月廿四日　出征　武藤敏文

七月卅一日　渡支挨拶　林利治

八月十二日　見學　陳維東

八月廿三日　訪問　菅千里

九月六日　訪問　田中周吉

九月十一日　上京　小方則太郎

九月十二日　內地歸還　渡邊重男

九月廿七日　訪問　井上太郎

九月廿九日　御挨拶　在神戸　村江則忠

十一月三日　訪問　今井光

十一月十一日　渡支挨拶　田中周吉

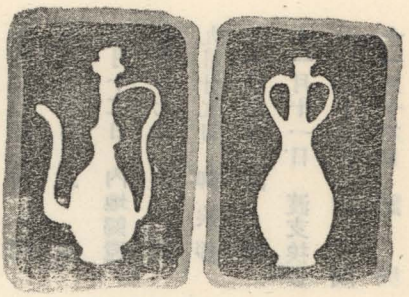
十一月十三日　訪問　三橋弘

十一月十六日　訪問　佐藤憲一

十一月廿八日　訪問　中村次郎

十一月廿八日　訪問　橫山虎雄

十二月八日　召集解除挨拶　中弓創



新人紹介

高田　孝君

秋田の出身丈けあつて、酒は新人中群を抜いてゐる。獨特のアクセントで地酒の旨味を語る破顔は、之も酒の爲か大變凉しい髪と共に印象的である。但し醫局には頭の薄い方では先輩多士齊々だから心配はない。

頭髪とは反比例して、中味は仲々良いし、それに勉强家だ。それでゐて話せる男だ。元氣がいゝから短現になつても大いに頑張つてゐるだらう。

相馬　順　三君

少し眼尻が吊り上つてゐて、飲むときつとギゴチなく手を拍いて歌ふ。笑つても本當に嬉しさうに見えない。だが直情な男で、登山が道樂、スキーも玄人裸足だ。歡迎旅行直後、アッペになつて、部長先生に手術をして頂いた。その爲入營が少し遲れたが、現在は金澤で活躍してゐる。

武藤　敏　文君

軍人には打つてつけの男。誰かゞ軍醫にして置くのは、もつたいないと云つた。それ程堅造である。歡迎旅行で女につかまり、眞青になつて震へ乍ら逃げて來たのは此男だ。今や軍醫中尉として大陸に活躍中だが歸る迄は童貞保證の限りでない。好漢自重せよ。

內藤敏德君

不思議に敏の字が續くが、兄弟ではない。この男は學生時代アルバム委員丈けあつて寫眞に明るい。又機械いぢりが好きだから、あれ程ひどく壊れてゐた別館醫局のラヂオをチョコ〳〵となほして了つたのにはあきれた。それ以來細菌の加藤さんにつかまり再三再四遠心沈澱器の修繕を賴まれたが、「日に二百回も廻はしたり停めたりされたんぢや、どんな名醫だつて駄目だ」といつて、だまつて倉庫の中へ放り込んで了つたといふ。軍醫中尉。

大久保崎夫君

少し小型だが、體格はがつちりしてゐる。悼名を棟梁といふ。飲めば必ず醉ふし、醉へばきつと藝を出す。人の好い事無類で、凡そ敵がない。スポーツはラグビーにソツカーをやつたが、仲々ファイトもあり、器用だ。之も軍醫中尉。

林　勝君

入局後一ヶ月にして下谷病院に出張して了つたので醫局には新人の酒豪がないと、仁ちやんをして三嘆せしめた。秋には、舊姓竹內から林となつて近い中にお芽出度といふ寸法、外柔內剛で世故に長じ、やる時には大いにやる男だ。正月に入營するさうだ。

石田堅一君

人呼んで石堅といふ。成程名前は堅いが、千惠藏ばりのやさ男だからおかしい、宴會では勿論大いにもてる。國策に副つて幼馴染の愛妻との間にもう二人の赤ん坊がゐる。ヘルツもどうして仲々强い。浪花節も上手く、頭も良い。之で、今一段のファイトがあれば鬼に金棒であらう。目下軍醫中尉として北滿第一線に居るが、この意味で大いに期待される。

瀧本昇君

秀才である上に、上原謙以上のスマート・ボーイだから、この男と一緒に飲んで、わりかんでは大損であ

る。警友病院出張中には、何でも「タキモト先生〳〵」で大變なもんだつたさうな。そこいらにゐる秀才とは違ひ、遊ぶ時にはあく迄遊ぶ。今海軍中尉となつて南の方に行つたらしい。

横畠徳雄君

鼻である。實に鼻である。おゝ偉大なる鼻よ。しかし心臓は決して鼻程強くなく、人の好い事も隨一。仲々の努力家で、權ちやんと共に新人中一番永く醫局に於て殆んど萬直をやり、壊れやしないかと皆をハラ〳〵させた。全く方々から御座敷がかゝつて席のあたゝまるを知らず、十一月、豫備員で入營する迄實によく働いた。どなたかいゝお嫁さんをさがして下さい!!

淺賀武夫君

整形に入つた唯一の新人。左利きの投手で、弓もやるし、鐵砲は特技中の特技だ。鐵砲といつても鳥打ちではなく、射撃の方で、年々神宮競技でメダルを持つて來る。一體に懲り性だから、何をやつても相當な所迄行く。ヘルツは新人中第一だが、甚だ寡言直情。酒も可成りいくし、醉えば別人の様によく騒ぐ。目下横畠君と共に豫備員に行つてゐる。

權守斗夫君

「胸毛の權さん」と云へば、其名は全慶應に轟いて誰知らぬ者は居ない。歡迎旅行の時、高座に出て、此堂々たる胸毛を御開帳に及ぶや「アレー」と女の子が眞赤になつて飛んで來た。目下出征中の權守英夫君の令弟である。眼光炯々として闘羽の再來を思はしめるが、會つて話してみると又之程オトナシイ男はない。全く人は見掛によらぬ物だ。此溫厚君子は、これで長距離界の花形で、一頃は驛傳の選手として鳴らした。又仲々の努力家でよく勉強する。目下大連の牛久先輩の所へ出張してゐる。

花岡正人君

自稱スマート・ボーイ。スマートといつても二十貫以上の堂々たる押し出しは、正に院長格である。そ、れで居て案外内氣な男だから不思議である。學生時代は豪球投手として相當やつたが、女房を貰つてからは爭はれないもので、どうもフオーアボールが多くなつた。

目下警友病院出張中である。

佐藤武君

滿州國大人といつた風采だ。堂々體重十八貫の大兵。昭和十一年日本醫大を卒業してから軍醫中尉となり永らく中支方面に轉戰して來た。廬山の戰鬪に名譽の負傷をして内地に還送され、本年九月召集を解除せられた勇士である。「頭も禿げ上つて一見年寄りに見えるかも知れないが、未だネクタイの結び方も良く解らないんです」とは御當人の辯、どうぞよろしく。

醫局近況追加

鶴見好文君　十二月三日　法醫學教室より入局す

佐藤壽郎君　十二月七日　細菌學教室へ轉科す

志田きく君　十二月十二日　南一階病棟主任より隔離病棟婦長に轉ず

小平正君　十二月五日　醫局及同窓會會計係に就任

修善寺歡迎旅行記

H K 生

新人も舊人も渾然と一つになつて心を觸れ合ひ歡を盡し明くれば新人も醫局員としての落着きと誇を得る歡迎旅行は醫局の樂しい年中行事の一つで二月、入局學生の見學の頃から、まだ嘴の黄色い二年子は近郊のあれこれを物色して伊豆の修善寺ときまりました。

四月十五日(土)、東京はまだ櫻に少し早いと言ふ寒さ。時節柄内輪にさゝやかにと車内もハイボールに海苔卷。伊豆は櫻の滿開で木炭自動車の窓から見る菜の花の黄色も目新らしく急に開けた春に皆日頃の緊張もとけてゆつたりと自然の懷にいだかれました。

宿仲田屋は桂川に臨み河鹿の聲溪流の響は都塵を拂ふに充分なところ。

一風呂浴びて三々五々散歩に出で名物生椎茸ガンピの細工物などひやかしたり、偵察をしたり、名の知られた

土地だけに先達も多き由にて氣强き限りでした。

歡迎の宴は例によつて例の如く土地の先輩の御來會も賑はしく渡邊治生先輩の情味溢るゝ歡迎の辭があり宴に入りました、春宵宴酣となれば先輩も後輩も舊人も新人も一つになり語り談じ唄ひ踊り終には床の間の生花が疊に生へ置物の大黑樣が座敷に浮かれ出すにがやかさ。然し思ひは同じ先生の御健勝を祝し醫局の彌榮を希ふ心で一ぱいです。

午後九時宴を終つて後は皆夜櫻を尋ねて外出し殘るは幹事ばかり。

明けて十六日皆元氣一ぱい起き出で賑やかな朝食の後解散し、川奈へハイキングに向ふ人あり、伊東へ越す人あり、花蟲の空は足にまかせて歩くに絶好でした。

* * * * * * * *

當直日誌より

昭和十三年

十二月四日　木枯らしや烏天狗の數をまし

十二月六日　門橋君母堂御逝去。謹んで哀悼す。

十二月十二日　祝論文通過!!

森　文雄君

大岡　保司君

堀田善二郎君

十二月十三日　吉野史朗君歸國さる、

十二月十九日　祝論文通過!!

井手　行乎君

大塚　廣君

十二月廿二日　醫局にて「スキ燒」(會費一口五十錢)流行す。

十二月廿三日　外科集談會、久保君安齊君百溪講師木村教授出演さる。雨を冒して醫局員一同ワッショ〳〵と出掛ける。當直子は淋しさうに密柑を食べて、ストーブを圍み、滿洲の珍談?を語り聽く。

十二月廿七日　年の暮ともなれば醫局は御馳走の山。當直するなら暮に限る。

十二月廿九日　同仁會第二診療班歸へる。瀨尾班長、小平君元氣に慶應醫學の爲め奮鬪せられたる事を醫局員一同感謝し、兩君の御健康を祝す。

十二月卅一日　聖戰二年、武漢三鎭も陷ちて、勝者敗者萬感交々到る內に年は暮れてゆく。ゴーン。其の時本年最後のアッペにして明年度最初のアッペ來る。加刀昭和十四年一月一日午前零時二十五分!!

昭和十四年

一月　元旦　謹しみて聖壽の萬歲を祈り奉る、皇軍戰士の武運長久を祈る。

午前十時より、例年の如く新年宴會、福引大會あり。

日本醫學は茂木になびく（菜と魚籠）（福引より）

一月　四日　近衞內閣總辭職す。醫局はビール山積す。

一月十二日　春場所大相撲初日。

一月十四日　茂木先生謝恩會、歌舞伎座觀劇並に宴會あり、盛會裡に午後十時散會。

一月十五日　双葉山が六十九勝で敗れた。安藝ノ海大手柄の日。許君結婚さる。御芽出度う。

一月二十日　堀越君アッペにて入院、木村教授御執刀。

一月二十一日　祝名倉令夫人御安產。（別館）

一月卅一日　抄讀會。

二月　一日　醫局茶話會、各役員交代す。

二月　八日　西君アッペにて入院、町田先生御執刀。整形にアッペ流行の徵あり。今度は誰だ。

二月　九日　「い」號から「ち」號上まで滿員。但大入袋は出ない。

二月十三日　祝橋本文吾、八木勝郎君論文通過。

二月十八日　於別館職員食堂、瀨尾、小平兩君歡迎會開催。慶應出發以來の實況映寫等あり盛會であつた。

二月　廿日　野崎講師次男坊御安產。

松浦勇四郎中尉公務出張の爲上京の途次來訪。御苦勞樣。今夜から當直四人となり賑か。

二月二十七日　野崎君整形を辭任され、大久保病院整形外科部長として赴任さる。

三月　三日　午後十時半佐藤壽郎君凱旋品川驛通過。森田君次男御安產御芽出度う。

三月十二日　中村廣人君アッペにて入院、町田先生御執刀。

三月十三日　祝野崎君論文通過。小泉君講師昇格。於幸樂兩君祝賀會あり。

三月十九日　高和君結婚。御芽出度う。

三月廿二日　ろ號入院の杉村大使容態依然惡く部長連夜當直せらる。

四月　三日　同窓會總會を幸樂に於て開催。出席者六十二名大陸に多數の會員を送つてゐる爲、出席者は昨年よりも減じたが至つて盛會。武運長久と醫局隆盛を祈つて乾盃す。

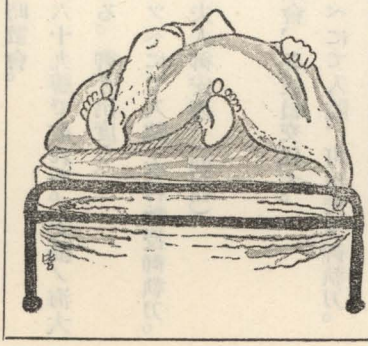
四月十二日　新舊醫局員對抗野球試合あり。新人元氣物凄く十三對七にて勝つ。

四月十三日　木村知好君錦州滿鐵醫院赴任の爲、於醫局送別會開催す、午後九時半東京驛發。篠原病院出火。

四月十四日　謹悼　藤原先生御母堂御逝去。

當直室有感

孤房獨睡床爲伴
單身覺起帳作帆



四月十五日　新人歡迎旅行に修善寺へ一泊旅行す。

四月十七日　川上弘君出征。

四月二十四日　謹悼　名倉厚君嚴父御逝去。

四月二十七日　遠山君出征。醫局擴張落成。引越そばを

戴く。

四月二十八日　祝新人　内藤、武藤、石田、高田、大久保、相馬君入營。

祝山口恒造君、西新助君應召。

於醫局盛大なる壯行會あり。木村先生御發聲にて、武運長久萬歲三唱す。

五月十三日　謹悼　町田先生御母堂御逝去。

五月十八日　田邊君出征につき醫局に挨拶に來訪。

五月二十四日　醫學部長より、臨時特別慰勞金頂戴す。醫局にては愛國公債を購入。

五月二十七日　武藤藤太郎君嘉昌と改名披露のため醫局にビール寄贈あり。

六月　三日　早慶第一回戰5A—0にて大勝。

六月　四日　同第二回戰は高塚投手悲痛の大暴投にて4A—3にて惜敗。

六月　五日　5—4にて涙を飲む。

六月　七日　午後六時より開局第十九週年記念と、醫局擴張祝賀の爲、於醫局四十四名出席大祝賀會あり。部長、木村、前田先生の後犬養、篠原先輩等の御演說あり、終りに瀨尾君珍藏になる、「思出の映畫集」を映寫。酒肴も澤山あり久し振りに大盛況であつた。

六月十七日　藤原工業大學誕生し、我が醫局より日吉へ瀨尾、久保兩君來賓として出席す。

六月十九日　祝河內野弘德、富田勝郎君論文通過。

六月廿三日　於醫局・瀧本君(入營)、植草君(海南島)櫛田君(ハイラル)三君の壯行會を開催。

六月廿五日　慶應夏季醫療奉仕隊指導者として植草君勇躍海南島へ出發。

六月廿六日　祝森山成一君應召。祈武運長久。

七月　一日　興亞勤勞青年奉仕隊別働隊醫務班長といふ、とてつもない長い肩書をもらつて、チョビ髭をつけた櫛田敏也君勇躍滿洲へ出發。

七月　七日　支那事變勃發二周年記念日に當り、醫局でも正午を期して默禱一分間の後、握飯を食ふ。あとで三階に行く樣な不心得の者は一人も居らず。

七月　九日　富士山救護始まり、先發茂木君夜行で出

發。

七月　十日　今年は醫局員激減の爲、暑中休暇は一名二十日宛三班に分れて取る事になり、「全部休まない人には特別考慮」と掲示が出る。

七月十二日　柳先生御母堂御逝去。謹しみて弔す。

七月十八日　今日から二十二日迄防空演習。警備副班長前田教授、救護班長木村教授以下夫々役目分擔、二十日からは本格的病棟救護演習等も行はれ、いづれも順調平靜に任務遂行する。

七月廿四日　新人武藤君北支へ出征。

七月廿八日　依田君北支へ赴任。

七月　卅日　新人石田君、內藤君滿洲へ赴任。

八月　一日　長屋君某地へ出征。

共に祈武運長久ならんことを。

今夏からは醫局も少いので、三年の特志家學生も混つて、三人で當直する事になる、ハウプトは病棟を皆廻るためにヘト〳〵なり。

八月　九日　井手行平君於帝國ホテル華燭の典を擧げらる。御芽出度う。

八月十三日　岩原、橋本、道躰三軍醫、加藤銀君來訪あり歡談す。但しビールは大拂底のため大困り。

八月十四日　根本一郎君、兵庫濟生會病院(神戸)に赴任のため於醫局送別會。午後九時東京驛發。祈御健康。

八月十五日　整形堀越君、鹽原の傷兵保護院へ出張決定。

題暑夜

當直者在當直室
鼻出提灯枕頭濕
有所要訪者乃驚
鼾聲如雷現逸物

八月廿三日　若林研爾君日赤病院船に乘込む事となり午前十時半東京驛發。

茂木先生午後三時東京驛發にて九月二—四日於ハルピン滿洲醫學會、六—八日於北京中華民國醫學會へ御出席の爲令孃御同伴にて渡滿せらる。御無事を祈る。

八月　卅日　若林君、突如召集令來り九月三日善通寺騎、十一入隊の由電報來り一同驚く。

九月　一日　興亞奉公日兼震災記念日のため、正午を期して於醫局默禱の後、握飯を食ひ、徵集金員を陸軍省へ献金することになる。

九月　二日　リーグ戰開始、今年よりトリプル・ヘッターである。先ずK3—T2・R3—M0・W10—H3で幸先よし。歐洲大動亂を他所に信濃町驛は大混雜を呈す。

九月　三日　英國宣戰布告。しかしリーグ戰ではW8A—H7の十一回延長戰である。

九月　四日　若林君「勇躍征途につく」の電報來る。

祈武運長久。

九月　七日　植草實君、海南島より椰子の實を抱えて凱旋。元氣なれども、色餘り黑からず。

九月十二日　整形渡邊重男中尉凱旋す。暫らく歸省靜養の由。御苦勞樣。

九月十六日　今日は別館に、明日は本館に、燈火管制行はれる事になる。

九月十八日　祝山口恒造君論文通過。

九月　廿日　神經科助手塚田安男中尉(十六回生)ノモンハンにて名譽の戰死の由發表せらる。謹しみて弔す。

九月廿一日　茂木部長、午後九時東京驛着にて御元氣に歸京せらる。

堀田善二郎君應召。佐倉步五七入隊。即日歸鄉となる。

九月廿三日　茂木部長邸に醫局員一同御招待あり。色々大陸の御土產話を拜聽し乍ら、大變御馳走になる。

當直氏にも御馳走屆く。

九月廿七日　部長より、暑中精勵の慰勞として金一封頂戴す。

九月　卅日　渡滿中の櫛田君元氣で歸る。「おいよく見

たか」といつて、醫局で髭を剃る。

十月　三日　佐賀縣の某狂女から物凄い手紙舞込む。外科醫局大先生樣として「先生三千圓紛失の覺え御座無く候や」に一同ダー。

十月　五日　別館には未だ藪蚊が居ます。

松浦元君休暇を得て滿洲鐵驪より歸京。醫局へ酒肴を寄贈。

十月　六日　北里圖書館講堂に於て、大陸報告會あり。今夏大陸へ視察旅行の諸先生、學生の大報告會にして外科よりも、部長、櫛田君の講演あり、大陸への關心益々高き秋、仲々の盛會であつた。

十月　七日　K4—R3で愈々早慶戰に秋の覇をかける事になる。

十月十二日　早慶戰野球切符分配。

早慶野球決勝戰でデットボールから可成り永くタイムとなる。犬養先生盛んに、ヤキモキの圖

物資愛護の爲、「特診患者にして、翌朝迄手術を延期し得ると認めらるゝ場合には、夜間十二時以後は手術せぬ樣」との御達しあり。實際最近は圓タクもなく、石炭も少し。多いのは手術許りなり。

十月十三日　午後四時より抄讀會あり。後、植草(海南島)、櫛田、松浦(滿洲)、齋藤(滿支)四君の大陸土產話あり。齋藤君傑作の十六ミリ大陸映畫も映寫す。久し振りにビール、壽司澤山出て、極めて盛會であつた。

十月十四日　對小兒科野球戰、乍殘念、11—1で大敗を喫す。猛者揃ひの昔懷かし、メンバー別記。

十月廿日　天皇陛下靖國神社行幸遊ばさる。午前十時十五分を期して、サイレン鳴り渡り一同默禱を捧ぐ。

十月廿一日　早慶決勝戰2—0で七年振りに優勝す。

十月廿三日　四條龍作氏より凱旋の御土產あり。

佐藤　武君（昭和十一年日本醫大卒）新入局。よろしく。

十月廿四日　今日から一週間防空演習に入る。何處もかも暗し。憂鬱。病院廊下の壁塗り替へ始まり、暗いのでぶつかつては白衣よごれる。

十月廿九日　防空演習續行。今夕七時、於醫局偶然北島先生と高和君との圍碁あり。七目置いた高和君だつたが、十數目の勝に大滿悅。先生「フフ、、、仲々つよい」。

十月　卅日　今日から神宮競技。救護も多方面で仲々多忙。

十一月三日　菊の佳節。今井光君上京來訪あり。「爛漫」にて乾盃。神宮大會最終日の今日、早慶野球戰は2—4で奇しくも決戰と同スコーアで惜敗。

十一月五日　上野精養軒に於て、北島先生古稀壽祝賀會あり。茂木先生の爆彈祝辭もあり。盛會であつた。

十一月九日　茂木部長次女慶子樣若尾氏と華燭の典を擧げらる。御祝品として、醫局よりハンドバツク、同窓會より頸飾を贈呈す。

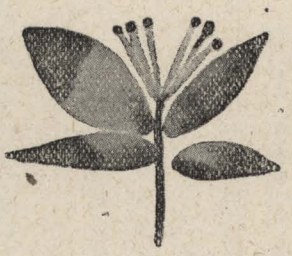
十一月十三日　祝小泉次郎君論文通過。

三四會醫局對抗リレーに外料優勝し、醫局に於て乾盃後、「喜仙」にて大祝賀會あり。（別稿あり）新人權守君、大連へ六ケ月出張の爲出發、これで醫局に新人一人も居なくなる。

十一月十六日　瀧本海軍軍醫中尉北支へ出征。

北里圖書館講堂に於て、新社頭福澤八十吉先生引見式あり。午後四時半より於醫局抄讀會あり。後ビール。此頃又、圍碁、將棋仲々盛んなり。

十一月廿一日　於醫局圍碁、將棋名人決定戰あり。名人植草君、準名人小平君となる。



綴方教室

ハイキング

岡品男

或秋晴れの日曜日のことだつた。

僕等は朝から（淺賀）ハイキングに出かけた。

家の前のこんもり（權守）した林の前に集つた。やがて畠の横（横畠）の小道を歌つたり、キャラメルを食べたりしながら、賑かに進んだ。森の中へ（中井）這入つたり、小川の高い橋（高橋）を渡つたりした。路傍の鈴なりになつた、柿の實を、爭つて、もぎ（茂木）取つて見たら澁柿だつたので大笑ひをした。「左手に見ゆるは將棋（將義）で名高き村（木村）なり」などと讀本の眞似をしたり、元氣一杯だ。古沼の傍の路は、先日の嵐で崩れかゝつて居るのでこは〳〵（高和）通つたが、却々の苦心だつた（櫛田）、一歩毎に窪み（久保）に足を取られそうだ。早く何か草を植れば（植草）いゝのにと、話し合つた。前方に見えて來たのが狸の居る森だ（森田）。

伊志河（石川）と云ふ川の川向ふに、鍋の蓋を、安產（安齋）のお守りと云つて呉れるお宮があると一人が、云ひ出した。そのそばの大きな藏一（名倉）はそのお賽錢で建つたのだと云ふ。御利益を頂いた人は、わざ〳〵割つた鍋蓋

（渡邊）を、奉納するんだそうだ。他の一人が、「それはほんとうか」と云つたら「さ、どうだか（佐藤）よくは知らない」と知つたかぶりが云つた。皆から「嘘を云へ（鵜澤）」と云はれて小さくなつた。

道は急にけわしくなつて來た。軍歌で元氣をつけて、頑張つた、大汗をかいた頃小さな平らな（小平）所で、一と休みした。大分昇つたので、急に見晴しがよくなつた。海が見えて、細長い笹島が見えた。小さな泉（小泉）を見つけて嬉しかつた。藪があるので皆んなブト（武藤）に刺された。痒い〳〵。僕は裸になつたので背を（瀨尾）やられた。自分（治生—渡邊）には氣がつかない內に皆やられて居た。肘から（土方）股（百溪）や腹（藤原）もやられた人も居た。

ボリ〳〵搔きながら峠へ向つた。峠の足元に見える屋根は中學校のある町だ（町田）、下りだから速いのは當りまへだ（前田）町の次の木村を通り拔ければ、もう、茂木山の麓だ。

とても早く來たものだと思つた、だが速いわけだ、現在醫局にはこれ丈しか、お醫者さんが居ないんだもの。符諜（婦長）で、先生方の名前を書いたり致しまして、誠に申しわけ御座居ません、惡しからず御了承の程願ひ上げます。

當直の晩ボンヤリと醫局の名札を眺めて居たら、こんな瘋癲な綴方が出來ました、—何しろ綴方の世の中ですからね、まつたくの話が。ハイ御退屈さま。

川柳漫畫

刀林編輯部選

片袖を入れて
廻診追っかける

お日様もしかめつらする
池の前

お結びをじっと
睨んで默禱し

豫備員の
胸は電話で
高く鳴り

齒ぎしりに
プレは一先づ
引返し

ヘルニヤの兒は
クリームパン一つ吳れ

運動救護

富士山救護たより

まへがき

今年は富士山救護陣も、未曾有の受難時代を現出し毎年颯爽として富士山に出掛けて行く健脚新人群が、今年は春の短期軍醫志願入營のために、殆んど醫局に居なくなつた爲に、十週間の救護に新人四人といふみじめさである。それで新人淺賀君が御殿場口へ、櫨守、横畠、花岡君が吉田口へ、救護二度目の茂木君も吉田口へ應援し、皆二週間宛といふ頑張り方で、不足分は内科の人にも賴み、何とか責任を果した。

和光では老夫婦尙健在、昔鳴らしたおきんちやんは既にお嫁に行き三人の母親となり、今年は二女茂ちやんが來てゐた。三女梅ちやんは吉田郵便局で交換手をしてゐる。二男武さんと末つ子弘ちやんが手傳つてゐる。

十年一日の如き、池谷さんの御親切には感謝の言葉がない。

食物の話

□「食物の話から始めようよ」

△「俺は丁度暇な時にぶつかつたから、一日二食位にして、時々チビリ〳〵やり、よく寢たよ。八合目はやつぱりチキンライスが一番旨かつたね」

□「僕の登つたのは七月十日で、未だ八合目は山開きをした許りで、何も食ひ物がなくて弱つた。毎日「おぢや」許り食つてた。腹の調子はいやに良かつたが、相當なもんだつたよ。然し戰地の兵隊さの事んを思へば贅澤もいへないと思つて我慢した」

×「八合目ぢや夜明二時頃になると、もうがや〳〵登つて來て、全くうるさかつたね。ホテルの番頭が盛んに甘酒を宣傳してゐたよ。その口上が愉快だ『サア三國一の甘酒を飲んでいらつしやい』てんだ」

○「『三國』一はよかつたね」

△「八合目ぢや郵便局の人が味噌を持つてたので、僕は胡瓜をその中へぶちこんどいて、一晩たつてから食つて見たんだ。旨かつたぞ」

○「俺は若目やするめを持つて行つたんだ。味噌汁をこしらへてね。煮立つた頃、若目をいゝ加減にちぎつて入れたんだ。それから飯も出來たし、いざ食はうと思て味噌汁の鍋を開けたらアツと驚いた」

×「どうしたんだ」

○「どうも、こうもあるもんか、若目の奴が味噌汁の中で、べら棒に伸びちやいやがつてね、掌程の奴が出て來やがつたには參つたよ」

×「馬鹿だなー」(笑聲)

△「山ぢや罐詰はまづいね。僕は牛罐等食つた事はなかつた」

○「罐詰は、やはり果物がうまかつたね。パイナップルや梨が。……和光ぢやどういふもんか、よく密柑の罐詰を出したね」

△「下谷の看護婦が登つて來て、黄色い瓜を呉れたが、とても旨かつた」

×「さうか、殘念」

○「俺はスルメを澤山持つて行つたが、八合目ぢや郵便局と相談して、一日一枚主義で食ふ事にしてたよ」

×「郵便局は今年から若い人が來たね。今迄來てゐた藤井の爺さん、あの人の息子が航空曹長とかで、戰死した爲に今年から登らない事になつたのだとさ。」

□「二十年登山に今一息だといつてゐたから、御當人も感慨無量だつたらう」

×「今年の新田といふ青年、仲々氣がきいてい〻人だつたね。僕は切手賣りも手傳つてやつたが、ブレも大分やつて貰つた」

△「あの次に來た渡邊といふ人は、汚い小倉の詰襟を着

て、ほんとに田舍者の風采だつたが、二、三日したら出征して了つたよ」

○「和光ぢやヒヨコを澤山飼つてゐて夫れを救護の先生が來る度に一羽宛つぶして御馳走して呉れるがその考へは仲々上出來だが、餘り氣持のいゝもんぢやないね」

×「いづれ此奴等は腹の中へ入るんだと思ふと、エサをやるのにも一寸いやな氣持がしたよ」

△「僕の行つた頃は、もう七、八羽しか居らず、今日は鷄をつぶさう、明日はつぶさうといひ乍ら胸算定があるので、仲々つぶして呉れず、朝から晩迄卵攻めにあつたには參つたよ。毎日全く同じ筆法で煮るんだからやり切れない。然し僕の行つた頃は君達先人達の餘德で、時々嘗ての山のクランケから禮狀と一緒に、菓子などを送つて來たが、これは皆默つて頂戴したつけ」

今年のトピツク

×「今年のトピツクは何だらうか」

□「先づ山火事だらう。凄かつたぞ。七月十一日の眞晝間のこと、僕と巡査が七合五勺あたり迄登つて行くと下の方で「オーイ、オーイ」と呼ぶ聲がして、蒙々と山舍から白い煙が出てゐるので、あわてゝ下りて行つた。六合九勺あたりで、未だ山開きをした許りの山舍で、七十位のヨボ〳〵爺さんが、雨漏りをなほしに屋根に上つてゐる間に、爐の火が莚から天井に積み重ねあつてた薪に燃え移つたのだからたまらない。たちまちボーツと燃え上つて「火事だ〳〵」とさわぎ出した時にはもう手も足も出なかつた。爺さんは腰を拔してへたばつて了ふし、消さうにも山のことで水は一滴もなく皆石を投げつけてゐたが、三十坪程の山舍は眞紅な焰を吹き上げて、物凄い勢で燃えて了つた。山小屋の火事は始めてださうだが、何しろ消すに水氣のない火事といふのは始めて見た。その中石油罐に火が入つたらしく、轟然たる爆音と共に爆發した。この音は山の下迄も聞こえたさうだ」

△「少し馬鹿〳〵しい話をすれば、和光の武さんが動力のない機械の話をしてゐた。何しろ石炭もガソリンも使はないで、神がかりでモーターが動くといふんだ。いくら俺が『そんな馬鹿なことはない』といても相手にしないで盛んに『空中電氣を應用するんだ』とか、『物理の本は今に書きかへられる』とかいつてすまし

てゐた。すこし『これ』らしい所もあつた」

×「僕のいつた時もその話をしてゐた。『陸軍省でもそれを戰車に使はうとしてゐる』とか『飛行機に使はう』とかいつてゐるといふ。丁度その時、その機械といふのを持つて來てね、木製の稻こぎの樣な代物で、それを一々神主さんが、神樣にうかゞひ立て乍ら組立てるといつてゐた」

△「和光に祀つてある天光社に髯を生した神主と、官女みたいな風をした女が來て『先生々々』といふんで、俺を呼んでゐるのかと思ふと、さうぢやなく神主のことで少々腐つた。講社の連中が來ると、六時になつても七時になつても飯にありつけず、サービスが俄然惡くなり、ひどい目に會つた」

○「今年は去年の三倍も登つたさうだね」

□「七月十五日、日曜とお盆の重なつた日は、本當の話山が崩れる位に登つた。小御岳入口の所から頂上を見上げると文字通り、ずーつと白い糸を引いた樣に登山者がつながり、夜は又懐中電燈や提燈の灯が馬返しから頂上迄びつしりつながつて、警察ぢやもう登つても泊る所がないからといつて、夜中の登山者を制限したさうだが、翌朝になると、あれ丈け登つた人がもうすつかり下山して至つて閑散になつてゐる。兎に角あれで、突當りの所へ押しかけたとしたら、富士山だつてぺちやんこになつたかも知れない位大勢登つた」

×「人死にもあつたさうぢやないか」

□「僕は都合三人死亡診斷書を書いたよ。心臓麻痺二人腦溢血一人、あんなに登られたんぢや、いくら救護だつてたまるものか。一ぺんなんか巡査と一緒に朝早く下山して來たら、登山道に犬ころの樣に死んでた。一人の旅の爺さんだつたが、わざ〳〵富士山迄ステリに來た樣なものだ。一度死ぬと山の人は不淨を極度に嫌ふから決して擔いで降りない。その時もその爺さん七十圓餘り持つてゐたので、それを全部出して巡査が强制的に道路人夫の男に擔いで降さした」

○「强力仲間ぢや、一度そういふのを擔ぐと五日も十日も休まなければ、身體が汚れて病氣になるといふ事に

なつてゐて、若しその翌日にでも登つて來ようものなら、皆が袋だたきにするんだつてさ」

△「盆や日曜などの混む時には、五合と八合に二人丈けぢや、とても手が足りない。何しろ往診するにしたつて立體的だからね。僕は四年の學生にでも手傳つて貰ふと良いと思ふが……」

×「救護所は今の設計では駄目だ。ありや建直した方がいゝ」

△「今年は『管轄違ひで遭難者見殺し』等といふ嘘つぱちのデマニュースが新聞に出たかと思ふと『山の仁術の主に擧げて感激—富士山救護所に美談—八合目救護所の若き醫學士が不眠不休の仁術に山小屋が深く感激してゐる』といふのも現はれ、相當ヂヤーナリズムも賑はつて面白かつたね」

○「世間の人は皆その通り信用するから、いゝ加減の事を書かれると實に迷惑するね」

□「△君は五合目に永く泊つてゐた年増の女行者に口說かれたといふが本當か？」

△「そりや嘘だよ」（一寸テレル）

×「しかしあの女、君の事を馬鹿に褒めてゐたぞ」

△「あいつは誰でも褒めるんだよ。實に變な奴で、又足が實に達者で、和光にゐる中に五、六回頂上へ登りやがつた。間もなく登らなくなつたから『どうして登らなくなつたんですか』と聞いたら『身體が汚れましたから』等と平氣で言ひやがつた。それから『先生黴毒は富士山の樣な高い所へ來なければ治るものぢやないと思ひます』なんて拔したので、すつかり御座がさめた」

○「五合目にゐた時、下から肉中毒のクランケが二人擔ぎ込まれて來た。プルスも可成り惡く、クランプが來て、自分で何もかも皆取つて了つて暴れ出した。巡査が誰か行つてさすつてやれといつたが、女共は皆恥しがつてモヂ〳〵して出て來ない。すると巡査が『誰か經驗のある人、來てさすつてやれ』といつたら、その女行者がイソ〳〵と出て來てさすり出した」

□「では此位で……」（凉々亭にて）

強剛を斥け

醫局對抗リレーに優勝

十一月十三日圖書館裏運動場に於て、三四會A級醫局對抗リレーあり、外科、內科、東校舍の順位にて、外科は又亦堂々優勝した。一着外科と二着內科は約百米といふ大差で、樂に優勝盃、ビール一打を獲得した。

此の日風寒く、醫局手不足の爲十名の走者を集めるのは仲々困難で、一時は棄權かと思はれたが、競技開始前キチ〳〵に人數が集つて來た。運動場は甚だ狹く、スタートすれば直ぐ急カーヴといふ物凄いトラックなのだが、既に經驗濟みなので、最早走者には自信滿々とした樣子が溢れ、寒いので外套をはおる者、スキーのウインドヂヤケツを着る者、遂には寢卷を持出す者迄現はれ、正に百鬼晝行（？）の形で大いに示威運動をやつた。

結局相手は舊競走部員の多い東校舍と思はれ、キヤツプテンの醫局長も專ら之に對抗して作戰を練つたが、三四會では既に外科を優勝候補と見做し、戰前選手一同の記念撮影を求める等我々の意氣益々あがつた。

角さんは　メンバー入れたり出したりし
安ナカは　此處にあるぞと　元氣附け

愈々第一路外科百溪君、第二路內科荻原君、第三路東校舍法醫齋藤君でスタートすると、案外、東校舍は直ぐに轉倒し、意外や內科トップを切り、百溪君之を拔かんとして懸命に追つたが及ばず、最後迄顎の下に前走者を置いてバトンタッチ。此時內科第二走者は棒立ちの儘バトンを受取つた爲、脫兎の如く飛出した外科石川君は、巧みに一瞬にして五米の差をつけてスタートし、ストレートにかゝるや力走又力走、內科稍鴨につけ入つて忽ち三十米の大差をつけて植草君へ……東校舍は小田、牛場等の猛者を揃へてゐるが最早や圈外に落ちた貌。植草君は身體を屈げて眞つしぐらに頑張れば、內科との差は增す許りである。之が爲後の走者は非常に樂になつたが、夫々意外の駿足と巧妙なるバトン連繫を示し、美事な力走振りを以つて、小平君悠々ゴールインした。唯このリレーに於て、對手の二者には屢々緩走者、轉倒者を出したので、我々の實力を眞實に試めすわけに行かなかつたのは甚だ殘念であつた。出場メンバー左の如し。

溪川草仁田保倉木守平
百石植渡邊櫛久千茂權小
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

丁度此の日、整形小泉君の論文通過あり。又新人權守君が明日大連に發つといふので、祝賀、送別會を銀座交詢社脇喜仙でやる事になり、ビールを飲み廻はした優勝カップを醫局に飾つて、久し振りに大擧出動となる。

喜仙に集つた面々、岩原、百溪、瀨尾君以下十六人大いにはめを外して、祝勝に醉ひ夜の更くるも知らず。

權さんは　前の日迄も　走らされ
祝勝會　愛國公債　賣りたがり
戰場に見せてやり度い笑顏

醫局對抗野球奮戰記

石川生

昔の醫局の野球記事を見ると、浦山しい程フンダンに練習やゲームをしてゐられますが、當今は人數が減つたのとボールを配給で買はねばならぬと云ふ樣な始末で、仲々野球愛好家を滿足させる程遊べなくなつてしまひました。それから入局早々の張切つた若い人が、皆兵隊に行つてしまふので、たまにやつてもスクレロチイツシュなゲームしか出來なくなりました。之れは外科ばかりで無く、各醫局共通の現象ですが、我々共も意氣は高く、量よりも質の野球を樂しんでゐます。

昭和十三年度の醫局對抗戰は、第一に內科と當りましたが、此の時は新入局員も澤山居り、練習も澤山やり、優勝候複と目されてゐたのに、我軍守備に破れてアツケない敗北を喫してしまひました。

對內科戰　昭和十三年九月廿二日病院グランド（八ー三負）

メムバー

	中	遊
	三投	投三
	二	二
	一	一
	左	左
	捕	捕
	右	右
1	石川	上田
2	根本	越口
3	星野	堀山
4	足助	依
5	高和	川
6	西	川
7	波邊仁	邊
8	川	上
9	依堀山	田越口

我軍安打七本、チーム打率二割四分一厘。

慰勞會は長野屋で大いに飲みました。

× ×

昭和十四年度は、好例の新入局員歡迎野球をやりました。全醫局員が一堂に會して遊ぶのは近來久し振りの事であるので、大層愉快でした。試合は打擊戰となり、新人の打棒は舊人を壓して快勝しました。

新人對O・B野球戰　昭和十四年四月十二日。

十三A—八　新人勝

メムバー

	新人		舊人	
一	三田	二捕・三一	平	二捕・三一
二	高本	左・三・投	小口	左・三・投
三	瀧岡	三・投・捕	山	三・投・捕
四	花賀	中	西	中
五	淺馬	捕	渡邊仁	捕
六	相保	遊	石川田(櫛)	遊
七	大久田	二	茂木橋(高)	二
八	石(武竹)藤内	右	小泉	右
九	内藤守(權)	投・左	百溪(中井)	投・左
	横畠	右	植草倉(名)	右

秋の醫局對抗は人的資源缺乏し、苦戰を覺悟はしてゐましたが、豫想外に好戰して、樂しい試合をしました。一次戰は小兒科でしたので、試合中如何なる出來事があつても、くさらぬ事を云ひ合はせたのでしたが、小兒科獨得の例の「エレキ」に我軍打棒振はず、チーム打率一割以下と云ふ負け方をしてしまひました。誠に殘念ですが、この「エレキ」に打勝つには、もつと精神的の何物かゞ加はらぬば駄目と思ひました。

醫局野球と云つても、結局ドングリの背競べですから、精神的團結の强い所が野球にも勝つ率が多いものと思はれます。我々は大いに考へて、次の機會には、先輩諸兄の御期待に添ひたいと思つて居ります。

對小兒科戰　昭和十四年十月十四日、病院グランド。

十一―一負

メムバー

	捕	三
	一	中
	投	二
	遊	左
	右	
1	石	川
2	瀧	本
3	花	岡
4	渡	邊仁
5	淺	賀
6	小	平
7	千	倉
8	高	橋
9	横（櫛）	畠（田）

醫局庭球リーグ戰記

外科の庭球も毎年慘敗の憂目に逢つて、昨年などは人員の不足から棄權する樣な轉落振りでした。今年もリーグ戰が始まると云ふのに、大外科たるもの今年も亦棄權ではみつともないと云ふので、あちこちから出張してゐる醫局員から兵隊さん迄總動員してメンバーを組む仕末でした。この聖戰下に手不足なのを無理算段して、猛練習數日間の後六月十五日小兒科と對戰することになりました。

敵は和泉、國岡、福島、田村、染谷氏等の古强兵に岡、小林、矢沼氏等の中堅所を揃へて、必勝の意氣物すごい許り。これに對する吾軍は若林、佐藤等の健在なるあり。宇佐美小平、渡邊氏等の中堅より千倉、高和、根本、高橋、瀧本の新進を配して苦心の作戰、强敵を一氣に擊破せんとしたが、戰吾に利あらず三對二を以て敗退す。

熱烈なる應援を深謝す。

外科		小兒科
（若林 宇佐美）	④―1	（小林 桃木）
（佐藤 千倉）	3―④	（岡 國岡）
（高和 根本）	1―④	（福島 田村）
（渡邊 高橋）	0―④	（和泉 染谷）
（小平 瀧本）	④―3	（矢沼 秋山）

外科山岳部誌

石川七郎

久しく山登りやスキーの記事が途絶へて居るので、最近の記錄を書いて置かうと思ひます。表題が凄い（?）ので何事ならんと思はれるでせうが、醫局員全部の誰でもが、氣の向いた時に出掛ける樣は、大昔の清遊會、濁遊會を想ひ出して頂けば宜しいのです。これからも大いに發展する積りですから、我と思はん方々の御參加をお願ひして置きます。

記錄

○昭和十三年度

一、新雪の谷川岳へ　一行　渡邊仁、石川、津留、依田。

十一月廿二日、夜行にて上野發。

廿三日、快晴。土合より西黑澤に入る。小屋場邊りより雪を踏む。マチガ澤との間の尾根に取附くと、行くべき谷川頂上は勿論、遠く朝日、笠、燧、日光白根等新雪に輝く山々が我々を迎へて呉れた。これより頂上迄のラツセルは、時に腰迄もぐる位で以外に時間を費した。頂上でノンビリ日向ボツコをして、歸へりは天神峠へ向つたが、峠を過ぎる頃から日が暮れて、一つしか持つて來なかつた懐中電燈を頼りに、やつと谷川溫泉に着くと、もう終列車に間に合はないと云ふので泊つてしまつた。

廿四日、昨日と違つてオジカ澤の頭に黑い雲がかゝつ

てゐる。邊りの秋色は既に晩く、冬を想はせて寒々としてゐた。晝汽車で歸京。

二、岩原スキー行　一行　渡邊仁、石川、安齋、津留、足助。

夜行日歸へりはつらい。と云ふので、安齋、石川は十二月十七日、午後の汽車で湯澤迄ゆき一泊。殘る三人は夜行に乘つたが、上野から高崎迄に一升壜をペロリ平らげて來る。

十八日、曇時々雪。一同揃つて岩原に向つたが、田舍道を間違へたりして、腹だけ減らしてしまひ、スキーは二時間位しかやれない。それに雪がベタ〳〵で、歸へり中里驛で石川と足助が一汽車遲れてしまつて、何しに來たか判らぬうちに東京へ歸へつてしまつた。

三、關溫泉より神奈山へ　一行　石川。

十二月廿日から廿七日迄、體育會山岳部スキー合宿に參加した時の記錄。

十二月廿四日、曇後吹雪。五時關溫泉發、馬の背で夜が明けた。妙高が近く美くしくせまつてくる。今冬はまだ降雪が少いので歩き良いが、ブツシュがひどい。クロフ小屋で朝食、それより一時間ばかり登つて、頂上から三本目の尾根の下をデポーとする。あとはワツパが快適に使へてすぐ頂上に着いた。吹雪いて來て何も見へないのですぐ下る。スキーを履けば下りの愉快さは言語に絶する。變化に富んだ尾根や、斜面の林間をブツ飛ばして忽ち宿に着いた。この吹雪はこれから二日間續いたのでラツセルがひどくなり、以後の登山は駄目となつた。

四、志賀高原より澁峠越え　一行　石川。

合宿の歸へり途、なるべく東京近く迄スキーで行かうと思つたので、粉雪の舞ふ志賀高原を訪れた。十二月廿七日、關溫泉發—關山より汽車、長野經由—湯田中—沓野の發哺藥師ノ湯の本宅へ寄つて晝食をすませ、ブラリ〳〵と登る。ドライヴウエイが出來て山は荒され、人は多くなつてゐる。

丸池の神津コツテイジに着いてから一滑りすると、豫

想通り雪は絶對の粉雪で、明日のツアーを樂しみにして寢る。

廿八日、雪。ヒュッテ八時半發、舊道を通つて澁峠に向ふと、處々澤山小屋が出來てゐる。熊の湯附近は大道になつて、殺風景な電柱が並んでゐる。ノゾキの小屋で食事をして横手山へ向ふと、吹雪がひどくなつたので頂上がどこか判らぬうちに下りになつてしまつた。碧い樣な粉雪を蹴散らして草津迄二時間、スキーの快味を滿喫してから、ゆつくり湯に浸る心地は何物にも替え難い。その日のうちに澁川經由で歸京する。

五、最上高湯より藏王山　一行　渡邊仁、安齋、石川植草、津留、他二人。

昭和十四年元旦、石川、津留先發にて夜行で發つ。上野驛の混雜言語に絶し、二人共別れ〳〵になつて山形迄ゆられて行つた。

二日。山形（七時）—バス—半郷—高湯（十一時）

午後練習に出たが吹雪强く、降雪未だ少く、人多く、あまり快適で無かつた。

三日、晴。コーボルトヒュッテ往復、此の邊りの美くしさは行つてみなければ判らない。宿に歸へると、渡邊安齋、植草が來てゐた。この三人も別々の汽車で來たと云ふ。

四日、晴。六時に張切つて起きて、全員で地藏岳に登る。朝日連峯や近くの山は見えたが、遠望は効かなかつた。高湯に戻つて練習をする。大いにモトを取つた日であつた。

五日。吹雪激しく寒いので、一寸出たきり炬燵でダベる。四時發つて歸途に就く。半郷迄の滑降は快適だ。山形で久し振りで美味しい夕食を食べ、雪の夜道をドライヴして上の山溫泉に一浴して夜行に乘つた。（詳細は藏王合宿記參照）

六、磐梯山、沼尻より土湯峠越え　一行　石川、德川。

一月廿七日、夜行にて上野發。

廿八日、晴時々粉雪。野口英世博士の生地、翁島に着くと、夜は將に明けんして、曉の寒氣は骨を刺す樣であ

つた。目指す磐梯は眞正面に、廣大な裾野を展開してゐて頂上附近には粉雪の舞ふのが見える。ダラ〳〵した登りを押立溫泉に向ふと、何だか淋しい樣な氣分がして來る。押立はわかし湯で、今頃は客も無く寒々とした氣分に滿ちてゐる。ぬるい湯に一浴して腹をこしらへると、磐梯目がけて出發した(十時)。廣い裾野をまつしぐらにデブリの重積した大きな澤を登る。猪苗代湖が鉛色に見えて來た。風が段々强くなつて、パン〳〵のクラストの廣野となり、頂上附近は眞黑な雲に閉されてしまつた。二時間程登つて八九〇米の平に達した頃は、眼も開けられぬ强風となつたので、頂上は斷念してシールを外した。下りはエッヂの無い僕のスキーが、クラストの上を風に流されて、斷涯から落ちさうになつたり、相當のスリルを味つてしまつた。宿に落付いてから、夕方の汽車で沼尻に向ひ、中の澤溫泉に一泊。

廿九日、晴時々粉雪。雪質が非常に良い。今日は土湯峠を越えて福島に出やうと云ふ譯で、九時に出た。横向溫泉迄は廣いドライヴウェイをゆくので、大したことはないが、登り乍ら安達太郎や鬼面山の樹氷の陽に輝いて美くしいのが望まれた。横向(十一時半)で晝食してから土湯峠への一里はすぐであつた。此處も强い風が吹いて、鬼面山の大岩壁は粉雪に霜んでゐた。土湯迄滑降二里、變化に富んだ羊腸たる山路を一氣に飛ばして土湯で一浴(三時)、更に自動車を飯坂溫泉に走らせて、またも一浴、福島から夜行で歸へつた。

七、草津白根より萬座溫泉へ　一行　石川、津留。

二月十日。午後の汽車で上野を發ち、澁川經由、草津に行つて一泊。寒い吹雪の日であつた。

十一日。斷然たる快晴となつて、昨日の雪で樹々の粧ひが朝陽に美くしい。八時半草津を發つてゆくと、汗ばむ位に暖かい。登るにつれて見える可き山々は皆まばゆひばかりに現はれてくる。いつも下るばかりで、登つたことの無い此の道を懷かしみ乍ら、十一時一寸過に芳ケ平小屋へ着く。此處から澁峠道に分れて白根の噴煙を眼指して登つてゆく。今年は降灰も少く、人氣の無い廣い

雪のスロープをゆく心持は格別である。頂上を右に見て鎌池のところから、栂やタンネの林間を萬座目掛けて滑り込んでゆく。今迄廣々とした處から樹間の傾面に移ると、山に來たしつとりとした氣分が感じられて、ゆつくりスキーを樂しみ乍ら下ることが出來る。萬座溫泉は、萬座山直下の少し開けた澤の中に盛んな溫煙りをあげてゐた(二時)。まだ早いので、荷を置いて萬座峠へ遊びにゆく。だら〳〵した尾根を捲いて登つてゆくと、遠く四阿や鹿澤の山々が望まれる。峠からは夕陽に輝いた笠が綺麗であつた。

十二日。今日も亦絶好無二の快晴である。八時過に宿を出て、昨日と同じ道を萬座峠に登つた。振りかへると白根の噴煙が天高く、眞直に立登つてゐた。こゝから山田への下りは、スキーを使へる最大の傾斜である。大きな樹間の急斜面を下つてゆくと、一度轉べば起きられぬ程もぐつたり、アツト云ふ間に樹に抱きついたりする事が度々であつた。松川へ出てからホツとして急に疲れてしまつた。山田溫泉へ一時前に着き、直に自動車で長野へ行くと、都合よく準急に間に合つて早く歸へることが出來た。

八、吹雪の蓬峠へ　一行　渡邊仁、名倉、安齋、石川植草、津留、石田、相馬、横畠

新入局の石田、相馬、横畠三君を混えて、愉快なスキー行が試みられた。

二月廿五日。午後上野を發つて行くと、一寸歡迎旅行の感じがする。五時半に土合へ着くと雪が降つてゐて、今にも日が暮れさうである。これから二里登るので、西黒澤の河原で驛辨を食べてランタンを點した。湯檜曾川の河原は一面の雪となつてゐるので、スキーで行くのは至極樂であつた。ガンバリ屋の相馬が最後までシールを着けさせないので、小屋がすぐ眼の前に現はれても、アタ〳〵するかばりで仲々着かなかつたが、厚ちやんが奥さんの心入りのお守札を出したので、忽ち皆元氣恢復した。武能小屋に着くと、小屋番はもう寢てゐたが、たゝき起して飯を炊かす。その間、碁や將棋をやり出したので、まるで醫局の樣な風景となつた。夜、風雪强く明日

が氣付かはれる。

廿六日、吹雪、狂風。全く凄い吹雪だ。外へ出ても眼が開けられぬ。それでも行ける處まで行けと、登つてみるとラツセルが腰迄ある。替る〳〵どうやら鐵塔の尾根下に着いたら、雪庇が大きくかぶさつてゐて登れさうにもない。石川と相馬がスキーを脱いで、ストツクで雪庇を破つた。それでやつと突擊路を開いて尾根に立つと、ひどい突風で各自が分らなくなる位である。やつと白樺小屋跡の避難小屋へ着いたが、高さ四尺位しかないところへ雪が吹込んでゐるので、皆這入ると身動きも出來ない。熱いテルモスの紅茶とパンを嚙つて早々に引あげる。下りは流石に快適だ。特に雪庇の處から小屋迄の粉雪は上越とは思へない位であつた。もうすることが無いので、昨日來た路を下つて土合に着いた。此處から汽車で水上へ行き、一浴して急行で歸へつた。あとで厚ちやん曰く「いやもう、ひでえ目にあつたよ」と。誠にひでえ吹雪であつた。

九、鹿澤の山々　一行　小平、渡邊仁、石川、植草。

前回の蓬峠に引換へて快晴、無風、粉雪に惠まれた、誠に心地良い旅であつた。

三月廿日。夜行にて上野發。下谷勤めで一緒に行かれぬ津留が驛迄送つて來た。

廿一日、快晴。四時半に田中に着くと、滿天の星で大氣は浸みるばかりに寒い。自動車屋をたゝき起して横堰迄ゆくと、行く可き鹿澤の山に雪が一寸も見えないので大いにあわてた。四十番を過ぎる頃から、林間に雪が現はれたので、歡聲をあげてスキーをはく。地藏峠附近は人影も無く、空は碧く、山は純白で、さつきの驚きが杞憂であつたのを喜んだ。峠の小屋で食事をしてのびてから、溫泉へは行かずに、湯の丸へ向つて登り出す。淺間の噴煙や、遠く北アルプスの大障壁が見え始めて、知らず〳〵に頂上へ着いてしまつた。眞近に猫、四阿がのしかゝる樣に見える。風もなく、暖かい早春の山頂を樂しんでから角間峠目指して滑ると、四人が先になり後にな

り、映畫の滑降を見る樣な大銀盤を、忽ち峠に下つてしまふ。これで大いにスキーの快味を味つたのに、それから上信國境を六キロばかり、鳥居峠に至る屋根を、ブラ〳〵滑つて行く心持は何とも云はれない。氣が向くと休んで果物を食べたりし乍ら、のんびりと鳥居峠に着いたのは、まだ三時であつた。半里の澁驛までスキーを使つて、其處から自動車で上田へ出て、その日の內に歸へつた。

十、新綠の乾德山　一行、石川、他學生大勢。

三四會山岳部の主催する春期天幕行に參加して、五月十三日夜行で新宿發。十四日早朝鹽山に下り、直に自動車で笛吹川に添つて行く。夜は明けんとして殘雪の富士山に朝陽が照り始める。紅色の富士、碧い空、香り高い新綠の道、久し振りの自然の饗應に目が眩みさうであつた。德和で自動車を捨てゝ乾德の登りにかゝる。二時間にして水場と稱する平地に着いて、さつきより遠くなつた富士山や、甲府盆地を眺めた。それから登りは樂になつて高原狀の處をゆくが、この邊りの落葉松の新綠の美くしさは、曉の紅富士と共に、忘れられないものであつた。頂上は雷々たる岩峰で、秩父の山の展望臺の樣な位置にあるので、金峰から甲武信、雁坂、雲取、大菩薩峠迄、手に取る樣に見える。充分のびてからブラ〳〵下つて來ると、殘雪の南アルプスが懷しく望まれる。水場に歸へつて皆で大宴會をやり、今朝來た道を通つて歸京した。

十一、初秋の三國山　一行　渡邊仁、石川、横畠。

九月卅日。午後上野を發つて後閑に下車、月の出た三國街道に自動車を走らせて法師溫泉に泊る。

十月一日、快晴。溫泉の氣分が良いので、朝湯に悠々とつかつてダベつてゐたら出發が遲れてしまつた。十時頃出ると、陽の光が强く暑い。綺麗な谷川に添つて一時間半で三國峠に着いた。喉が乾いてゐたので、此の時食べた二十世紀の味が今でも想ひ出される。これから三國山迄は一時間位だが、仲々急でアゴを出してしまつた。

越後の苗場山が堂々と聳へて、これからでも行きたい樣な氣になる。頂上附近は紅葉の盛りで、實に綺麗であつた。近くの仙の倉、萬太郎から谷川岳へかけて、無氣味な山相を展開してゐる。三國峠まで下つて今度は舊三國街道を猿ケ京に向つた。山仕事の里人か、ハイカーでなければ歩かないこの路は、癈道の樣になつてゐて、スヽキの密生にまかされてゐる。里へ近附くと秋の哀れを想はせるコスモスが、其處此處に、風に吹かれてゐた。猿ケ京に着くと時間があるので、笹ノ湯に浸つて夕食を食べた。

入浴の時、丁度女湯が壞れてゐて、男女混浴といふ始末であつたので、折しも妙齡のメツチエンが足も觸れんばかりの眞近に這入つて來た爲に、ひどくエレギーレンして湯槽から出て來られないで、ノボせてしまつたといふお方があつた。誰でせうか。あてゝごらん。それからあとは無事に歸へつたが、東京へ着く迄汽車の中で、その時の心理狀態をしやべり續けて、興奮してゐたには參つた次第である。

十一、新雪の蓬峠　一行　石川、他學生大勢。

これも山岳部の秋期天幕行について行つたので、十月廿一日の夜行で上野を發つた。廿二日、型の如く土合に着いて武能小屋に向ふと、圍りの紅葉が血の樣に紅く、谷川の岩壁には新雪がベツトリと着いてゐる。二月に來た時と違つて、快晴の秋の大氣を吸ひ乍ら、のんびりと蓬峠に向つた。白樺小屋跡で獨り遲れて休んでゐると、物音一つしない靜けさである。笠や朝日の山腹にかゝる樹氷の森も美事だが、谷川岳の壯絶さは云ふ可き言葉の無い程であつた。頂上附近は總て岩峰に新雪をかぶり、中腹以下は紅黃とりどりの豪華な紅葉であつた。やつとまた峠に向ふと、雪が出てくる。峠の頂上は靴がもぐる位で、越後の方は曇つて見えなかつた。武能小屋に戻つて、パーテイをやつてから、夕闇のせまつて來た湯檜曾川を下つて行つた。(完)

藏王スキー合宿の記

雪女郎

序の巻

正月の休みに皆でスキーに行かう。何處が良いだらう。人情の細やかな信州か東北が良いだらう。それぢあ志賀高原にしようか、なんて云つてゐると、今迄默つて聞いてゐた仁ちやんが、突然「信州は酒が不味い！」と云つたのでトタンに最上高湯へ行くことに決まつた。メムバーは、この渡邊仁七郎がリーダで、通稱仁ちやんなんて云はなくても、誰でも知つてゐるお方であるが、越後の產で、スキーは下駄と同じ位に心得てゐる。その次にひかへた酒豪は、九州の產で津留慶之と云ふが、これは慶ちやんとは云はない。俗稱は有るが此處では公開をはゞかる態のものだから略す。スキーは本科に來にから始めたので、只今はメーシツヒ位のところ。

あとは信州でも最上でも、どつちでも良い手合で、仁ちやん、慶ちやんの犧牲になつた樣なものであるが、先づ安齋直。これは「タヾシ」と讀むんだが、皆は「チヨク」と直明に發音してしまふ。酒は一滴のむと可愛らしくなつてしまうが、スキーは歷史が古い。豫科からやつてゐて、ヒツコリのスキーを持つてゐるのは、外科廣しと云へどもこの子一人だ。その次は後年海南島で大いに勇名を走せた南海の兒、植草實だ。南洋の美男子がスキーをやるとはおか

しいが、一度雪の降つたところを見たいと云ふので一緒に行くことになつた。この子に酒を飲ましても、醉つてるらしいナ、とは想像されるけれども、顏に出た色をデイフエレンチーレン出來ないので困る。最後に出て來た奴は石川七郎と云ふが、スキーへ行くのに、フラウも一緒に連れてくと云ひ出したにはにはガツカリした。中學時代から、學校を休んで山ばかり登つてゐたお蔭で、仁ちやん位は滑れると思はれる。そのスキー振りを、フラウに見せてやりたいのだナ、と考へると、胸クソが惡くなる樣なもんである。皆は「七郎」と呼んでゐる。

出發の巻

元旦は仁ちやん、「チヨク」共に當直ので、植草、津留、石川及フラウが先發することになつた。丁度弘前に居た川上弘中尉が歸任するので、一緒に山形迄行く事にして上野驛へ行くと凄い。どのプラットフオームもスキーの林と化して、汽車に乘れても到底座れさうにもない。由來、七郎は如何に混雜する汽車でも座れなかつたタメシの無いと云ふ男であるが、如何に七郎でも今夜だけは駄目だらうと思つてゐると、皆をフオームに待たしておいて、線路へとびおりて軀け出して行つた。そのうちに乘る可き汽車が靜々とフオームに這入ると、早くも反對側から跳乘つて座席をとつてしまつた。津留は他の車へ席を取つたが、植草がまだ遲れて來ないので待つてゐると、どん〳〵人が乘つて來て、便所へも行けない程混んでしまつた。そのうちに汽車は出る。七郎達も津留と連絡しやうと思つたが、身動きも出來ず、その儘になつてしまつた。津留は獨りで居たが、福島へ着くと乘つてゐた車が切離されることになつたので、泣く〳〵食堂車のブリッヂに移つて、凍へ乍ら夜を明かし山形へ着いた。スキー行の汽車の中は本當は大いに樂しく愉快なものだが、こんな苦勞をして十二時間もゆられたのは始めてゞある。山形でやつと勢揃ひしたが、植草だけが見當らない。どうも乘り遲れたらしい。川上中尉に分れる。今は北支に居る彼との最後の對面であつた。

高湯迄の巻

今日は正月二日である。雪の山形驛頭に立つて、行く可き雪の山を眺めると、昨夜の苦勞を忘れてしまふ。これでは歸へりも大變だらうからと、歸へりの寢臺券を買ひに行くと「うまくねエネ」とやられた。何度賴んでも「うまくねエネ」で追放はれる。あとで考へると、之れは「駄目だ」、「都合が惡い」、「困つたナ」位のところらしい。仕方が無いのでバスに乘つて山の神に向つた。今日はこの邊では珍らしく暖かい日で、曇つた空から時々霙が落ちてゐる。車中「うまくねエネ」が流行つて、笑つてゐるうちに半鄕に着く。これから上は雪がゆるんだから自動車は行かぬと云ふ。此處から高湯迄は二里で村落の中の輕い登りだ。重い荷物やスキーを馬橇に賴んで、空身でブラ〳〵歩いてゆくと、山の部落にも正月の賑やかさが來てゐて、晴着を着飾つた子供等がスキーヤーを眺めてゐる。そのうちに高湯の杜と湯煙りが見え出して、粉雪が紛々と舞つて來た。古い、大きな湯宿の立並んだ高湯は、豐富な湯量と豪快な石段の街とを持つて、昔の懷しさを傳へてゐる。僕達は街の一番高見に在る、岡崎屋といふ宿に這入つた。

練習開始の巻

高湯は、藏王山の山腹深く食ひ込んだところの一平地に展がつてゐて、村中全部が溫泉の爲めの生業を營む所である。藏王の最高峰熊野岳へは、スキで約六時間で達せられる。其處へ達する迄にも、八寶荒神とか、地藏岳とかを越えて行かなければならないが、そのルート全體が優秀なゲレンデを展開してゐる。

久し振りで、スキーにワックスを塗つて、粉雪の上に立つと藏王のふところに來たといふ喜びが湧き上つて來る。八寶荒神の麓に、山形高校で建てたコーボルトヒュッテと云ふ小屋があつて(コーボルトは雪靈の意)、此處迄の往復

が良い練習となる。距離は約四キロ。道は迂餘曲折、非常な變化に富んでゐて、登るのが苦にならない程である。我々は去年、此の道で雪に一夜を明かした友達のことなどを語り合ひ乍ら進んで行つたが、風が非常に強くなつて來たので、屢々立止つて風の過ぎるのを待たねばならなかつた。雪量はあまり多く、無く人の通りが激しいので、路はカリ〳〵にクラストしてゐる。つまんないからもう止めやうか、と云ひ出すと、誰も早く滑りたいもんだから、すぐシールを外して下ることになる。今日は未だ初日なので、あまり亂暴もせず、あまり珍談も無く、他人の股へ首を突込む位のことで歸へつて來てしまつた。溫い湯と炬燵が僕達を迎へてくれた。

コーボルト・ヒュッテの卷

三日。晴れては居るが、地藏岳は雲に覆はれてゐる。昨日の道を登つて、獨鈷沼に達す。黑い樹に取卷かれた綺麗な沼で、今は全部結氷してゐるから、その上をスキーで渡つて行くと、處々氷が割れてゐて、美くしい水を汲むことも出來る。これから、また暫く登ると鳥兜山の尾根に着く。コーボルト・ヒュッテはすぐ目の下で、その背後には左から八寶荒神、地藏、熊野と、藏王山の重鎭が一眺に在るが、山頂附近は雲に覆はれてゐる。此の邊りは概木地帶であるが、氣溫が低い爲めに綺麗な霧氷となつて、陽にキラ〳〵と輝いてゐる。雪は藏王特有の灰の樣な粉雪となつて滑降慾をそゝられる。

コーボルト・ヒュッテのすぐ傍にある、藏王小屋に這入つてパンと紅茶の晝食をすます。煙が一杯に立込めた素末な小屋の內は、人が一杯で食べ終へると早々に飛出してしまつた。これからが藏王の核心に這入るので、眞白い珊瑚を想はせる霧氷や、異國風の大きい樹氷に歡聲を發し乍ら懺悔坂に着く。此の邊りの雪景色の素晴らしさは絕對に他所に見られぬもので、高さ三丈程の栂の大木の密生に全部眞白に雪が氷り着いて、所謂モンスターを形成してゐる。

これから一登りで地藏だが、上はガスが立込めて居るので、坂を上下し乍ら遊ぶことにする。粉雪を蹴つて樹氷を分け降る心地良さは、スキーヤーのみの知る醍醐味である。

疲れゝば雪に腰をおろして、熱い紅茶をのんだり、寫眞を撮つたりしてから、癒々歸へりだ。ワックスを塗り直して高湯の方を望めば、山波が遙かに續いて滑降の樂しさが想はれて來る。曲りくねつた林間の路、一氣に飛ばす平原の直滑降、ボーゲンを大きく畫く尾根の下り等々、高湯の黑い杜が見える頃には、膝がガク〳〵になつてしまつた。再び硫黄の香り高い湯の宿に歸へると、後發隊の仁ちやん、安齋、植草が來てゐて、寢むさうな顏をして炬燵に這入つてゐた。十疊二間をぶつ通して俄然賑やかになつたので嬉しくて仕樣がない。大宴會を催し乍ら、山の狀態、今日の良かつた事を云つてひがましたり、汽車の苦心談を語つたりする。後發隊も三人分れ〳〵となつて、仁ちやんだけ普通列車で獨りやつて來たといふ。

入湯の巻

高湯には宿屋が二十軒程あるが皆內湯がある。その他街の眞中に大きな共同湯があつて、それから流れ出る湯が湯煙を立てゝ街を流れゆく。一つの宿にゐる客は、共同湯は勿論、他のどこの宿の風呂へ這入つてもかまはない。だから我々も大分おみきのまわつた頃、そろつて岡崎屋を立出でた。雪がチラ〳〵と降つて湯煙りの中に消えて行く。高見屋、辻屋、近江屋、柏屋と一軒二軒のうちはよかつたが、三軒以上となると身體がヒリ〳〵して來る。殊に酸味の強い硫黄泉だから湯に這入つた時の痛さつたら無い。もう止めようと云ふのに、下の方に良い湯かあるからと、仁ちやんが先に立つてゆく。裏街のゴミ〳〵した道端に堀立小屋の樣な浴場があつて、之れに這入るのだと云ふので皆大分閉口したが、遂に這入つてみると俄然良い湯であつた。フカ〳〵にふやけて宿へ戻ると、皆疲れてすぐ寢てしま

つた。

地藏登攀の巻

附、植草スキーで樹に登ること

四日。昨日に增した快晴だ。六時に起きて飛出した。今日は獨鈷コースは止めて、尾根を眞直に登る大平コースと云ふのを行く。風が無いので暑い位、屢々立止つて水を飲む。遠望が良く利いて朝日連峯や月山が見え出した。

コーボルト・ヒュッテに着いたのは十一時頃で、ヒュッテの裏の風當りの無いところで、むすびを食つてゐると、八寶荒神の頭に雲が去來して、陽が照つたり陰つたりしてゐる。これから上は急な斜面が續いて、例のモンスターの中を喘ぎ乍ら登る。以前と違つて指導標が完備してゐるのと、邊りが綺麗なのとでどん〳〵道がはかどつて、コーボルトから一時間程で八寶荒神と地藏岳の鞍部に着いた。大きな石の地藏さんが寒々と風に吹かれてゐる。此處から右へ地藏の頂上迄はすぐで、頂上に立つと宮城縣側から强い風が吹いて來る。藏王の最高峯、熊野岳はすぐ目の前で、刈田岳、五色岳は遙か彼方に、膨大な山容を横たへてゐる。高湯が恐ろしく低く見えて、白い〳〵銀一色の世界に、印象的な杜が黑く、それと知れる。

さあ下りだ。始めはゆつくり樂しんで下りる積りでも、雪が良くて自由に曲るので忽ちのうちに懺悔坂を下つてしまつた。どん〳〵人が下つて來て眼の前で轉がるのを見てゐるのは面白い。そのうに遙か彼方の、殆ど垂直な斜面に一人のスキーヤーが見え出した。何處へ曲るのだらうと思う間もあらず、眞直に下つたので、忽ちあふりを食つて放り出される、落ちる、下にモンスターがあつて、その梢の上にスキーを引つかけた。しかし幸に怪我も無く、ドスンと大地へ落ちると、悠々とまた滑り出した。全身雪にまみれて何處の誰やら識別出來ない。仁ちやんは急がば廻れの秘法にて森の新雪の中をおりてくる。チョクはヒツコリーに物言はせてたどり着く。津留も來た。植草だけが居ない。

サテは木登りの勇士は南海の快男子か、と云ふことになつて、駈けつけて見ると、今や顔面に氷り附いた雪が解け出して獨得の肌が現はれて來たので、あゝこれは何處の誰でもない、と云ふことが判つた次第である。それからの下りは各々秘術を盡して滑つたが、曲り角で一々雜木に突込んだり、指導標に抱き附いたり、獨鈷沼へ落ちかけたり、更に電信柱と相撲をとつたりして高湯へ着いた頃には、サンタンたるものであつた。

愈々明日は歸へるので、最後の夜は再び大宴會となつて今日の登頂と、歸へりの無事なりしを祝ひ合つた。

歸途の巻

附、再び入湯の事

五日。吹雪いてゐて猛烈に寒い。もう登頂を終へたから何の心殘りも無い。霏々と降る雪を眺め乍ら炬燵でパイ一やるのも惡くない。

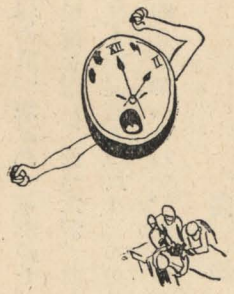
懷かしい高湯に分れて、午後三時宿を出る。半郷迄二里の下りはゆるい下りで、立つて居ると、どん〳〵とんでゆくといふ快適さだ。流石に昨日の樣な傑作は無く、一時間程で半郷につく。お名殘に山形の料理を食べて行かうと、車を走らせて山形隨一の料理屋と稱する千歳館へゆく。久し振りで美味しい御馳走にありついて皆大喜びだつたが、殊に日本丸とか云ふ土地のお酒は絶品で、仁ちやんは默り乍ら俄然喜んだもんだから、皆が御飯を食べ終へてもまだ飲んでゐる。汽車に遲れるよ、と云つても「ウン」とか云つちあつて飲んでゐたが、やがて曰く「溫泉に這入らう」。乘る可き汽車迄三時間程あるが、皆めんどくさいので止さうとは云つたが、一邊云ひ出すと聞かないので、仕方なく立上つた。スキーは一纒めにして送つてしまひ、月の出た雪路に車を走らせて、上の山溫泉にゆく。しかし時間がせまつて、パイ一やる暇も無く、文字通り湯にザブンと浸ると、また自動車に乘ると云ふ始末で、その儘滿員の夜行に乘つたのであつた。（終）

川柳漫畫

刀林編輯部選

呼び出して
木當のことを言ひ含め

イレウスを圍む
白衣に二時が打ち



ホレこんなムチが
とれたと婦長見せ

醫局では段々見物
將棋さし

大部屋は
當直の醫者
睨みつけ

文苑

梅

—治生—

梅折るや社詣での出來心

○

梅花點々井桁のつるべ乾きあり

○

梅咲くや垣根の外を猫過ぎる

○

巨いなる梅少し花持ちて居り

出征の友を送る

——治　生——

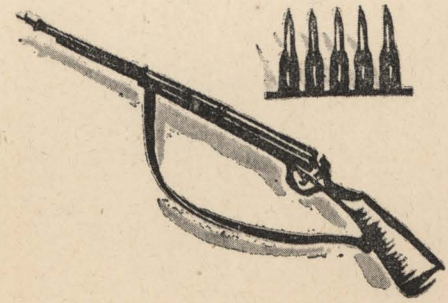
一、行けよ君、戰場へ
一億萬の同胞は
心を合せ起つ時ぞ
執れよ銃、振れよ刀
斷乎と拂へ國の仇

二、行けよ君、戰場へ
男と生れ今日の日に
めぐり會ひたる身のほまれ
仰げ空、富士晴れて
武運は君の上にあり

三、行けよ君、戰場へ
故山の母は老いたれど
涙落さぬ覺悟あり
其の心、肝に記し
家門の歴史汚すなよ

四、行けよ君、戰場へ
いとけなき子は聲揃へ
愛國の歌唱ひつゝ
赤きほゝ、つぶらの目
君等の勳願ふなり

五、行けよ君、戰場へ
赤心示す血潮もて
祖國の榮譽確保せよ
進め野を、越えよ波
高く揭げよ日章旗



節衣の書から

小田原　夏積生

本文は小生が貧しき書架に收藏してある節衣の書（雜書なれども小生にとりては衣食を節して求めた處の書）から何にくれとなく暇に任せて讀書の際に多少なりとも後日の參考ともなる樣に感じたる個所から、書留めおいた雜記帳から拔書きしたるものにして、又時にはこれに自分の愚論を附け加へたるものである。

一、人、常に菜根を咬み得ば即ち百事做すべし（汪信民）

今、人菜根を咬む能はざるに因つて其の本心を失ふ（朱子）

菜は野菜の葉、根は野菜の根で人間が常に、大根菜葉などの不味い食物で辛抱するだけの氣慨があるならばどんな事でも出來るものである。今の人は菜根を咬む事が出來ないで、今の人の本心を失つて輕佻浮薄に流れ目前の利益のみを追つて居るのは本當に自分と云ふ此の心を失つておるのだと思はれる。今の緊張しておる時代に闇取引をして利益を貪つて居る商人や、湘南、伊豆方面に宿るに室なき程押寄せる遊覽者に、この事を考へて貰ひたい。そして國家あつて自己あることを知つて貰ひたい。

二、宿借りにはこれが君の爲めに與へられた貝殼だと云ふものは無い。然し無數に借りられる貝殼が彼れの前に提供されて居る。

今日非常時非常時と謂はれておるが、この非常時に對應すると云ふ事は矢張り平常の用意と云ふ事がなければならぬ。非常時であるからと云つて只騷ぎ廻つて居つても何にもならぬ。今の當路の人がやれ非常時だと騷いでおるのも平常の覺悟が足りなかつたから騷ぎ廻らねばならぬ樣になつたので、平常の覺悟さへ立派であればこう騷ぐには及ばないと思はれる。勝海舟が江戸城明渡しする時相手が西郷であるから心配はいらぬと云はれたと云ふことである。此れは西郷の心事が、天靑く日白く人をして知らざらしむるやうな事のない公明正大な點に信用を置いたからではなからうかと思はれる。今の中央の役人に敢てこの一言を呈する次第である。

三、日本が生んだあの豪放不羈の英雄豊臣秀吉ですら、言ひ遺した言葉に、世の中の病氣を療すに三つの藥と四つの毒があると。三つの藥とは天を懼れ、身を修め、儉を守る。四つの毒とは、利を爲し、邪慾を思ひ、物を怠り、非義を行ふ。この三つの藥を用ひて四つの毒を去つたならば、國の病氣は療るものだと云つて居る。各自が自已の職業に忠實であれば、興亞の大業を成すにも易々たるものと思はれる。

四、死の問題は他人の問題ではなく自身の問題である。而も刻々に迫り來る自已の問題である。死は決して斷滅ではなく永遠へ赴く道筋の一つの變化である。死が終末でないと云ふことは、生物學上から見るのに吾々が生きて居ると云ふのは單細胞が集まつて身體を組織して居る狀態をいひ、其の離散した時を死と云ふのである。この單細胞なる物質が化學的集成である以上死は不滅である。從つて死を新しい生と見ても差支ない。

肉體がそうして續いて行く間は肉體と不即不離の關係にある精神に就ても不滅であると云ひ得る。

死が來れば死なくてはならない。そこに個人としての形體は失はれるが、精神方面の行爲、言語、文章、業蹟は何等かの形で社會に影響し受け繼がれるから、個人に死んで社會に生きるものと云ふことが出來る。されば人生には生死以上の大問題がある。それは節義を守ると云ふことで、義に生きる爲めには死を輕んじなければならない場合がある。肉體的生命よりも義が重いからである。正しい意味の死を選ぶと云ふ場合の死は勿論死にきりの死でなく、死んでよりよく生きる死である。

東洋永遠の平和達成にたづさわつた我が忠勇なる戰士は肉體的には死んでも生きた義人と云はねばならぬ。

高原の便り

伊藤國男

一、すゞらんの便り

昭和十四年六月十三日稍々蒸暑い高原の初夏、中村武重氏と私と二人富士見驛のプラットホームに汽車を待つて居た。豫ねて御通知あり、茂木先生が御出でになる日の夕方である。やがて六時五分着下り列車が滑り込んだ。驅け寄る二等車の開いた窓に先生の白頭溫顏が覗いて居られる。早速車中に乘り込んで久々の御挨拶、傍に居られる奥樣慶子さんにも御挨拶、御元氣な御一家を御迎へして氣持が急に晴々とする。沿線の信濃の風物の物語やら四方山の話の中に何時の間にか上諏訪に着く。賴んでをいた布半の番頭が驛まで出てくれた。先生御一家と共に布半に着、夕闇迫る諏訪湖を一眸の内に收められる二階の部屋に通された。

「これはいゝな、いゝな、仲々涼しい、君湯に入らう」

先生が先に立たれる。一足遲れたと思つたが吾々が浴室へ下りて行くと、先生はもう出て來られた。

「先生、もうお上りになるのですか」

「うん、少し混んでゐるからな、まあ入つて來たまへ」

湯から上つて來ると、湖水に向つた椽側の椅子に腰かけられて團扇を使はれながら、諏訪の凉しいこと、湖水の眺めのいゝこと、それからそれと昔話まで語られて先生のお話が何時盡きるとも知れない。

布半までお供して今日は直ぐに失禮しようなどと話し合つて居たのだが、何時の間にやら先生の親船に乘つてしまつた樣な氣持になつて、ゆつくりお話を伺ひ夕食を御馳走になつてしまつた。先生のお湯の早かつたことから奥樣は

「主人はお風呂が嫌ひでして、夕食後風呂に入りませんかと言へば、今夜はもう眠くていやだから、明日の朝にしようと言つて寢てしまひ、朝になれば又時間がない、もう病院へ行かなければならないといふ樣な調子で、風呂に入れるのが大變でございます」

と言はれる。之を聞かれながら先生は大きな手に杯をとられて、時々

「ふゝん」

と笑はれては湖水の方を見られる。私等ははじめて先生の風呂嫌ひを此の時知つたのである。明日の御相談をして九時上諏訪發の汽車でお暇する。

翌朝八時十五分富士見驛に先生御一家をお迎へし、病院内を御覽になつたり、樂燒をなさつたりして暫く休んでいたゞき、その間に受持患者の廻診を濟ませるのである。七十人位だから重症以外は顏だけ見て

「變りありませんね、ぢや」

とか何とか言つて通り過ぎてしまふ。病人よ許せ、今日は又とない嬉しい日なのだから。

十時頃出發立澤といふ上の部落まで行く。危なかつた昨日からの空もすつかり晴れ上つて山の綠が美しい。滴る樣な新綠の林に入ると、微風に送られて鼻にくる幽かな鈴蘭の匂ひ、と早や足元は一面の鈴蘭である。幾分盛りを過ぎて居るが清楚なその姿が實に愛らしい。例の無雜作に黑いソフトをチョコンと頭にのつけて先生が草叢に蹲つて白い

花を摘んで居られる。

次の豫定もあるので余り長居も出來ずに此處を引上げて自動車で下り、病院で一寸休んだ後汽車で上諏訪へ、更に自動車で霧ヶ峯迄登つた。グライダー練習場で車を捨てる。

「ふん、之は廣くて氣持がいゝ、實にいゝね、君こんな廣い處はめつたにないね」

と先生が盛に感心される。立澤はそろ〳〵晩春の姿であつたが、此處霧ヶ峯は今すべてが早春の眺めである。草も芽を出したばかり、鈴蘭も僅かに花の芽を出してゐる。高い空では雲雀がいゝ聲で鳴いてゐる。風がかなり冷い。

「君どこかで辨當を食べよう」

併し余りにも廣い草原なので據り所がない。やつと牛程の一つの石を見つけて傍に一同腰を下した。一本のビール、一杯のコーヒと海苔を卷いた握飯の味が素晴しい。先生も

「之はうまい、之はうまい」

と連發される。

未だ皆が握飯を頰張つてゐる中に、早や先生はシヤベルを持つてテコ〳〵と出かけられて鈴蘭をこいで來られる。又直ぐ何か探しに行かれる。

「君、蕨もある、蕨がある、之はいゝ蕨だ」

本當に氣持のいゝ綠色の莖だ。兎角する內車山の方に眞黑な雲が湧き上つて來た。

「君あの雲はいけない、あれは雨が來るな、少し急がう」

と先生にせき立てられて辨當の店をしまひ、池のくるみを指して緩かな斜面を下る。下り徑に先生と奧樣はわらびを兩手に一杯摘まれた。慶子さんは一面に咲く白菫を摘んで花束を作られた。

「之で君一杯飲めるよ」
と先生は蕨の束を見つめてニコ〳〵して居られる。
池のくるみで待たせた自動車に乘り十分位山を下つた時、ポツと大きな雨が自動車の屋根に落ちた。すると續いて又ポツ又ポツポツと、忽にして天の底がぬけた樣な大雨が來た。いつも釣に行かれて空模樣を見るに敏なる先生の先見の明あり、吾々は一滴の雨にも濡れずにすんだことを喜び合つた。雨と共に天地も碎けよと轟く雷鳴は布半へ歸つてからも暫くは鳴り止まなかつた。
宿の湯に先生と共につかり、今日一日の行樂の話に花を咲かせ、或は先生がゲブルトに立會つて恐ろしく感謝せられた昔のお話など伺ひながら、又も先生御一家と共に夕食を御馳走になつてしまつた。
いつか止んだ雷雨後の町を驛まで先生、奥樣、慶子さんが私共を見送つて下さつて、宿の浴衣にスプリングコートを引掛けて、汽車の出る迄改札口に立つて居られた先生のお姿を今もあり〳〵と眼前に思ひ浮べて、又翌朝富士見を通過して歸京せられる先生御一家を驛に御見送りした時に、宛も出征兵士を送るヂンタと旗の波の中に、窓からお顔を出された先生の慈愛の眼指しを、あり〳〵と眼前に思ひ浮べて、もつと吾々が御案内をしなければならなかつたのに、却つて先生に御世話になつてしまつた事を恐縮に思ひながら、あの時の樂しさを想ひ出してゐる。それにしても先生はじめ御一家皆樣がこの一日を大變喜んで下さつたことを、私共も亦非常に嬉しく思つてゐる。
「清氣芳風　藏」と先生の御揮毫下さつた樂燒の壁掛に見入つては彼の日を思ひ出すのである。

二、あさがほの便り

一昨年から居るNさんは朝顏を作るのがうまい。今年は春の雪が未だ消えない内から、豫ねて用意の植木鉢やら土

やらをいぢりながら、朝顔の種を蒔く支度に餘念がなかつた。

或る日廻診の時

「先生朝顔を蒔きませんか。種を上げますよ。之は三粒で五十錢といふ種で苗屋から送らせたのですが、幾分黄色味がかつた白の大輪です。五、六寸のは咲くでせう」

とNさんがいふ。さてどうしよう、蒔いてみようかと一寸考へた末

「さうですか、では下さい。蒔いてみませう。花が咲いたら見せますからね」

と言つて種の袋をシュルツェのポケットに入れた。之が私の朝顔作りの動機である。

〃朝顔作り〃などと言へば大袈裟だが、Nさんから貰つた三粒の種と横濱の種屋へ註文したのとを一緒に五月中旬に箱へ蒔いた。此の地は春の來るのが遲い爲、種を蒔くのがどうしても遲れるし、蒔いても亦發芽までの時日がかゝる。毎日土が乾かぬ程度に水をやつてやつと芽が出たのが二十日位後である。未だ種の黑い皮を被つてむつくりと土を持ち上げて頭を出して來る朝顔の芽に、生きんとするものの恐ろしい力を見る。蟻がその芽の横を觸角をふり立てながら忙しさうに歩いてゐる。

やがて双葉がぱつと開く。それからといふものはNさんの病室へ顔を出す度に、診察の方はいゝ加減にしてをいて朝顔の話ばかりを尋ねる。Nさんも亦診察よりは朝顔の話の方を歡迎するのである。鉢へ植込む時の注意、土の作り方、灌水法、芽の止め方、施肥法等々。夕方歸つて來てから停車場の方へ鉢を買ひに行く。バケツを持つて裏の山へ腐葉土を掻き集めに行く。日暮前の一時間ばかりの仕事としては仲々忙しい。腐葉土を二、川砂を一、畑土を二の割合にして土を作り、之を入れた三十數鉢を作り上げ、双葉の出揃つたものから段々植込んでゆく。すつかり植込む迄には十日以上を要した。手にかけたものに對する愛情とでもいふか、潰れさうな芽も一々捨てずに集めて庭の隅に植

えてやつた。油粕を買つて來て瓶に腐らす用意もした。

朝起きては水をやり、夕方歸つては水をやる。やがて野山の若葉が生々と初夏の太陽に輝く頃、朝顔の芽もすく〳〵と伸びて双葉の間から本葉が出る。枝が出る。梅雨も明けて夕立が來る樣になつた頃は枝も伸びて隨分大きくなつたが、山の激しい夕立にたゝかれては一たまりもない。一天かき曇る入道雲を見ては病院に近きを幸、家まで歸つて來て三十幾つかの鉢を軒下に入れてやるのも一つの日課となつてしまつた。

蕾が見えはじめて段々大きくなる。その頃Nさんの朝顔は流石本職だけに、もう最初の大きな花を咲かせた。大事さうに鉢を抱へて病室を見せてあるくNさんの顔は得意さうだ。Nさんのにれ遲ること二週間ばかり、八月下旬にはそれでも私の朝顔もとう〳〵花を咲かせた。途中枯れたり蟲がついたりして鉢の數は二十五許りに減つたとはいふものの、之が一時に咲き揃つた朝さすがに嬉しさが一杯だつた。爽かな高原の風が顔を撫でる朝、楊子を使ひながら一つ一つ見入る朝顔の花の表情。赤、白、水色、紫、淺黄等。大きいものは五寸を越えた。三粒五十錢の種も五寸余の白い花を咲かせた。之は持つて行つてNさんにもよく見せた。

最後の花も終つて早や一ケ月餘の此頃、暮るゝに早き秋の日を浴びて、未だ片附けられない朝顔の鉢が井戸端の畑の横に雜然と並んでゐる。

三、しめじの便り

八ケ岳の最南端の一峯編笠岳がその裾を西南に引いて釜無川に落ちるところ、其處に信濃境といふ驛がある。富士見の隣のこの驛まで汽車で來て登りはじめたのがもう十一時頃、村はづれで牛車を牽いた一人の農夫に出合つたので尋いてみる。

「山へ行く道はこれですか」

「山へお出でかね……きのこ採りかえ、そうだこの馬車道に沿つて行きや山へ登るだ」

「しめじはその邊にありますか」

「そーえ、あるうよ」

といふ話。こんな奴が山へ行つても仲々茸はとれるもんぢやねえと腹では言つて居たのかも知れない。畑の横を通り過ぎ松林をぬけ、草原を過つて轍の深くくひ入つた徑はだら〳〵と登つてゆく。松林の下草に生えてゐる漆が燃える様に美しく、楢の葉が黄色に色づいて木洩日を浴びて輝いてゐるのが、さながら新綠の候を想ひ起させる。甲府盆地に續く斜面には芒の原が波打つ上にポツカリと富士の姿が浮いて見える。

人つ子一人通らぬこの徑を登ること約一里、そろ〳〵しめじのありさうなところへ來た。路傍のりんどうを取つたりしてふと踏み入つた松林、隈笹を分けて見るとチラと黑つぽい茸が目に入つた。近所に又二つ三つ見える。之は占めたと十ばかり取つたが果してしめじだらうか。間違はぬ様に見本を持つて來ようと思ひながら、今朝出る時それを忘れてしまつた。それでも兎に角之を大事に持つて登つてゆく中、谷の方からガサ〳〵と草の茂みを分けて登つて來る親子がある。親子連れなので安心したが、山の中で人に會ふのは誰も居ないより氣持の惡いものである。立留つて

「山へ行く道は之でいゝんですか。これから八ヶ岳の裾を通つて乙事(オツコト)の方へ出ようと思ふのですが」

「そーえ、乙事迄は仲々えらいが、之を今少し登りや左へ折れる徑があるで」

「それからあのー」と言ひつゝリュックザックからさつきの茸を出して、

「之は何ていふやつですか、しめじですか」

「そうだ、そりや黑しめじちゆう茸で先づそれが一番だな」

「どうもありがたう」

之で一安心。成程その親子の籠には之と同じ茸が澤山入つてゐた。又登りはじめる。時々地圖と磁石で見當をつけながら八ヶ岳を仰ぎ駒ヶ岳を鳳凰地藏の連山を眺めながら、又足元の一本一本の草にさへ無限の懷しみを感ずる。

道傍の草に坐つて持參の握り飯を食べ水筒の番茶に喉を潤ほして尙登り、大分山裾へ分け入つた頃「右杯流を經て編笠岳に至る—左山路」といふ路標の立つてゐる岐れ道に出た。其處を左に折れると松林は益々深く、晝尙暗い苔の道が快い濕り氣を帶びて土の匂がそこはかとなく漂ふ。靜寂なる山の午後、時々ギアーといふ變な鳴聲の聞えるのは懸巢ででもあらうか。

しめじのありさうな處を根氣よく探して歩く。と皿の樣な眼の中に又一つ入つた黑いかさ、今度は自信たつぷりである。この時ふとこの間聞いた「しめじを取るにや一つ見附けたら動くなちゆうことがあるだ」といふ言葉を思ひ出した。そうだ、動くなとつぶやいてリュツクザツクを下し腰を据えて邊りを見廻すと、あるある松葉の間に苔のかげに。手袋をはめた手で搔きとるその嬉しさは二十五年前の栗拾ひを想ひ起させる。

此處を取り終つた時は獲物は五百匁ばかりになつた。之をリュツクザツクに入れて梢に鳴る秋風を快く聞きながらそろ〳〵里への下り路にかゝる時、帽子の上に肩の上に色づいた木の葉が散りかゝる。秋の落日を正面に受けて乙事を過ぎ瀨澤新田を過き富士見を指して歩く足取りが輕い。

四、すすきの便り

珍らしく風邪を引いて寢てしまつた。病院を休んで我が茅屋に秋の訪れを聞く。茅屋とはいふものゝ日當りのよいこの六疊間は私にとつては日本一の安息所である。煤けたカーテンには赤とんぼの影がすい〳〵とうつる。何の氣な

しに眺めてゐると、こは如何に、今しこの赤とんぼが一匹の蠅をつかまへて食べはじめてゐる影である。と又一方では蒲團を乾す爲に渡してある竹竿に列をなしてとまつてゐる赤とんぼを、かまきりが狙つてゐるではないか。馬が立上つた樣な恰好をして三角の頭をふり立て恐ろしき鬪爭直前の一瞬である。赤とんぼは之を知つてか知らずでか、いとも暢氣な日向ぼつこの樣子、併しそろり〳〵と近寄るかまきりも亦仲々飛びつかない。とその中に赤とんぼがぱつと舞ひ上つて一尺ばかり向ふへとまつた。平和な小春日和の日向の窓にこの樣な鬪爭が繰り返されてゐる。私の頭にふと歐洲大戰の姿が浮んで來た。

窓の外にはほゝけ立つた芒の原がさやかな風に波打つてゐる。遠山の頂は既に雪に蔽はれて中腹から下は今紅葉の眞盛り、南アルプスも富士も八ヶ岳も寢ながらに見えるこの窓である。望遠鏡をとり出して釜無の流れに沿つた溪谷の紅葉を一本一本眺める。所々から炭燒の煙が昇る。紺碧に澄み切つた空には秋雲の一片が靜かに流れる。實に悠久な山の姿である。

山と語る一時の後には又自分の姿をつく〴〵と眺める。如何に小さい力ない姿であらう。數々の不幸に苦しみ病に苛まれながら心に鞭つて歩んで來た道も振り返つてみる。一度はこの高原に捨てた命でありながら、又時には碌々の身を横たへて我が一片の志向未だ緒に就かずと悶へてみたことも幾度か。抑々結核醫の進むべき道は如何、曰く豫防事業、曰く學術的研究、曰く宗教的信念による患者の治療等と考へる幻の中に何者かの手が私を麾く。

併し何を言つても山は唯默々と時の流を幾千萬年見送つてゐるばかりである。ツルゲネーフの詩ユングフラウとフインステラールホルンの物語を思ひ出す。相變らず窓の外には芒の波が搖れ動き、かまきりは又次の赤とんぼを狙つてゐる。蒲團にもぐり込んで取留めのない秋の一時であつた。

清水のキス釣

多霧沈介

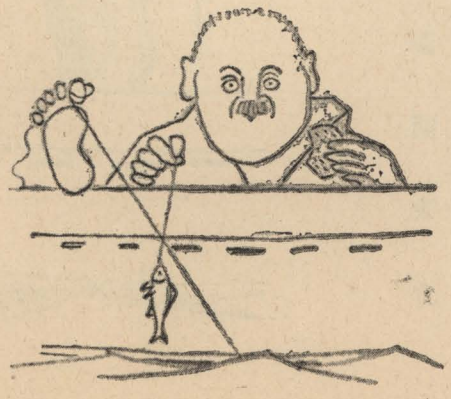
先生の溫顏に接したのは、久し振であつた。五月二十七日の夕方、清水驛に先生を御迎へして興津の水口屋に御案内する。海に面した一室で先生を始め、佐藤院長、川田先生に小生、夕食までの一刻を雜談にふける。

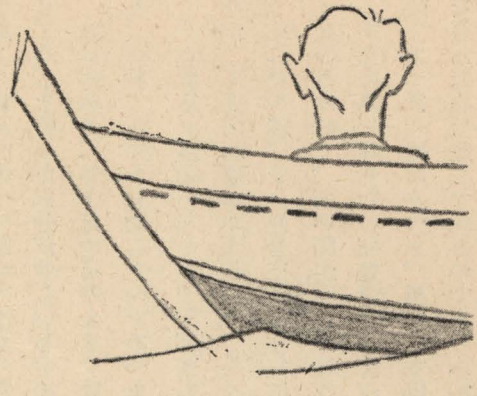
汀に寄せる波の音も靜かにかすかに、立て込めた靄の中に、海は次第に暮れて行く。港の灯も漸く明るくなり出した。

羽衣の傳說に名高い三保の松原の尖端には、燈臺の光が燦き始めた。右手の山の頂に明滅するのは「日本平の航空燈です」、「あ、そうスか〳〵」と昔に變らない先生の御言葉もなつかしい。やがて夕食の膳が運ばれる。波の音に月の光、落ついた老女中のお酌で御馳

走になり、お暇を告げた。

明日は釣のお供だ。夜明けから船でキスを釣り、午後には靜岡で講演される御豫定、明日を樂しみに仕度萬端整へた。翌朝は未明に家を出で、皮泌科の宮村先生と一緒に興津へ出掛けた。宮村先生も昨年から釣のファン、釣と聞いたらお銚子も盃も投げ出して飛出す程の熱中振、勇んで海岸に行つて見ると、先生の船はもう沖に出て居る。「オーイ」と呼べば、「イヨーイ」と船頭が答える。船を返してもらつて乘り込んだ頃に漸く東が白む。船底をのぞいて見ると、もういゝキスが七八尾泳いで居る。釣れるなと思ふとうれしくなつた。日が昇るにつれ次第に暖くなる。五月とは云へ海の日は強く相當に熱い。やがて穩かな南風が出て爽快となる。いゝ氣持でゆられながら糸をたれる。仲々よく釣れる。しかも相當いゝキスばかり。何とも云へない手應を樂しみながら、一時は夢中で釣つた。僕等は糸一本をさばくのに仲々手こずる。先生は兩手に糸を持たれ、交互に釣り上げては餌を換え投げ入れる。糸を持ち片手に握飯を持てば、僕等は魚のあたりがよく分らない。先生は片手に二本の糸、片手に握飯、あたれば握飯をくはえたまゝ上げられる。用を足すには、僕等は糸をおさめ、艫





に行く。先生はその場で二本の糸を片手にまとめ、クニーラーゲで船べりから要領よくなさる。一刻も糸を手ばなさず手ぎはよく、實際數多く釣られたのには敬服した。「君々、遠慮なく釣り給へ」と冗談なども云はれたが、こんな場合、大抵船頭が一番よく釣り、次には土地の者、お客様はびりつこけと決つて居るものだが、遠慮にも何にも、「お客さん よく上げるね」と船頭も云つた通り、土地子の面目まるつぶれになつたのは殘念であつた。

獲物は皆日赤へいただいたが、翌日の晝に食堂へ出した所、四十人近くの職員に、一人當り大は二尾小は三尾、みなに行き渡る程あつた。

午から先生は講演をすまされ、夕方の汽車で御歸京。

此の日の釣はすばらしい大漁とは云はれなかつたが、「清水は釣れんね」とおつしやらず、度々お出掛け下さる様御待ちして居る。

× × × ×

病床に林克己君を訪ふ

石川七郎

林が、戰線で病を得て、去る十月廿七日に廣島に送還せられ、直ちに同地の陸軍病院へ收容せられたと云ふ報が、彼自身の筆で私に知らされたのは十一月六日であつた。その手紙に依れば、病氣はさう重いものでは無く、「擔送では無く、獨歩で還へつたのですから御安心下さい」と云ふ樣な譯であつたので、分らない乍らも一應は安心したけれど、其れを書いた氣分が淋しいものに感じられたので、手紙を讀み乍ら涙が湧いて來て仕方がなかつた。

林は昭和十二年十月に見習士官で應召して兵站部隊附となると、直に支那に渡つて上海、蘇州、南京、九江、漢口と、轉戰二年の日を過したのであつた。

一時廣島に落附いてから、宇都宮に轉送されると書いてあつたので、東京を通る時は知らして欲しいと云つてやつたが、丁度入れ違ひの九日には、早くも東京を素通りして、宇都宮陸軍病院に行つて居たのであつた。

それで早速、十一月廿三日の休日に宇都宮へ向つた。

此の日は暖く、弱い陽が秋の武藏野に照つてゐた。

宇都宮驛で降りたのは晝頃で、彼の居る新川分院と云ふのは街を突拔けた畠地の眞中に在る、廣いバラツク建の病院であつた。庭に立つと、男體、太郎、女貌等、日光の山々が豪壯に見える。伊那の山懷に育つた彼は、日々の明暮をどんな心で過して居るのであらふか。

私は庭傳ひに、いきなり彼の部屋へ入つて行つた。ドアを開ける前に歡びの聲が口をついて「林公、林公」とゞなつた。

彼は今食事を終へたところで、私がふみ込んで行くと、おろ〳〵して、今食べ終へた食膳を持つて立ち上り、ものも云はずにそれを外へ置きに行つて、またすぐに戻つて來た。彼は由來、口に出して云ふ事の下手な男であるので、默つて私を見て笑つた。その笑ひは昔の通りの、先づ眼を二三回しばたゝいてから微笑むと云ふ、彼獨得のものであつた。こんな間は全くの一瞬間だつた。その間に私の方では、勝手に澤山の事を言つてゐた。まるで彼が病人であるのを忘れてしまつたかの樣に……。

彼の居る部屋は、將校病室だから一人部屋である。南に面した八疊程の、それでもまあ洋式に、木のベット、机と椅子、ストーヴが入れてある。入口のドアーには「祈武運長久」の日の丸が貼つてあつて、突當りが廣い窓だ。あとはトランクや軍隊行李や、外科や手術の大きな本、澤山の果物なぞが亂雜に置かれてある。まあこれで生活は普通に出來るだらう。

二年振りで見る彼は、想つてゐた程變つては居なかつた。十六貫五百あつた體重が十五貫に減つたさうだが、さう痩せたとも感ぢられない。少しでも變つたところと云へば、ぢゝむさい口髭を生やした位の事であらう。然し全體の感じが如何にも疲れてゐる樣で、傷々しく思はれる。今年の七月、九江から漢口に移るとすぐマラリアに罹つて四十度の高熱に惱まされたが、今でも七度臺の發熱があると云ふ。血液檢査は隨分度々やつたが、原蟲を發見することが出來ないので、今では熱の原因が分らない。食慾もあり他に變つたこともない。苦痛が大して無いので、平穩な入院生活を過してゐるといふ。

僕達はそれからゆつくりと、戰場の話や、彼の心境なぞを聞いたり、昔の話を仕合つたりして時の過ぎるのを忘れ

てしまつた。戰場から還つた人が皆さうである樣に、彼も亦のんびりとした、大きな心を持つてゐて、私を安心させたのであつた。

彼は亦、長いこと教室に御不沙汰してゐたお詫を云つてから、先生の御樣子、教室の狀態などに聞き入るのである。長い間、先生の御溫顏や、先輩、同僚達から遠去つてゐるといふ事は、私共に比べて、どんなに不幸な事であるかと云ふことが感じられる。

夕陽が奧日光の山々を眞赤に染め出した。私達は廣い庭に下りて行つて、昔の樣な、山を背景にした寫眞を撮つた。彼も南京で、ローライコードを買つたが、背景が寫つてゐた事が無かつた、と云つたので笑つたりした。

これで、林に逢ひたかつた私の心が幾分滿足した樣であつた。とにかく、彼は元氣で我々の間近に居るのである。そしてもう長い時間彼としやべつたのである●

別れて歸途に就くと、早くこの會見記を皆に知つて貰ひたいと思つた。そして早く彼が癒つて、元氣に教室へ歸る日のある事を願つたりした。　（一四・一一・二四）

林檎の皮

STUV生

病院の中なら、醫者はどんな人の腕だつて堂々握つてもいゝのだ。それは醫者に與へられた特權である。しかし花恥かしい乙女の手を握る時と、皺くちや婆さんの腕を握る時とでは、人間だもの、自ら觸感の異る事は當然である。何はともあれ要はクランケがそれで安心すればいゝんだ。そこで二つの失敗話を御披露する事にしよう。

或る防空演習の闇の夜だつた。ドサクサ紛れに一人のお婆さんが怪我をして、特診にやつて來た。燈火管制で暗い上に、警官や防護團の人がワイ〳〵とついて來て、何が何だかわからない。當直先生それでも患者丈けは見分けて、先づどの醫者でもする樣に手さぐりでクランケのプルスを見た。所がである。驚いた事にその手首は老人とも思へぬ程大變ふくよかで、プルスは速いが非常にしつかりしてゐる。その瞬間、何を思つたか、當直氏はアツと驚きの聲をあげた……。

あとで、外來のブレ孃の曰く……

「先生、どうしてあの時私の手をお握りになるのかと思ひました……」

もう一つは手術場での話。

或る五つ六つの女の兒が目隱しをされて運ばれて來た。顏だつたか頸だつたかのプラスティクが始まらうといふのだ。聞き分けのいゝ兒だと思つてゐる中に、手術場の異樣の雰圍氣に感じて、急に

「おかーちやん〳〵と」泣き出した。

それから脚をバタつかせて、何といひ聞かせても駄目になつた。丁度そこへ某君が入つて來て、いはへられてゐるクランケの片手をソツと握つてやつた。すると何と思つたか、その女の兒は安心したらしく急に大人しくなつて、泣きじやくり乍らも、白い布が幾枚も掛けられ、手術野に沃丁が塗られた。……一二分の後……

そこへ次室の手術が始まるので、プレが同君を呼びに來たものである。

同君「よし」と何氣なく握つたクランケの手を離さうとしたが、その時女の兒は「わー」と一聲あげ、足をバタつかせて「わー おかあちやん、行つちや……いや……いや」に某君「ェー 何だつて?!」

この狀景にプレはプツと噴き出して外に飛んで出て了つた。

○

防空演習以來、一人の守衛さんと知り合ひになつた。

丁度その人が同じ方面から通つて來るので、よく省線の中で逢ふ事がある。

そして

「先生、お早よう」から段々

「先生、どちらに、お住ひで……」

になり、此頃では、うるさい位色んな事を聞かれて少々閉口だ。新聞も碌に讀めない。

此の間も、こんな一問一答があつたのだ。
「先生、イペリツトつて奴は、大變怖い物だつていひますね」
「うん」
「あれは毒瓦斯つていつても、水なんださうですね」
「さうさ、水だよ、飛行機から撒いたり、大砲ん中へ入れて、うつたりするのさ、あれを吸へば君、すぐ死んぢまふよ」
「へー、そうですかねー。つまり、それを吸ふと、どういふ事になるんですか?」
「……まあ學問的にいへば、肺水腫になるんだね。肺水腫といつてね、肺胞の中へ水がたまる病氣なんだよ。まあ肺胞を一つのコップとするだろー。その中へ半分程水が溜るから、苦しくなつて、死んぢやうのさ」
「成程、してその肺胞といふものは、どの位の大きさの物です?」
「さうだねー　先づ、米粒かせい〳〵豌豆豆位なものだらう」
そこで、省線がゴーつと信濃町のトンネルに入つた。守衛氏、複雜な表情で盛んに感心してゐたが、電車がトンネルを出て、我々が立ち上らうとする時、彼は、
「先生、そんな小さい所へ半分許り水が溜つても、そんなに重くなるもんですかねー」といつた。

○

或る夏の夜のこと……醫局の隣りの圖書室で、ぽつねんと書き物をしてゐた。丁度圖書室の窓の向ふには、芭蕉や檜の木を隔てゝ、時々蓮の花も咲かうといふ池があり、又其の向ふには病院名所の一つ、畫は日光浴場となり、夜は夕涼に至極よい丈夫な椽臺がある。然し勿論今は眞暗闇で何も見えず、唯圖書室の電氣スタンドが一つ明るくついて

ゐる許りである。

するとその闇の中から絹ならぬスフを裂く様な歌聲がする。

〽なじかは知らねど　心詫びて　昔の誓ひはそゞろ身に泌む……

これは「ローレライ」の一節だらう。聲自慢の附添孃が患者の寢靜まつた後の徒然に、一人此處に凉みに來たらしい。間もなく其妙なる歌聲に吸ひ附けられた樣に、三々五々と附添孃が集まつて來たらしく、暗闇の中の椽臺に腰を卸して、しきりと何かしやべり出した。

病室の天使達は、やがて彼女達の本當の姿をクローズ・アップして饒舌の限りをつくしてゐる。

げに暗闇は女を大膽にするものであるわいと一人感心して、アレコレと彼女等の容貌を想像してみる。勿論雜音となつて話の內容は到底分析出來るものではないが、一體向ふからは、明るい此方がよく見える筈であるのに、向ふは味方大勢の上に暗いのだから、あの窓際に外科の先生がゐる位の事は一向苦にならないらしい。

その中、〽鐘や太鼓に送られ乍ら……の甘つたるいのや、〽色も香も……といふ少しエロな大島椿の歌をセンチに歌ふものあり、合の手に身震ひする樣な笑聲が混つて、喧ましいこと限りなく、お蔭で此方は何も手がつかなくなつて了つた。

しばし、あきれ果てゝぢつと暗黑の中を凝視してゐると、驚いたことになつた。

一際錆のある聲が群聲を薙き伏す樣に浮び出て「支那の夜」の伴奏をつけてから

「アー支那の夜……芭蕉の葉蔭に……一人ぽつち……何を書くやら……やるせなさ……」と歌ひ出したのである。

急に皆が默つて了つた。二秒……三秒……五秒……クスクス〳〵。

余りの突然に純情な俺は一瞬ハッとしたが、闇の中の女共の視線は、きつと此方に集注してゐるに違ひないと思ふ

と、段々ムラ〳〵と來て了つた。その瞬間パッと立上るや、思ひ切つて上半身を出來る丈け窓の外にはみ出して、スタンドを片手に持ち、うんと向ふを照しつけてやつた。そしてブル〳〵と震えて、何かどなりつける積りであつたがその時遲く彼の時早く、カサ〳〵と衣づれの音がして、天使等は我先にと姿を消して了つた。

○

エーテル・ラウシュがかゝると、謹嚴そのものの樣な男が忽ちにして、普請場の兄貴の樣に木遣りをやり出したり譯のわからぬ事を無暗矢鱈にしやべり出し、さては、うちの女房と喧嘩した經緯や、貯金の金高迄いひ出し、又何を間違へてかゲラ〳〵笑ひ出して、

「おい、よせよ、よせよ、よせつたら……」

から、實にいゝ氣持になつて、ツツン、テン、ト と、都々逸が飛び出す等、お醫者樣もプレ孃も噴き出して了ふのがある。實際ラウシュは僞りのない日頃の生活を、まざ〳〵と手輕に出して吳れる。もうとつくに氣がついてゐる事だらうが、警察なんかでも十の訊問よりも一つのラウシュの方が、氣がきいてるんぢやないかと思ふ程である。

所が最近は、さすがに時局柄で「ラウシュの歌」も「愛國行進曲」や何かに變つて來たから、驚かざるを得ないではないか。この間も或るおとつつあんが、ラウシュで、背中のカルブンケルを切られ乍ら

「勝つて來るぞと勇ましく」から

「バンザーイ、バンザーイ」

と眞に迫つた出征風景を一くさりやつたのに、オペラトールのメスも一寸鈍つた位、一同しんみりしたものである。

次に之もラウシュの例で少し毛色の變つた所をいへば、冬の或日スキーの大腿骨折で擔ぎ込まれた一人の若い外人があつた。

愈々手術場に出て、足を伸されるべくラウシュにかゝつたが、その時、殆んど片言しか通じないと思つてゐたこの碧眼の若者は、俄然、大きな聲を張り上げて、何と……

「キュ　ニヲ　デテキヤラ　イキュ　ツキゾー」

○

どの位卓効があつたか判らないが、兎も角、永年使ひつけたアダリンやルミナールやクラウデンが段々なくなつて來て、所謂非常時型の代用品が横行する時代となつた。中には「名は體を表はす」式の極覺え易い藥もあるが、何度聞いても、すぐ忘れて了ふ樣なのを、藥局で是非之を使へといつて來ると、看護婦ならずとも、少々閉章てる事がある。

これは、さうした時代の笑へない一トピックとして、先頃しきりに醫局を賑はした話題である。

或夜特診に來た子供のアッペを手術する事になり、當直醫K君は、手術場から「ほ」號病棟に電話をかけて、

「手術場に出す前に注射をして呉れ。子供だからナルコポンを輕目にやる樣に……さうだね……○・三注射して呉れ」と命じた。そしてK君や助手になる人達が手術場に行つて、着物をぬぎかけてゐると「ほ」號の新人らしきプレより手術場に、けたたましく電話あり。

曰く「先生、カルメニンといふ藥は御座いませんですけれど」と來た。

すると手術場プレ嬢も、いとも不思議さうに、

「先生、カルメニンていふのは、何の代用品ですか？」

にK君

「そ、そんなのあるかい!?」

これは、刀林流行の「嘘倶樂部」でも又皮肉でもなくて實話なのであるから、一寸考へさせられるではないか。

○

別館當直室の惱みの數々を擧げるならば、何といつても、早朝からの（といつても當直氏にとつてはです）塵蒐めのトロツコのガタ〳〵ドシヤンといふ雜音と、排泄諸孃の間斷なく引き鳴らすあの水洗の音である。折角の熟睡時間を之等の雜音に目茶々々にされて、可哀想に當直氏は毎朝フラ〳〵として起き出て〻來るのだ。樂ぢやない。

それからもう一つ癪に觸るのが、例の「油蟲」である。

此奴が晝となく夜となく匍ひ廻はり、時々ノモンハンのソ聯兵の樣に、寢臺の眞白な敷布の上に二、三匹駐屯しては何かヒソ〳〵やつてゐるのを見ると、どんな大人しい人でもムツと來るといふ。一寸つかまへてやらうと思つても此奴の逃足は又とても早く、余程見當をつけて敲かないと、スースーツと簡單に躰をかわされるのである。神樣はよくもこんな汚らはしい蟲けらに、か〻る機敏な逃足を與へたものだと感心せざるを得ない。

醫局のX君が、此奴を根本的に退治する方法を「モダン日本」か何かで見て來た。皆は馬鹿にしたが彼氏仲々自信あり氣に「細工はリユー〳〵」といふ顏付きである。

彼氏南一階の看護婦室に來て

「おい、デヤガ芋を大根卸ですつて吳れ」といつた。

「……？　先生、それ何するんですか？」

プレが鳩豆といふ表情をしたのも無理はない。

「何つて、君、油蟲退治に使ふんだ」

主任がフフンと笑ひ出した。

「そのヂヤガ芋に『ボール』末を混ぜて、お團子をこしらへて呉れ、そうさなー、五つもあればいゝだらう……」

ブレはおかしな先生だと思つたが、今丁度馬鈴薯のあり合はせがないから、炊事から貰つて來て晩迄に作つて置くことを約束した。

いふ迄もなくその夜は彼の當直であつた。十一時の廻診を濟ませて一人寢の床に入る前、其處此處に匍ひ廻る蟲けら共も今夜限りだと思ひ乍ら、用意のお團子を少しこね合はせて急所々々に、ワルテンの鹽の樣に置いたのである。

懐中電燈に照されて余りまどらかならぬ一夜の夢の中にも、油蟲がウヨ〳〵と匍ひ廻つてゐた事であらう。

翌朝、例の如く、ガラン〳〵とヂヤ〳〵で眼を覺した彼はムツクと起き上つて、最も手近かな寢臺の足の所に置いた猫いらずならぬ例の芋の山を見た。

しめた!! 半分以上崩れてゐる。さては……と彼は、ほくそ笑んで、醫局仲間の喜ぶ顏等を思ひ浮べ乍ら、珍らしくも朗かな朝を迎へた。

しかし、殘念だがどうも之は駄目だつた。その原因といふのは本當につまらない所にあつたのだから、彼も諦め切れないであらう。彼の身にもなつてやつて呉れ。

「いや、實はあれは失敗だつたよ。この次もう一ぺんやるがね、あの時はね君、ブレの奴、硼酸と重曹とを間違へてヂヤガ芋の中に入れたものだから、油蟲の奴、好物にマーゲンミツテルを貰つてすつかり胸をすかしやがつた」

しかし其の後一向油蟲の減らない所を見ると、未だ本法を實施しないのかしら……或は好漢惜むらくは兵法に通ぜずといふのか?

伊豆の一日

相見三郎

枕頭の電燈を點けて中央公論を取り上げ、雷音老人の「三宅坂夜話」を讀む。日本の將來も容易ならぬ、銃後の吾々もいつまでも銃後で安閑として居られぬのではないか、今頃は支那に滿洲に同窓諸君はどうして居られるだらう。誰彼と親しかつた出征の君達の顏が浮ぶ。窓が白んで來る。毛蟲に喰はれて葉のすつかり落ちてしまつた櫻の枝が朝日に輝いて囀りが一しきり耳をくすぐる。當直室から汽罐室の傍を通つて木戸を潛ると公園に出る、海岸の丸石を踏むと、こゝにも秋の觸感がある。鬱蒼とした松林には小鳥の囀りが降る樣だ。空氣銃の音が晴れ上つた秋空に吸はれて行く。一望の駿河灣は朝風に翳りのかゝつた鏡の樣だ。漁船が三々五々鏡面に浮び上る。左手金山棧橋には本船が赤い腹を見せてゐる。この赤い腹がかくれる迄鑛石が積み込まれて、四國の別子へ廻航するのだ。久能山の裾に三保の松原がうつすりと浮んで居る。南アルプス連峰はもう雪だ。新鮮な海氣を腹一杯に吸ひ込むと健康感が溢れて來る。この戰禍の眞只中にあり乍ら平和そのものゝ土肥の朝。勿體ない樣だ。

朝食後九時の診察時間迄は未だ間がある。サイクルを馳つて隣村八木澤へ行つて見る。土肥からは縣道は海岸沿ひに松崎から下田へ通じてゐる。伊豆の西海岸は斷崖絕壁の連續で、地層の隆起だか陷沒だか知らないが、大古は隨分海面が高かつたらしい。處々に奇岩洞窟を形成し、その下を潛る紺碧の水は紅毛の處女の瞳の樣な深い妖しい色に輝いて居る。大謀網は大きく小さく輪を描いて點綴してゐる。縣道の大きなスロープを一氣に驅け降りると八木澤村に入る。この村は私の病院が村醫を引き受けて居る、問題の所謂無醫村だか、以前醫者が居た時よりは寧ろ保健狀態が好

い。以前土地は醫者が居た時は病院を目の敵にして、直接患家に接近し得るのを奇貨として盛に病院の逆宣傳をやつたものだ。又重症患者が出ると强制的に、時には附添つてまでも沼津に出す。又無斷で病院に來たり、往診を賴んだりすると、その患家はその醫者に冷酷に取扱はれるとの事、患家にして見れば夜間や時間外では病院に往診を賴めない爲め、萬一の場合を慮つて村の醫者の御機嫌を損はない樣に、村の醫者の言ひなりになつてゐたわけだ。八木澤に地元の醫者が居なくなつてからは、病院の時間外は土肥の開業醫を賴んで行くが、重症患者や手術患者で沼津に出る樣な者は殆んど無くなつた。村民も病院には絶對信賴で、吾々としても非常にやりよくなつたし、村民にしても寧ろ無醫村なるが故に倖になつた樣な格好だ。村に農園を經營して居るS氏を訪ふ。同氏は未だ私が醫局に居た頃、肋骨カリエスで慶應病院に入院して居たんで米國といふ珍らしい名前と、二、三回再入院して來たんだつたので記憶に殘つてゐた。昨年土肥に來て入院して居たが、全快退院してから玆に農園の經營を始めた。農學士だけに仲々見事に柿を作つてゐる。この春病院で產れた赤ちやんを抱かされたり、柿を御馳走になつたりする。東海の碧空に巨人が描いた一幅の扁額の樣に、旣に雪を戴いた雄大莊重な大富士を左手に眺め乍ら、再び自轉車を驅つて病院に歸る。

手術後たつた十日で、勇敢にも退院したイレウスの患者の往診にリンゲルを用意して行く。歸りに之亦退院後のアツペの繃交に立寄る。田舍では日が好いからとて無理な退院をする患者がよくある。

沼津のY醫師から紹介狀を携へて來た患者。膝關節ロイマチス、土肥のK醫師からY氏に紹介して沼津へ送つたがY氏から「外科ならわざ〳〵沼津迄出て來るに及ばない」と言はれて逆に私宛に紹介され、即日歸鄉して來たもの。土肥にはK氏とY氏の二人の開業醫が居るが、いづこも同じ角突き合ひ。K氏は沼津のS病院出身の所謂外科醫者だ。二十年以上も土肥に開業してゐる地盤を、後から開業したY氏や病院に荒されるのを恐れて無理に患者を沼津に送り出す。Y氏はそれに對抗して手に合はぬ患者はK氏に轉醫されるのを恐れて、どん〳〵病院に紹介してよこす。

それだからY氏から紹介してよこすアツペは殆んど早期だが、K氏の手を遁れて病院に來るアツペは、例外なくペルホツてゐるといふ始末、この間はK氏の患者を手術する事になつて、無理矢理K氏に立會はせたが、例の如くの慘膽たるもので「盲腸の手術は早い方がいゝですな」と今更感心してゐるのには呆れた。近來はボツ〳〵K氏のやり口に怨嗟の聲が起つて來て、K氏も止むを得ず次第にアツペを病院に紹介してよこす樣になつて來た。

金山から電話。重傷患者が來ると言ふ。金山で重傷と言ふ以上は駄目に違ひない。待つてゐる中に擔ぎ込んで來たのを見れば頭蓋骨折、お寺へ行くのが戸惑ひして來た樣なものだ。金山側は病死にして呉れと言ふ。變死では鑛產監督局がうるさいさうだ。或る鑛山で坑內に變死者が出た。若い醫者が「死んでゐるなら死體を動かすな」と命じた。坑夫は坑口に火を焚いて、會社側との慰藉料の交渉が纏るまで、死體を引き渡さなかつたといふ事件があつた。產業衞生に關係する醫者はデリケートな氣を使はなければならない。結局檢視といふ事になる。ゴタ〳〵してゐる中に四時の退勤時間が來る。釣竿を携へて病院の附近の川で鮎釣りをする。夕陽が松林の隙から眞紅の光芒をそゝいで、川尻に押して來る波頭を彩る。輕快や觸感と共に鮎の白い肌が飜る。釣の醍醐味だ。

歸宅するとF氏から手紙が來て居る。F氏は土肥から南五里程の田子といふ漁村の醫師。同氏が病室や手術室の增築に就て私が外科の顧問を依賴されて、度々アツペの手術をしに行つてやつてゐる。開業醫は直接患家に出入する爲めに、そんな田舍醫者のところでも相當アツペの手術があるのには感心させられる。昨年末同氏宅に忘年會に招かれ其の折、藥師如來の木像を贈られたが、その藥師樣と對のものを昨日鑑定してもらつたところ、千年以上のもので國寶級のものと判明したから大切に愛藏して呉れとのこと。自分に取つては猫に小判で、同氏には氣の毒なことだつたと思ふ。

トロリン〳〵と溫泉の湯こぼれの音を聞き乍ら、浴槽の緣に頭を凭せてのび〳〵と浸つてゐると、寂然とした秋の夜に細々と蟲の音が湧いて來る。（十月二十日）

酒の歌

久米仙

酒をのみながら、酒の歌を作らぬと叱られることがある。これは尙、酒の菩提を行かぬものゝ言葉でもあらうか。

とまれ、昔から今に至るまで酒のことは屢々詠はれてゐる。牧水の作に

白玉の齒にしみわたる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりける

些か取り澄ましたかたちではあるが、何事にまれ初めが大切であらう。

おでん屋の酒のよしあし言ひ給ふな

といふ誓子の句のごとき、まことに吾意を得たりである。

ひとたび醉へば天に翔り地に潜み、その仙術たる、千里を行くがごとしである。

太祖禁酒　而人竊飲　故難言酒　以白酒爲賢者　以清酒爲聖人。

とあるのは、吾々呑ん平にとつては聖典とも言へるであらう。

この悅びは絶對的であるし、こゝに初めて大伴旅人の歌が生れる。

言はむすべ、せむすべ、知らにきはまりて貴きものは酒にし有らし

然し心すべきは、あまり仙術に醉ひすぎることであらう。猿も木から落ちるの譬で、久米仙のごとく

會々婦人以レ足踏二浣ス衣一ヲ、其脛甚白、忽生二染心一、即時墜落。

といふことになつては、苦々しい限りである。勿論古川柳に曰く

仙人さまアと濡手で抱きおこし

となるのも悪くはないであらうが。

宿酔のあの空々漠々たる心境も、一見無慾なことは、宛も大きひじりのさまがあつて、棄て難いものである。

久米仙奴 alcoholismus ならん、と呼ばれては一言も無いが、最後に旅人の歌をひとつ申し上げる。

なかなかに人とあらずば酒壺となりてしかも酒に染みなむ

父も母もうち震へつゝ馳せ寄るに

アッペを裂いて見せにけるかな

春の雪

—治生—

○

それぞれに曲りつ降るや春の雪

○

池のふちに淡く積りぬ春の雪

○

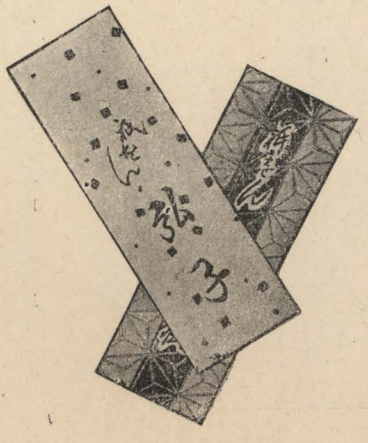
風一陣春雪雨の如く見ゆ

○

雨となりぬ芝生に残る春の雪

○

暮れ行けど雨止まず春の雪まだら



鶏頭

—治生—

○

鶏頭の高きはわけて色も濃く

○

鶏頭の育ち過ぎたる小庭哉

○

鶏頭の庭に白鳩迷ひ來し

○

傘させば鶏頭明く見ゆる雨

無題

小平生

上海から歸つて來ると、早速拙宅を訪れて來て呉れたのは帝大の叔父であつた。よく無事に歸つて來たといふつもりであらう。松竹梅を二升ぶら下げて來て下さつたのであるが酒を嗜むことに於ては人後に落ちる小生であるので、此の美酒が喜ばせたのは實は、其の後に押しかけて來た、醫局の惡童連であつた。第二番目の訪問者は保險屋であつた。

保險といふものに甚だ冷淡でもあつたが、それより、より保險の勸誘なるものに反撥的なりし小生は、上海出張前に雲霞の如く押し寄せた生命保險を片端から擊退して戰雲たなびく大陸へ出掛けたのであつたが、芽出度く凱旋？して而も留守中に長男が生れたといふことになると、勸誘員たるもの此のチャンスを何丈以て逃すべきやといふことであらう。上海出張の本俸、加俸自宅送りといふはかなき掟によつて、いみじくも貯へられた數千金は保險にでも入らことにぬは、うたかたの如くに消え失せることであらう、といふわけで遂に勸誘員の軍門に降つたのであつた。と言ふても自らの生命保險に何萬圓もはいつたといふわけでない。自分の死んだ時の爲の保險は考へたゞけでも胸糞が惡くなる。小生の契約したのは實に伜の徵兵保險といふ奴だ。而も保險の月報に寫眞を載せませう、といふ程の保險額では無かつたのである。序でに醫局の某氏の所に玉の樣なお孃さんが生れたといふ話を聞いたので、早速勸誘氏に紹介したところ、これが圖らずも多額の御契約に與つたといふので、小生宅はカステラの折を一箱頂戴したのであつた。伜を丈夫に育て上げると、ほつて置いた僅々の金子が數倍になつて轉げ込む。而も誰かを紹介すれば又々カステ

ラが貰へそうだといふわけで、何處かに子供は生まれんものかと探しあぐんで居る中に、月日の經つのは早いもの、人樣の所でなく自分の家で又々子供が飛び出して仕舞つた。そこで再び保險氏の襲擊を喰つたのである。凡そ出來もせぬことを出來ると思はれたり、有りもせぬ物をあると思はれたりする程、小生にとつて迷惑千萬なことはないのである。上海出稼ぎの貯へは既に盪じんに歸して居て今は、刀林子の御賴問になる旨い物の話も凡そ想像外の狀態だ。今度の子供は女の子だから徵兵もあるまいと言ふと、いや出世保險といふのがあるから、是非お嫁入りの仕度用に三萬圓もおはいり下さいと言ふ。これに這入つたか、はいらぬかは皆樣の御想像にお委せするとして、話を前に戻して出來もせぬものを出來るだらうと詰め寄られるのには當惑する話だ。これは酒を吐くだけ吐いて、胃の腑が裏返しになるのに匹敵する苦しみである。刀林出版の頃になると小生が惱まされるのは繪の註文である。君は繪が畫けるだらう、繪を一つ賴むと來るに決つて居る。成程、恩師茂木教授の御命令とあれば何の言ひわけも出來ようぞ、宵つ引いて禿筆を振つて先生の御本の挿圖を畫いたこともあるのだが、凡そ繪畫といふことになると甚だ苦手だ。油繪はどうだ、水彩はどうだと詰め寄られると、もうそんな物は畫いたことは無い位の返答は口にも出ぬ程に、むかつ腹が立つて來る。切角人がそう思つて呉れるからには、ちとこつそり蔭で練習でも始めて、流石はと思はせてやらうと、水彩繪具の小箱を買ひ込んだこともあるが、根が心から好きでないので、今は繪具のチューブも「モロゾフ」の飴菓子のようにコチ〳〵になつてゐる仕末である。數年前病院大廊下で催された七十五周年紀念の餘技展に、木村先生に「に號病棟」の一室に檻禁されて、西野教授や犬養先生の漫畫？ を鞭撻々々畫かされた。あの時の苦しみを忘れずに畫道に精を出したなら、今回の刀林誌上を小生畫く所のマン畫、ワイ畫等々を以て獨占するに至つたであらうものを……。玉磨かざれば光無し、現在の小生は繪を畫くよりは、斯くの如きみゝずの寢言を書く方がやゝ樂であるので、刀林子の御註文に應じ、旨いもの、趣味の話し、小生宅ハンエイの話等折り混ぜて御報告申し上げた次第である。

手術

岡品男

手術をなさる先生方の御苦心、御骨折は今更云ふ迄もありませんが、一方手術を受ける立場の人、つまり患者の側も並大低ではないと思ひます。

痛いことに關しても默つて我慢をして居ると「痛むなら痛いと云ひなさい」、「痛みませんか」、「どうですか」と疊みかけて尋ねられると、つい心にはないのに、義理で「痛い」と云はされて了ふこともあるし。

又痛いと云へば「今大切な所ですぞ」、「誰でも痛いんですよ」、「小供さんでも我慢しますよ」と總攻撃に會つて了ふ。

默つて居れば「何々さん、どうですか」、「痛みますか」の連續射撃では反撃と「ウーム〳〵」と生きてる證據を示せば「騷ぐとやり憎い」、「聲を立てると長くかゝる」、「一寸靜かになさい」と緘口令が出る始末。

一體患者は、どうして居ればいゝのだらう。

人工的大腸カタル

勞働を避けて、樂をして寢て居たい方に、お推めする確實な方法。

先ず強い位の飯を嚙まず（此の嚙まない事が秘傳です）急いで、殆ど水と一緒に嚥み下します。半日位胃袋の模樣が可怪しいが、その位の事は我慢して下さい。すると、功顯いやちこ、お腹がグル〳〵と鳴つて來ます。もう占めたものです。やがて諸君は立派な下痢、腹痛と云ふ二要素を獲得します。あとは心臓です。休める休めないのは、心臓

次第です。

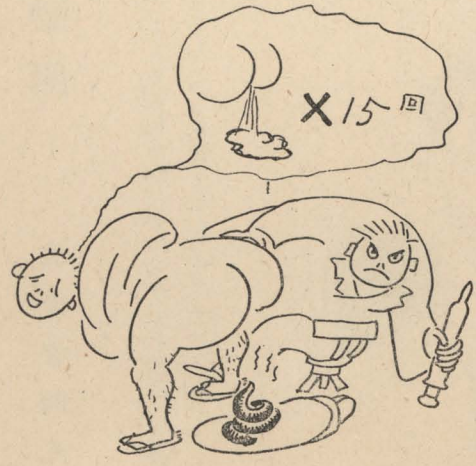
但し、念の爲申し添へますが、その下痢便は、心得のあるお醫者さんには見せてはなりません。一と目でインチキが曝かれる程飯粒が並んで出て來ますから、露見したが最後、絶食、その後に來るものはインスリンで、クタ〳〵に伸ばされます。浮世離れた或社會にある事實だそうです。

硬便性下痢

沈んだ顏貌、意氣消沈、如何にも大病の様子です。語る言葉も弱々しそうです。聞けば昨夜から、十數回に及ぶ下痢があつた由です。性狀は水の様で、濟んだ後も、さつぱりせず。又出そうなのだそうです。勿論腹痛もあります。立派に大腸カタルの訴へです。

訴に比べて所見は大分趣が違ひます。第一お腹はむしろ膨隆して居り、グルレンも聞えません。尋ね直しても訴へは同じです。直に浣腸器が取よせられます。數分の後出ました、出ました。御婦人連大好物の實りの秋の、おさつの様な、憎らしいまでに太いのが、コテ〳〵と、しかもほのかに湯氣迄立ち昇つて居ます。

以下型の如き經過です。さぞかし、今頃は後悔して居るでせう。何しろ絶食後のインスリンといふ奴は、利きますからね。別天地の日常茶飯事だそうです。



刀林嘘倶樂部

眞赤會同人

一、「に」號の下には、よく外人が入院する。或晩の當直廻診で、そんな事何も知らずにドアーを開けた某君、見れば其毛唐なので、咄嗟の言葉に一寸困つたが、何！「西部戰線異常なし」の「異常なし？」で行けばいゝと一人極めして、ツカ〳〵と枕元に進み出て、云つた言葉が何と「イム・ウエステン・ニヒツ・ノイエス？」……クランケ蒼い眼をパチクリさせたが、某君も眞赤になり乍ら、てれ隠しに「グート・グート」といつた。さて「お大事に」は何といふんだか思ひ出せず「ビテ・ルーイヒ・ルーイヒ」といつてブレを引き具して出て來たとは、何處迄も人を喰つてる。

○

二、醫局で默りやで有名なAB兩君が、珍らしく某所に落ち合つて、其處に蓄音器を持ち出して、二人共極めて嚴肅な面持で名曲？に聞き惚れて居るらしい。惡童連中何を聽いて居るのだらうと傍に行つてよく見ると、これは驚いた事に、其レコードには溝が一本も附いてゐなかつた由。

○

三、或眞夜中、情夫に短刀を刺されて、したゝか深手を負つた若

い女が手術場に出た。すると消息通のP君が小聲で「あの女はね、昨夜二時頃、男に鞘ぐるみ八寸もある物凄い短刀でグサツとやられたんだとさ」といへば、Q君鼻でフフンとあしらつてから「短刀だか何だかわかりやしないや」すると又傍に居たR君、手つき手眞似もよろしく「へー!! 鞘共八寸。ハハー ナール程」は何の事だかさつぱり判らない。

○

四、 外科第二診察室で或日シムメルブツシュ煮沸滅菌器から、猛烈な勢ひで盛んに蒸氣が立ち昇るのを發見した。Y君、看護婦に「オイ、コレ〳〵蒸氣（常軌）を逸しトルゾ」と極めつけた。途端にS君「之が本當の杓子蒸氣（定規）だ」は稍々出來が良い。

○

五、 小さいK君、某デパートで中位のシャツを手に取つて、デパート孃「君！ 之は洗ふと少しは縮むかい？」、「いゝえ、其んな事は御座ゐません」さらばと一番小さいシャツを示して「之は洗ふと伸びる？」デパート孃得意さうに優秀品の太鼓判を捺す心算で「其んな事もムゐません」に、K君腐つて眞赤になり、臺の端から伸び上り「一體俺は何んなシャツを買へばいゝんだい？！」

○

六、 A君「防空演習で毎晩暗いもんだから何も手がつかない。昨夜はとう〳〵飲み過ぎちやつてね。何だか未だフラ〳〵するよ」といへば、B君、後から肩を敲いて「それが所謂十日管制で、二日醉といふ奴だね！」は少し苦しい。

○

七、 「ほ」號の大部屋を夕廻診すると、此の寒いのに窓が二つ三つ開けてあつて、スースー風が入つて來る。喧ましやで通つてゐる某君附添に向つて「オイ此の寒いのに、そんなに窓を開けて置いちやいけないぢやないか、折角スチ・

ームがあつても何もなりやしない」と吐鳴りつけると、どうした事か、附添も周圍の患者達もクス〳〵笑つてゐる。某君益々腹を立てゝ「オイ何とか返事をしろよ。風邪を引かせたらどうするんだい」といへば、患者はやほら向き直つて「先生臭くはありませんか？　今風を通して貰つてるんですよ」これで某君やつと合點して「成程、患者も排泄するのか」は一寸手遲れ。

○

八、年増の大女が、「ギプスベット」を造る事になり、臺の上に、うつ向きにねかされた。主治醫D君、ギプス係の看護婦に向つて例の如く「この人は大きいよ。何卷位かなー。四十五卷か、五十卷だらう」といへば、大女何を間違へたか「先生、ひどい、わたし何ぼ何でもそんなに重かないわ」に一同、只眼をパチクリ〳〵。

○

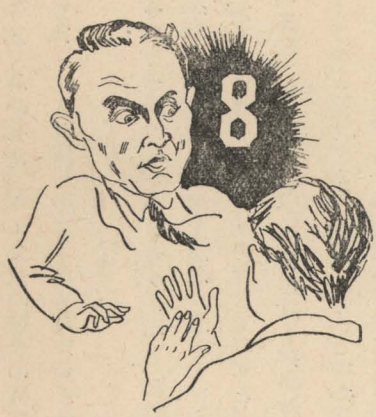
九、某病院出張中の某君、外科へ紛れ込んだ某患者に「何處が惡いのかい」と聞く。「ヘイ、先生、何うも下つ腹から膿が出ましてねー」さてはアツペか、ペリトニテイス後のフイステルでもあるかと思ひ「どら〳〵、お腹を見せて御覽、何時頃手術をしたんだい」患者は徐ろに服を脱ぎ乍ら「實は腹といつても、膀胱からなんで……」、「膀胱？では其處から小便も出るのかい」さてはゼクチオアルタでもあるかと考へた。すると患者は更に言葉を濁して「いや膀胱といつても尿道からですが」とう〳〵人の良い某君大喝一聲「では早く云へば淋病だらう」と患者頭を掻いて「まあ、さうです。へへへ」は何處迄も世話が燒ける。

○

十、腐り序でにもう一ついへば、或るトリツペルゲレンクの、若い奥さんを持つたC君、病室に入ると丁度マンと一合戰あつた後とみえて、奥さん眼を眞赤にし、マンはモヂ〳〵してゐる。こいつはいけねーと二言、三言月並みな

事をいつてサツと引上げて來たC君、看護婦室で汗を拭いてゐると、其處へ、さつきのマンが入つて來て「先生、誠に申かねるお願ですが、色々と事情もありますので、あれは淋毒性ではないといふ診斷書を書いて下さい」と、泣かん許りに懇望した。C君言下に「それは困る」とはねつけたが、追つかけて來て色々といふので、腐りきつて歸つて來た。翌朝クランケ丈けの時廻診を濟ます積りで行くと、今度はフラウの方が、人拂ひをしてから曰く「先生、あの人は自分で惡いくせに、あの人や、お姑さん迄も絶對に淋毒性ぢやないといふんです。それに、あたしの父は大變怒りまして、明日來るから、先生に「正しく淋毒性だ」といふ診斷書を書いて貰つて置けといつて歸りました。先生、どうしませう」C君、醫局へ歸つて來て「おゝ神よ、俺を何故醫者にしたーッ」は笑へない話。

○



十一、將棋の齋藤八段がアツペで入院した。受持の新人某君何も知らずに、アナムネーゼを聞きながら「貴方は將棋をおさしになるんですか」「ハア」よせばよいのに「どの位ですか、三段位ですか」「……八段ですッ」某君兩眼を一層寄せて「ウヘー」

十二、某君まことに口うるさいアツペを一人持つた。ナンノカンノと、よけいな事ばかりいひ、大事な事は一つもわからないので、腐り切つてゐる所、その午後いよ〳〵オペラチオンとなつて、先づ某君がクランケを横にねかし、ルンバールのため、背中に沃丁を塗りかけると、その男、今度は眼隱しを取つて向き直ほり「先生、背中ぢやありませんよ、盲腸ですよ」に某君「飛んでもねえ野郎だ」と怒るまいことか。

十三、鼻の孔が、トーチカの銃口の様に四つもあいてゐる赤ん坊が入院した。誰かが「凄いなー、まるで此間活動で見た『土と兵隊』のトーチカみたいだ」といへば、駄洒落氏「君ッ『鼻と兵隊』ぢやないか」は成程。

○

十四、ついでに、之も整形の話で、駄洒落の部に入るかどうか、グレンツゲビートだが。今年の正月のことである。新年早々第一發に外來を訪れた患者といふのが、何と緣起でもない兎唇の赤ん坊で、商賣とはいひ乍ら、もう少し何とかしたクランケもありさうなものだと、一同少なからずうんざりした。ムツターの方では、そんな事おかまひなく「先生、正月早々で、誠に申譯も御座ゐませんが、うちでも、やつと年を越して、どうやらお芽出度い松の內に生れさうだと喜んでゐたのに、こんなのが出ちやつて」とオロ〳〵と泣き出し、何でも今日手術をして呉れといつて歸りさうもない。さすが豪毅のE君もすつかり醉ひがさめて、こは、どうしたものかと、歸趨に迷つてゐると、傍にゐたFが、仲々うまい事をいつたもので、

「先生、やつてやんなさい。『兎唇(年)の初めのためしとて』つていふぢやありませんか」

○

十五、又之は產科の話だが、洋裝のマ、ちやん、M先生に「私はお乳が出ないので困つてゐます。何をしてもちつとも効きません。何か良い方法があつたら敎へて下さい。M君之には一寸困つたが、敢然として「洋裝を止める事が第一ですね！」と一言。マ、ちやん狐につまゝれた樣な表情で「あら！　何故で御座ゐますの？」と反問する。M君得意の鼻を蠢めかしながら、洋裝の胸のところのボタンを指し乍ら「ほれ、古語にもある通り『扣鈕（牡丹）に空乳（唐獅子）と云つた譯ですな」とは之で嘘のつきじまい。

御退屈樣!!

同窓會々員名簿

（昭和十四年十一月日末現在　入局順　○印ハ在局者　休印ハ休職者）

氏名	住所	自宅電話及勤務先
○茂木藏之助	四谷區東信濃町二八	電四谷四五六八
犬養六郎	四谷區三光町五四	電四谷六二一六
成松清敏	福岡縣嘉穗郡桂川村	平山鑛山病院
柳壯一	札幌市北四條西十五丁目一	電二二三二　北大柳外科　六七三
大庭國紀	神奈川縣鎌倉材木座	電宅用　院用一三七〇
中村復一郎	中野區大和町一六〇	東京新宿病院
梅村六郎	大森區田園調布三ノ八〇	電田園調布二七七五　横濱大雄山病院
○木村博	麻布區笄町八〇	電赤坂三九二五
高桑武夫	新潟縣柏崎町本町六丁目	
柴沼薫	水戸市裡南町三九一	水戸常盤病院
戸田四郎平	神奈川縣小田原萬年町四ノ五六二	電小田原二四〇
森信彦	（昭和十三年九月死亡）	
阿部貞治	川崎市貝塚一一二	
片柳常作	（昭和十三年八月死亡）	
山田甫一	（昭和五年十一月死亡）	
稲葉俊雄	茨城縣結城郡結城町一四一六	
大槻正路	蒲田區仲蒲田三ノ十一	電蒲田三一三一
○町田謙二	芝區白金三光町二六九	電高輪六七三三
赤松常信	桐生市永樂町市役所脇	電三六五五
高木宗吉	（昭昭十三年九月死亡）	
中村武重	長野縣富士見高原療養所	
休鎌田竹次郎	ブラヂル、サンパウロ市、日本病院	
山田晟	（昭和十年四月死亡）	
山本順	小樽市　小樽病院	
東郷光美	京都市東山區山科竹鼻	
關市衛	杉並區和泉町三四一	電松澤二一七五
今井金治	群馬縣伊勢崎町住吉町	
新田龜三	深川區木場三丁目八	
上石英造	宮城縣牡鹿郡石巻市新田町三九	

澤江六太郎　栃木縣栃木市萬町二丁目
篠原靜夫　杉並區阿佐ヶ谷四丁目九電荻窪二〇八九
牛久昇治　大連市楓町九〇　聖愛病院
佐藤太平　靜岡市西草深町二五　靜岡日赤
林利治　北支派遣杉山部隊梛野部隊
大曾根幾次郎　茨城縣港町六丁目
神山敏雄　滿洲國興城溫泉ホテル　興城陸軍病院
高橋哲太郎　（昭和五年三月死亡）
中村勝之助　樺太眞岡南濱町
近藤宗彥　澁谷區代々木深町一六六七
三橋弘　樺太大泊榮町中通廿八　三橋病院
木村守江　福島縣石城郡四倉本町
濱野碩太郎　福井縣遠敷郡小濱村住吉
豊田秀穗　（昭和十一年七月死亡）
○渡邊治生　群馬縣太田町　中島飛行機太田病院
神野澄晴　大分縣北海部郡小佐井村
吉崎純　富山縣高岡市旅籠町

竹下貫一　熊本市大江町本一二三
高巢三四一　福岡縣山門郡瀨高町大竹　矢部川病院
駒井忠雄　品川區五反田三丁目七〇
四條龍作　八王子市八日市三一
後藤昇　山形縣大石田町
原廣治　目黑區駒場町七九七　電青山五二八〇　横濱濟生會病院
佐藤維秀　大森區省線大森驛前
横山虎雄　杉並區清水町二一〇　電荻窪三三五四　中島飛行機病院
川田正雄　靜岡市大岩宮下町一一七　靜岡日赤
吉野史朗　山口縣大津郡人丸
中村次郎　兵庫縣西宮市川西町三四　病院　大阪市北區曾根崎中一丁目三〇　電北五〇六七
桑野鐵四郎　北海道釧路市富士見町四三　北海道博濟病院
槍田榮　足利市伊勢町
○岩原寅猪　赤坂區青山南町五丁目七九　東京第一陸軍病院　（入隊中）
森文雄　四谷區須賀町四二　電四谷三一三六　東京電燈病院
松井八郎　大津市松本梅林町八九四ノ一

河内野弘德　世田ヶ谷區上馬町三ノ八九一

高橋福三郎　（昭和十二年六月死亡）

○藤原道純　麻布區飯倉片町六和期フラツプト内

古川明　麻布區新綱町一ノ五五　東京第三陸軍病院　（入隊中）

松橋一　長野縣上諏訪町湖柳町一〇四五

君塚正　山形縣小松町　小松町立病院

鍋島勉　群馬縣太田町一ノ六〇

○前田和三郎　麻布區本村町二二五　電三田八一三

村上晋　日本橋區小舟町二丁目二番地ノ四　電茅場町五〇八〇

關口林五郎　前橋市北曲輪町

井上太郎　高崎市嘉多町五〇　綿貫病院

吉岡勝衛　杉並區天沼二丁目五一〇

中村廣人　世田ヶ谷區下代田町八一

八木勝郎　ブラヂルサンポーロ市

小口宇一　北支派遣篠原部隊氣付　橋結部隊本部　（入隊中）

弓削中　中支派遣松浦部隊後藤部隊　（入隊中）

○土方久顯　目黒區衾町一四七一　横濱警友病院

○百溪定七郎　世田ヶ谷區代田二丁目六八二

○瀨尾省三　澁谷區千駄ヶ谷一ノ五六二

○小野田肇　佐世保海軍病院氣付　驅逐艦敷波　（入隊中）

加藤銀次郎　城東區北砂町三ノ三一九

志田元秀　北支派遣谷口部隊　神谷部隊　（入隊中）

森下貫一　靜岡縣濱松市森下病院

橋本文吾　埼玉縣川越市小仙波一一一一　市川市國府臺陸軍病院　（入隊中）

伊藤由比　（昭和八年十二月死亡）

蓮江英男　世田ヶ谷區代田一丁目六五二ノ五

堀田善二郎　淺草區藏前三丁目一〇ノ一八

富田勝郎　北海道空知郡砂川町上砂川　三井砂川鑛業所醫院

小方則太郎　新潟縣小千谷

小澤武雄　牛込區若松町五八　北支派遣阿南部隊緒方部隊　永井隊本部　（入隊中）

田村信介　靜岡市水落町一ノ二七

田中周吉　佐世保局氣付南京基地隊　軍醫長　（入隊中）

辻岡元　淺草區田中町二ノ一〇　上海佐々木部隊辻岡隊　（入隊中）

○武藤藤太郎　世田谷區代田一丁目六五二ノ三
布留文夫（嘉昌）　滋賀縣甲賀郡寺在村深川市場
寺田泰三　神戸市須磨區磯馴町五ノ廿四　兵庫縣衛生課
相見三郎　靜岡縣田方郡土肥村　土肥慶應堂病院
酒井欣郎　芝區高輪南町二八
森豊明　北海道倶知安町南一條東一丁目
細江靜男　ブラジルサンパウロ市
濱名元中　茨城縣日立鑛山本山掛橋役宅三〇ノ一　日立鑛山本山病院
○若林研爾　（留守宅）杉並區馬橋二ノ一二三　（入隊中）
神山雅臣　大森區新井宿四丁目九九一
成内穎三郎　滿洲國開原滿鐵醫院
森山成一　北支多田部隊石井正部隊見習士官　（入隊中）
栗本勝之進　江蘇省南通市江北中央病院
○笹島彦次郎　大森區新井宿四丁目九八九　電犬森九一五九
休島田信勝　芝區赤羽橋濟生會役宅
明樂治部輔　和歌山縣加太深山大阪陸軍臨時病院　（入隊中）
照井侃　秋田市中谷地町四四

○井手行乎　世田ヶ谷區北澤一丁目一二九七
休伊藤國男　長野縣富士見高原療養所
板橋剛　濱松市中澤四六七　日赤濱松診療所
畠中卓助　滿洲國撫順北臺町二ノ四ノ八
○門橋勇　北支派遣今村部隊上島部隊　（入隊中）
龍野一雄　横濱市中區宮川町三ノ七三　黒澤醫院
中村寛　滿洲國新京安藤部隊本部
古山實　中野區本町通三ノ三六
○小平正　淀橋區西大久保三ノ一六三
齋藤脩二　澁谷區永住町一五　電青山五五〇八
宮尾啓　滿洲國滿鐵療陽醫院
○伊藤原　中野區大和町八四東京第三陸軍病院　（入隊中）
萩尾又八　（昭和十二年十二月死亡）
大岡保司　市川市市川外二〇七七國府臺陸軍病院　（入隊中）
大塚廣　千葉縣茂原町一九二
釜江省司　兵庫縣加古郡加古川町
高橋眞雄　荒川區日暮里渡邊町一〇五五　康樂病院

中野宗夫　北支山西省臨汾臨汾陸軍病院　（入隊中）
長坂謙三　水戸市外村松晴嵐莊
○山口恒造　和歌山六十一聯隊留守隊本部付（入隊中）
重盛福七郎　岡山縣日比町玉造船所衞生課
木村知孝　滿洲國錦州市滿鐵南山寮二二四號
渡邊敬　千葉市龜井町一一一八　千葉醫大法醫學教室
佐藤憲一　天津鐵路醫院東站分院
山田迪　濱松市元城町一　電二九八
休今井秀雄　仙臺市定祥寺通り三番地　玉造旅館　仙臺陸軍病院　（入隊中）
休大内正夫　北支派遣桑原部隊　青村部隊津島部隊　（入隊中）
渡隼　赤坂區青山南町六ノ一四七白井敏方
菅干里　盛岡市加賀野春木場二二　岩手醫專
休竹内實　中支派遣萩洲部隊小野部隊　（入隊中）
○鵜澤敏三　市川市市川九〇一
葛原信一　奉天市淀町八與信ビルアパート二二號
山田庸夫　足利市家富町二二〇六　中島飛行機病院
○小島茂　南支派遣松浦部隊後藤部隊　（入隊中）

○佐藤壽郎　市川市市川九〇一
○小泉次郎　牛込區新小川町江戸川アパート八五號
久崎章　愛知縣一ノ宮市新柳通一丁目三三　厚生病院
岩崎一平　福岡縣嘉穗郡稻築村　三井山野鑛業所病院
○蓮江信行　中支派遣齋藤（彌）部隊　佐々木部隊　（入隊中）
尾村偉久　大阪府北河内香郡里一一三一
大木猪四郎　（入隊中）
○渡邊仁七郎　下谷區茅町二ノ九
休渡邊昇　（留守宅）品川區大井瀧王子町四五七一　（入隊中）
中山一郎　中野區川添町二六寄生蟲學教室
○名倉厚　四谷區須賀町三八　電四谷三六〇八
○小林忠　北支派遣篠塚部隊氣付　三宅惣部隊　（入隊中）
小林不二夫　中支派遣萩洲部隊　新村部隊移川隊　（入隊中）
小坂慶一　小樽市住ノ江町九ノ七　小樽病院
○赤倉一郎　北支派遣草場部隊氣付　高崎部隊水間隊　（入隊中）
木本多喜雄　兵庫縣赤穗郡赤松村　日本鑛業旭日鑛山醫局
休河田清士　市外吉祥寺四六七　芝濟生會

今井光　新潟縣新津町全天療院

稲葉玉六　佐世保局氣付軍艦堅田　（入隊中）

○林克巳　宇都宮陸軍病院新川分院入院中　（入隊中）

○西平賀健　（留守宅）四谷區南寺町二三　（入隊中）

○富田忠良　齊々哈爾陸軍病院　（入隊中）

休 小田滿　豊橋陸軍教導學校愛知縣蒲郡町　（入隊中）

加納保之　水戸市外村松晴嵐莊

辻岡浩　滿洲國錦州滿鐵醫院
南支派遣柳川兵團高澤建部隊本部

休 名和精　（入隊中）

滿洲國牡丹江省佐藤部隊醫務室　（入隊中）

休 工藤達之

休 松浦勇四郎　滿洲國黑河省孫吳陸軍病院　（入隊中）

休 松丸忍　北支派遣多田部隊氣付棚野部隊小林隊　（入隊中）

○小柴清定　目黑區下目黑三ノ六五六東京第三陸軍病院　（入隊中）

○安齋直　埼玉縣入間川町三五三三

菊池龍介　澁谷區代官山アパート四七

宇佐美政三（國日）　牛込區砂土原町三ノ五病理學教室

○左奈田幸夫　中支派遣齋藤部隊布施部隊中山部隊　（入隊中）

○石川七郎　目黑區上目黑三ノ一七七六　（電澁谷一三四四）

郭在禧　釜山府草梁町三二六

○森田正朗　豊島區駒込一ノ一三〇

○西新助　中支派遣甘粕部隊林部隊本部　（入隊中）

遠山一郎　北支派遣舞部隊中村部隊本部　（入隊中）

大沼良雄　澁谷區長谷部町七平塚方　（入隊中）

奥山俊夫　北滿牡丹江省綏陽渡邊部隊本部（入隊中）

○渡邊重男　麻布區我善坊町一月崎方

休 田邊重信　哈爾賓尾之上部隊本部　（入隊中）

休 中島三次　中支派遣清水部隊志摩部隊松島部隊　（入隊中）

休 長屋信美　四谷區左門町四二北支派遣本間部隊氣付渡部隊　（入隊中）

○植草實　板橋區練馬土支田町一ノ五三六

○久保秀夫　淺草區馬道一ノ六

○櫛田敏也　横濱市鶴見區生麥四六西山方

軍地良亮　茨城縣石下町

山田二郎　（入隊中）

○高和壽次　杉並區橋馬二ノ二四一

○合原義泰　南支派遣安藤部隊服部(巳)部隊　(入隊中)
許添旺　岩手縣黑澤尻町小林町濟生會病院
○木村將義　杉並區天沼二ノ四六五
休城俊輔　北支派遣平田部隊本部　(入隊中)
休權守英夫　滿洲國興安省ノモンハン野戰郵便局氣付山岡部隊本部　(入隊中)
玉村一夫　旅順陸軍病院
○千倉義雄　目黑區綠ヶ丘二三一二富田照方
○茂木英一　市川市八幡町一九八〇
根本一郎　神戸市葺合區日暮通濟生會兵庫縣病院
休萩村恒雄　兵庫縣明石郡垂水町西垂水(留守宅)下谷區初音町四ノ一八　(入隊中)
細川忠　(入隊中)
休星野正雄　(入隊中)
休道躰祐二郎　神奈川縣鎌倉町馬越一二四五　(入隊中)
休川上弘　芝區高輪北町四八北支派遣舞部隊氣付青砥部隊千葉部隊本部　(入隊中)
休依田亘正　旅順小林部隊　(入隊中)
○津留慶之　板橋區中板橋九ノ一八〇一
休內野一男　靜岡縣志太郡岡部　(入隊中)

○日下部明夫　板橋區小竹町二四一二新田方
○松浦元　濱江省鐵驪縣鐵驪訓練所病院
休松本源一　千葉縣松戸工兵學校附北支派遣木村部隊氣付
休傳田俊男　田中信部隊天野隊本部　(入隊中)
足助又次　小石川區宮下町五三　(入隊中)
○澤浦正三郎　橫濱市神奈川區幸ヶ谷三
小樽市量德町　小樽病院
○高橋哲二　板橋區板橋町六ノ八四八
○中井愼一　四谷區舟町六七富久和莊內
休石田堅一　滿洲國孫吳池田部隊附市川市大字新田一〇八　(入隊中)
休大久保崎夫　北支派遣田邊部隊江口部隊古木部隊　(入隊中)
○花岡正人　麻布區三軒家町五一
○橫畠德雄　本鄕區駒込動坂橫畠楠正方
休高田孝　四谷區平長町四本島方　(入隊中)
休瀧本昇　大森區馬込町西四丁目三千百二十四　(入隊中)
○林(竹內)勝　澁谷區鶯谷町四七大川方
休相馬順三　大森區山王二ノ一九二四　(入隊中)
休內藤敏德　滿洲國牡丹江省東寧東寧第二陸軍病院　(入隊中)

休 武藤敏文　北支派遣本間部隊氣付 永野部隊本部　（入隊中）

○權守赳夫　大連幡磨町 大連聖愛病院　大連聖愛病院出張

○淺賀武夫　杉並區上荻窪一ノ一〇横田方

○佐藤武　荒川區尾久町五ノ一一三五

編輯後記

本年「刀林」は茂木先生の玉稿を戴き、「大陸特輯欄」を飾ることが出來まして私共喜んで居る次第です。先生には御多忙中御無理を御願ひ申上げましたことを深く御詫び申上げます。

戰地に在られる會員諸兄よりの御便りを、紙面の都合等もあり私共で勝手に編輯致しましたが、御寛容下さい。

公私御多用中に拘らず御投稿下さいました各地先輩會員諸兄及び在局員諸兄に厚く御禮申上げます。

卷頭を飾つた寫眞は海南島のは植草君、北・中支のは齋藤君の御寄贈になるものです。又カット、表紙等は、全部小泉講師の御援助によるものであり、口繪其他は笹島・小平先生を煩はしました。編輯員一同感謝に堪へません。

應召會員諸兄の武運長久と各地會員諸兄の御健康を御祈り致します。

鵜澤敏三　森田正朗
佐藤壽郎　茂木英一

昭和十四年十二月二十二日印刷
昭和十四年十二月二十五日發行

非賣品

東京市四谷區西信濃町廿二番地
發行者　慶應義塾大學醫學部
外科整形外科教室同窓會

編輯者　鵜澤敏三

東京市京橋區湊町三丁目八番地
印刷人　高橋與作

東京市京橋區湊町三丁目八番地
印刷所　正進社印刷所

不許★複製

東京市四谷區西信濃町廿二番地
發行所　慶應義塾大學醫學部
外科整形外科教室
振替口座東京二九二七五番